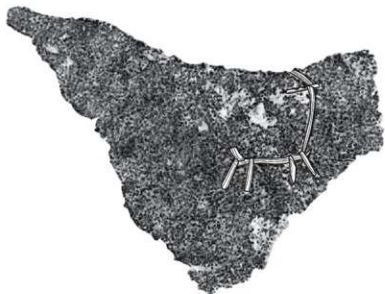


愛知県東海市

平成26年度

はたま ひがしはた  
畑間・東畑遺跡発掘調査報告



2016年

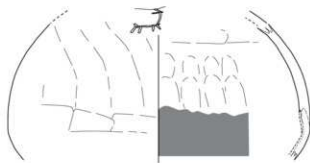
愛知県東海市教育委員会



愛知県東海市

平成26年度

はたま ひがしはた  
畑間・東畑遺跡発掘調査報告



2016年

愛知県東海市教育委員会





鹿線刻画



線刻画土器出土地点 (☆)



4 地点全景



溝群完掘状況



4 地点出土の瓦類



3 地点出土の壺 (130)



4 地点出土の甕 (201)



6 地点完掘状況



5 地点完掘状況



2 地点完掘状況



5 地点貝層断面



5 地点出土の甕 (306)



5 地点出土の壺 (312)



1 地点出土の古瀬戸水注 (034)



1 地点完掘状況



3 地点完掘状況



## 序

愛知県東海市は、知多半島の付け根に位置しています。伊勢湾に面する本市は、太古の昔から海と関わりの深い生活を営んできました。現在は、海浜部にわが国でも有数の工業地帯が広がっており、海との関わりも変化していますが、かつては、愛知県の語源になったとされる「あゆち潟」と呼ばれる遠浅の海が広がっていました。この伊勢湾を臨む平野部には多くの遺跡が残されています。

東海市では、名古屋鉄道常滑線太田川駅を中心とする区域を中心市街地と位置づけ、平成4年度から土地区画整理事業を実施しています。教育委員会では、本事業区域内に所在する埋蔵文化財について、平成11年度から発掘調査を実施しています。

本書では平成26年度の畑間遺跡及び東畑遺跡における発掘調査成果について報告します。平成26年度の調査では、集落の中心部とみられる地区を調査するなど、多くの成果がありました。特筆すべきは、シカの線刻のある土器片が出土したことです。線刻で動物を描いた土器の出土は市内で初めてのことです。

今後、本書が既刊の報告書と合わせて地域の歴史研究に活用され、埋蔵文化財への理解を深める一助となれば幸いです。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

愛知県東海市教育委員会  
教育長 加藤 朝夫

## 例 言

1. 本書は愛知県東海市大田町に所在する畑間（はたま）遺跡、東畑（ひがしはた）遺跡の発掘報告書である。
2. 本調査は、知多都市計画事業 東海太田川駅周辺土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として、東海市教育委員会が同事業施行者である東海市より依頼を受け実施した。調査に際しては、国際文化財株式会社中部支店に「畑間・東畑遺跡発掘調査業務委託」として業務委託の上、実施した。
3. 本事業は、現地での発掘調査を平成 26 年 5 月 1 日から同年 11 月 26 日まで実施した。出土遺物の洗浄や注記などの一次整理作業は発掘調査期間の後半から現場事務所を開始し、復元・実測作業や資料分析を中心とした二次整理作業は、平成 27 年 5 月 8 日から国際文化財株式会社中部支店（愛知県清須市）において発掘調査報告書の作成作業と同時に、本書の刊行をもって終了した。

各地点の調査面積は以下のとおりである。

1 地点：(畑間遺跡地内、HM14-1)：	165㎡
2 地点：(畑間遺跡地内、HM14-2)：	205㎡
3 地点：(畑間遺跡地内、HM14-3)：	502㎡
4 地点：(東畑遺跡地内、HH14-4)：	206㎡
5 地点：(東畑遺跡地内、HH14-5)：	100㎡
6 地点：(畑間遺跡地内、HM14-6)：	164㎡
合計調査面積	1,342㎡

4. 現地調査は、東海市教育委員会社会教育課主任宮澤浩司の監督の下、国際文化財株式会社中部支店主任調査員坂野俊哉、現場代理人・施工管理技士足立勤、測量技師上田誠人および青山宗清が担当した。
5. 調査の実施にあたり、東海市教育委員会、東海市中心街整備事務所、愛知県教育委員会、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、知多古文化研究会など、関係各位の御協力を賜った。
6. 自然科学分析のうち、各地点から採集した貝層の貝種同定を国際文化財株式会社調査員西野順二が行い、ハマグリ成長線分析を埼玉大学大学院の畑山智史氏に、プラントオパールや微粒炭をターゲットにした土壌分析および各種サンプルの放射性炭素年代測定を(株)パレオ・ラボに依頼した。
7. 調査および報告書作成にあたっては、  
青木 修、赤塚次郎、石黒立人、大倉 崇、小栗康寛、寛 和也、鬼頭 剛、桜庭 洋、十田幸明、鈴木正貴、竹原弘展、立松 彰、辻西 恒、利川 昇、中野晴久、中村賢太郎、中村 毅、永井邦仁、永井宏幸、丹生泰雪、西川邦彦、西村誠治、樋口正人、藤澤良祐、脇木真美子、増子康真、森まどか、森村知幸、山下勝年、山本智子の各氏にさまざまな助言および協力を頂戴した。ここに記して御礼申し上げる次第である。
8. 発掘調査と現場事務所における出土遺物の水洗および、一次・二次整理作業は、  
牟田神東勝男、平野光男、平野武光、藤井恭彦、中野真知子、水谷美子、山本 學、神野政一、山崎久生、藤井恵美子、下谷雅子、井上由子、入谷敦子、川島明美、亀井久美子、野呂和子、加勢秋彦、山本明日香、樋田泰之、大塚正樹、加藤豊子、花井晶子らの尽力によって為し得たものである。
9. 出土遺物の実測・採拓・復元およびデジタルトレース作業は、加藤豊子、花井晶子、ナカシャクリエイテブ(株)の協力を得た。
10. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は、上田誠人、坂野俊哉、ナカシャクリエイテブ(株)が行った。
11. 今回出土した遺物、作成した図面、写真などの記録および各種資料はすべて東海市教育委員会で保管している。
12. 本書の執筆は坂野俊哉(国際文化財株式会社)を中心に、第 1 章第 1 節・第 3 節を宮澤浩司(東海市教育委員会)

が行った。なお、第4章自然科学分析に関しては、各節の分析項目冒頭に執筆者と所属機関を記してある。

13. 付載としては、今回の調査で発見された弥生土器片にみられる鹿線刻画について、愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏に玉稿を賜った。また、とこなめ陶の森資料館小栗康寛氏には、過去の調査で出土した資料も含めた石織の考察を寄稿いただいた。
14. 表紙は鹿線刻画拓影図（線画との合成）である。

## 凡 例

1. 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第VII系に準拠し、世界測地系にて表記している。メートル=m 単位での表記を基本とするが、文中では必要に応じてセンチメートル=cm を用いている。
2. 標高は全て T.P.= 東京湾平均海面高度による。
3. 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』（2007年版）を用いた。
4. 本書で使用する遺構番号は、種類種別に関係なく各地点毎に完結した通し番号を与え、番号の後ろにその属性記号を表記してある。遺物番号は遺物実測図の通番を基本に、地点上げ遺物の場合は出土地点を表す「d」を先に記し、そのあとに通し番号を付した（例：d-001、d-123 など）。なお、「k」を付したものは基本的に遺物包含層出土の遺物だが（例 k-018 など）、例外も含まれている。
5. 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。遺物の出土分布図に関してはその種類によって縮尺が統一されていない場合もあるが、各図に表示した。
6. 中世遺物の時期に関して、出土分布図や観察表においては略号を用いた。例えば「尾6」は尾張編年第6型式段階を、「常5」は常滑窯編年の5型式段階を表す。
7. 参考文献目録は必要に応じて本文脚注などに記したものもあるが、あらためて巻末にも一括して掲載した。

		型 式	
古 器	高 麗 瓦 (30×30)	須 賀 瓦 (20×20)	瀬 戸 瓦 (20×20)
1100	1 a	VII-1	第3型式
	1 b	VII-2	第4型式
1150	2		
	3	VII-3	第5型式
1200	4		
	5	VII-1	第6型式
1250	6 a	VII-2	第7型式
	6 b		
1300		VII-3	第8型式
	7		
1350			第9型式

\*愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第152集  
『夏敷古窯跡・蛇廻岡古窯跡』掲載表を元に作成

縮尺例 (尾5)

(尾6)

# 目 次

巻頭図版

序

例言・凡例

第1章 調査の経緯と遺跡の環境	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の位置と地理的歴史的環境	2
第3節 畑間・東畑遺跡における既往の調査	10
第4節 発掘調査の方法	11
第5節 調査経過	15
第2章 畑間遺跡（1地点・2地点・3地点・6地点）、 東畑遺跡（4地点・5地点）の調査	23
第1節 1地点（HM14-1）の調査	23
第2節 2地点（HM14-2）の調査	35
第3節 3地点（HM14-3）の調査	45
第4節 4地点（HH14-4）の調査	72
第5節 5地点（HH14-4）の調査	104
第6節 6地点（HM14-6）の調査	119
第3章 自然科学分析	129
第1節 貝層分析の結果	129
第2節 東畑遺跡2014年度調査出土ハマグリ成長線分析	137
第3節 畑間遺跡のプラント・オパール分析と微粒炭分析	144
第4節 畑間遺跡の放射性炭素年代測定	148
第5節 東畑遺跡出土木材化石の放射性炭素年代測定	152
第4章 まとめ	155
1 黒色土の提起する諸問題	155
2 古代から中世前半における相関する複数の問題	157
3 弥生中期後半の土器群と古式土器再編へのがかり	161
4 縄文時代について	164
5 中世の諸問題	164
6 近世の諸相	165

付載 1 愛知県東海市東畑遺跡の“鹿”線刻画をめぐる断想..... 167付載 2 弥生時代中期の石畿について..... 181

## 遺構観察表

## 図版

## 写真図版

## 挿 図 目 次

第 1 図	畑間・東畑遺跡の位置	..... 1	第 33 図	3 地点西セクション図 2・南セクション図	..... 55
第 2 図	愛知県周辺の地質図	..... 3	第 34 図	102SD 溝	..... 56
第 3 図	常滑層群の分布状況	..... 4	第 35 図	096SK・099SK 土坑?	..... 57
第 4 図	第四系の地質図	..... 4	第 36 図	027SK 土坑	..... 58
第 5 図	東海市へ知多市北部遺跡分布図	..... 5・6	第 37 図	053SD 溝・059SK 土坑・018SX 砂 の硬化面	..... 59
第 6 図	知多半島の荘園・国衙領推定位置図	..... 8	第 38 図	016SX 木製貯蔵施設?	..... 61
第 7 図	遺跡分布図(詳細)	..... 9	第 39 図	012SX 性格不明な大形土坑	..... 62
第 8 図	既往の調査地 (S=1/2500)	..... 12	第 40 図	017SX 性格不明な大形土坑	..... 63
第 9 図	調査区グリッド図	..... 13	第 41 図	3 地点条痕文土器分布図	..... 65
第 10 図	基本層序模式図	..... 14	第 42 図	3 地点主要遺物分布図(西半)	..... 67・68
第 11 図	1 地点セクション位置 (1/500)	..... 23	第 43 図	3 地点主要遺物分布図(東半)	..... 69・70
第 12 図	003SK 土坑	..... 24	第 44 図	3 地点出土遺物(近世の焼し瓦)	..... 71
第 13 図	1 地点遺構平面図	..... 25・26	第 45 図	4 地点セクション位置 (1/500)	..... 72
第 14 図	1 地点北セクション図	..... 27	第 46 図	4 地点遺構平面図(弥生へ古墳)	..... 73・74
第 15 図	1 地点北・東セクション図	..... 28	第 47 図	4 地点遺構平面図(中世前半)	..... 75・76
第 16 図	001SX・002SD・004SK・006SK 遺物分布図	..... 30	第 48 図	4 地点遺構平面図(中世後半)	..... 77・78
第 17 図	009SD 区画溝	..... 31・32	第 49 図	4 地点北セクション図 1	..... 79
第 18 図	東掘乱からの出土遺物	..... 33	第 50 図	4 地点北セクション図 2・西セクション図	..... 80
第 19 図	2 地点セクション位置 (1/500)	..... 35	第 51 図	001SD 溝群	..... 83・84
第 20 図	2 地点遺構平面図	..... 37・38	第 52 図	4 地点 002SU 土器集積	..... 85
第 21 図	2 地点北セクション図	..... 39	第 53 図	014SD/027SZ 幅広床下周溝を持つ 住居址	..... 86
第 22 図	2 地点北・東・南セクション図	..... 40	第 54 図	008SB 住居址	..... 87
第 23 図	003SD 溝	..... 42	第 55 図	011SB 住居址	..... 88
第 24 図	002SD 大溝	..... 43	第 56 図	009SB 住居址	..... 89
第 25 図	3 地点セクション位置 (1/500)	..... 45	第 57 図	弥生時代～古代の遺構と出土遺物	91・92
第 26 図	009SK 土坑	..... 46	第 58 図	4 地点中世前半の遺構と出土遺物	93・94
第 27 図	3 地点遺構平面図(西半)	..... 47・48	第 59 図	4 地点中世後半の遺構と出土遺物	95・96
第 28 図	3 地点遺構平面図(東半)	..... 49・50	第 60 図	拡張区出土の遺物	..... 97
第 29 図	3 地点北セクション図 1	..... 51	第 61 図	291 把手部復元案	..... 98
第 30 図	3 地点北セクション図 2	..... 52	第 62 図	知多郡大里村繪圖	..... 100
第 31 図	3 地点北セクション図 3	..... 53			
第 32 図	3 地点東セクション図・西セクション図 1	..... 54			

第 63 図	今回検出した 014SD/027SZ 住居址 (上) と姫下遺跡 SB08 住居址 (下) ……	102	第 82 図	HM14-2 貝層サンプル 3 ……	130
第 64 図	5 地点セクション位置 (1/500) ……	104	第 83 図	HM14-2 貝層サンプル 4 ……	131
第 65 図	5 地点遺構平面図 (弥生) ……	105	第 84 図	HM14-4 001SD-22 貝層サンプル ……	131
第 66 図	5 地点遺構平面図 (中世) ……	106	第 85 図	HM14-2 002SM 貝層サンプル ……	132
第 67 図	5 地点東セクション図・南セクション図 1 ……	107	第 86 図	HM14-5 001SM 貝層サンプル ……	133
第 68 図	5 地点南セクション図 2 ……	108	第 87 図	HM14-5 003SM 貝層サンプル ……	134
第 69 図	001SM 貝層範囲 ……	110	第 88 図	貝殻の計測点と切断面の模式図 ……	137
第 70 図	004SK 墓壇と考えられる土坑 ……	112	第 89 図	出土ハマグリの最終日周線数 ……	139
第 71 図	5 地点弥生時代の遺構と出土遺物 ……	114	第 90 図	Walford 法による東細遺跡出土ハマグリの成長速度 ……	140
第 72 図	5 地点中世の遺構と出土遺物 ……	115・116	第 91 図	細間遺跡における植物珪酸体および微粒炭分布図 ……	145
第 73 図	平成 23 年度調査区 4 地点出土縄文土器拓影図 ……	118	第 92 図	暦年校正結果 ……	151
第 74 図	6 地点セクション位置 (1/500) ……	119	第 93 図	暦年校正結果 ……	153
第 75 図	004SD 溝 ……	120	第 94 図	大田地区出土の石包丁 ……	156
第 76 図	6 地点遺構平面図 ……	121・122	第 95 図	東海市南部～知多市北部の条里制遺構と土地条件 ……	158
第 77 図	6 地点東・西セクション図 ……	123	第 96 図	大田地区出土の瓦塔・香葉唐草文瓦当およびプラント・オパール検出位置 ……	159
第 78 図	6 地点南セクション図 ……	124	第 97 図	各遺跡出土の獅子懸式土器 (1) ……	162
第 79 図	6 地点主要遺物分布図 ……	125・126	第 98 図	各遺跡出土の獅子懸式土器 (2) ……	163
第 80 図	HM14-2 貝層サンプル 1 ……	129			
第 81 図	HM14-2 貝層サンプル 2 ……	130			

## 付 表 目 次

第 1 表	地質年代表 ……	2	第 15 表	貝殻成長線分析の結果 ……	139
第 2 表	既刊報告書一覧 ……	11	第 16 表	東細遺跡における年齢組成 ……	141
第 3 表	HM14-2 貝層サンプル 1 ……	129	第 17 表	細間遺跡 3 地点における年齢組成 ……	144
第 4 表	HM14-2 貝層サンプル 2 ……	130	第 18 表	試料 1g 当りのプラント・オパール個数 ……	144
第 5 表	HM14-2 貝層サンプル 3 ……	130	第 19 表	微粒炭分析に用いた試料の計量値と微粒炭数 ……	145
第 6 表	HM14-2 貝層サンプル 4 ……	131	第 20 表	測定試料および処理 ……	148
第 7 表	HM14-4 001SD-22 貝層サンプル ……	131	第 21 表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 ……	149
第 8 表	HM14-2 002SM 貝層サンプル ……	132	第 22 表	測定資料および処理 ……	152
第 9 表	HM14-5 001SM 貝層サンプル ……	133	第 23 表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果 ……	153
第 10 表	HM14-5 003SM 貝層サンプル ……	134			
第 11 表	各貝層サンプル集計 ……	136			
第 12 表	検出動物分類一覧表 ……	136			
第 13 表	貝殻成長線分析のサンプルリスト ……	138			
第 14 表	日周線による季節区分 ……	138			

## 写真目次

写真1	130 壺欠損部分	63	写真16	編模様 A	128
写真2	出土の瓦塔部位解説写真	64	写真17	編模様 B	128
写真3	201 頸部に粘土紐の輪積み痕を残す (下は内面)	90	写真18	東畑遺跡 5 地点 001SM 貝層の貝種	135
写真4	195 上例同様頸部に残された輪積み痕	90	写真19	作成した検鏡用プレパラートの一部	143
写真5	289 道具瓦?	98	写真20	観察用レプリカとその保存用貝殻片	143
写真6	「加工さいころ」	98	写真21	観察用レプリカの切断面	143
写真7	299 有溝研磨具	99	写真22	最終冬輪と腹縁の顕微鏡写真	143
写真8	出土瓦塔 (上: 4 地点、下: 3 地点 132)	101	写真23	産出した植物珪酸体と微炭炭分析の プレパラート写真	147
写真9	噴出物の様子	103	写真24	畑間遺跡放射性炭素年代測定試料	151
写真10	基盤層で確認された皿状構造の様子	109	写真25	木材化石片	154
写真11	001SM 貝層の拡がり	111	写真26	測定用に切り分けた小片	154
写真12	片口鉢 (346) と壺口縁 (350) の出土状況	111	写真27	分析試料	154
写真13	10 層 (混土貝層) と山茶碗の出土状況	111	写真28	096SK 土壌サンプル採取位置	155
写真14	001SM 貝層圧縮部分の断面	111	写真29	3 地点 102SD セクション	157
写真15	かわらけ (359 ~ 361) の 出土状況	127	写真30	特殊丸瓦 (291)	160
			写真31	特殊丸瓦とその仲間たち	160

## 巻頭図版目次

巻頭図版第 1	鹿線刻画 線刻画土器出土地点 (☆)	巻頭図版第 3	2 地点完掘状況 5 地点貝層断面 5 地点出土の甕 (306) 5 地点出土の壺 (312)
巻頭図版第 2	4 地点全景 溝群完掘状況 4 地点出土の瓦類 3 地点出土の壺 (130) 4 地点出土の甕 (201) 6 地点完掘状況 5 地点完掘状況	巻頭図版第 4	1 地点出土の古瀬戸水注 (034) 1 地点完掘状況 3 地点完掘状況

## 図版目次

図版第 1	1～6地点遺構観察表 (1)	図版第 29	4地点出土遺物実測図 (1/2) (6)
図版第 2	1～6地点遺構観察表 (2)	図版第 30	4地点出土遺物実測図 (1/2) (7)
図版第 3	1～6地点遺構観察表 (3)	図版第 31	4地点出土遺物実測図 (1/2) (8)
図版第 4	1地点出土遺物実測図 (1/2) (1)	図版第 32	4地点出土遺物実測図 (1/2) (9)
図版第 5	1地点出土遺物実測図 (1/2、013・014・019 は 1/3) (2)	図版第 33	4地点出土遺物実測図 (1/2、262 は 1/3) (10)
図版第 6	1地点出土遺物実測図 (1/2、028～032 は 1/3) (3)	図版第 34	4地点出土遺物実測図 (1/2、266 は 1/3) (11)
図版第 7	1地点出土遺物実測図 (1/2) (4)	図版第 35	4地点出土遺物実測図 (1/2) (12)
図版第 8	1地点出土遺物実測図 (1/2、058 は 1/3) (5)	図版第 36	4地点出土遺物実測図 (1/2) (13)
図版第 9	1地点出土遺物実測図 (1/2、068・069 は 1/3) (6)	図版第 37	4地点出土遺物実測図 (1/2) (14)
図版第 10	1地点出土石器実測図 (1/2、072・073 は 1/3)	図版第 38	4地点出土遺物実測図 (1/2) (15)
図版第 11	1地点出土遺物観察表 (1)	図版第 39	4地点出土石器実測図 (1/1) (1)
図版第 12	1地点出土遺物観察表 (2)、 1地点出土石器観察表	図版第 40	4地点出土石器実測図 (1/2、299 は 1/1) (2)
図版第 13	2地点出土遺物実測図 (1/2) (1)	図版第 41	4地点出土遺物観察表 (1)
図版第 14	2地点出土遺物実測図 (1/2) (2)	図版第 42	4地点出土遺物観察表 (2)
図版第 15	2地点出土遺物観察表	図版第 43	4地点出土遺物観察表 (3)、 4地点出土石器観察表
図版第 16	3地点出土遺物実測図 (1/2) (1)	図版第 44	5地点出土遺物実測図 (1/2) (1)
図版第 17	3地点出土遺物実測図 (1/2) (2)	図版第 45	5地点出土遺物実測図 (1/2) (2)
図版第 18	3地点出土遺物実測図 (1/2、131・135～137 は 1/3) (3)	図版第 46	5地点出土遺物実測図 (1/2、312 は 1/3) (3)
図版第 19	3地点出土遺物実測図 (1/2、158～161 は 1/3) (4)	図版第 47	5地点出土遺物実測図 (1/2) (4)
図版第 20	3地点出土遺物実測図 (1/3) (5)	図版第 48	5地点出土遺物実測図 (1/2、344 は 1/3) (5)
図版第 21	3地点出土遺物実測図 (1/3) (6)	図版第 49	5地点出土遺物実測図 (1/2、349・351 は 1/3) (6)
図版第 22	3地点出土石器実測図 (1/2)、 3地点出土遺物観察表 (1)	図版第 50	5地点出土石器実測図 (1/1、355 は 1/2)、 5地点出土遺物観察表 (1)
図版第 23	3地点出土遺物観察表 (2)、 3地点出土石器観察表	図版第 51	5地点出土遺物観察表 (2)、 5地点出土石器観察表
図版第 24	4地点出土遺物実測図 (1/2) (1)	図版第 52	6地点出土遺物実測図 (1/2)
図版第 25	4地点出土遺物実測図 (1/2) (2)	図版第 53	6地点出土石器実測図、 6地点出土遺物観察表、 6地点出土石器観察表
図版第 26	4地点出土遺物実測図 (1/2) (3)		
図版第 27	4地点出土遺物実測図 (1/2) (4)		
図版第 28	4地点出土遺物実測図 (1/2、203 は 1/3) (5)		

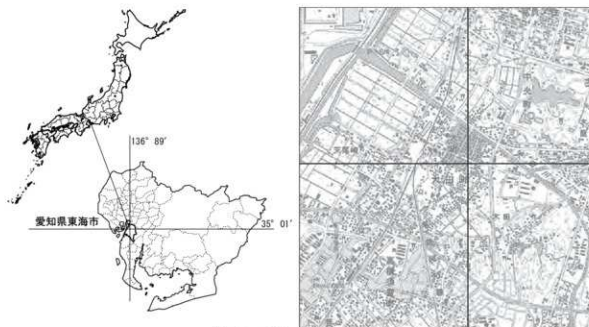
## 写真図版目次

写真図版第 1～5	1地点	写真図版第 13～24	4地点
写真図版第 6～8	2地点	写真図版第 25～28	5地点
写真図版第 9～12	3地点	写真図版第 29	6地点



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

## 第1節 調査にいたる経緯



第1図 畑間・東畑遺跡の位置

畑間遺跡及び東畑遺跡は愛知県東海市大田町に位置する（第1図）。平成8年度から10年度にかけて愛知県教育委員会が実施した知多半島遺跡詳細分布調査<sup>1</sup>によると、畑間遺跡は古墳時代から中世にかけての遺物散布地、東畑遺跡は弥生時代から中世にかけての遺物散布地とされている。

本市では、名古屋鉄道太田川駅周辺地区を東海市の玄関口として位置づけ、中心市街地としての整備を進めており、平成4年度から土地区画整理事業、連続立体交差事業及び市街地再開発事業の3つの事業を実施している。こうした事業のうち、土地区画整理事業に伴い、事業区域内に所在する埋蔵文化財包蔵地について、その範囲および性格を把握するために平成8年度に試掘調査を実施した<sup>2</sup>。この調査によって、事業区域内には畑間遺跡、東畑遺跡、郷中遺跡の他、後田遺跡、龍雲院遺跡が存在することを確認した。この試掘調査の結果に基づき土地区画整理事業担当当局である都市建設部中心街整備事務所と協議・調整をはかり、平成11年度から東海市教育委員会によって、主として道路整備用地の記録保存を目的とした緊急発掘調査を継続して実施している。平成26年度末時点での調査済み面積は19,815㎡である。

平成26年度の調査は、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者である東海市長から、平成26年4月4日付け第19号にて文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知があり、平成26年6月1日付け26教生第287号にて愛知県教育委員会教育長か

1 『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』愛知県教育委員会 1999

2 『愛知県東海市東畑遺跡等試掘調査報告』東海市教育委員会 1997

ら発掘調査指示があった。また、畑間遺跡、東畑遺跡範囲内の7地点1,200㎡について、原因者である東海太田川駅周辺土地区画整理事業施行者代表者の東海市長から平成26年4月4日付け中第20号にて発掘調査依頼があり、平成26年4月4日付け社第59号にて東海市教育委員会教育長から発掘調査を実施する旨回答し、現地調査業務及び1次整理作業について、平成26年4月22日に国際文化財株式会社中部支店と業務委託契約を締結した。

現地調査は5月1日より着手し、社会教育課職員の監督の下、1地点、3地点、6地点、5地点、4地点の順に調査を実施した。同年11月26日に現地調査は終了し、その後現場事務所に1次整理作業を実施し、平成27年3月30日付けで成果品の納入を受けた。

平成27年度には報告書作成を行った。現地調査を受託した国際文化財株式会社中部支店と2次整理作業及び報告書作成業務について、業務委託契約を平成27年5月7日に締結した。その後社会教育課職員の監督の下、国際文化財株式会社中部支店の整理事務所において2次整理作業及び報告書作成業務を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。

## 第2節 遺跡の位置と地理的歴史的環境

畑間遺跡と東畑遺跡は知多半島北西部に位置する東海市大田町の、伊勢湾に面した沖積地に存在する。

沖積地には海岸線と並行するように複数の砂堆列がみられ、両遺跡は現在の海岸線からいちばん内陸にある第一砂堆上に存在する。

遺跡名は大田町内の小字に由来するものだが、隣接する郷中遺跡、龍雲院遺跡などとともに砂堆上のほぼ全体がひとつの巨大な歴代遺跡をなしており、前述の各遺跡はその部分的な様相であると

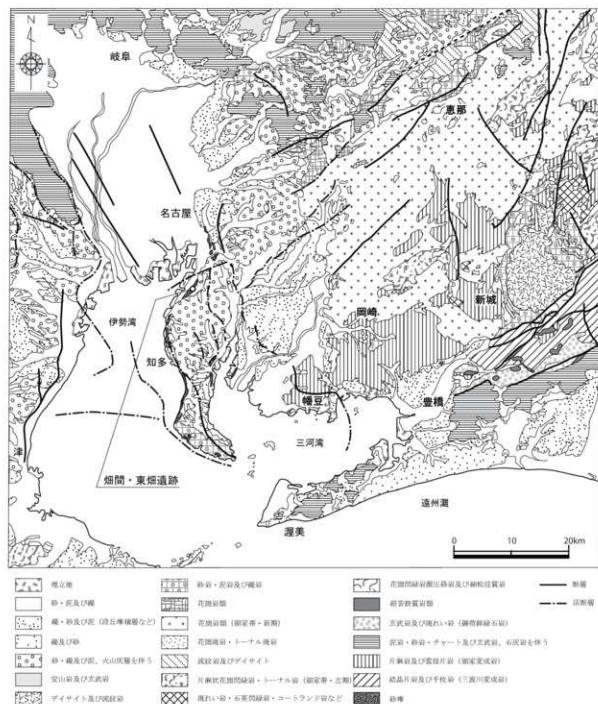
地質時代 (万年前)		地層	厚さ (m)	堆積相	
第四紀	完新世	沖積層	20 ~ 30	上部：砂層	
				中部：海成粘土層	
	更新世	後期	新田層 & 相当層	10	下部：砂層
					上・基底部：礫層
		中期	野間層 & 相当層	30	中部：海成層
					海沫のよい海浜砂層
					厚い粘土層
前期	武豊層 & 相当層 (亀崎層)	30	非海成の砂層		
			薄い海成粘土層		
新第三紀	鮮新世	常滑層群	450	赤褐色表土層 (ロース) と漂白された?角礫層	
				2枚の海成粘土層と風化されたクサリ礫層	
				(中・大礫) との互層	
	中新世	新崎層群	布土累層	180	砂泥互層 (湖沼・河川成)
			河和累層	180	砂層は礫なども含みやや粗くなる 火山灰層をはさむ
			豊丘累層	80	砂泥互層 (湖沼・河川成) 火山灰層をはさむ
			砂礫層 (中・細礫)		
	内海累層	100	火山灰層をはさむ泥層		
	山海・豊浜累層	670	火山灰層・砂泥互層・厚い泥層との互層		
	日間賀累層	100	火山灰質の砂泥互層		

第1表 地質年代表

言うことも出来る。

伊勢湾に突き出した知多半島は、尾張丘陵部から続くなだらかな丘陵地（標高約10～30m前後の知多丘陵）が中央部を貫き、臨海部には数段の段丘面や大小の沖積平野が形成されている。丘陵部の大半は第三紀中新世から鮮新世の常滑層群に属し、常滑層群は下位から豊丘累層・河和累層・布土累層に区分され、互いに整合している（第1表参照）。

半島の南端部である南知多町域にほぼ相当する部分は地質が違い、砂岩・泥岩・頁岩および礫岩などからなる第三紀中新世に属する師崎層群がやや険しい山地を形成し、標高は50～100mほど

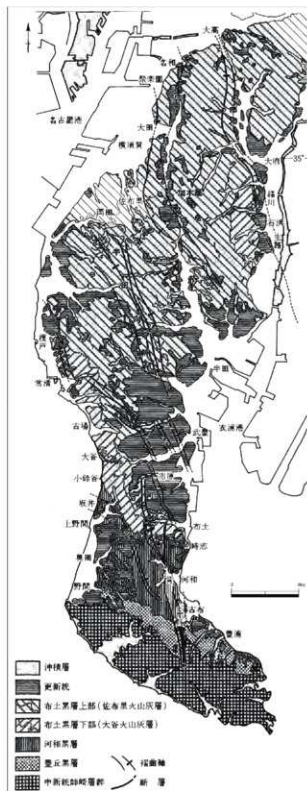


\*「愛知県活断層アトラス」（愛知県防災会議、1979）、「活断層図」（地質調査所、1983）などを元に作成

第2図 愛知県周辺の地質図

である。知多半島の最高峰はこの地帯に含まれる高峯山で、標高は128mである（第3図）。

大田の谷から養父・横須賀の谷、更にはその南に続く八幡の谷周辺にはさまざまな時代の遺跡が点在している（第5図参照）。地域における文化圏という意味では、東海市南部から知多市北部の



第3図 常滑層群の分布状況



(いずれの図も『日本の地質 中部地方2』より)

第4図 第四系の地質図



第5図 東海市～知多市北部遺跡分布図

伊勢湾岸地域はひとつの地域として把握しておく必要がある。

旧石器時代の遺跡は未発見だが、縄文時代の遺跡としては高ノ御前遺跡（前期から断続的に晩期まで）の他に、この大田地区での調査の進展により、第一砂堆上のいくつかの地点で、断片的ながら縄文中期以降の資料が発見されるようになってきた。今回の調査でも2地点の地山面から埴畑式土器が1片発見されている。また、東畑遺跡の限られた範囲でも晩期前半の資料がまとまりをもって発見されており、旧河道をはさんだ高ノ御前遺跡の対岸である東畑遺跡においても晩期の遺跡が展開していた可能性が高い。

弥生時代になると、近世まで海岸線であった第三砂堆が安定的に形成されたようで、横須賀の谷を擁する南側の砂堆ではいくつか活動の痕跡を見出すことができる。すなわち、烏帽子遺跡などはその代表例であり、第一砂堆の南半でも住居址や方形周溝墓など、集落規模の遺跡（畑間遺跡・東畑遺跡など）が営まれるようになる。同時に、知多市側砂堆上でも遠賀川式土器を出土するいくつかの遺跡（荒古遺跡、細見遺跡など）が出現する。中期には方形周溝墓を伴う集落規模の遺跡が、第一砂堆南半に展開していく。弥生時代後期になると海岸部の沖積地を取り囲む丘陵上にも遺跡が出現し（中ノ池遺跡群：標高約20～40m、知多市大廻間遺跡：標高約30mなど）高所性集落の様相を垣間見せるものの、沖積地の遺跡も廃絶すること無く営まれている。東畑遺跡では、後期の集落が砂堆上で地点を移しながら古墳時代前期まで継続して展開する様相が確認されている。該当期の古墳は東海市北部の兜山古墳（三角縁神獣鏡などが出土した4世紀後半の前期古墳＝滅失）がその代表例であると同時に知多半島部最古の古墳であるが、この古墳は領域的には名古屋市南部一帯のアユチ潟に属するものである。名和町塚森遺跡は天白川河口左岸の砂堆上に営まれた歴代遺跡だが、いわゆる塚森類の脚台付製塩土器が出土する。このあたりが旧アユチ潟文化圏の南端と考えてよいだろう。

古代の海浜集落遺跡としては、近世まで海岸線であった第三砂堆北端に位置する松崎遺跡が代表例ではないかと考えられる。古墳時代から古代にかけての拠点的な製塩遺跡で、その時期には第一砂堆上での活動が希薄になる様相が確認されている。後期古墳に関しては、第一砂堆北端の弥勒寺丘陵裾に王塚古墳が、大池のある丘陵部に丸根古墳が、養父・横須賀の谷の第三砂堆上に釈迦御堂古墳が存在していたが、いくらかの遺物や簡易な記録を残し全て滅失してしまった。唯一現存するものとしては、同谷奥丘陵中腹に営まれた岩屋口古墳が挙げられる。巨石を用いた6世紀末頃の後期古墳であり、7世紀から8世紀にかけての追葬品と思われる須恵器が出土している。なお、近年天井石などが復元整備されている。

養父・横須賀の谷の南に続く八幡の谷の第二砂堆に相当する部分に存在する法海寺遺跡は、弥生時代から古代・中・近世まで断続的に続く歴代遺跡である。古代寺院としての法海寺は、文安元年（1444）に書かれた儀軌によれば天智帝7年（668）の創建とされている。発掘調査によれば、境内地からは塔心礎や礎石、白鳳時代の古瓦も発見されており、知多半島部では数少ない古代寺院跡である。出土瓦の研究からは中島郡や海部郡の諸寺と同範・同文関係が指摘されており（『愛知県史』資料編4ほか）、儀軌における熱田神宮との関係の深さなどとあわせて考えると、海路を介した盛んな交流を想像することができる。

また、大田の谷～養父・横須賀の谷～八幡の谷を、臨海沖積平野の砂堆を中心に展開したひとつの文化圏と捉えるなら、当地域の古代はいくつかの神社や岩屋口古墳などに加え、法海寺のような

新たな宗教的中心を獲得したことになり、人々の関心も徐々にこのような大伽藍に移行していったのであろう。

中世の様相は遺跡から出土する遺物や、さまざまな遺構から推察できる。砂堆上では中世にさかのぼるいくつかの区画溝が発見されており、龍雲院遺跡では周囲に小規模な堀を巡らせた居館跡と思われる遺構も検出されている<sup>3</sup>。

生業に関しては、砂堆上や周辺の丘陵地を農業の基盤としながら、伊勢湾を舞台とした半農半漁的な生産形態を推定できると同時に、地域の特産物である焼き物の生産、すなわち窯業に携わる半農半窯の形態も推測可能である。農業、漁業、窯業それぞれの生業には時期的に忙閑の波があることから、これら複数の生業が組み合わされた業態を当地の基本的なものと想定した上で、遺跡からの出土遺物を検討すべきであろう。

古代から中世にかけて、知多半島地域ではいくつかの荘園や国衙領が存在していたことが判明している。記録に残る最古の例は枳豆志庄で、藤原氏の所領であった東北院<sup>4</sup>領として記録に登場する。同じ頃、摂関家領であった堤田庄<sup>5</sup>が、治暦2(1066)年に藤原頼道の弟教道により仁和寺に寄進されている。

続く12世紀の記録としては、鳥羽上皇の安楽寿院領となる野間内海庄が康治2(1143)年に不輸不入の特権を得たことが記されている。その領域については「北西を枳豆志庄と堺、北東を山、南西を界浦」という記述があり、現在の美浜町野間地区から南知多町内海地区を含む臨海荘園であったことがわかる。この野間内海庄には著名な大御堂寺(野間大坊)があり、源義朝が当地で最後を迎えたと言われているが、義朝を暗殺した長田忠致(庄司)またはその父親の致俊が寄進したものとされている。その後野間内海庄は上皇の寵姫八条院の八条院領となり、12世紀末には長講堂(後白河法皇の持仏堂)の所領になっている。なお、同じく八条院領としては、同時期に源満仲らが寄進したとされる大野庄が成立している。



第6図 知多半島の荘園・国衙領推定位置図

- 3 龍雲院遺跡(2013年報告)の居館跡では、区画内の北辺に短刀とともに埋葬された屋敷墓(北枕の仰臥屈葬人骨)が発見されている。時期は12世紀後半に属する。
- 4 藤原氏の娘で一条天皇の中宮となった上東門院彰子の発願により、長元3(1030)年京都の法成寺に建てられた。
- 5 元は春日部、海東、中島、知多、丹羽の五郡に分かれて存在していたもののひとつ。

また、知多半島北部はとりわけ国衙領が集中する地域でもある。英比郷、額石保、藪郷、荒尾郷などがそれであるが、同時にこれらは熱田社とも関係が深く、大郷郷、木田郷、藪郷、御幣田郷、乙川御嶺、英比郷、生路郷などは熱田社領に属していた。正平9(1354)年4月の「熱田社領注進目録」には知多郡内に6箇所の社領が記されており、それぞれの広さについて、御幣田郷：田高539段20歩、大郷郷：田高338段150歩、乙河御嶺：田高443段130歩、英比郷：田高220段、生道郷：田高149段160歩、木田郷：田高210段180歩と記録されている。現在のところ位置不明な御幣田郷は、隣接していたと思われる木田郷の2.5倍近い郷域であったことを念頭に置けば、自ずから大まかな位置が推定されよう。第6図は12世紀から13世紀にかけてのそれらの推定位置を示したものであるが、それぞれの領地における荘園や国衙領としての機能は、地政学的な見地や、中心となる社寺のありよう、遺跡の分布などとともに総合的に考慮されるべきであろう。大郷郷すなわち今回の調査範囲(3地点)には、熱田社ととりわけ関係の深い八幡社(跡)が、古代以来の中心地の一つであり、知多郡衙の有力な候補地の筆頭でもある藪郷には、熱田神社が存在する。近世以降の様相としては、寛文6(1666)年の尾張藩横須賀御殿「臨江亭」の造営(第二代藩主徳川光友による)が画期的な出来事である。養父・横須賀のいちばん海側の砂堆は大田の谷の第三砂堆をも凌駕する広大な砂堆で、知多市側にも続いている。御殿の南側には小規模ながらも城下



第7図 遺跡分布図(詳細)



町風の町割りが敷かれ、17世紀中頃まで馬走瀬（まはせ）と呼ばれていた小さな集落は、横須賀御殿の一部に組み込まれていた<sup>6</sup>。

この臨江亭とそれに伴う大規模回遊庭園であった御洲浜は大田川（旧）河口に位置していたため、河川氾濫などの影響を受けやすかったのであろう。それらの影響を排除すべく、藩主の命令で大田川の流路も谷の北側に新たに開削され、旧河道一帯は湿地や田畑に変貌したものと想像される。

遠浅の海岸部では東海市北部の名和方面から干拓による新田開発（埋め立て式）が進められてきた。その嚆矢が名和前新田で、地積は333反にも及び、元禄8（1695）年の築立である。大田地区の沿岸では大田川の現河口周囲に浜新田が寛延3（1750）年に、南側の後浜新田が寛政9（1797）年に築立し、その後幕末から明治に至るまで干拓事業は続けられていく。このように新たに出現した陸地部分を除き、少なくとも昭和の初め頃までは江戸時代以来の集落構造がほぼそのまま残っていたようである。実際に大田地区の調査の積み重ねによって、時に中世前半にまで遡る区画や地割りが、今回の中心街整備事業直前まで境界や地境として残存していた例がいくつも確認されている。

昭和に入り沿岸は更に埋め立てが進み、江戸時代を通じて開拓されてきた干拓地の輪郭は、西知多産業道路に沿った防波堤としてその痕跡を残している。東海市北部から知多市中部まで続く埋め立て地は、製鉄関連工場や造船工場、LNGや石油備蓄タンク群に変貌している。

### 第3節 畑間・東畑遺跡における既往の調査

畑間遺跡、東畑遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地として知られてはいたが、土地区画整理事業実施以前は試掘調査も含めて、発掘調査は実施されていなかった。初めて調査されたのは、前述のとおり平成8年度実施の土地区画整理事業に先立つ試掘調査である。調査では土地区画整理事業の予定区域内に20箇所のトレンチを設定して試掘調査を行った。このうち畑間遺跡、東畑遺跡に関係するトレンチは12箇所に上る。この試掘調査によって範囲が不明であった各遺跡について、概略ではあるが遺跡の範囲を特定することができた。各遺跡の時期については、畑間遺跡については中世から近世の時期、東畑遺跡については弥生時代中期から古墳時代前期の時期と、古代から中世の時期であることが推測された。

その後、平成11年度から土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査によって、畑間遺跡、東畑遺跡それぞれの発掘調査が行われることで各遺跡の様相が明らかとなってきた。既往の調査地は第8図に示した通りであるが、各年次の調査は土地区画整理事業に伴う家屋移転の進捗に応じて調査を実施しており、家屋移転の進捗状況が進んでいなかった調査の初期段階には小規模な調査とならざるを得なかった。このため、遺跡全体の様相のみならず、近隣の調査区での遺構との整合を図ることすら調査の初期段階では困難な状況であった。

調査の初期段階は駅前から延びる街路（駅前線）を中心に調査を行ったことから、南北方向に長く延びた畑間遺跡の中央部を東西方向に調査する形となった。その後、周辺の街区道路の調査を順

6 現在は名鉄常滑線尾張横須賀駅のある地区が横須賀地区の中心部という印象が強いが、本来の横須賀は名鉄河和線高横須賀駅側の砂堆上に展開する高横須賀集落である。残念ながら高横須賀地区の考古学的情報はほとんど知られていないが、大田地区同様、現在の集落の下には中世集落がまるごと眠っている可能性が高い。

次実施している。これまでの調査では、主に縄文時代から近世にかけての幅広い時期の遺物・遺構を確認している。特筆すべき事項としては、第1に縄文時代後期以降の縄文土器がまとまって出土したことがある。畑間・東畑遺跡が立地する砂堆の形成時期を示唆する新たな知見である。また、第2に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、それぞれの時期毎の生活域が分かってきたことも挙げられる。近年の調査では、駅前線以外の街区道路部分の調査も進んできており、おぼろげながらもではあるが、遺跡内での集落の消長をたどることができるようになってきている。

なお、調査開始時の平成11年度から平成19年度までは東海市教育委員会直営で調査を実施した。この間の調査成果については概要報告<sup>7</sup>を行うと共に並行して整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行している<sup>8</sup>。平成20年度以降は民間調査機関の支援を受けて調査を実施しており、基本的には調査翌年度に報告書を刊行している。既往の調査で刊行した発掘調査報告書は第2表のとおりである。

調査年次	省名	発行機関	編集機関	発行年
平成20年度	愛知県東海市畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際航業株式会社	2009年(平成21年)
平成21年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	安西工業株式会社名古屋支店	2012年(平成24年)
平成22年度	愛知県東海市平成22年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田園中富岡支所	2012年(平成24年)
平成23年度	愛知県東海市畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2013年(平成25年)
平成24年度	愛知県東海市平成24年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社島田園中富岡支所	2014年(平成26年)
平成11年度～ 19年度	愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告 —平成11～19(1999～2007)年度調査—	東海市教育委員会	国際文化財株式会社西日本支店	2014年(平成26年)
平成25年度	愛知県東海市平成25年度畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告	東海市教育委員会	株式会社アコード名古屋営業所	2015年(平成27年)

第2表 既刊報告書一覧

## 第4節 発掘調査の方法

今回の発掘調査は土地区画整理に伴う市道建設箇所の発掘調査であり、畑間遺跡地内4箇所と東畑遺跡地内2箇所の6つの地点に分かれている。

それぞれの地点における調査用グリッドについては、愛知県埋蔵文化財センター『埋蔵文化財の調査・研究に関する基本マニュアル』に基づき、1辺5mの小グリッドを最小単位として設定した。

すなわち、世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系の座標に基づき、座標のX軸を座標系原点の子午線に一致する軸とし、Y軸をX軸に直交する軸とし、座標系原点からX軸は真北へ、Y軸は東へ向かう数値を正とする。これに基づき、1km×1kmの大グリッドを設定し、更に100m×100mの中グリッドを設定し、その中の最小単位として5mグリッドを設定した(第9図)。

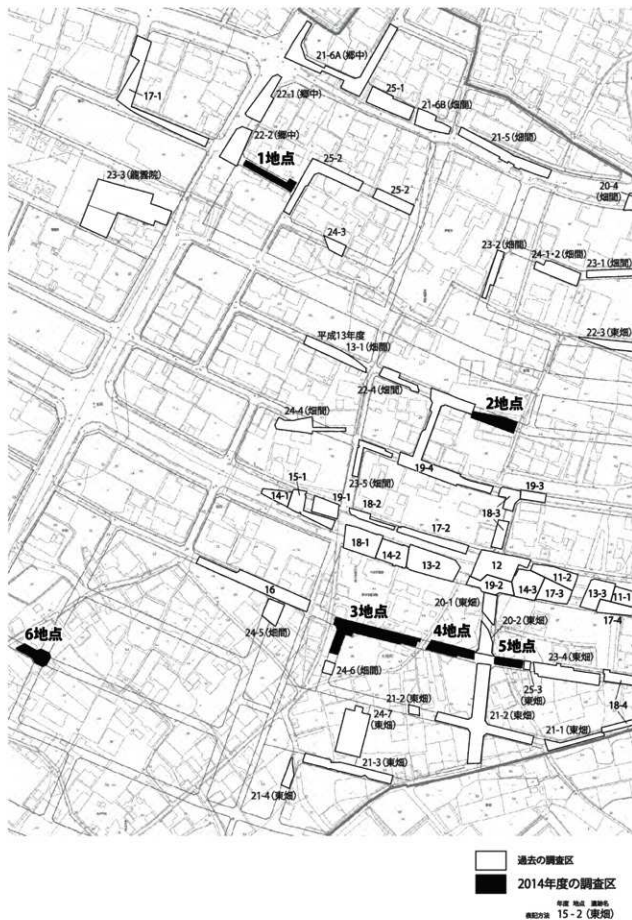
実際の発掘調査は、各地点の試掘データや周辺の調査結果を参考に、重機を用い表土及び攪乱土を掘削除去後、人力による掘削を実施した。

遺跡の記号については、畑間遺跡：HM(1地点・2地点・3地点・6地点) 東畑遺跡：HH(4地点・5地点)とした。例えばHM14-3は2014年度畑間遺跡3地点という意味である。

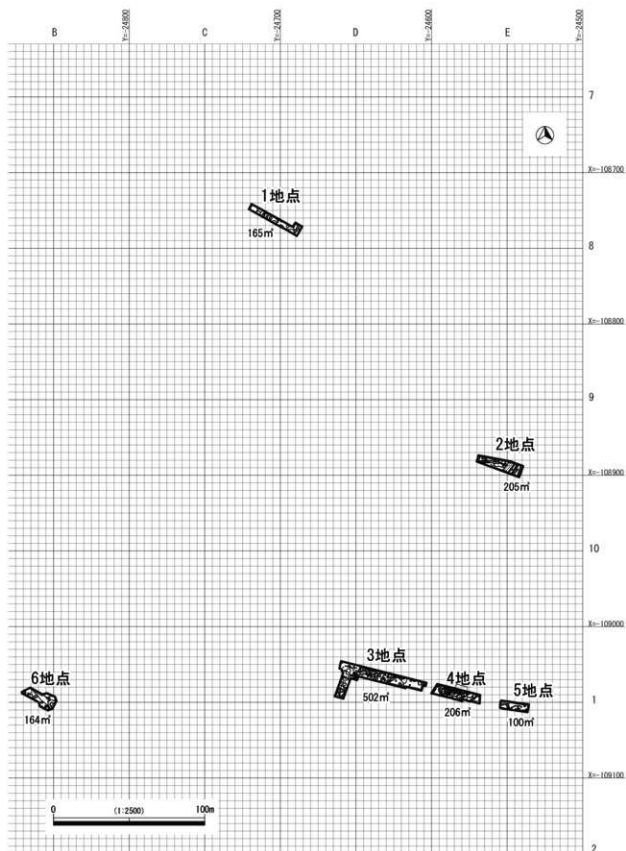
7 「伊勢湾を望む海辺の遺跡—東畑遺跡等発掘調査概報—」東海市教育委員会(永井伸明・宮澤浩司)『研究報告とうかい』創刊号 東海市教育委員会 2007

「伊勢湾を望む海辺の遺跡(2)—平成19年度畑間・東畑遺跡発掘調査の概要—」東海市教育委員会(宮澤浩司)『研究報告とうかい』第2号 東海市教育委員会 2009

8 「愛知県東海市畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査—」東海市教育委員会 2014



第8図 既往の調査地 (S=1/2500)



第9図 調査区グリッド図

主な遺構の種類は、以下の略号を用いた。

SB: 住居址 SD: 溝 SK: 土坑 SP: 柱穴またはピット SM: 貝塚または貝層 SU: 集積遺構  
 SX: 不明遺構およびその他 SZ: 墳墓（今回1基のみ例外あり） NR: 自然流路

重要遺物や特定の遺物に関しては地点上げ遺物扱いとして各地点毎にd-001から番号を付し、トータルステーションを用い出土地点を測量した。各地点のd番号は遺物観察表と実測図でも共通で使用している。

各地点は高所作業車を用い、完掘状況の全景写真を撮影した。

調査終了後は重機を用い掘削土で埋め戻し作業をおこなった。出土遺物の洗浄および一次整理は、調査期間の後半から現場事務所にて、調査作業と並行しておこなった。

### 基本層序

基本層序は第一砂堆上の各調査区に共通するものである。

I層は一般に現代の表土や耕作土、工事などでもたらされた客土や、現代を中心とした攪乱層も含まれている。

II層は近世の遺物包含層や、それに類する整地層などである。

III層は中世の遺物包含層や、それともなう遺構埋土、整地層などである。

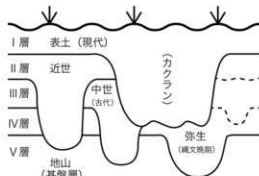
IV層は縄文時代の遺物を散漫に含む弥生時代の遺物包含層で、遺構埋土などを含む。

V層は一般に地山と呼ばれる基盤層であり、当地では無遺物の砂層である。

言うまでもなくこれらの層は全ての地点において普遍的に存在するものではなく、実際に模式図に示したような整然とした層序が見られる地点はほとんど存在しない。また、I層表土とII層の境界は明確な場合が多いが、II層とIII層の境界は極めて曖昧であり、確実に分層出来ることは稀である。更には、地点によってはIV層が存在しないこともあり、I層表土が直接V層地山に乗る状況、すなわち明確な遺物包含層が存在しないこともあった。（今回報告する畑間遺跡3地点=HM14-3など）

このような状況が出現する理由としては、大田地区のほぼ全域が弥生時代以降、中近世から現代にまで営まれ続けた巨大な歴代遺跡であることや、一部の客土を除き、遺物包含層の大半が均質性の高い砂層であること、遺構面がほぼ同一場所で、常に地業や開墾が続けられた結果としての堆積であることなどを挙げる事が出来る。

もちろん地点によって時代別の濃淡があり、縄文時代の遺物が比較的多く採集される範囲や、弥生時代の遺物や遺構が濃厚に存在する地点もある。不思議なことに古代に関しては極めて局所的な様相でしか遺構や遺物が発見されていないが、中世以降の遺物は第一砂堆に乗る集落範囲のほぼ全域で散布が見られることから、郷中遺跡を中心とした集落が周辺に耕作地を伴い存在していたものと考えられる。



第10図 基本層序模式図

## 第5節 調査経過

期間・東畑遺跡発掘調査は平成26年4月22日に業務委託契約を締結し、周辺工事の関係上優先的に調査を済ませる必要があった1地点から作業を開始した。

主な作業工程は以下の如くである。(調査日誌抄録を兼ねる)

- 平成26年(日付の後ろは当該日の調査現場における最高気温である)
- 5月1日に全ての調査予定地を視察。1地点については調査予定地を取り囲む、フェンス設置予定プランを縄張りした。同時に調査予定地近隣住民に挨拶回りをする。
- 5月2日から1地点の調査区周囲に安全フェンスを設置。作業員代表者と打合せ。
- 5月7日23°:仮設事務所プレハブを設置。測量基準点設置作業を開始。
- 5月8日24°:道具類の搬入。
- 5月9日25°:仮設事務所に水道設置と電気工事。午後、東邦ガスの立ち会いで埋設管の確認。
- 5月12日22°:宮澤氏立ち会いの下1地点表土掘削の開始。夕方までに約3分の2を終了。調査区西端部分に湧水有り。
- 5月13日27°:作業員新規入場者講習を実施。現場事務所周辺にフェンス設置。表土掘削を継続。調査区東端で極めて良好な遺物包含層を検出し、調査区拡張の可能性を検討する。
- 5月14日28°:表土掘削の継続と同時に、調査区清掃開始。調査区西端からの湧水対策として水中ポンプ釜場を設置。いたるところに近現代の覆乱を確認。
- 5月15日23°:セクション清掃と同時に遺構検出開始。調査区東端部分を約3m北側に拡張し、表土掘削を完了。拡張部分は中世遺物の出土が多い。
- 5月16日25°:東拡張区からの中世遺物の出土多く、完形の山皿を中心に地点上げ測量を行う。調査区西半は地山の砂層が露出しはじめたので、遺構検出を開始。
- 5月19日28°:東拡張区からの中世遺物出土続く。近世覆乱の中にも中世遺物が多く混ざる状況。古瀬戸水注が出土。
- 5月20日25°:東拡張区を南北に縦断する溝を確認。近世覆乱は赤土大甕を埋設した結果である可能性が高い。
- 5月21日23°:降雨と水中ポンプを止めてあったため、調査区の大半が水没する。一時的に排水を行う。
- 5月22日25°:遺構掘削終了、地山標高は西端1.637m、中央2.266m、東端2.315m 空掘に備え、調査区内外を清掃し、道具類を撤収。遺構測量および調査区外形測量。最終的な面積は164.7㎡となった。測量班は引き続き3地点の基準点設置と調査区位置出し。
- 5月23日28°:高所作業車(22m)からの完掘状況空撮を行う。
- 5月26日23°:1地点フェンス撤収および、東拡張区の埋め戻し。3地点フェンス位置出し縄張りおよび、調査区縄張り完了。近隣住民のための仮設駐車場を整備。
- 5月27日26°:3地点、調査予定地周辺にフェンス設置完了。
- 5月28日30°:3地点、周辺清掃後、調査前状況の撮影。



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

5月29日 30°：調査範囲面積は概算で約450㎡となる。重機搬入。0.45と0.25の2台+排土運搬用ダンプで稼働予定。

5月30日 30°：調査区西部の南北部分から表土掘削開始。現地表から50～60cmほどでいきなり地山砂層を確認。遺構や遺物の気配は極めて希薄。

6月2日 30°：本日は調査区東端部分より表土掘削の続き。こちら側は中世以前の遺物包含層が残存している様子。

6月3日 29°：測量班による調査用グリッド杭打ち作業。

6月4日 29°：新規入場者講習に引き続き、6月度安全大会を開催。

6月5日 24°：雨天作業中止。内業で1地点のセクション図を調整。

6月6日 28°：調査区西部の南北部分南セクションの分層および土層注記。地山面で性格不明な大形土坑を複数検出し、掘削開始。地山面からしばしば水神平式の条痕文土器が出土。

6月9日 29°：南北部分西セクションを分層し、土層注記および写真撮影。明確な遺物包含層が存在せず、表土を除去すると直ちに地山に到達する構造。地山面に掘り込まれた土坑から、弥生中期の壺を検出。単独で埋納された土器棺の可能性もある。

6月10日 28°：調査用グリッド杭打ち完了。井戸跡の大きな攪乱を確認。南北部分の北半には、小規模な焚き火の痕跡と思われる炭の堆積を複数箇所検出。

6月11日 25°：掘削作業無し。攪乱範囲や地山標高の測量。重機の往來用に残してあった調査区中央部分の表土掘削完了。

6月12日 31°：性格不明の大形土坑について、近隣住民から巨木の抜根跡ではないかというアドバイスがあった。旧八幡社境内地にはたきさんの巨木があったとのことから、可能性を考慮。調査区南北部分と東西部部分の交差する角地から、長方形の木棺のようなものが埋設された痕跡を発見。部分拡張して調査予定。

6月13日 28°：出土遺物は予想に反し不自然ほど少ない。平安末の布目瓦やいくつかの山茶碗、弥生土器片や近世陶磁器が極めて散漫に出土する。

6月17日 28°：板状の木質が埋設された遺構は数点の金具が伴う様子。埋土からは大量の土鍬が出土する。結局調査区東西部部分の中央あたりまでは、遺物包含層がほぼ存在しない様子が判明。地山面にはいくつも重機の爪痕が確認出来た。本日より現場事務所にて遺物水洗作業を開始。

6月18日 23°：降雨のため屋外作業は中止。いくつかの遺構で図化用写真撮影と測量を行う。

6月19日 29°：地山面の精査に伴い、水神平式土器の破片を検出。個体数は多くないようだが、一箇所にかたまること無く散らばったように分布する模様。

6月20日 30°：性格不明の長方形土坑 016SX を完掘し、写真撮影および測量を行う。長持のような木製品が埋設されたようでもある。東西部部分の中央部あたりでは、弥生期独特の暗褐色を呈する埋土の遺構をいくつか確認。

6月23日 30°：南北部分の遺構掘削はほぼ終了し、二班に分かれ東西部部分の遺構検出と掘削を行う。

6月24日 32°：東西部部分の掘削を継続。東端部には中世の遺物包含層が存在するが、地山レベルは20センチ近く下がる部分が発出された。現在まで使われている瀬古道（生活道路）に並行することから、旧八幡社境内周囲の区画溝である可能性もある。

6月25日 30°：東西部部分、北セクションと、東端部分のセクションを整形。調査区中央部分には3基の巨大な掘り込みが発出されたが、やはり巨木の



抜根跡である可能性が高い。午後からは掘削作業を中止し、水洗・乾燥済み遺物の一次選別作業を行う。

6月26日 30°: 屈曲した東端部を東セクションとして分層し、土層注記、写真撮影を行う。東端の低地部地山面は細粒砂ではなく、数ミリから5ミリ以下の礫粒と細粒砂になる様子。

6月27日 30°: 東端の低地部の掘削完了。いくつか遺構のように見えた部分は木の根による攪乱であった。黒褐色砂を埋土とするいくつかの遺構も、弥生土器の出土量は極めて少ない。

6月30日 32°: 埋土が異常なまでに黒い2つの遺構(102SD、096SK)の土壌サンプリングを行った。低地部地形測量開始。本日より、水洗済み遺物への注記作業を開始。

7月1日 33°: 調査区中央部の遺構検出を続行。地山標高点の測量。

7月2日 32°: 屋外作業は休工。図面整理などの内業や、遺物への注記作業を行った。

7月3日 26°: 東西部分の北壁を北セクションとして清掃し、分層、土層注記、写真撮影および図化用測量を行った。午後、7月度安全大会を開催。主なテーマは熱中症対策について。

7月4日 30°: 注記作業および各種内業のみ。

7月7日 26°: 空撮に備え調査区内外を清掃。土囊を調査区外周に沿って並べ、道具類を片付け。地点上げ遺物測量を行う。

7月8日 33°: 高所作業車(27m)から空撮を行う。調査区の東、南西、北西の計3箇所から撮影した。空撮後は土層注記、黒色土のコラムサンプリング、ブルーシートや土囊の撤去、6地点の草刈り作業などを行った。

7月9日 34°: 埋め戻し開始。全体の三分の一程度を終了。測量班は6地点の調査区位置出し作業。

7月10日 28°: 台風接近のため現場作業は中止。台風対策および内業(セクション図作成、注記作業など)と、6地点近隣住民への挨拶回りを行う。

7月11日 33°: 調査区埋め戻しの続き、全体の三分の二を終了。6地点、基準点の設置。

7月14日 32°: 調査区埋め戻し完了。整地作業は約半分を終了。

7月15日 34°: 調査区の整地作業完了。内業は図面校正作業ほか。

7月16日 35°: 3地点のフェンスを解体し、土囊・単管とともに6地点へ運搬。重機1台を6地点に回送。碎石を戻し仮設駐車場を復元。

7月17日 35°: 6地点にフェンスを設置し、調査前状況の写真撮影を行う。

7月18日 34°: 6地点の一部を、発掘体験学習用に表土掘削。3地点周辺の除草作業。

7月22日 34°: 6地点にて、宮澤氏指導の下、小学6年生有志4名の発掘体験学習を行う。

7月23日 35°: 6地点の表土掘削を継続。中央の現代攪乱も同時に除去し、グリッド杭打ちまで終了。遺物水洗作業は1地点分を終え、3地点及び試掘資料にとりかかる。

7月24日 35°: 調査区外形を整形し、人力による攪乱除去作業を行う。午後から寒冷紗を設置。

7月25日 38°: 攪乱部分で地山を検出。調査区西南端で貝層を確認。猛暑!

7月28日 35°: 現代の井戸跡か近世の井戸跡と切り合う様子を確認。寒冷紗を作業場全面に増設する。噴霧器で散水し土色を確認しながらの作業。

7月29日 34°: 調査区の整形は完了。井戸跡の掘削は湧水点までとした。遺物の気配に乏しい。

7月30日 34°: 貝層範囲を確認し、測量後状態の良い部分をサンプリング。破砕貝層と土層の互層が3枚ほど確認出来、貝種はシオフキ主体。須臾器





が数点出土。

7月31日 36°：排土置き場の整形。地山面から弥生土器の集積？を検出。調査区西部ではかわらけ4枚（大1、小3）を用いた遺構を確認。内業は3地点出土遺物の整理作業。

8月1日 35°：地山面にて、東西方向の溝を確認。中世以降の区画溝か。遺構壁面に皿状構造の竈模様を確認（標高は2.5m）。

8月4日 29°：井戸跡の切り合い部分を測量。調査区周辺の清掃を行う。

8月5日 35°：高所作業車からの空撮を行う。撮影後、土嚢や道具類の片付け。午後は8月度安全大会を行った。

8月6日 34°：セクション清掃後、分層、土層注記、写真撮影、図化用の測量を行った。2地点近隣住民への挨拶回り。

8月7日 35°：ミニユンボ0.12を投入し、調査区の埋め戻しを開始し、夕方までに終了。

8月8日 35°：埋め戻し跡を整地。2地点調査区の位置出し。

8月11日 34°：台風接近のため作業中止。

8月14日 29°：台風余波で作業中止。内業としてデータ整理を行った。

8月18日 35°：フェンスを解体し、2地点に運搬。調査予定地周辺と現場事務所周辺の草刈り作業。

8月19日 35°：重機を2地点に回送。フェンス設置および清掃後、調査前状況を撮影。

8月20日 36°：宮澤氏立ち会いの下、表土掘削を開始。中世遺物を含む遺物包含層が比較的良好に残っている様子。全体の三分の二を終了。

8月21日 35°：表土掘削を終了。調査面積は205㎡になる予定。

8月22日 35°：屋外作業は休日で、内業のみ。

8月25日 31°：調査区を整形し、西側より遺物包含層の掘削を開始。帯状に貝層が分布する様子。

8月26日 32°：ほぼ全面で遺物包含層の掘削を行う。寒冷紗を設置。先行して4地点の調査予定地周辺に安全ネットを敷設。

8月27日 29°：東端部は地山面が露出。南北に走る大溝が存在する様子。状態の良い貝層3箇所ですamplingを行った。猿投窯の合子d-065が出土。

8月28日 27°：2地点出土遺物の水洗と、6地点出土遺物の注記作業を開始。4地点調査区の位置出し測量を行う。

8月29日 28°：新たにシジミ主体の貝層を検出し、samplingを実施。遺構は東端部を除きほぼ全面に展開する模様。

9月1日 30°：遺構プランをほぼ確定し、個々の遺構掘削を開始。午後から9月度安全大会を行った。

9月2日 31°：遺構掘削。大小溝のプランが確定。samplingした貝層の水洗を開始。

9月3日 30°：いずれの溝も中世のものと判明。貝層範囲の脇から縄文中期の呷細土器が単独出土。

9月4日 25°：溝の周辺でいくつかのビッドを検出。山茶碗の出土が多い。降雨のため午後は作業中止。

9月5日 29°：溝の切り合いが複雑な様相となる。東端部では自然流路を検出。掘削の終わった溝からの湧水は、汲めば汲むほど出て来るので様子を見ながら溜めておくことにした。

9月8日 29°：屋外作業は休工。samplingした貝層の仕分けと遺物の注記作業を行った。

9月9日 31°：大溝からも湧水著しいが、埋土には殆ど遺物が含まれないことが判明した。中世遺物としては山茶碗の出土が多い。



9月10日 30°：大溝の東側に並行して細い溝を検出。両者の関係は不明だが、中世の所産と理解。大溝のセクションと東西セクションを清掃、分層、写真撮影後土層注記。

9月11日 29°：北セクションを清掃、分層、写真撮影。

9月12日 29°：調査区周辺を清掃後、高所作業車からの空撮を行った。撮影後、北セクションの土層注記作業。午後、4・5地点近隣住民への挨拶回りを行った。

9月16日 30°：中央の攪乱部分を利用し、地山砂層の堆積状況を確認。調査区埋め戻しを開始。約半分を終了。内業は2地点の出土遺物整理・注記作業にとりかかる。

9月17日 27°：調査区埋め戻し作業の続き。三分の二を終了。

9月18日 27°：調査区埋め戻し完了。2地点の出土遺物整理・注記作業。

9月19日 25°：フェンスを解体し、4地点に運搬。午後から4地点周辺からフェンス設置開始。

9月24日 25°：5地点は工事の関係でフェンス設置位置を変更。4地点とともに、調査前状況写真を撮影。東邦ガス担当者の立ち会いで、ガス管理設置位置を確認。

9月25日 30°：5地点の表土掘削を開始。埋設管の位置を確認出来る範囲を先行し、続いて宮澤氏立ち会いの下、4地点の表土掘削も開始。5地点では旧瀬古道に沿った貝層を確認。

9月26日 28°：4地点の表土掘削を継続。5地点側に続くような良好な遺物包含層は、調査区中央部に至りやっと出現。表土掘削の終了した部分から、調査用のグリッド杭打ちを開始。

9月29日 29°：4地点は主要部分の表土掘削を終了し、ブルーシートで養生。5地点は調査区整形と壁面清掃作業を開始。

9月30日 30°：5地点のほぼ全面で遺物包含層掘削開始。貝層は中世遺物を大量に含むため掘削せずに作業を進めた。

10月1日 29°：純貝層を含む貝層に並行し、別の破砕貝層が存在する様子。東端部では弥生土器の出土があり、土器棺の可能性があったので図化用に検出。午後からは10月度安全大会を開催した。

10月2日 26°：001SM貝層における遺物出土状況を撮影し、図化用に測量。中世の貝層以下には、弥生期の遺構が展開する模様が判明。

10月3日 27°：001SM貝層に含まれた中世遺物は山茶碗、山皿、片口鉢、甕と器種多様。部分的に意図的に貝層が破砕され圧縮された部分を確認し、道路敷きの遺構であると推定。

10月6日 27°：台風のため屋外作業は中止。安全パトロールをし、強風で捲れ上がったブルーシートなどを再調整。

10月7日 25°：001SM貝層サンプリングを行う。西側に並行する002SM破砕貝層は混貝土層で、地山面を深く掘り込んで形成されている様子。続いて東側で検出された003SM貝層は弥生期の遺構埋土に含まれたもので、保存状態の良い巨大ハマグリとシジミが主体の様子。大石を伴う様子から、墓塚である可能性もある。

10月8日 26°：遺物包含層掘削。一部の遺構壁面で皿状構造の竈を確認した。調査区西端と中央部南側はいずれも大きな窪地になったが、住居址の痕跡である可能性が高い。

10月9日 24°：遺物包含層および遺構掘削。同時に壁面清掃も開始。003SM貝層の洗浄を開始。ハマグリ、シジミを中心に、ウミナガ、ツメタガイ、アカニシなどの貝種が際立ち、特徴的な組成が判明。魚骨などは見当たらず。

10月10日 27°：調査区周辺の清掃後、高所作業車からの空撮を行った。



畑山氏が来跡され、貝類のサンプリングと選抜を行った。

10月14日 23<sup>時</sup>: 調査区東端部分に出現した皿状構造部分を深掘りし、写真撮影した。湧水レベルは標高2.84mで、皿状構造上層レベルは3.20m。平成23年度4地点調査時に発見したものよりやや粗めの編み模様。001SM貝層延長部分を掘削し、大量の中世遺物を得る。これらの補足作業終了後埋め戻しを開始し、夕方までに終了。

10月15日 18<sup>時</sup>: 5地点フェンスを撤去し、5地点での作業は全て終了。4地点の調査区整形、清掃および残っていた表土掘削を再開。魚骨を発見すべく、貝層洗浄残土の精査を開始。

10月16日 22<sup>時</sup>: 4地点調査区の中央に残っていた重機用のブリッジ部分を表土掘削後、調査区東半の清掃作業を開始。東邦ガス担当者立ち会いで、ガス管の位置を確認した。

10月17日 27<sup>時</sup>: 調査区清掃の続き。遺物の出土状況に鑑み、宮澤氏と協議の結果、調査区北辺を1m拡張することを決定し重機での掘削を再開。古瓦など中世遺物が集中して出土する部分があることを確認。

10月20日 23<sup>時</sup>: 拡張部分を優先して遺物包含層の掘削を進める。弥生後期の土器が集中し、ミニチュア土器も検出。方形周溝墓の可能性を考慮。

10月21日 22<sup>時</sup>: グリッドごとに遺物包含層の掘り下げを開始。東西方向に中世遺物が並ぶ傾向を発見。同レベルですでに弥生土器が出土する部分も有る。

10月22日 20<sup>時</sup>: グリッド毎に遺物包含層の掘削を継続。

10月23日 18<sup>時</sup>: 地点上げ遺物はあえて残したまま掘削を続けた結果、調査区のほぼ全域に中世の畝状遺構が存在することを確認。

10月24日 23<sup>時</sup>: 遺構検出しつつ、全体的に遺物包含層の掘削を進める。地点上げ遺物多く、平安末期の瓦も多く出土するが、生焼けのような状態のものも含まれている。須恵器破片や東濃系山茶碗も発見。

10月27日 24<sup>時</sup>: 香葉唐草文瓦当破片が出土。畝状遺構のプランがほぼ明らかになりつつある。

10月28日 19<sup>時</sup>: 瓦類や山茶碗などが直線状に出土する原因が、畝状遺構の溝部分の掘削にともなうものと断定。あらためて調査区全面で遺構検出を開始。

10月29日 22<sup>時</sup>: 畝状遺構の検出状況を写真撮影後、掘削を開始。15条以上の溝を検出したが、それぞれの溝がさほど深くないので、掘削完了と同時に測量を開始。一部に保存の悪い貝層が見られたが、溝に廃棄されたものと考えられる。

10月30日 22<sup>時</sup>: 畝状遺構=溝群を001SDとして把握し、全員で溝の掘削を進める。完掘状況を写真撮影後、測量。既に下層の遺構群が黒色土の濃淡で見え始めている。

10月31日 21<sup>時</sup>: 畝状遺構を横断するセクションを測量後、全面リセットし、掘り下げを開始。中世遺物の集積された部分を確認。東浦町教育委員会楠氏視察。

11月4日 19<sup>時</sup>: 中世遺物の集中する部分を002SU土器集積として範囲を限定し、検出開始。遺物の広がりは更に北側にも続いている様子。午後から11月度安全大会を開催。

11月5日 19<sup>時</sup>: 002SU土器集積範囲を拡張。遺構プラン検出の結果、上面の畝状遺構と同じ方向に展開することが判明。調査区西側は中世遺物の出土が少なく、主に弥生土器が出土する。

11月6日 23<sup>時</sup>: 調査区西端部に土坑を検出。3地点東端部と地山レベルの差は約40cmで、瀬古道部分全体が切り通しのよう掘り込まれた状況になるものと推定。



11月7日 21°: 大量の灰が充填された土坑 005SK を掘削。埋土中に遺物が含まれず、時期決定が難しい。東半部は下層に住居址が重複して存在する様子を確認。

11月10日 22°: 複数存在する住居址のプランをほぼ確定。弥生時代中期のもの、後期または廻間期期のものが存在する様子。

11月11日 19°: 住居址プラン内に竈の残欠と思われる焼土塊を検出。方形周溝墓の溝と想定していた遺構 014SD のサイズが異常で、再検討しつつ掘削を継続。遺物は廻間期に集約されるものと思われる。

11月12日 19°: プランが確定され、掘削の完了した住居址から測量を開始。現地説明会に残しておく地点上げ遺物を選抜。空撮用の清掃を開始。11月13日 14°: 調査区周辺を清掃し、調査区内に散水後、高所作業車からの空撮を実施。周辺の3つの地点から撮影を試みた。特に5地点の東側からのアングルでは、3～5地点および平成20年度調査区の全体を俯瞰した画像を撮影することができた。

11月17日 16°: 遺構掘削の続き。方形周溝墓もどきの 014SD は完掘されたが、一辺 5m の巨大な方形プランとなった。説明会用に土器集積に残したままの遺物ラベルを書き換え。

11月18日 16°: 住居址床面の確定と測量。セクション分層開始。いくつかのサブトレンチを掘削。午後からは見学会用に調査区周辺の整備を開始。排土の山は墳丘状に成形し、調査区を見るための物見台として整備した。

11月19日 16°: 現地説明会準備作業。配布用の説明会資料を準備。

11月20日 14°: 地上の三方向からあらかじめ遺構完掘状況を撮影。説明会用資材搬入後、見学者用通路の設置を開始。見学者が調査区内まで降りられるように、アルミステップを設置。各種キャプション（遺物名や遺構名など）を設置し、不足分の作成作業を行った。

11月21日 17°: 現地説明会関係の諸作業。午後から作業員を観客に見立て、宮澤氏がリハーサルを行う。問題点がいくつか指摘されたので、当日までに修正。

11月23日 20°: 現地説明会関係の諸作業の続き。遺物展示用のテント設置ほか。

11月24日 19°: 午前中に現地説明会を開催。約120名が来跡。午後からは、北セクションの土層注記および地点上げ遺物の取り上げを行った。

11月25日 13°: 地点上げ遺物の回収作業および、部分拡張による掘削を実施。測量などの補足調査と同時に、見学会に使用した各種資材の撤収を行った。

11月26日 15°: 調査区埋め戻し、資材回収、道具類の回収、補足調査出土遺物の水洗作業を同時に展開。

11月27日 20°: 調査区埋め戻しおよび整地作業を完了。遺物水洗中に鹿の線刻画を発見！

11月28日 19°: 4地点周囲のフェンスを撤去し、道具類および各種資材を整備。重機を返却。現場作業員は本日まで。

12月1日 17°: 現場事務所にて遺物の一次整理およびデータ整理作業を開始。（以後2015年3月まで継続）



## 第1章 調査の経緯と遺跡の環境

平成 27 年

3月27日、仮設事務所プレハブを撤去し、跡地を整備。

5月7日、東海市役所にて、「畑間・東畑遺跡発掘調査報告書作成業務委託」として発注を受ける。

5月8日、報告書作成業務に着手。国際文化財株式会社中部支店（清須事務所）にて作業を開始。

平成 28 年

3月31日、本書刊行



## 第2章 畑間遺跡（1地点・2地点・3地点・6地点）、 東畑遺跡（4地点・5地点）の調査

### 第1節 1地点（HM14-1）の調査

#### 1 1地点の概要と遺跡の構造

今回の調査では畑間遺跡範囲内に1地点・2地点・3地点および6地点の計4カ所の調査区が所在する。うち、1地点は平成22年度の2地点と平成25年度の2地点を東西に繋ぐ調査区である。

5月1日に調査区を取り囲むフェンスを設置し5月12日に表土掘削を開始。5月14日より調査を開始し、5月23日に空撮を実施。5月26日には埋め戻しを行い、調査を終了した。

調査面積は拡張部分を含め165㎡である。

基本層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土層。現代の耕作土や客土で、調査直前まで存在した住宅による攪乱と、それに付随する耕作地の様相を示す。攪乱のうち大きなものは井戸跡である。

Ⅱ層：中世～近世の遺物包含層。セクション図における1・2層がこれに相当する。10YR3/2黒褐色や10YR4/2灰黄褐色を呈する砂層が大半であり、中世部分と近世部分の分離（分層）は不可能である。

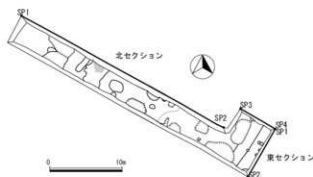
Ⅲ層：中世の遺物や、部分的に古代の須恵器を包含した層で、10YR3/1黒褐色を呈し、やや粘質のあるシルト砂層である。一部の遺構埋土と、地山レベルの下がる調査区西端にのみ分布する。

調査前の標高は地表面で3m前後であり、大田の集落のある第一砂堆の西側縁辺部にあたる。地山面の標高は、砂堆中央部に近い調査区東端で2.3m前後、より縁辺部に近い西端では1.6m前後と、東西約35mの間で70cm近い比高差がみられた。

表土掘削の段階で、調査区東端部では表土直下から大量の中世遺物の出土がみられ、遺物包含層の残りも良好であったことから、敷地内において可能な範囲で北西側に拡張を行った（5m×3m）。その結果、大半の遺物はこの拡張区とその周辺から得られたものである。

調査区全域に大小の攪乱が見られ、湧水する地山面砂層での遺構検出はかなり難しかったが、調査区西部の003SKからのみ古代の須恵器が出土した。拡張区を含む東部では南北に延びる溝が検出され、中世の所産と考えられる（詳細は次項で述べる）。

調査区西端部では表土掘削時より湧水がみられ、水中ポンプで積極的な排水をおこなうも、調査



第11図 1地点セクション位置 (1/500)

期間終了まで常時湧水が続き、降雨とポンプを停める週末が重なった時には調査区面積の半分以上が水没するほどであった。

発掘調査は他の地点同様、表土掘削後に調査区全体の整形と清掃から開始した。作業は湧水対策もあり西端部から始めたのだが、30m 近くの間はごく一部を除き、ほとんど遺構も検出されず、見るべき遺物も無かった。

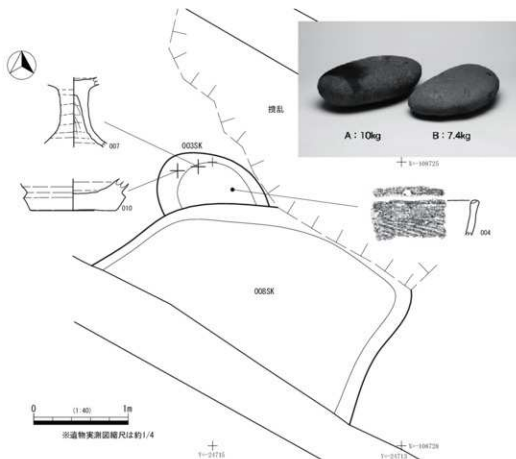
## 2 主な遺構

### 003SK：土坑（第12図）

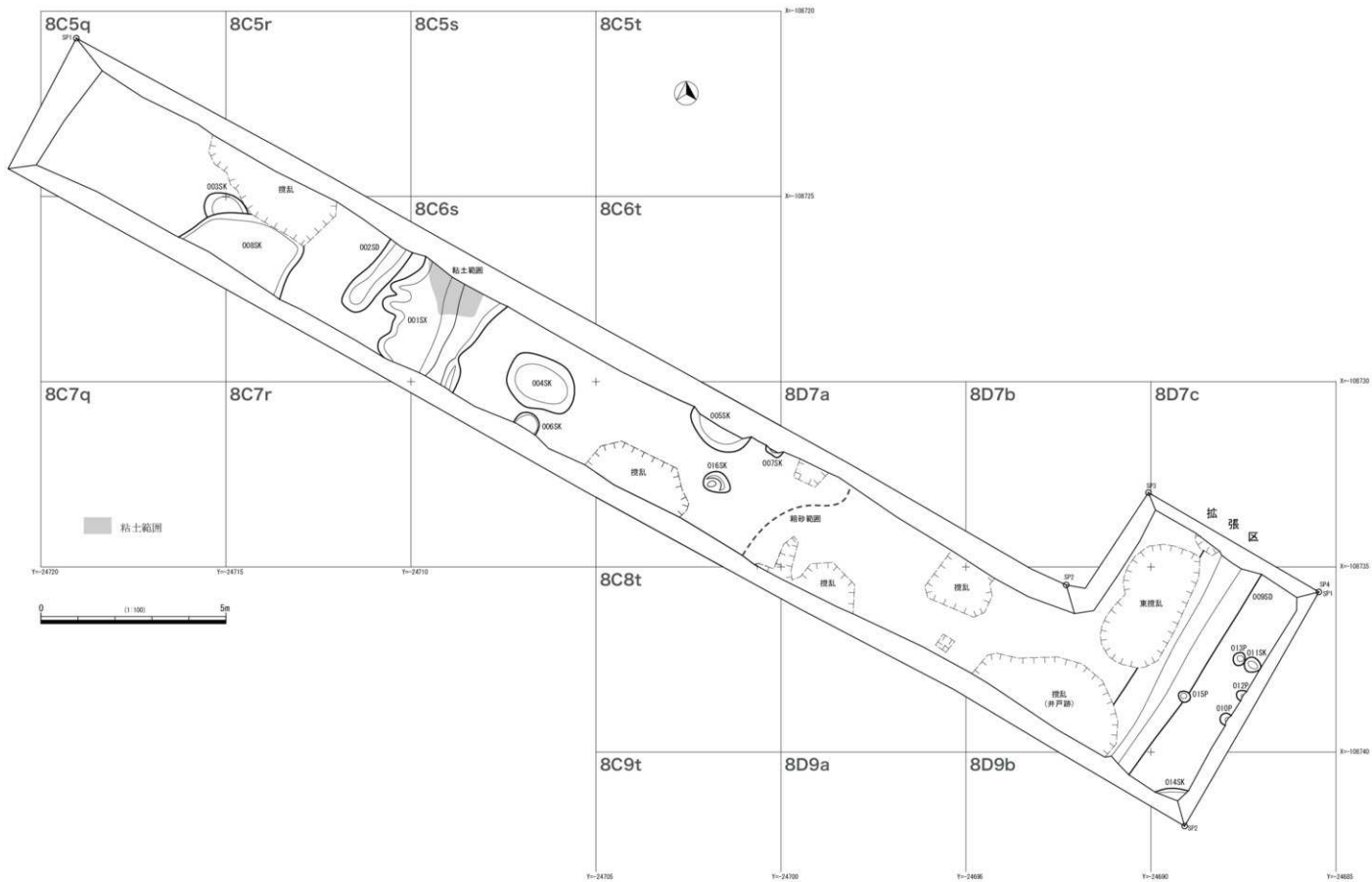
調査区西端に近く、湧水がある地山砂層で検出した土坑である。時期不明の大形土坑 008SK（浅い）によって切られているが、出土した扁平石の大きさなどから楕円形プランで深さは30cm以上あったものと推定される。

埋土からは須恵器の鉢底部と高坏脚部および、扁平で楕円形の石2個（A：34×19.5×厚さ9cmで重さ10kg、B：32×20×厚さ7cmで重さ7.4kg）のほか、縄文時代晩期の土器2点も出土した。遺構の時期は、出土した須恵器に従えば、7世紀末から8世紀ということになる。上記2個の石は上下に重なるように出土したが、現状は湧水著しい砂地であり、もし柱の根石として砂地での沈降を防ぐために柱穴底に二重に設置されたものであるとすれば、貴重な発見例となる。なお、A石は片面端に半円形に煤の付着がみられることから、炉材などの転用を想定することができる。

なお、残念ながらこの003SKと組をなすような他の土坑は、調査区内では見つかっていない。

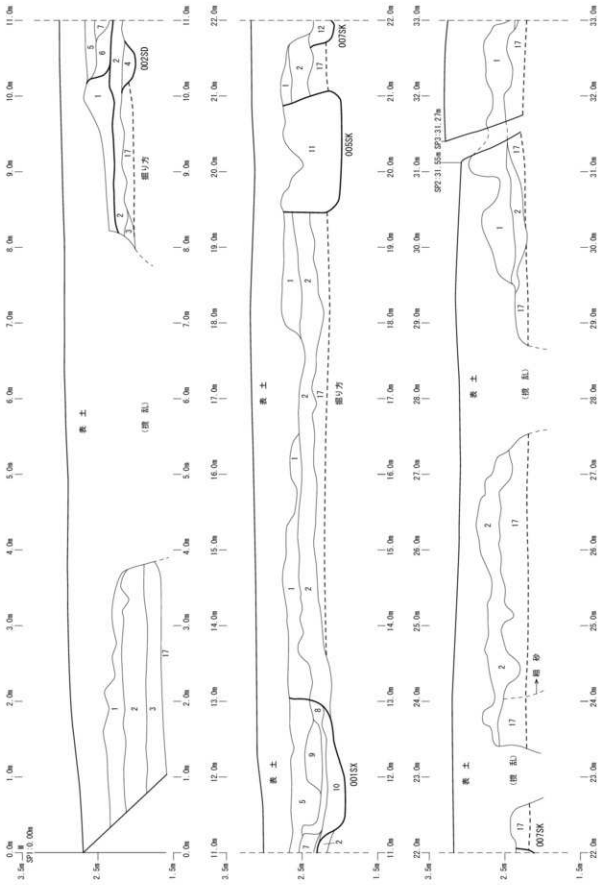


第12図 003SK土坑

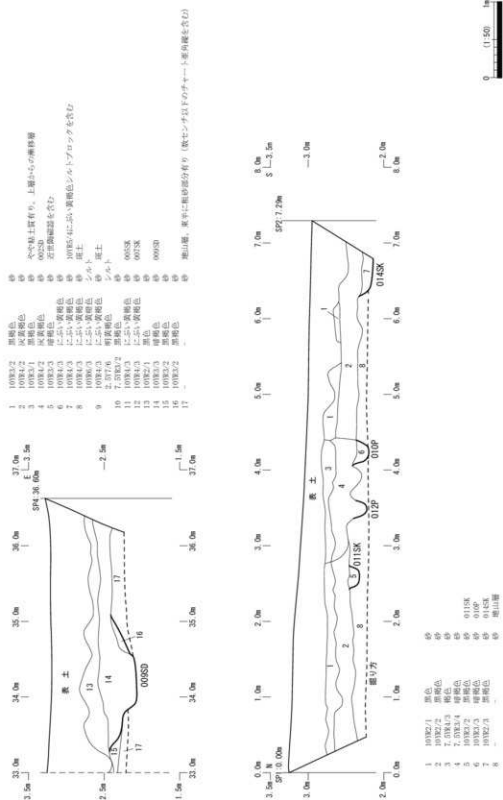


第13図 I 地点遺構平面図





第14図 1地点北セクション図



第15図 I地点北・東セクション図

## 009SD：区画溝（第17図）

調査区東端から拡張区の外形と並行に、北北東から南南西に向かって延びる溝で、幅は1.5m前後。逆台形の断面で平均の深さが40cmほどある。埋土は10YR3/3暗褐色の中粒砂で、底部にやや粘り気のみられた。遺構掘削と同時にここでもかなりの湧水があり、溝から溢れることは無かったが、遺構内には最後まで安定した水位が保たれていた。

溝のプランは西側を中心に複数の現代攪乱によって消失していたが、遺構埋土から東側にかけては遺物包含層の残りが良く、山茶碗を中心とした大量の中世遺物が出土した。また、溝に並行するように存在した攪乱からは現代の陶磁器に混ざり、かなり多くの中近世遺物も出土しており、この溝一帯が中世から近世に至る廃棄場所であり続けた可能性が高い。実際に、今回の調査直前まで存在した住宅と、それに付随する畑地の様子は航空写真や地籍図で確認出来たが、ちょうどこの009SDが検出された部分が、隣地との境界線になっていたことが判明している。すなわち、この大田地区ではしばしば見られることなのだが、中世の区画溝が埋没こそするものの、その後現代に至るまで地籍の境界であり続ける事例がいくつかの調査地点で確認されている。この009SDに関しても、水が溜まるような溝としての機能は中世末期までに失われつつも、境界としての意識はそのまま引き継がれてきた可能性が高い。

なお、この調査区に隣接する平成25年度の調査区（2地点）でも、009SDに並行するほぼ同規模の溝が検出されており（040SD）、13世紀後半に掘削され、その後埋没したものが、近世に再掘削された様相が観察されている。

これらの他にも、この1地点からは14基の遺構を検出した。001SXはオリーブ黄色の粘土が貼られた平坦面を持つ不整形な遺構で、同様なものは当地区の調査でしばしば見られる。大甕の破片を伴う場合や、粘土によって槽のような形状が作り出されている場合もあるが、その用途や目的は不明である。

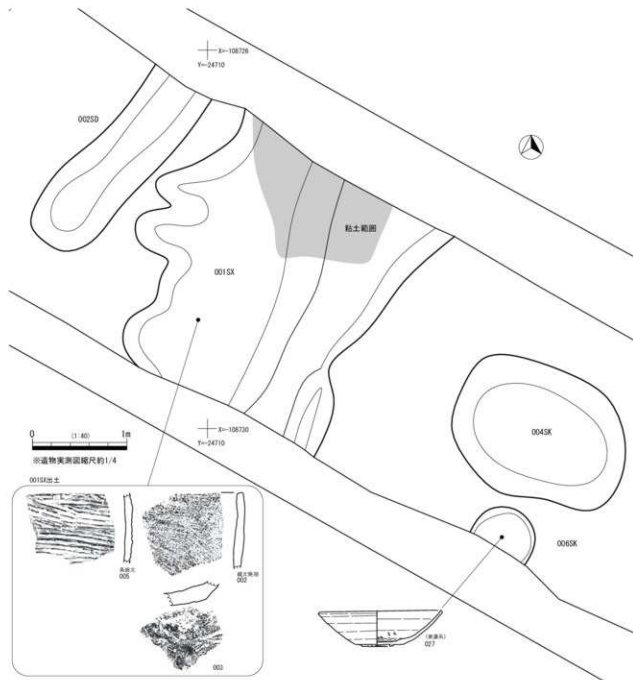
## 3 出土遺物

1地点からの出土遺物としては、縄文時代晩期初頭の下別所式土器と思われるもの（001）1点と、同じく晩期の五貫森式土器（004）1点が003SK埋土より出土している。また001SX埋土からは、晩期稲荷山式と思われる土器（002,003）が出土しているが、いずれも遺構は別時期のものであり、埋没過程で埋土に混在したものである。これらとは別に深い貝殻条痕の施された土器片が遺物包含層から発見されているが（005）、こちらは水神平式であろう。

古代の遺物としては003SKから出土した2点の須恵器（007,010）のほか、調査区東部でも須恵器十数片と大甕の把手1点が出土している。極めて希薄な様相ではあるが、当地区にも8世紀代を中心にして何らかの営みがあったのだろう。003SKから出土した石2点に関しては先述した通り柱穴の根石として用いられた可能性が高いが、A石は被熱する環境下より転用されたものであることが興味深い。

中世の遺物としては、そのほとんどが拡張区も含めた調査区東端からの出土である。常滑窯第2型式の羽釜（019）や甕（028）、尾張第4型式の山茶碗（020）、猿投窯製品の四耳壺（013）も存在するが、大半が尾張第5型式の山茶碗と山皿でコンテナ2箱分近くが出土した。

また古瀬戸水注（034、巻頭図版第4）は特殊器物であり、寺院や役所などとの関連が推測され

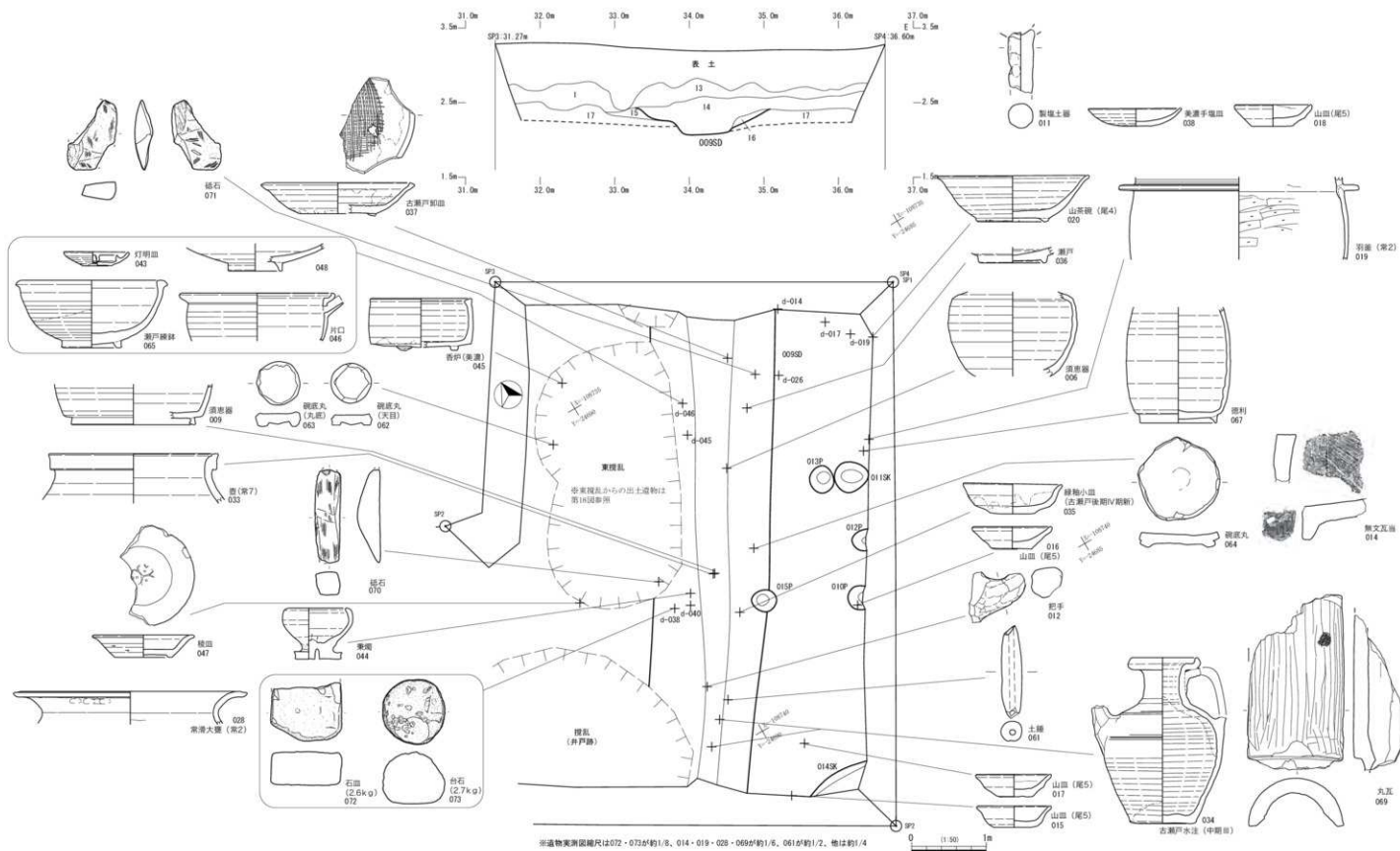


第16図 001SX・002SD・004SK・006SK 遺物分布図

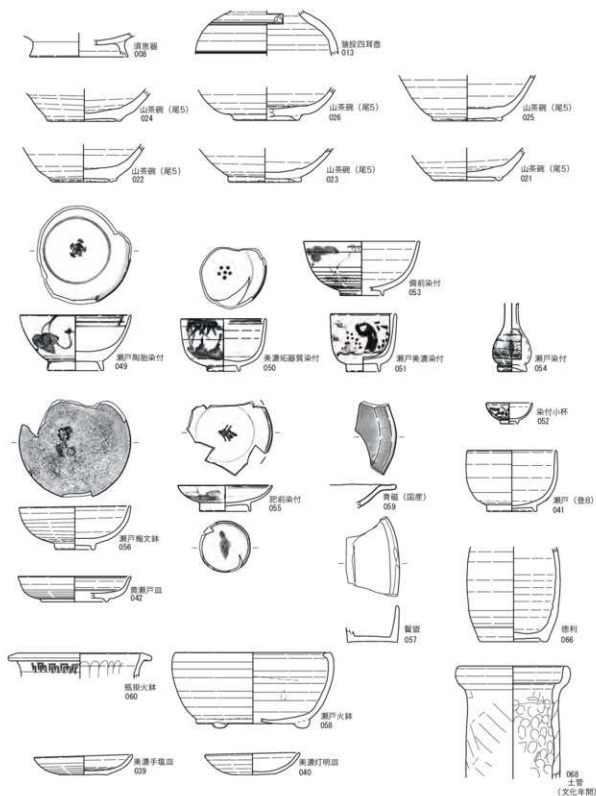
る遺物である。調査区東側には明応2（1493）年創建と伝えられる常蓮寺（西山浄土宗）が存在するが、水注の年代とは隔たりがあるため関連は不明である。しかしこの常蓮寺から更に東側の地区では仏堂の存在を推測させるような遺物や遺構が出土しており（2012年度調査、12世紀末の区画溝、礎石、焼土塊や大量の瓦など）、大田の集落の中でも宗教的意味合いの強い場所でもある。

近世遺物としては江戸時代後半のものが大量に出土した。それらの産地は瀬戸・美濃を中心に常滑、備前、肥前と多様である。大田集落のいわゆる「郷中」にほど近い近世の様相がよく現れた遺物群である。

石器としては砥石2点（070,071）のほか、いずれも凝灰質砂岩の台石（073）（2.6kg）と石皿（072）（2.7kg）がセットで出土している。用途などは不明であるが、砥石とともに中世以降の遺



第17図 009SD区画図



第18図 東畑遺跡からの出土遺物

物である可能性が高い。

#### 4 1 地点のまとめ

今回の調査区では東端と西端の地山が70cm近い標高差を有することが明らかになった。大田の谷（沖積地）のほぼ中央を占める第一砂堆は佐渡島のような形状を有するが、砂堆の南西側から北東に向かって谷状に低地が入り込む部分がある。今回の調査区西側への地山の落ち込みは、この谷状地形に対応する潜在的なものと考えられる。

実際に調査区西端部の地山標高値は1.5mであり、汀線の範疇と理解してもよい数値である。第一砂堆本体の西側縁辺部の様相は、龍雲院遺跡の調査範囲内で明らかになったが、広大な砂堆の中にもさまざまな微地形が存在し、伏流水脈の存在が示しているように単に見かけ上の起伏だけではない特徴がいくつも内包されているのである。

今回の調査では、中世以後の遺物包含層が良好に残存した東側部分から大量の陶器類が発見された。当地区は隣接地の小字である「郷中（ごうちゅう）」が示すように、特に近世以後は大田集落の中心地であったことから、これらの遺物は集落の活発な活動が中世にまで遡ることを物語るものであろう。



## 第2節 2地点 (HM14-2) の調査

## 1 2地点の概要と遺跡の構造

2地点は平成19年度調査区の東側に続く調査区である。8月19日にフェンスを設置し、翌8月20日から表土掘削を開始。8月25日より調査を開始し、9月12日に完掘状況の空撮を実施。9月16日から埋め直しを行い、調査を終了した。

調査面積は205㎡である。

基本層序は以下のとおりである。

I層：表土層。現代の耕作土が大半で、現代の排水管理設にともなう攪乱も含まれる。

II層～III層：中世～近世の遺物包含層。分離は難しいがセクション図における1・2層以下の層で、10YR3/4 暗褐色、同 3/2 黒褐色、同 4/3 にぶい黄褐色を示す砂層が大半である。

なお、本調査区では確実に古代以前に遡る遺物包含層や遺構がみられなかったため、基本的にIV層は存在しないと考えてよい。(わずかに縄文土器が1片と、十数点の須恵器が検出されたが、いずれも該当期の遺物包含層を伴うものではなかった。)

調査前の標高は地表面で4.5m前後あり、砂堆上としては最も高い部分に属している。第一砂堆の東側縁辺部にも近く、砂堆東側に市道を隔てて広がる水田との標高差は1m以上ある。地山面の傾斜はほとんど無く、東西約30mの両端部で西側が10cmほど低くなる程度である。

検出された遺構の多くは溝であり、そのいずれも時期的には中世～近世前半に掘削されたものと考えられる。現代の集落で使われている路地とほぼ同様の角度を示すものもみられる。すなわち、001SDおよび015NRがN-20°Eという角度で延び、これらは近世集落の町割りに沿うものである。また、幅が4.5mにも及ぶ002SDと、それに付随する028SDはN-36°Eという方向を示す。こちらの方は中世前半にまで遡る可能性が高い。

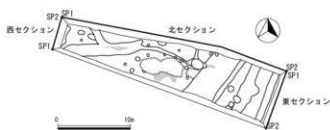
この両者の違いは年代差であるとの解釈も可能であるが、大田地区の特徴として中世から引き継がれた境界が姿を変えつつも近世または近代まで残存していた例がいくつもあり、これらの溝もその一例と理解してよいだろう。

## 2 主な遺構

## 003SD：溝（第23図）

調査区西南端から東に向かって延びる溝で、途中まではA、B二本の溝が並行する（幅1.5m）。更に、北側から湾曲する007SD（幅1m弱）と合流し、急激に幅を50cmに減じ、径1.5mほどの円形土坑や別の細い溝029SDと切り合い、合流しつつも002SDに至っている。大半の部分が緩やかに湾曲している。

この溝の埋土最上層には、大量の貝殻を含む部分があり、一部は純貝層の様相を呈し溝の上に盛



第19図 2地点セクション位置 (1/500)



り上がるように捨てられていた。これらの貝は溝の埋没過程で廃棄されたものと思われるが、調査区中央部では下層に遺構を伴わずに貝層のみが広がった部分もあった（貝層範囲2）。貝層範囲として把握できた部分は全部で4箇所あるが、2以外の3箇所は全て溝のプランに沿っており、検出した貝層の表面観察の結果、各貝層の組成に微妙な差異が認められたので4箇所ですべてサンプリングを行った。貝層の分析結果は自然科学分析の章を参照されたい。

溝の埋土や周辺からは多くの山茶碗が出土しており、遺構の所属時期は13世紀中葉である可能性が高い。

#### 002SD：大溝（第24図）

調査区東側を南北に縦断する大きな溝である。埋土掘削の途中から湧水がはじまり、ポンプによる排水を続ければ続けるだけ湧水し、最後まで水位が下がることはなかった。幅は4m強で、検出面からの深さは50cm前後であった。埋土は上面の暗褐色から下に行くほど黒みを強め、黒褐色から灰褐色となる。最下層の砂はややシルト化し、わずかに粘性が認められたことから、一次的な水流はあったものの、普段は常時浅く湛水していた可能性が高い。

当初は埋土から大量の遺物出土を予想していたのだが、掘削してみるとむしろ周辺部より少なく、木製品などもみられなかった。出土遺物は数点の須恵器を除きほとんどが山茶碗で、13世紀後半の資料が多い。

この002SDは先述した007SD（003SDの延長上）と切り合うが、埋土として検出された貝層の分布状況や切り合い状況を見ると、この大溝が先に存在したようである。その埋没過程において、掘削時より幅の狭まった溝（002SD）に向かって007SDは掘られたのであろう。

また、この大溝の東岸には並行する細い溝028SDが存在するのだが、こちらの方が先に掘削されていた可能性がある。両者の関係は不明だが、東側の上端を共有する関係とも理解できることから、028SDは002SDのガイド的な意味を持っていた可能性もある。出土遺物で見ると、時期差はほとんど無いようである。

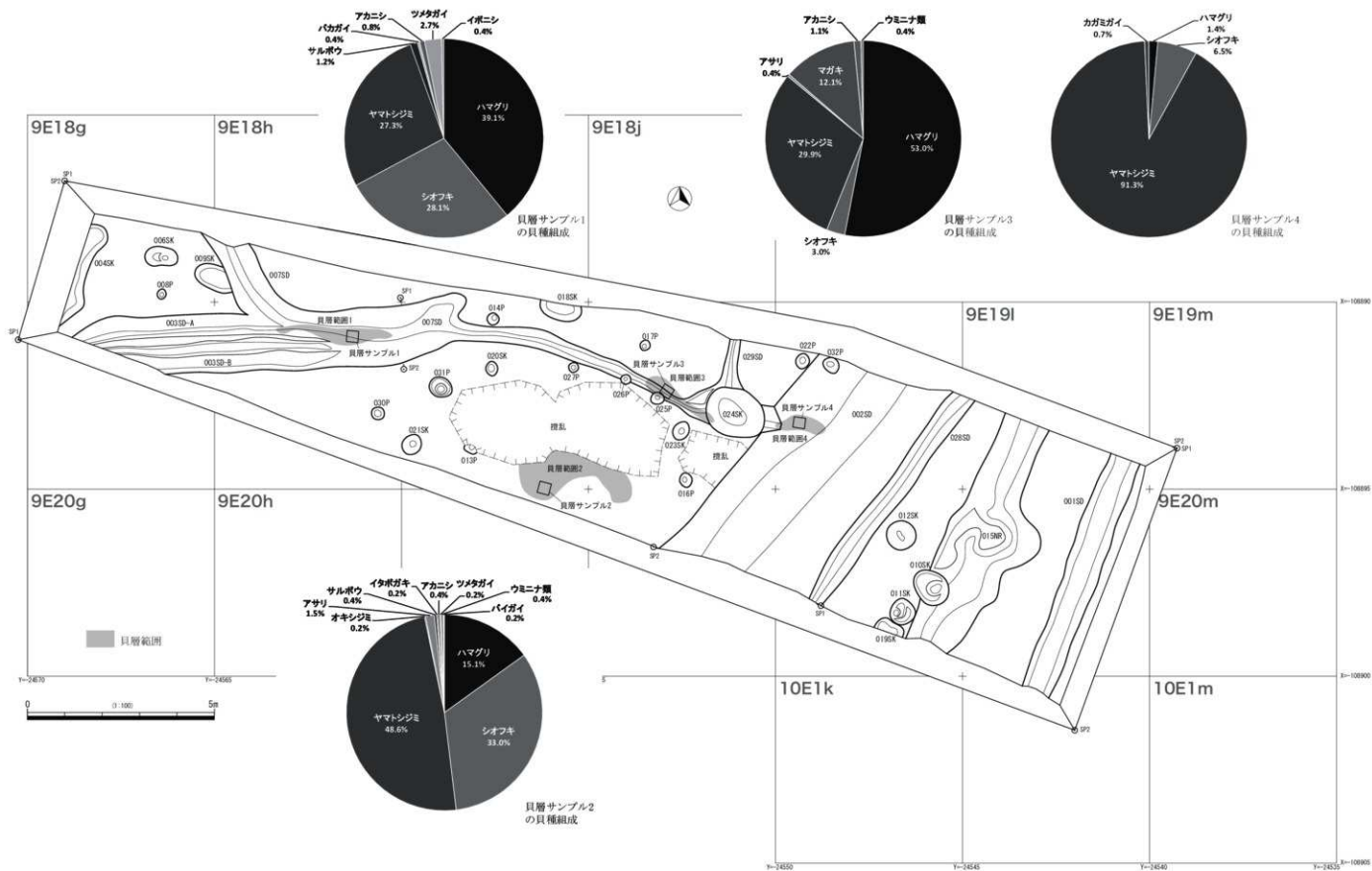
002SDに関しては、居館を囲む溝や灌漑用の水路などではなく、集落の中の大区画としての溝であったものと思われる。調査区内での様相に限られるが、この大溝から西側では大量の遺物が出土しており、貝殻の廃棄など、より生活に直結した痕跡が濃厚だが、東側はほとんど無遺物であり、一部に自然流路化したような水流（015NR=水溜まり?）の痕跡もある。また、いくつかの土坑（010,011,012,019SK）も見られるが新旧の遺物を伴わず、建築物としてのプランも呈していない。

溝の方向はN-36°Eである。

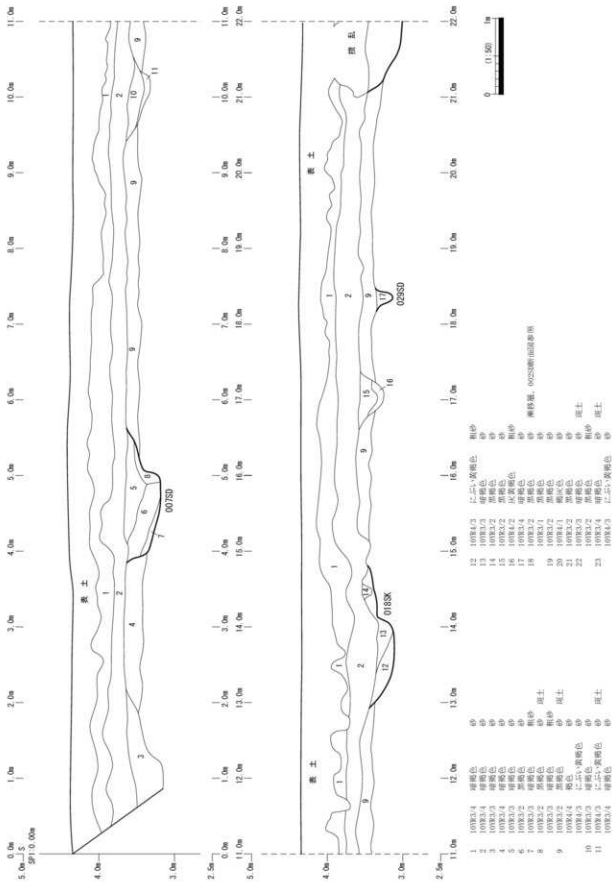
### 3 出土遺物

今回の調査では、最古の遺物として縄文時代中期中葉の咲畑式土器（074）の発見が注目される。これまでの調査で、砂堆上のいくつかの地点から、極めて断片的だが縄文時代中期の資料が検出されてきた。いちばん古いものは中期前葉の北裏C1式土器であり、この咲畑式はそれに続く資料ということになる。

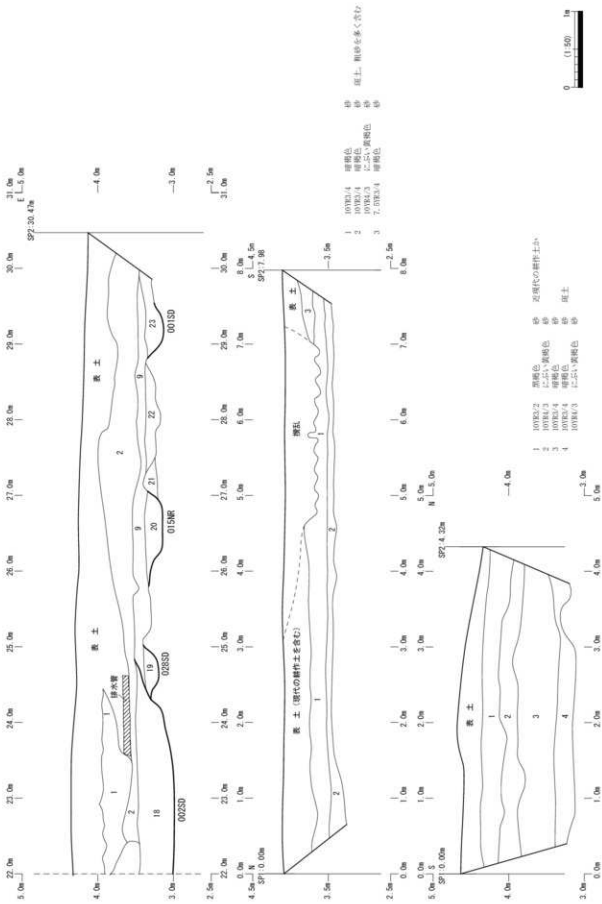
縄文時代晩期資料に関しては、東畑遺跡の旧大田川河道に面した狭い範囲から百点以上の土器片が出土する状況から、当時における拠点の一つであったと理解してよいだろう。中期資料に関して



第20図 2地点遺構平面図



第21図 2地点北セクション図



第22図 2地点北・東・南セクション図

は砂堆全域でまだ数点のみの発見であり、かつ遺構を伴わないこともあり、散布程度の把握に留まるものである。しかし、旧河道を隔てた対岸に位置する高ノ御前遺跡のように、断続的ながら拠点的な様相を示す遺跡も存在することから、この砂堆上にもそのような性格を持った縄文遺跡が存在していた可能性を示唆する資料の一つであると理解したい。

古代の遺物としては、須恵器片が数十点出土したに過ぎない。過去の調査によれば、今回の調査区の数十m南西の調査区(平成19年度4地点)からは8世紀から9世紀にかけての須恵器がまとまって発見されており、カマド跡を持つ住居址も検出されている。現在までのところこの第一砂堆で古代の遺物がまとまって出土する地点は極めて限定されており、同時期には集落としての中心地は第三砂堆北端の松崎遺跡に集約されてしまったのかもしれない。製塩土器の脚部も1本発見されたが(076)、知多式4類のもので、須恵器と同時期のものである。

続く中世の遺物としては、他の地点でしばしば見られる12世紀末の瓦類は1片のみで、尾張4型式までの古手の茶碗類なども見られず、尾張5～7型式の山茶碗が大量に出土した。完形品はほとんど無いがその量は異常なほどで、重さにすれば合計15kg以上だが、底部(高台)や口縁部の特徴を元に個体数をカウントしてみると、推定100個体以上となる。これらには同時期の狼投産や瀬戸産のものも含まれているのだが、中世集落内の様相としては極めて異なる状況である。

異色の遺物としては、12世紀末の狼投産製品と推定される合子(077)がある。手捏ねで口径4.5cm、胴部の最大径約6.5cm、高さ3.2cmと、愛らしく掌の中に取まる大きさだが、胴部上半や内面にはうすすらと自然軸がみられ、風格がある。底部は真っ平らではなく原料の粘土塊の丸みとその上に積まれた粘土紐の痕跡がそのまま残されたような荒々しい仕上げになっている。蓋は木製だったのだろうか、未発見である。

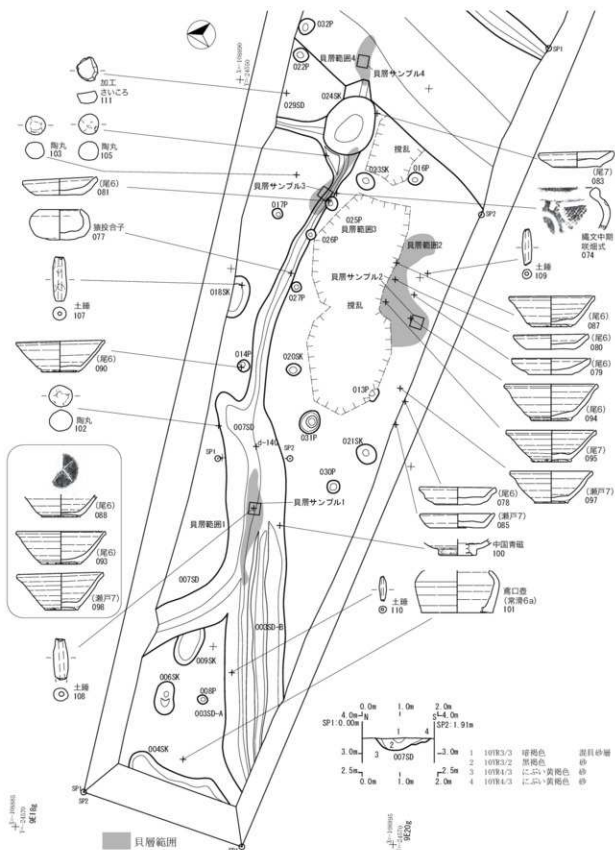
この他に常滑製の小型片口碗と思われるもの(101、鶯口壺の胴部である可能性もある)や、中国青磁(100)、陶丸、陶鍾、古手の瓦を材料とした「加工さいころ」などが出土している。

#### 4 2地点のまとめ

2地点の調査では、中世における区画溝(大溝)の存在と、それを境界とした内と外の様相の違いのごく一端をうかがい知ることができた。

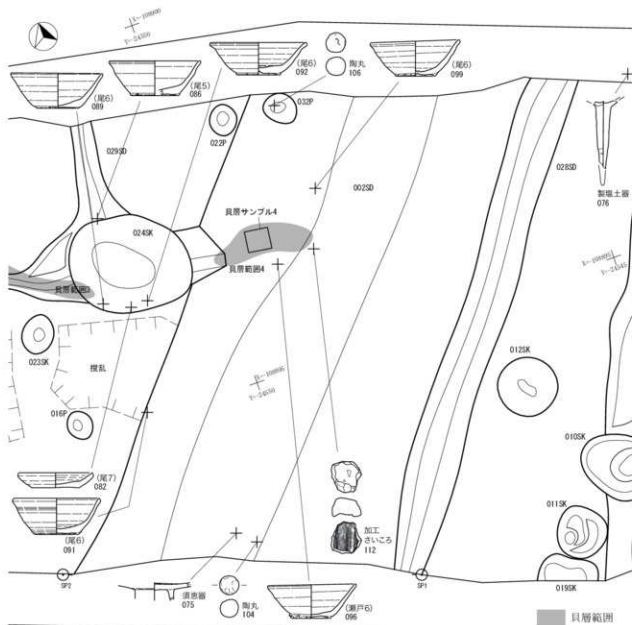
このような区画溝に関しては、平成25年度の調査報告書において中村毅氏が「町割り溝」と称してこれまでの調査結果を検討している。大田地区の郷中遺跡を中心とした第一砂堆北部では、今回の土地区画整理事業直前まで残っていた町割りに沿った溝がしばしば発見され、例えば南北方向であればそれらの多くがN-20～30°-Eの角度を呈することが指摘された(『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告書』2015年)。

今回発見された002SD大溝はN-36°-Eの方向を示しており、その掘削は13世紀前半である可能性が高いが、中世には方向の異なる複数の町割りが敷かれていたのであろう。実際の様相としては、大溝の西側は大溝が埋没していく過程においても活発な活動の痕跡が残されていたが、大溝の東側には遺構や遺物もほとんど無く、自然流路の痕跡が見られる程度であった。過去の調査においても砂堆東側縁辺部では方向を同じにする細い溝群が検出されており、一帯が居住地に隣接した耕作地であったことを物語っている。これらのことから、002SD大溝は中世前半における集落内の区画溝であった可能性を指摘しておきたい。

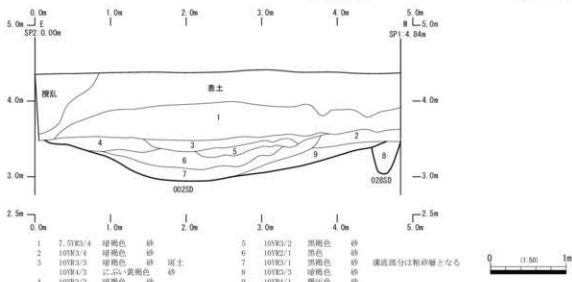


※遺物測定距離は087・088・090・093・094・095・097・098・100・101の約1/6、他は約1/4

第23図 003SD 溝



※遺物実測図縮尺は075・096・099・091・092・096・099が約1/4、他は約1/4

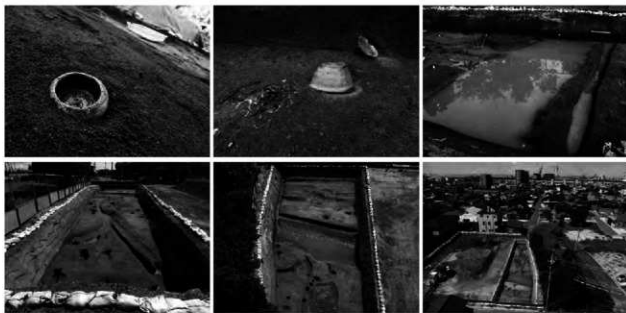


第24図 002SD 大溝

一方「区画内」である調査区西側の様相であるが、複数の溝が並行し合流し、緩やかに湾曲してあたかも002SDに繋がる排水溝のような状況を呈するも、003SD-A/Bは007SDと合流後急激に幅を狭め東流する。この007SD東半の下端レベルは003SD-A/Bより十数cm高くなるので、水流が直接大溝に流れ込むことは無い。むしろ024SK底部からの湧水がかなりあることなどから、水場としての利用を想像することができる。

建築物に関しては、中央の攪乱部分を取り囲むように10基のピットや土坑が見られたが、建物のプランをなすような組み合わせは見出せなかった。しかし、溝に沿って帯状に分布する貝層の存在や、無数の茶碗類の存在を考えると、集落の居住域であったと考えるべきであろう。

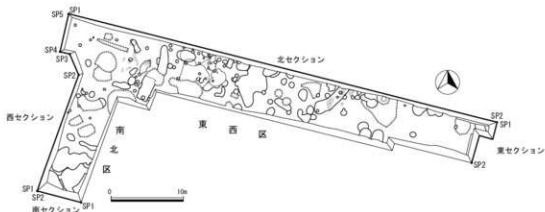
当調査区では近世以後の遺物もほとんど見られないことから、集落の居住域に隣接した耕作地としての利用が続き、現代に至ったものと推定される。





### 第3節 3地点 (HM14-3) の調査

#### 1 3地点の概要と遺跡の構造



第25図 3地点セクション位置 (1/500)

3地点は今回の調査で最も広い面積の調査区であり、部分的な拡張も含め、最終的には502m<sup>2</sup>になった。3地点の調査区は道路計画に従い全体がL字形をなし、南北に延びる西側部分（全長約14m、以下「南北区」と表現）と、東西（約60m、以下「東西区」）に延びる部分からなる。3地点の調査区は、そのほぼ全てが旧八剱社の境内地の東西最大幅に相当する。

現場では5月27日にフェンスを設置し、5月30日から表土掘削を開始。6月4日から調査を開始し、7月8日に完掘状況の空撮を実施。7月9日から埋め戻しを開始し、7月14日に終了した。基本層序は以下のとおりである。

I層：表土層。現代の耕作土や、住宅解体時の攪乱など。

II層～III層：弥生、中世～近世の遺物包含層。本調査区の堆積状況は特殊で、表土を除去すると他の地点にみられるような遺物包含層を介さず、いきなり地山砂層に到達する部分も多く、その場合の遺物包含層は地山面の僅かな窪みや、地山に掘り込まれた遺構埋土としてのみ存在する。弥生期の遺物は地山面に散らばったような状況で出土するものや、地山面で検出された遺構埋土から出土するものがほとんどである。

調査前の標高は地表面で4.5m前後あり、第一砂堆の中ではいちばん標高の高い部分に相当する。地山の標高も3.5mから東西区中央部では約4mにも達し、今までの全ての調査区の中でいちばん高い。また、調査区東端では3.2mと、50cmほど低くなるが、この変化は全体の緩やかな傾斜を現すものではなく、調査区西端部近くで数十cmの段をなして下がった結果生じた数値差である。この段差は旧八剱社の外周を画する堀のようなものの痕跡で、恐らくは人為的な掘削であろう。

このような特殊な状況を生み出した原因に関しては、いくつかの予察も含め後節にて言及する。

本調査区で検出された遺構は多いが、厳密に時期を特定できるものはごくわずかである。表土からいきなり地山面に至る部分が多く、表土の堆積もさほど厚くないことから地上の影響を受けやすく、攪乱部分も多い。また、特に南北区南端と東西区中央付近には性格不明の大形土坑が存在し、

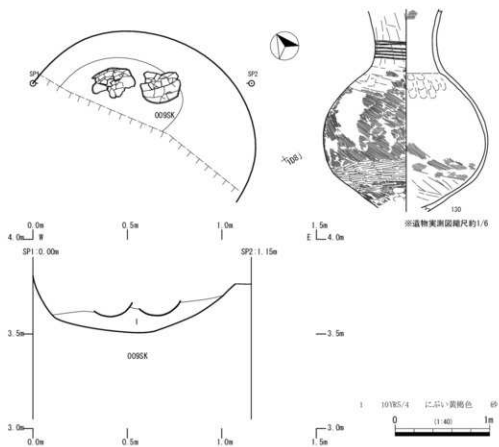
プランを特定できたものは遺構 (SX) として測量し、プランが明瞭で無い部分は地形的に測量を試みた。これらのうちいくつかは、かつて当地に存在していた巨木の抜根跡である可能性も高いが、埋土中に遺物が混ざることあつて、個々の峻別は難しかった。

弥生期の遺構に関しては、埋土が独特の色 (黒褐色、暗褐色など) を呈することが多いことなどから比較的把握しやすかったが、本調査区では遺構数に比して土器などの遺物量は極めて少ない。また、水神平式を中心とした条痕文土器や、ごく少量だが縄文晩期土器は地山面から散漫に出土する場合がほとんどである。水神平式を中心とした条痕文土器に関しては、僅かだが分布に濃淡がみられる (第 41 図条痕文土器分布図参照)。

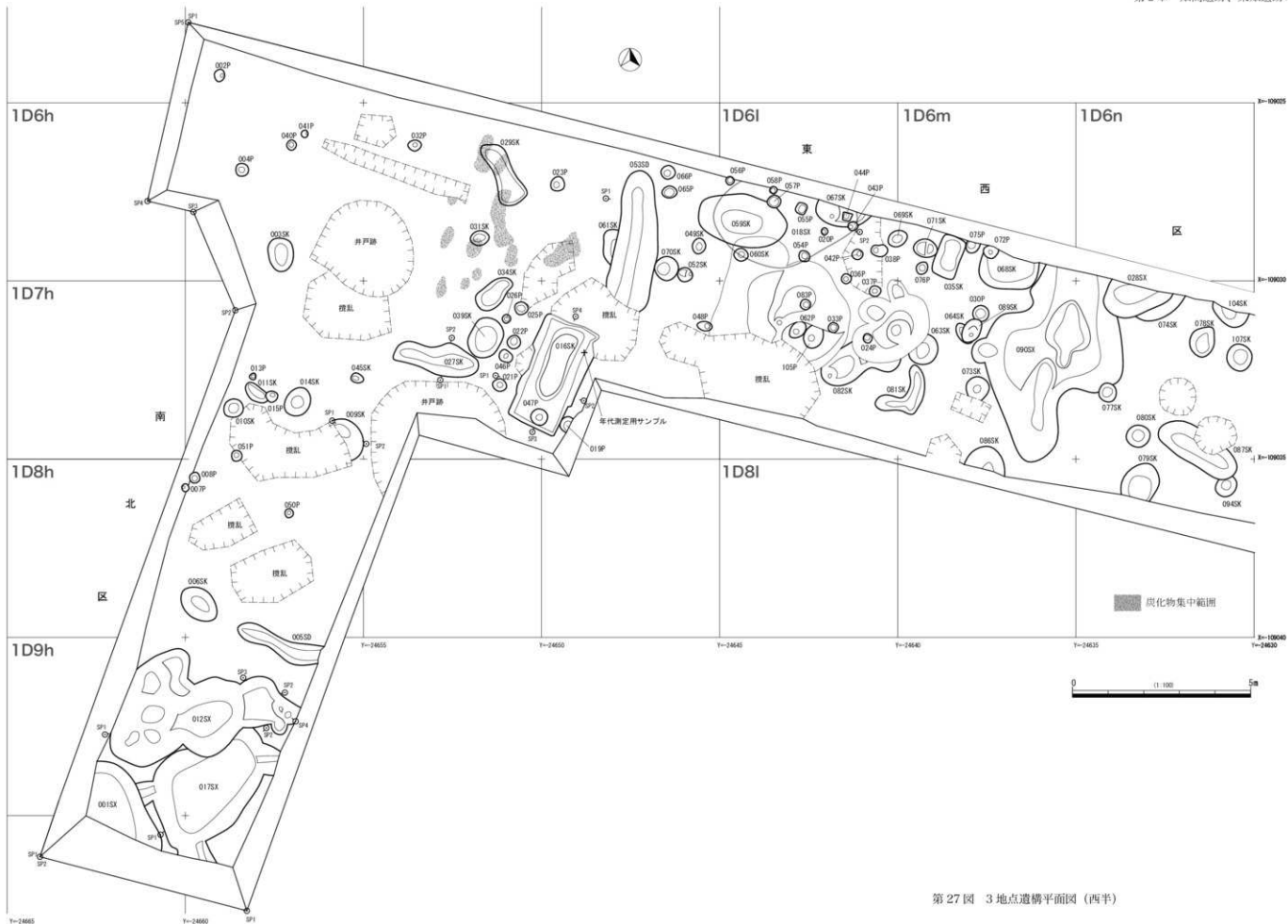
## 2 主な遺構

### 009SK : 土坑 (第 26 図)

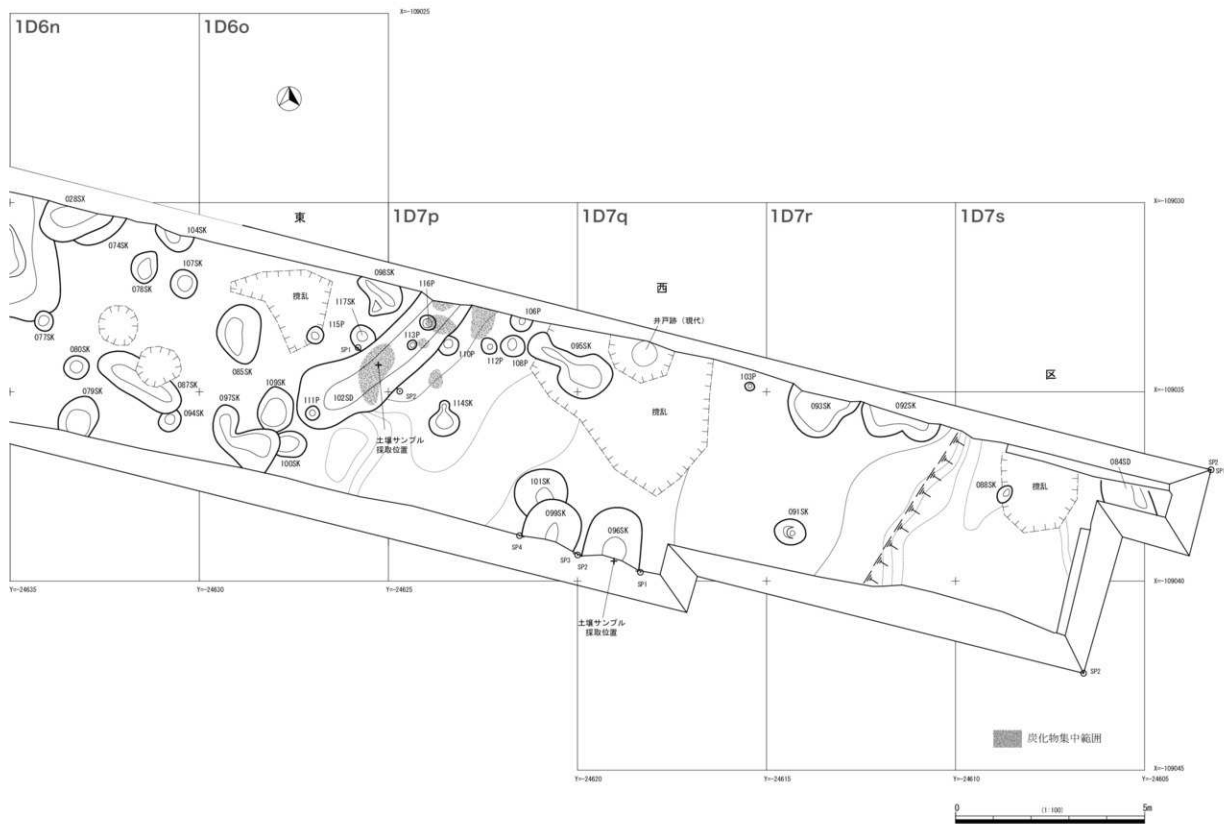
調査区南北部分の中央北寄りで検出した土坑で、残存部の最大径 1.2m、地山面からの最大深度は 30cm ほどである。全体の半分以上が攪乱によって失われていたが、残存部の埋土中ほどで、弥生時代中期 (貝田町式新段階と推定) の壺が半割されたような状態で検出された。性格不明な土坑であるが、復元された土器の様子などから、土器棺埋納用の土坑または供献土器であった可能性もある。



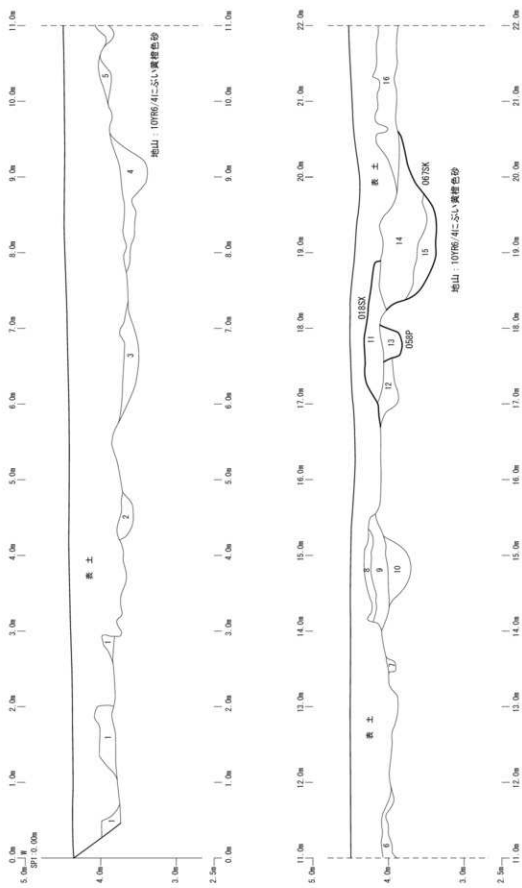
第 26 図 009SK 土坑



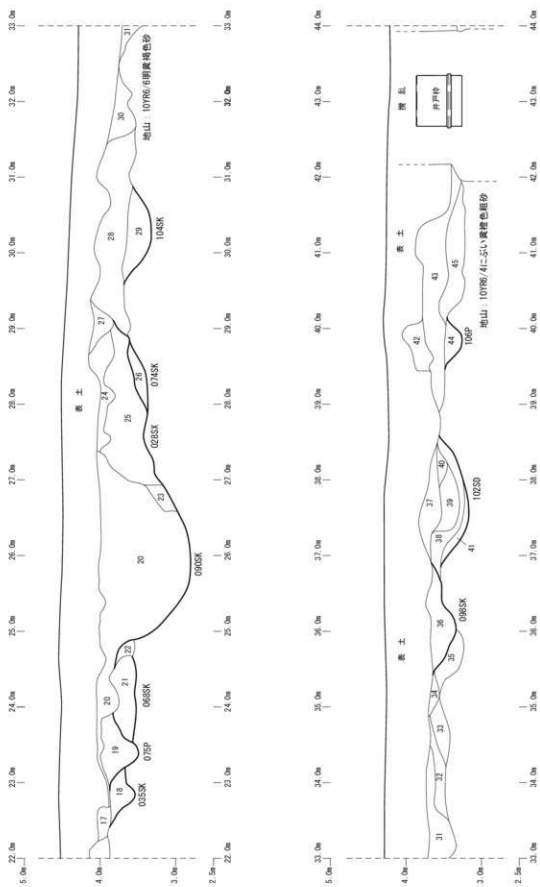
第27図 3地点遺構平面図(西半)



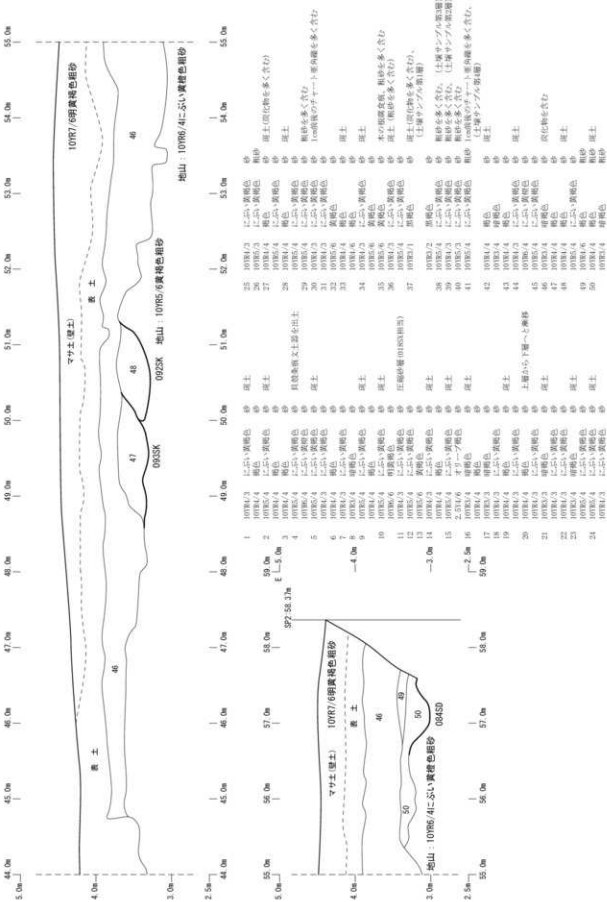
第28図 3地点遺構平面図(東半)



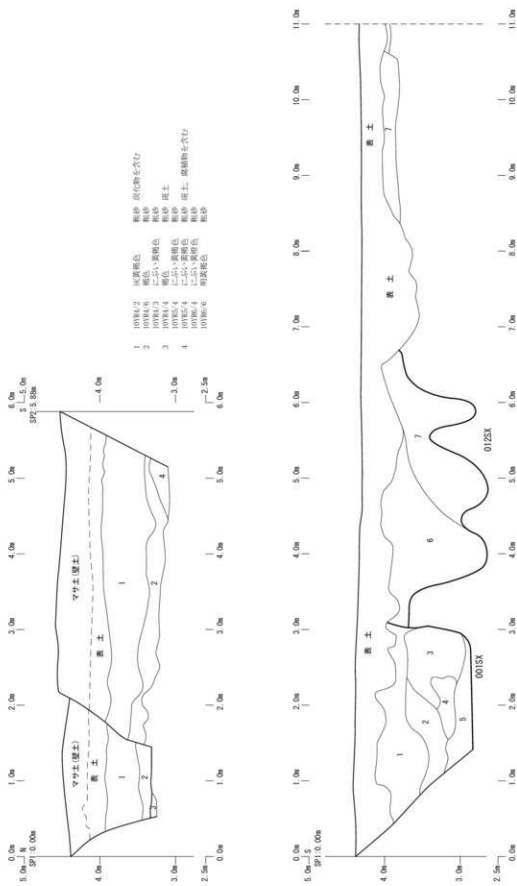
第29図 3地点北セクション図1



第30図 3地点北セクション図2

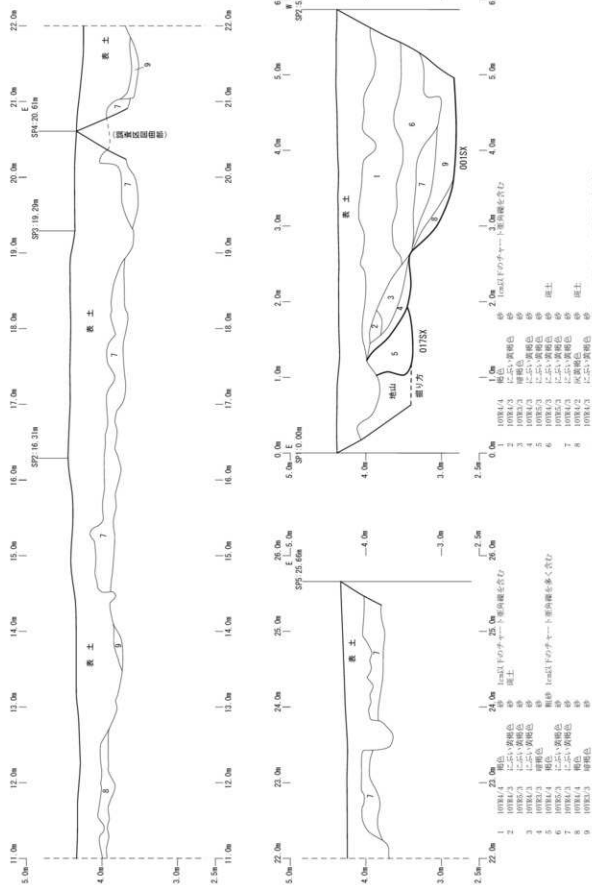


第31図 3地点北セクシオン図3



第32図 3地点東セクション図・西セクション図1





第33図 3地点西セクション図2・南セクション図

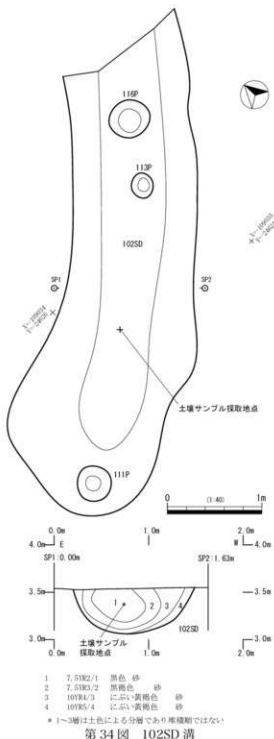
## 102SD：溝（第34図）

調査区東西部分の東寄りに、ほぼ北東から南西に向かって延びる溝で、検出されたプラン上端は僅かに湾曲しているようにも見える。全長約5m、平均的な幅は1.5m前後で、深さは45cm前後であった。検出時は方形周溝墓などの溝ではないかと考えたが、最終的には対応する同規模の溝が無いことなどから、単独のものだと判断した。溝底面には3基のピットを検出したが、いずれも極めて浅いもので、柱穴や杭の痕跡とは考えられない。

この溝の検出面には炭化物が集中する部分があり、斑状の分布範囲は概ね溝の平面プランに沿っている。特異なのはその埋土で、溝のほぼ中央に設けたセクション部分では、異様なまでの黒色を呈する中心部分から、同心円をなすように土色に変化する様子が観察された（断面図参照）。遺構プランそのものは断面形状が碗形に掘削されており、堆積学的にはこのような状況はありえないため一般的な掘削を躊躇したが、埋土における砂粒の相違がほとんど見られなかったことから、便宜的に土色による分層を行い、断面図を作成した<sup>1</sup>。

同時に、目視でいちばん黒色を呈していた中央部分の土壌を採取し分析を行ったが、土壤中に多量の微小炭化物が検出され、それが強い黒色を呈する原因の一つであることが判明した。それらの年代測定結果では、2σ暦年代範囲が930-831 cal BC (95.4%) すなわち縄文時代晩期前半を示す数値が出た（第3章参照）。残念ながら埋土中からはほとんど時期を特定し得ない十数片の小さな土器片しか発見されていないが、縄文晩期の資料とも考えられる土器底部や口縁部資料も含まれていた。

もしこの102SDが縄文晩期の遺構とすれば、当地区では初めての縄文時代の遺構の発見といってもよいであろう。縄文晩期の土器資料については、今回報告する五瓦葺式土器の口縁部が唯一であるが、本調査区の東側に続く4地点～5地点の南東側では、過去の調査で縄文晩期全般の土器片が多く発見されており、第一砂堆南端の旧大田川に面した地域では縄文時代晩期の集落が展開していた可能性を裏付けるものである。



第34図 102SD溝

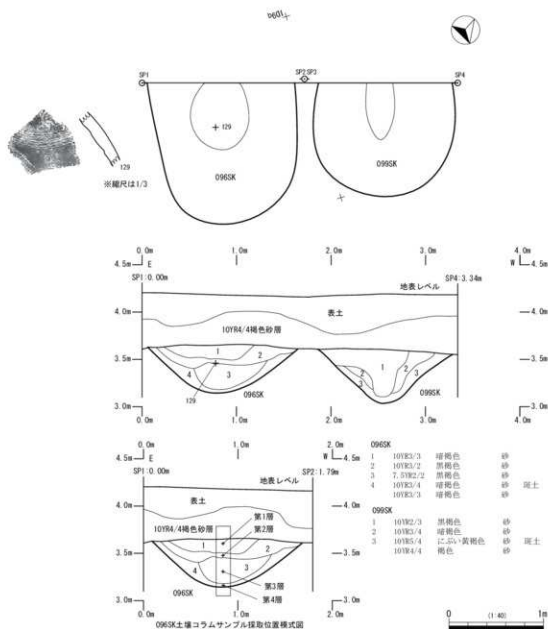
1 北セクションにおける102SD部分の分層結果では、同心円状の堆積は確認されておらず、最上層は炭化物を多く含む黒褐色の埋土で、遺構の検出面を覆うように盛り上がった断面形状を呈していた。

## 096SK・099SK：土坑？（第35図）

調査区東西部東端近くで2つ並んで検出した遺構で、未発掘部分が溝状になる可能性も高いが、ここでは検出した部分をSKとして把握しておいた。

埋土は当地における弥生期独特の暗褐色～黒褐色を呈し、断面形状は碗形および開き気味のV字である。両者とも直上は褐色砂層に覆われていたが、散漫に出土する遺物の様相などからこの層は中世に所属するものと思われる。より堆積状況が安定していた096SKのセクション面において、土壌のコラムサンプルを行った。4層に分層した埋土を層毎に分析した結果、とりわけ黒色の強い第1～3層の土壌から多量の微粒炭を検出した。また同時に、第1層からのみイネのプラントオパールを検出した（第3章参照）。

微粒炭の年代測定の結果は、第3層の2 $\sigma$ 暦年代範囲が206-88 cal BC (87.3%)で弥生時代中期頃に、第1層の2 $\sigma$ 暦年代範囲が41 cal BC-65 cal AD (95.4%)で弥生時代中期から後期に



第35図 096SK・099SK土坑？

相当する数値を示した。遺構が弥生期のものである可能性に関しては、黒色、暗褐色、黒褐色を呈する埋土から経験則として類推することは出来たが、年代測定によって大まかではあるが絶対年代を特定し得たことの意味は大きい。残念なことに埋土にはほとんど遺物が含まれておらず、図中に129として拓影を示したものが唯一の弥生土器であり、第2層と第3層の境界から出土した。黒色に仕上げた器面にササラ状の原体で文様が描かれたもので、中期の獅子懸式または古井式に相当し、年代測定で得られた結果と良く整合する。

また、土壌分析の結果、第1層からのみ多量のプラントオパールを検出した。平成23年度の調査では4地点で発見された弥生時代中期の土器棺(d-002)内に堆積した土壌から、多量のプラントオパールが検出されている。今回サンプリングを行った地点とは約100mほどの距離があるが、基本的に同一遺跡の別地点と考えてよい。このプラントオパールと微粒炭検出の意味については、後述する。

#### 027SK：土坑（第36図）

調査区南北部分と東西部分の交差する地点で検出した遺構で、全長2.4m、幅50～90cmで、船底形の深さは30cm前後である。埋土は黒褐色から暗褐色で、弥生期の遺構である可能性が極めて高いが、遺物の出土が無いので推測に留めておく。

#### 053SD：溝（第37図）

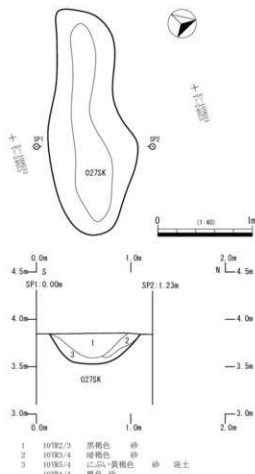
調査区東西部分の西部で検出した溝で、極めて緩やかに湾曲しつつもほぼ南北に延びる。南端は攪乱によって失われているが、残存部の全長は約4m、最大幅1.3mで深さは40cmである。埋土はにぶい黄褐色の斑土であり、遺物としてはプラン内から条痕文土器と下呂石の剥片がいくつか出土したが、遺構との関連は不明である。

所属時期は弥生期のものとは断定できない。西側に最大幅1mほどの土坑を1基伴うが、性格は不明である。

#### 059SK：土坑と、018SX：砂の硬化面（第37図）

調査区東西部分の西側に位置し、表土掘削の直後に砂が硬化した範囲を検出したため、堆積状況を把握するためにトレンチを掘削したところ、その下層から059SKを検出した。

018SX硬化面の範囲はおおむね3m×3.8mで、いちばん厚い部分で20cmあり、薄い褐色を呈していた。硬化の原因は不明だが、人為的所産であるとする、さらさらした砂をそのままで搗き固めることは不可能であるため、何かを含浸させて搗き固めたのだろうか。現在のところ、この遺構の性格は不明だが、層位的にも古い時代の所産とは思われないうことなどから、旧八剱社境内地に



第36図 027SK 土坑



おける何らかの活動の痕跡と理解しておくことも可能であろう。

018SX の下層に存在していた 059SK は 2.5m×1.5m、最深度は 60cm という規模の長円形の土坑で、地山層に掘り込まれている。埋土の大半は黄褐色砂の斑土であり、他の遺構同様に出土遺物はほとんど無いが、遺構内から数片の弥生土器片と石鏝（169）が 1 点出土している。なお、上面の 018SX との関係は無いものと思われる。

#### 016SX：木製貯蔵施設？（第 38 図）

調査区の南北部分と東西部分の角地で検出した遺構で、3.1×1.7m の長方形プランを呈する。地山砂層をこの大きさに深さ 60cm ほどほぼ垂直に掘り込み、壁面に沿うように周囲に薄い板を巡らせ、土坑底面にも板が敷かれていたようである。しかし底面中央には幅 50～60cm で長さ 1m 程の鳥状に残された部分（深さ 45cm）や南側にピット 047P があり、全面が水平ではない。

埋土中からは、ところどころに木質や把手のような金具のほか、漆の残欠や、上層からは 20 個以上の土鏝が発見された。また、土層断面の観察から埋設または設置された空間に落ち込んだような状況が看取された。これらのことを総合的に考えると、内部に空間を持った板張りの施設または、長持のような長方形の木箱が埋設されていたのではないかと思われる。土鏝に関しては、漁網のようなものが埋納または上面に掛けられていたのではないかと推測される。

壁面と埋土の所々には板状の木質の痕跡が残り、数カ所で採取した木質のうち保存状態が良いものの年代測定を行ったところ、17 世紀から 20 世紀前半の年代を得た。その頃は当地に八劍社が存在していた時期であり、境内の一角に設置された、神社に関係する何らかの施設の一部であった可能性が高い。

#### 001SX・012SX・017SX・090SX など：性格不明な大形土坑群（第 39・40 図）

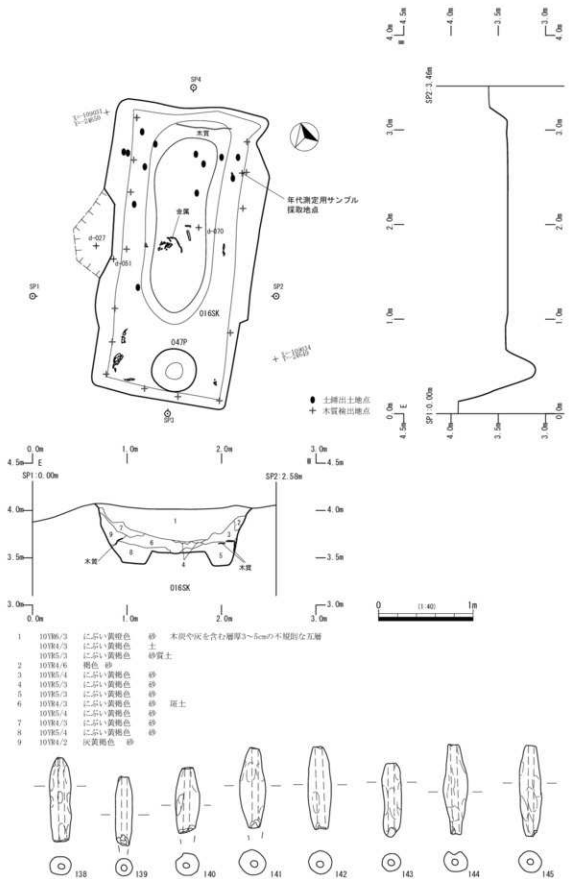
いずれも地山面での検出で、掘削中は人為的なものなのか自然のものなのか判断に苦しんだ。時折埋土から遺物が出土したが、弥生土器片から中世の陶器、そして近世陶磁器と多様かつ断片的な様相で、属性の決定には寄与しないものばかりだった。そうするうちに近隣住民から、かつて八劍社境内には何本もの巨木があったことを聞き及び、僅かな手がかりを元に調べてみると以下のことが判明した。

東畑の八劍社<sup>2</sup>が大宮神社に合祀されたのは明治 42（1909）年であり、合祀後に松や樟の巨木 30 本が競売されたという記録がある<sup>3</sup>。『張州雑志』によれば、八劍社の「祭神、熱田八劍宮、拱社、牛頭天王、山ノ神、神明、里俗伝々、往古熱田ノ明神、暫ク此地ニ鎮座在リシ」とあり、拱社を三社有するかなり広い神域を持った神社であったことがわかる。

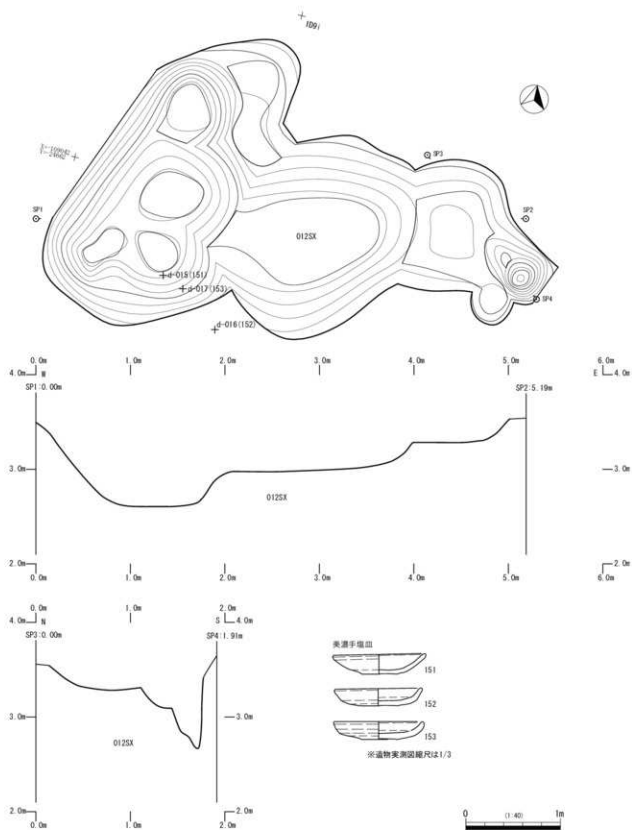
江戸時代後期に製作された大里村の村絵図にも、巨樹に囲まれた八劍宮の表現があり（第 62 図 知多郡大里村繪圖）、これらのことなどから、今回検出された不整形な大形土坑の大半は、巨樹の抜根跡と判断した。

2 現在は 3 地点全体が畑間地内に存在するが、瀬古道を挟み東側に隣接する 4 地点からは東畑地内となる。

3 『横須賀町史』1967 による。

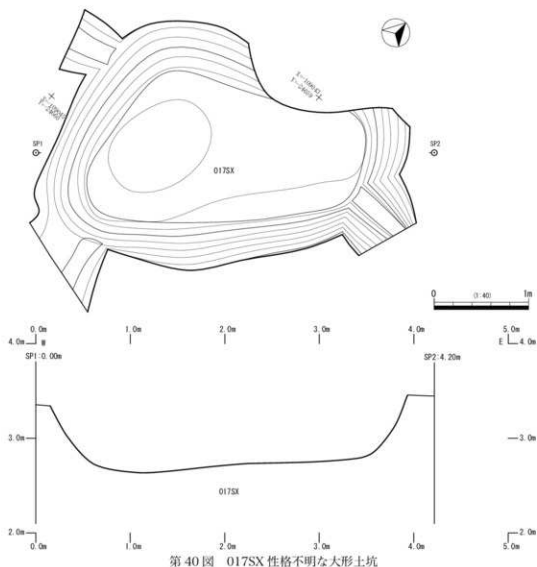


第38図 016SX 木製貯蔵施設?



第39図 012SX 性格不明な大形土坑





### 3 出土遺物

本調査区から出土した最古の遺物は、縄文時代晩期五貫森式と思われる土器片1点(113)である。弥生時代の遺物としては、貝殻による条痕文が特徴的な水神平式土器が散漫に十数片出土したほか、貝田町式の壺(130)や瓜郷式系の壺(131)など、量的にも質的にも極めて断片的な出土状況である(第41図条痕文土器出土分布図参照)。

このうち、土坑009SKに埋設されたような状況で出土した弥生壺(130)は中期の貝田町新段階に属するもので、口縁部を欠くが、頸部に施された6段の沈線やハケ目調整された球形の胴部が特徴的である。復元の結果、胴部中央から下半にかけて土器の割れ口が他の破片より磨耗しており、底部にかけて弧をなしてきれいに欠損している。また欠損部分の反対側にも僅かだが同様の磨耗がみられることから、埋設にあ



写真1 130壺欠損部分

り意図的に欠損させた可能性を指摘しておきたい。その場合の用途は土器棺である可能性も高い<sup>4</sup>。

古代の遺物としては、須恵器が数片出土したにとどまるが、猿投窯製品の瓦塔と思われる資料(132)も出土している。恐らく屋根の棟先端部分と思われるが、本来なら棟のすぐ脇から始まる瓦列との間にもう一条細い棟?が付けられており、建築物の構造としては直ちに塔と断定できない形状をしている。愛知県埋蔵文化財センターの永井邦仁氏に実見していただいたところ、工人が必ずしも建築物としての構造を正確に把握していたわけではないので、この

ような間違いが生じる可能性はあるとのことであった。この大田地区からは過去の調査においても何点かの瓦塔破片が出土していることから、それらとともに総合的な検討を要する資料であろう。

中世の遺物としては、12世紀末と推定される加木屋地区の古窯製品(杏葉唐草文軒平瓦や丸瓦など)の他、山茶碗や山皿、加工円盤や加工さいころ、陶丸などが出土したが、いずれも明確な遺構に伴うものではなかった。

近世以後の遺物としては、美濃焼の灯明皿や手塩皿、焙烙や土鍾などのほか、黒く燻された瓦類が多く出土した。これら瓦類は、かつて存在した八劍社の社殿や付随施設に葺かれていたものと推定される。

#### 4 3地点のまとめ

当地点は旧八劍社境内地であったことが知られており、調査前には他の調査地点にも増して多量の遺物が出土するのではないかと予測した上で調査に取りかかった。ところが既に表土掘削の段階から、調査範囲の多くの部分で表土除去と同時に地山砂層が露出する特殊な状況が判明し、いわゆる遺物包含層は調査範囲の限られた部分にしか存在しないことが判明した。結局、広大な調査面積にもかかわらず、出土した遺物量は予想を大きく下回るものとなった。

調査区の東西両側に存在した古くからの瀬古道(生活道路)は、江戸時代後期の村絵図にも表現されており、3地点の調査範囲は全て、旧八劍社境内地に含まれる。すなわち、調査地の西側に並行する瀬古道は、集落の中心部に所在する常進寺門前から八劍社および毘沙門堂を結ぶ道で、第一砂堆のいちばん標高の高い部分<sup>5</sup>を通っていた。このような道は「往還」と呼ばれ、村の生活に密着した重要な道路であった。また、調査地の東側を通る瀬古道は、八劍社境内の外周を画する道で、現在では小字である「畑間」と「東畑」の境界になっている。八劍社の創建年代は不詳であるが、当地は中世の熱田社領であった大郷(おおさと)郷であることから、少なくとも中世前半までには創建されていたものと思われる。

過去の調査では、周辺の調査区から弥生時代以降の様々な遺構や遺物が数多く発見されており、

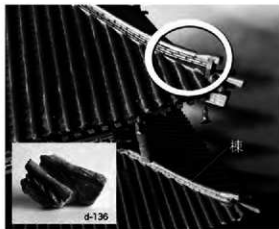
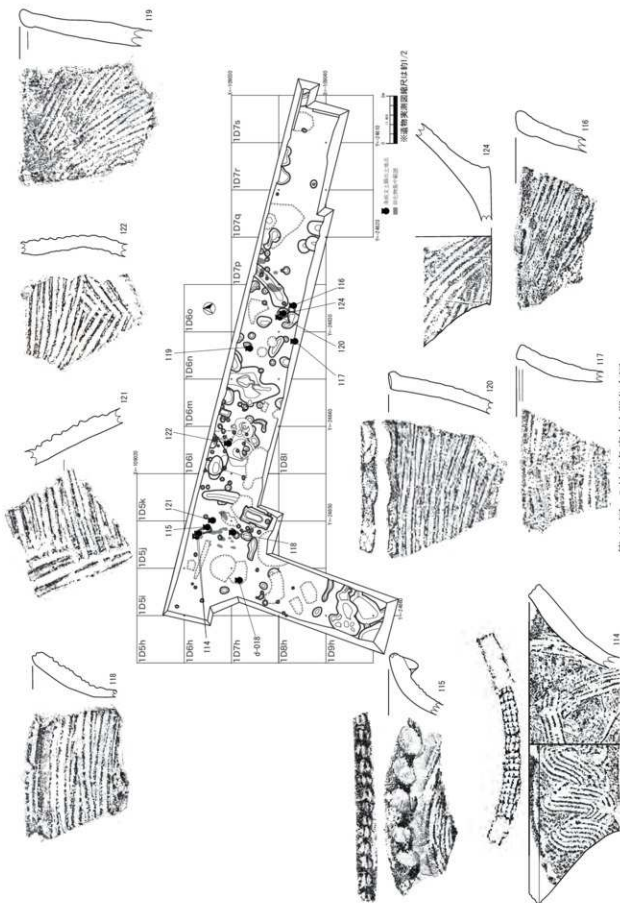


写真2 出土の瓦塔部位解説写真

4 ほぼ円形をなす欠損部の最大幅は約17cmで、底部を欠く上に、部位は異なるが、欠損部は円窓付土器の雰囲気似る。(前頁写真参照)

5 現地標高4.5m～5m前後



第41図 3地点条痕文土器分布図

当調査区での様相はそれらと対照的である。例えば、弥生時代の遺構と思われるものは十数基検出されたが、そのほとんどが性格を特定し得ない単独の土坑や溝であった。過去のそれぞれの調査区は3地点から数十m離れてはいるが、東西南北いずれの側でも弥生時代の方形周溝墓や住居跡が検出されている。

このような特異な状況の原因として第一に考えられることは、少なくとも中世後半以後明治に至るまで、当地が重要な神社境内であり続けたことによって、一般の居住域とは違った様相が出現したものと推測される。しかし中世以後の状況は神社の存在で説明できても、弥生時代の様相についてはどのように解釈すべきであろうか。

基本層序の項目でも述べたように、東西区の中央では地山標高が4mと極めて高く、古い時代の遺構は度重なる削平によって消滅してしまったのだろうか。しかし、実際は縄文晩期の遺構の可能性が102SDや、弥生時代中期～後期の遺構である096SKなどがそれぞれ40cm以上の深さを保って点在しており、原地表は現在の標高からかなり高かったという仮定を積極的に肯定する状況には無い。

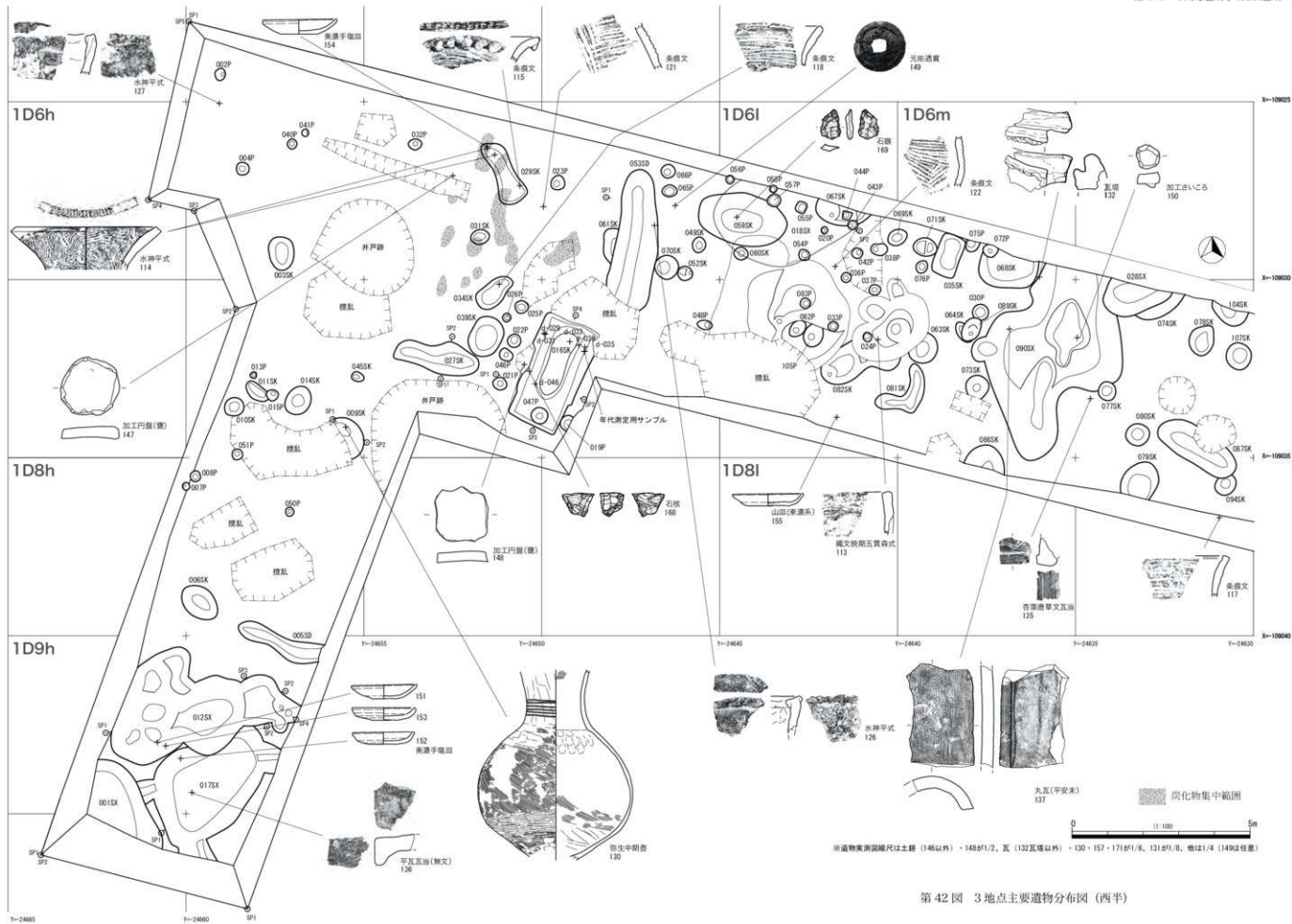
想像をたくましくすれば、当地はすでに弥生時代より神聖視された場所であって、一般の居住が避けられ続けてきたのではないだろうか。実際には地形的な高まり(砂丘)の存在を背景に、人工的な墳丘ではなく、半ば自然の砂丘上に支配者たちの墳丘墓的なものが存在していたのかもしれないし、地下施設を伴わない祭祀の場が存在していたのかもしれない。

古代人の祈りの場所や重要な墳墓が、後に神社や寺院に取り込まれて長く残り続ける例はいくつもある。当地が後に八剱社として地域の人々の信仰の場になった背景には、時代を超えて存在する聖なる場所に対する意識の連続があったのかもしれない。

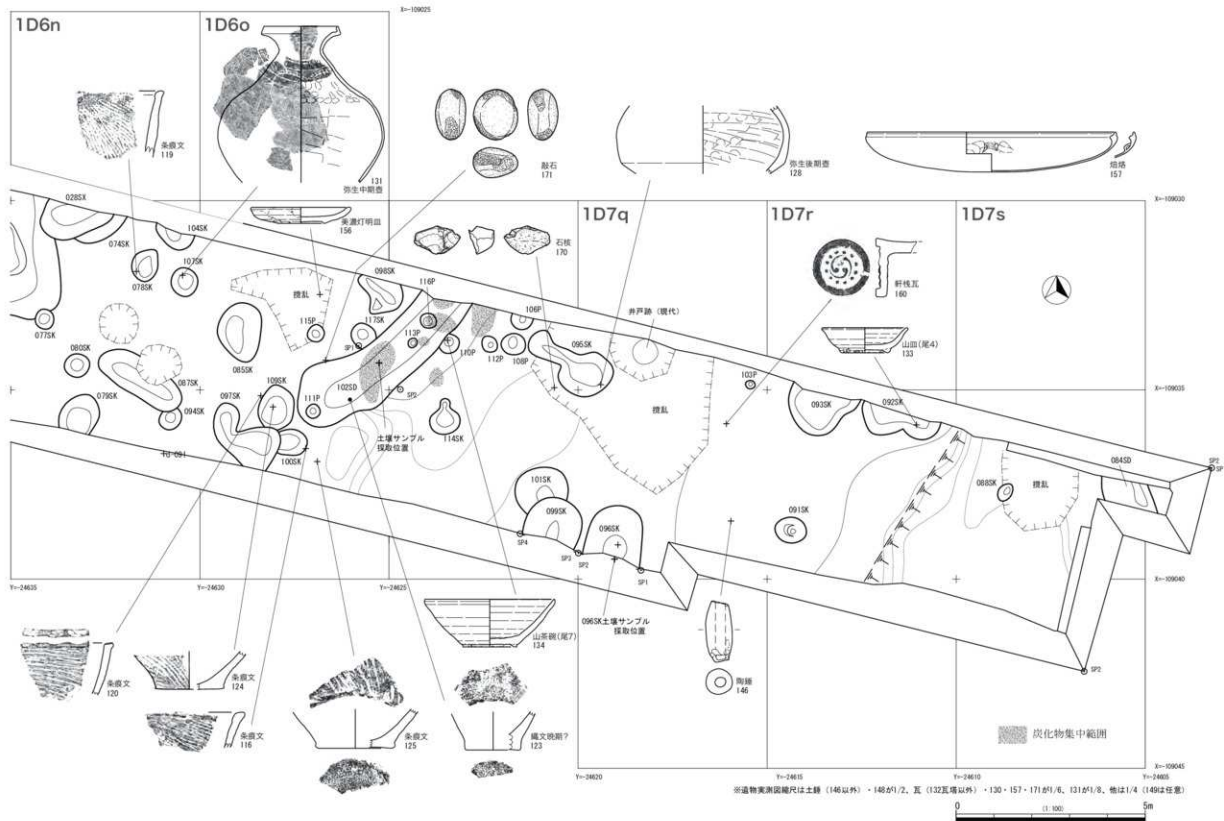
最後に、土壌分析の結果について言及しておかねばならない。まず異様なまでの黒さを見せた102SD埋土からは微粒炭が検出され、縄文時代晩期の年代を得た。また、同様の黒さを呈した096SK埋土のうち、第1層からは大量の微粒炭が検出され、同時にプラントオパールも検出した。こちらの年代は弥生時代中期～晩期であったので、両者には直接の関連性は無いが、微粒炭の成因という意味では共通項が存在する可能性がある。

森将志氏(パレオ・ラボ)によれば、微粒炭は人間の活動や自然現象に伴う植物燃焼によって生じるという(第3章参照)。096SKの第1層に関しては、「イネ機動細胞珪酸体が産出しており、稲作などの人間活動の痕跡が読み取れる。よって、焚火や野焼きなどの人間活動が他の層準よりも活発であったと推測され、微粒炭を生じさせる事象が多かった可能性も考えられる。」と述べている。これらの指摘から想像出来るのは、当地における焼き畑農耕の存在と、それに伴う陸稲栽培の可能性であろう。現在の大田川開削以前の旧流路は、前章の遺跡分布図にも示した通り、第一砂堆背後から大きく湾曲して広大な後背湿地を形成していた。汽水域がどこまで広がっていたかは明らかではないが、旧河道には周辺の小規模な開削谷から流れ込む小さな水流が何カ所もあり、水田に適した場所も存在していたことだろう。同時に、集落のある砂堆上の周辺環境は灌木の混ざる草原のような環境を想像すればよいだろうか。先ほどの096SKの土壌分析結果では、イネ科植物相のなかではササ類やキビ族、ウシクサ族の優先的な環境が復元されており、これらが定期的に焼き払われることにより微粒炭の材料となった可能性が高いのである。

プラントオパールに関しては水稲と陸稲の区別が出来ないということなので、現在のところは焼



第42図 3地点主要遺物分布図(西半)



第 43 図 3 地点主要遺物分布図（東半）

き畑を伴う陸稲栽培の可能性を指摘するに留めたい。

なお 102SD 埋土における大量の微粒炭は、縄文晩期における農耕の可能性にも抵触する問題であり、今後同時期の土壌分析結果が得られた段階であらためて考察したい。



第44図 3地点出土遺物(近世の焼し瓦)

## 第4節 4地点 (HH14-4) の調査

## 1 4地点の概要と遺跡の構造

4地点は畑間遺跡で取り扱った3地点の東に続く調査区で、9月24日にフェンスを設置。翌25日から表土掘削を開始し、更に東に続く5地点との関係で10月16日から調査を開始。11月13日に先行して空撮を済ませ、11月24日に現地説明会を開催。翌25日から補足調査と埋め戻しを開始し、11月26日に終了した。

調査面積は206㎡である。(補足調査を行った拡張区は図面上約24㎡だが、半分以上が現代攪乱であった)

基本層序は以下のとおりである。

I層：表土層。現代の耕作土や客土、家屋解体時の攪乱層も含む。

II層：近世の遺物包含層で、褐色の砂層である。北セクションにおける1・2層と3層の一部が含まれる。近世の遺物はほとんど出土していない。

III層：中世の遺物包含層で、3層の一部と26層がこれに相当する。調査区の東側に行くに従い、暗褐色が強くなる。なお、今回は遺構の検出段階において、便宜的に中世層を前半と後半の2層に分層したが、セクション面では明確に分離することができなかった。

IV層：上面が中世層によって削平されているが、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物と遺構を含む層である。暗褐色砂層で、遺構埋土はさらに黒みを増す。多くは遺構埋土として存在するが、少量の須恵器を含む部分もあり、一様では無い。

現地表面の標高は4～4.5mと、3地点同様第一砂堆の中では高い部分に属する。地山面の標高も3.5m前後と、3地点に次いで高い。

表土掘削の段階で、先行して調査を行った3地点とは違い、当地の中近世遺物包含層の特徴である褐色砂層が全面に広がる様子が観察された。褐色砂層は東側に行くにつれて濃さを増し、調査区東半には良好な遺物包含層が残っている可能性が高まった。よって表土掘削の深度は最低限に留め、可能な限り人力による掘削や遺構検出を行った結果、中世のものと思われる溝群001SDを検出した。これらは畑の畝に対応する溝の痕跡である。

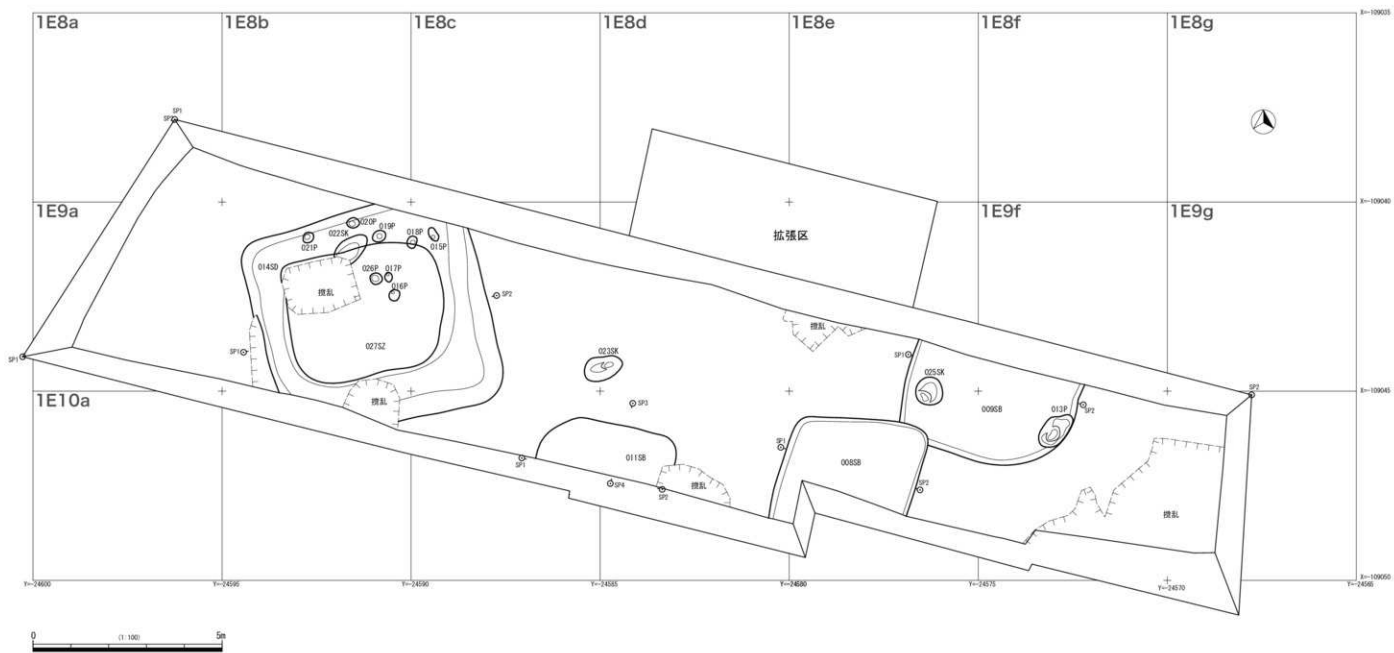
また、溝群の下層からは、同じく中世段階の遺構として溝003SD/010SDや、土坑005SK、ピット012P、土器集積002SUを検出した(第52図)。

さらにその下層からは、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が出土し、本調査区には少なくとも上中下三層の遺構面が存在することが判明した。厳密には、最下層は弥生時代中期の遺構と、後期から古墳時代前期の遺構が重複する状況だったので四層の遺物包含層ということになるが、この両者の分離は不可能であった(第46図)。この最終面では、調査区西部から幅広床下周溝を持つ住居址一軒を検出したが、知多半島では初めての発見例となった。



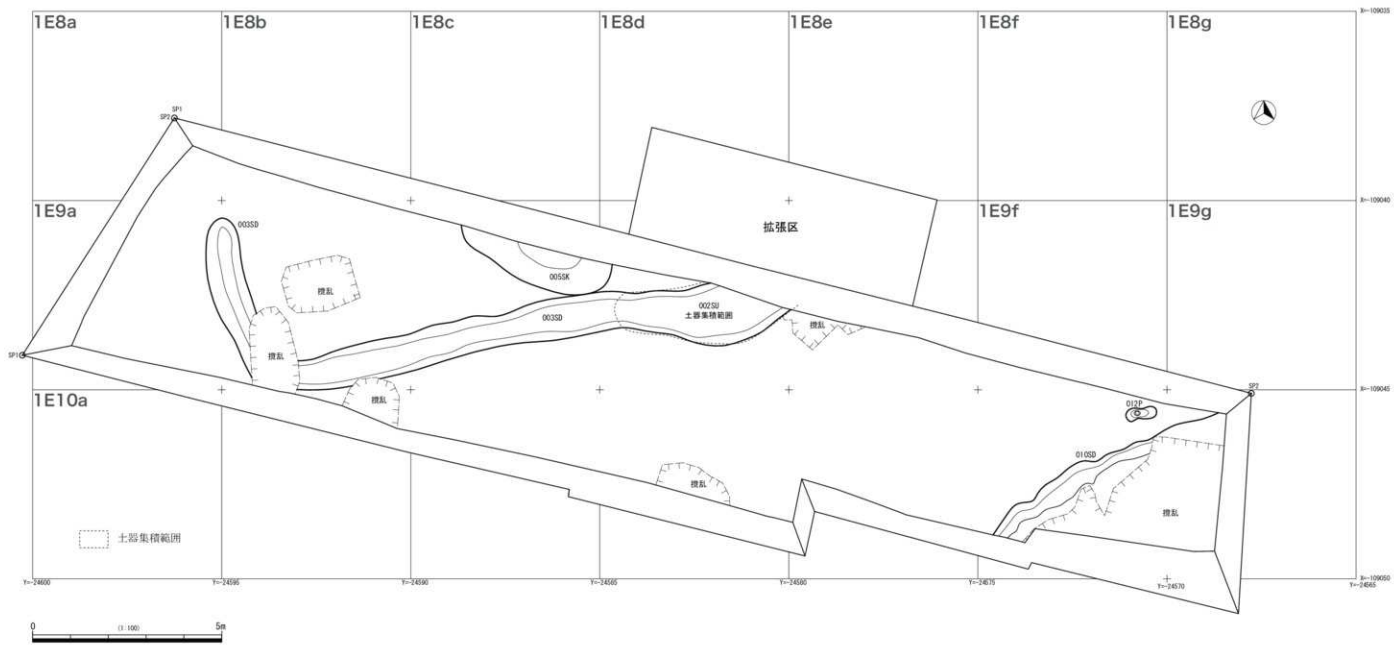
第45図 4地点セクション位置 (1/500)



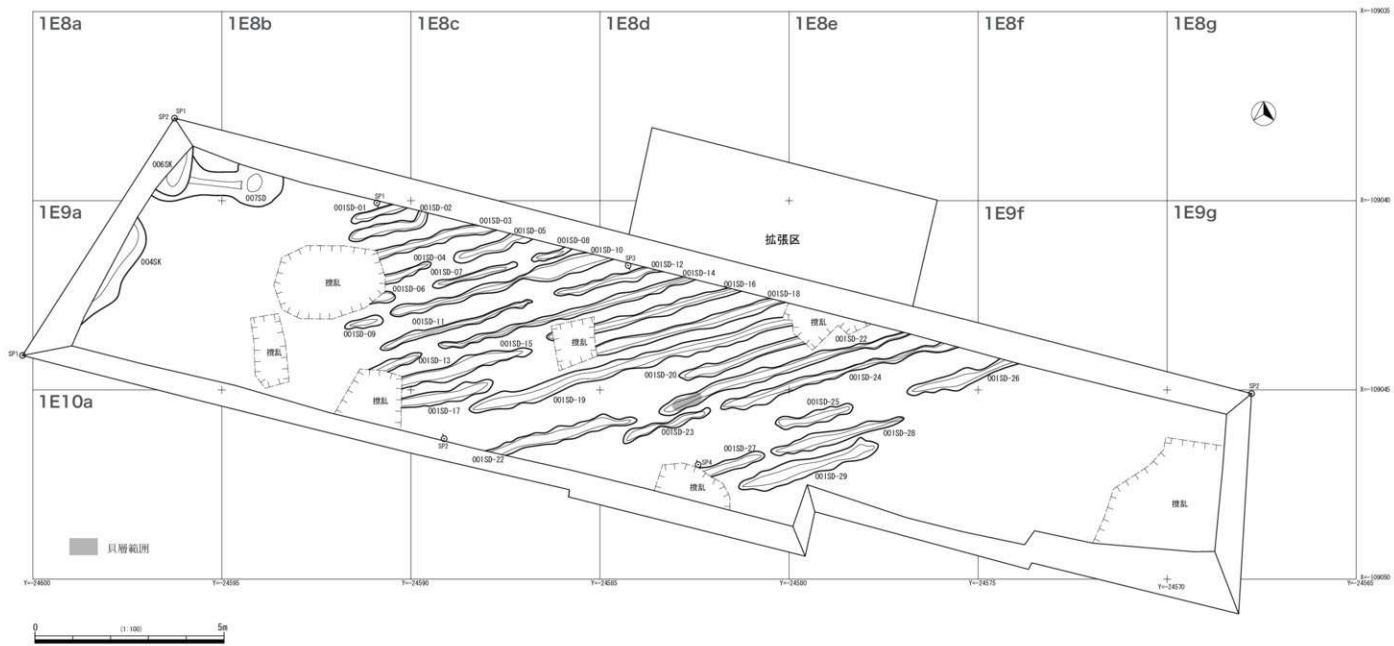


4  
地点  
(HH  
4)

第 46 図 4 地点遺構平面図 (弥生~古墳)

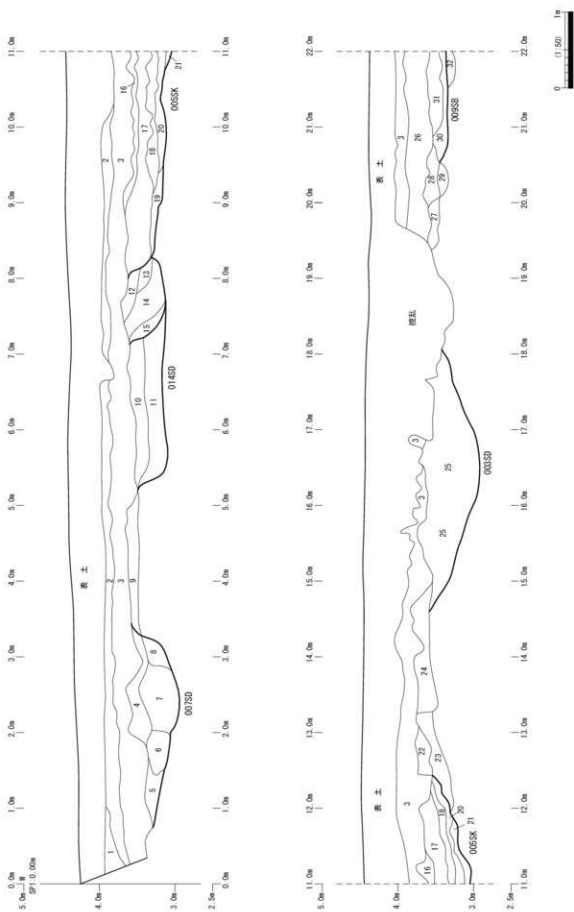


第 47 図 4 地点遺構平面図 (中世前半)

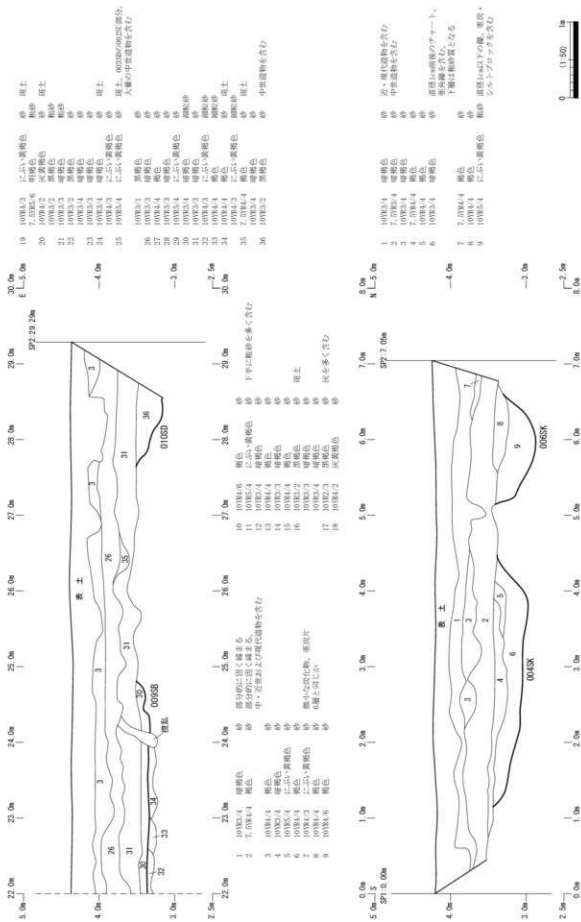


4  
地点  
(HH  
4)

第 48 図 4 地点遺構平面図 (中世後半)



第49図 4地点北セクション図1



第50図 4地点北セクション図2・西セクション図

## 2 主な遺構

### 001SD：溝群（第51図）

表土掘削終了後、遺物包含層の掘削を開始した早い段階で細い溝の一部が出現しはじめ、調査区全体の掘り下げに伴って中央部のほぼ全面に溝群の広がりを確認したので、遺構検出を行った。その結果、耕作地の畝に対応する溝群を17列検出した。

溝の幅は15～40cmで、深さは10～20cm、溝の間隔は平均60～70cmで1～1.5m幅の部分もある。1箇所のみ溝内に貝層が充填されている部分（長さ約70cm）があった。

検出面の標高は3.6m前後で、溝の断面は皿形か碗形であり、作業時は最低でも20cmほどの深さがあったものと思われる。畝の高さは想像するほかは無いが、溝と溝の間隔や土質が砂であることを考慮すれば、数十cm以内だったであろう。

溝の方向はE-15°Nで、後に下層に出現する003SD溝と、最下層の014SD周溝ともほぼ同じ方向である。

溝の内外からは中世陶器が多く出土した。その時期は概ね12世紀末から13世紀後半にわたるもので、山茶碗や甕、鍋、盤などのほか、瓦も多く見られた。調査区壁面における遺物包含層の堆積状況などから、13世紀後半以後の開墾である可能性が高い。

なお、001SD溝群とほぼ同一面に検出した遺構としては、調査区西端に004SK土坑と、006SK土坑および007SD溝状遺構があるが、いずれも性格不明であった。

### 003SD：溝（第47図）

上層で検出された溝群の調査後、十数cmの遺物包含層掘り下げによって新たに確認した遺構である。ほぼ直線的に約13m伸びた部分と、西側でほぼ直角に曲がり4.5mほどの長さが見られたが、その部分は深さが10cm以下と溝の痕跡のような状況であった。直線部分は東に行くにつれて深さが増し、東端部は土器集積範囲002SUと一体化してしまうが、深さ20cm前後となる。直角部分を有することだけを見れば区画溝としての機能を想定することもできる。溝内に大量の中世陶器が廃棄されたような状況を呈していたことから、この溝自体が放棄され、埋没したのち、上層の溝群が掘削されたことがわかる。その際に攪乱された遺物が、上層でも多く出土したのであろう。

### 002SU：土器集積（第52図）

前述した003SD溝の一部が、幅1.5mほどに拡幅され、その中に多くの中世陶器が廃棄されていた。多くは山茶碗で、一般的に検出例があまり多くない片口鉢が5個体以上含まれていた。また社山古窯などで焼かれたと思われる瓦（多くが丸瓦）もしばしば見られ、独特の組成をなしている。

なお、遺構として便宜的に土器集積の範囲を輪郭線で表現してあるが、遺物の分布範囲は密度を減じつつ溝周辺にも広がっており、基本的には周辺部も含めた溝東半と理解してよい。

山茶碗のいくつかは根張4型式のもので、瓦類の年代とは良く整合するが、6型式・7型式のものや、東濃系の山茶碗も含まれており、かなり年代幅がある。新しい時期の遺物に関しては、上層の溝群に伴うものとも考えられるが、層位による分離は不可能であった。

## 010SD：溝（第47図）

調査区東端で検出した溝だが、大半が現代擾乱によって消失している。埋土に瓦などの中世遺物を含むため、便宜的に中世前半の図面に表現した。平成20年度調査区2地点の014SD延長部分に相当する。014SDは緩やかに湾曲するプランが確認されており、区画溝の一種と考えられる。なお、平成20年度調査で検出された部分は、中世後半の遺構である上層の溝群001SDとほぼ同じ方向だが、今回検出された部分では、多少湾曲する傾向が見られたことから、時期を異にするかと判断し中世前半の遺構平面図に収録した。

## 005SK：土坑（第47図）

003SD溝北側に隣接して検出した楕円形の土坑で、検出部分の長さ4.2m、幅1m、深さ50cm強を測る。黒褐色から灰黄褐色の埋土には大量に灰が含まれていたが、目に付くような炭化物は見られなかった。また、全くと言ってよいほど遺物を含まず、不自然なほどであった。用途・成因などは不明のままだが、検出面が溝群001SDより下層であったため、中世前半の遺構として平面図に収録した。

014SD/27SZ<sup>1</sup>：幅広床下周溝を持つ住居址（第53図）

調査区西部で検出した住居址である。当初は南側の溝から検出したため、かなり幅広の周溝を巡らせた方形周溝墓ではないかという思い込みがあった。しかし、周溝の南半分を掘削した段階でようやく異変に気づき、今まで周辺の調査区で発見されていた周溝墓とは違った種類の遺構ではないかと思い始め、あらためてプランの精査を行った。

その結果、周溝外周の検出面レベルを残してあった北半部分において、ビット群015～021P・026Pや土坑022SKを検出した。精査してみるとそれらの遺構はいずれも、埋め戻されたような褐色砂上面で検出しており、規則的なプランはなさないが、住居址の床面で検出した可能性が高い。

最終的には一辺6m前後の方形プランとなり、柱穴と思われるものは発見できなかった。軸線は上層の001SD溝群とまったく同じで、興味深い。

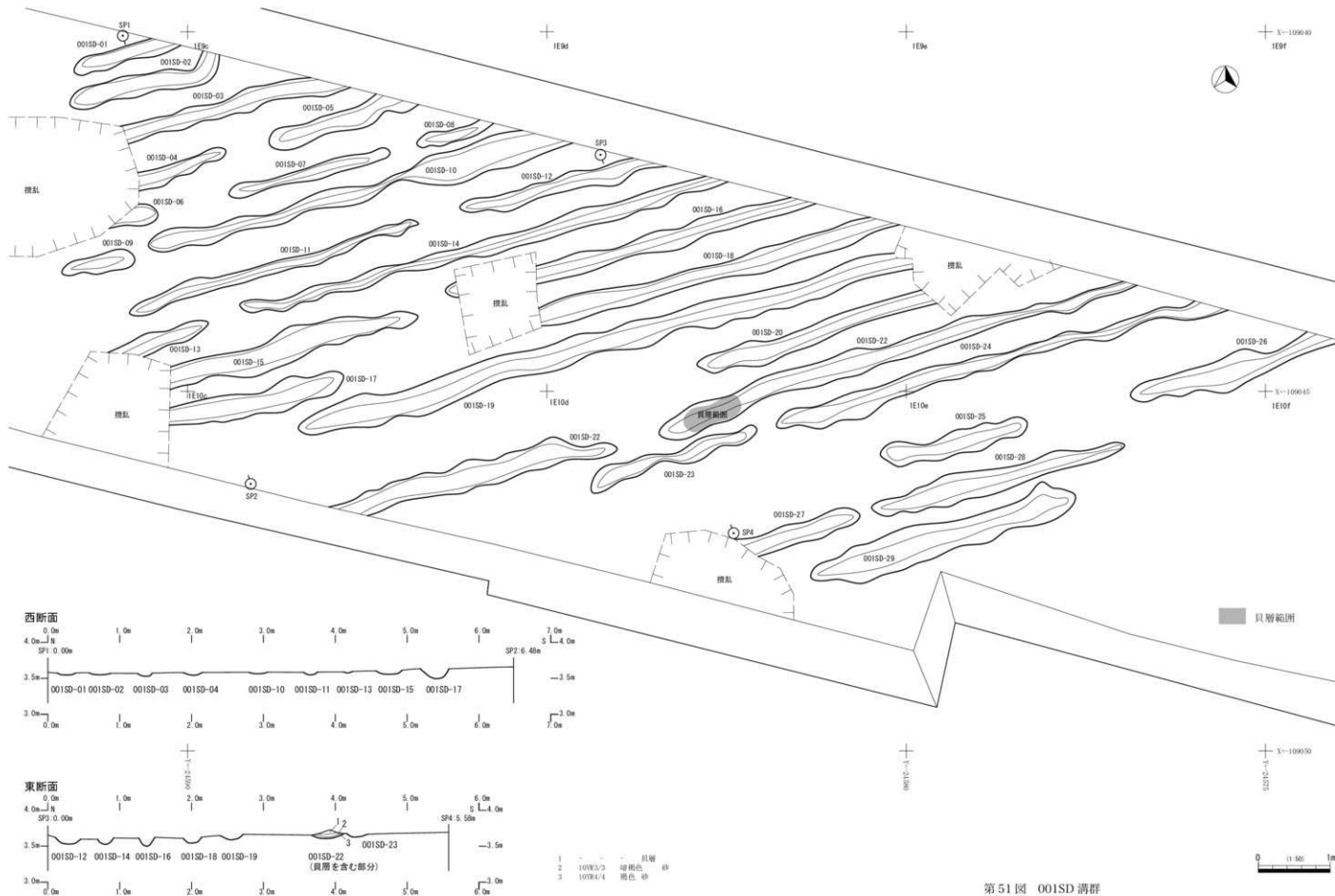
主に周溝埋土やその周辺から出土した遺物の様相などから、廻間Ⅱ式期を中心とした古墳時代前期の住居址と考えられる。

## 008SB：住居址（第54図）

調査区西部で検出した古墳時代前期の住居址で、検出したプランは3.6m×3mであった。後述する弥生時代中期の住居址009SBと一部が切り合うが、プランの西側（北辺と西辺）は上層である中世層からの干渉が強く、明確な直線プランが検出できなかった。実際に本遺構と同時期の遺物が008SB周辺のとりわけ北側から出土しており、同時期に複数の住居址が隣接して存在していた可能性は否定できない。遺構平面図におけるプランは暫定的なものと理解願いたい。

床面と思われるレベルで検出された遺物としては、年代決定の手がかりとなったS字状口縁付

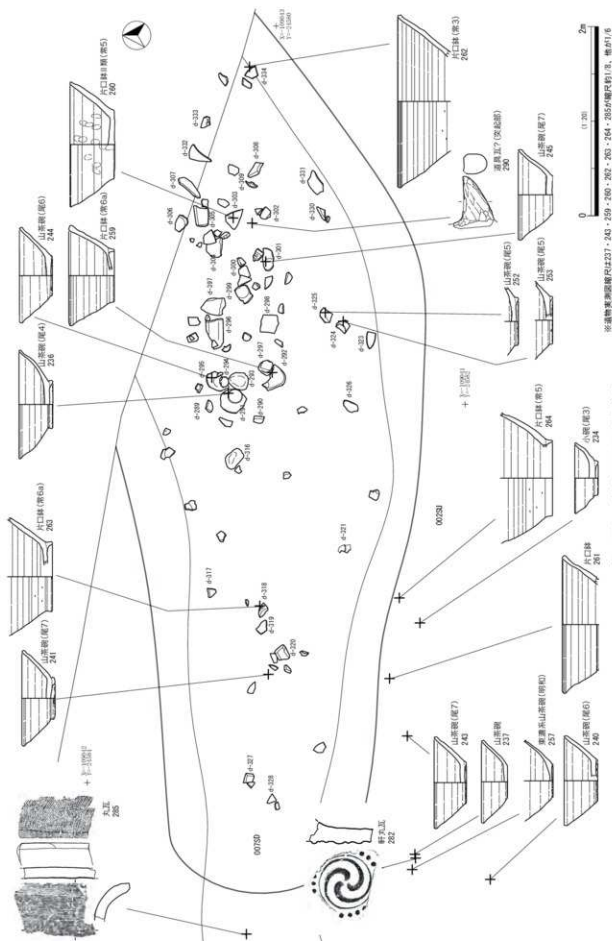
1 遺構完掘の最終段階まで本遺構を周溝墓の一種と誤解していた結果、SZ記号が付してあるが、本来は住居址を表す記号SBが付されるべきであった。ただし、遺構番号の混乱を避けるため、あえてそのままとしてある。027SZのみの例外として御理解いただきたい。



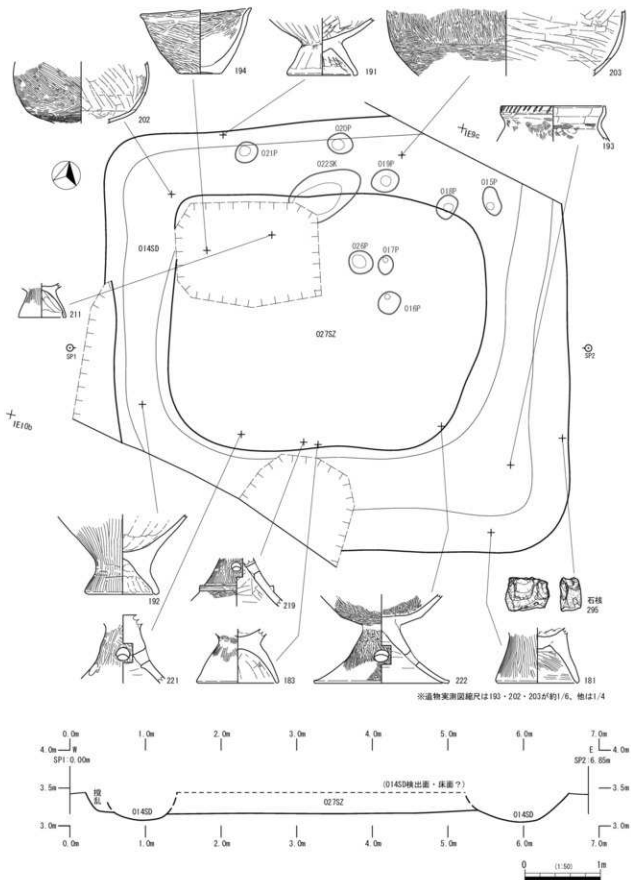
4地点 (HH-4)

第51図 001SD遺群

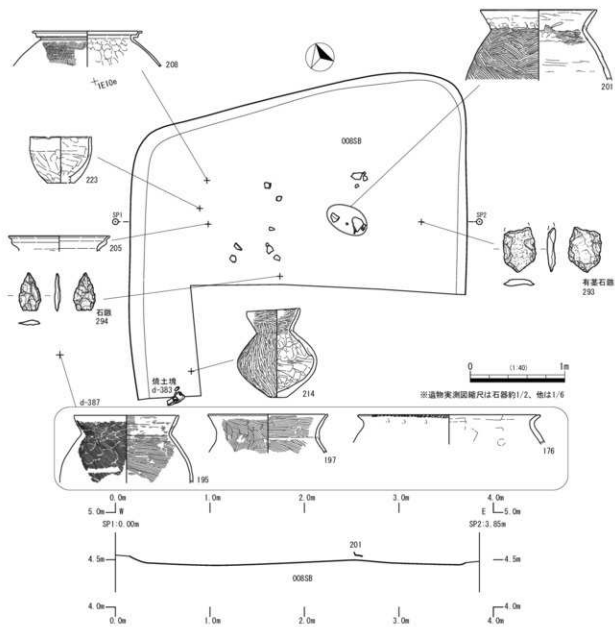




第52図 4地点002SU土器集積



第53図 014SD/027SZ 幅広床下周溝を持つ住居址

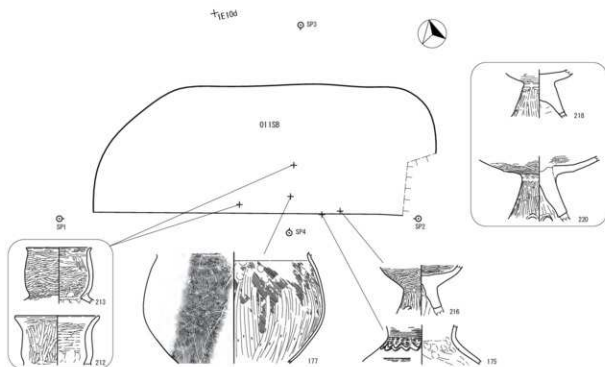


第54図 O08SB住居址

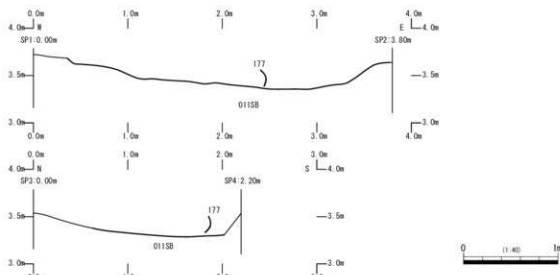
甕 (205,208) のほか、頸部に意図的に粘土の繋ぎ目を残す特徴的な甕 (201)、小型壺 (214) のほか、石鏃 (293,294) や、カマドの残欠と思われる焼土塊 d-383 が出土している。なお、焼土塊の出土位置はカマドの原位置を示すものではないようだ。

#### 011SB：住居址 (第55図)

調査区中央南部で検出した住居址だが、断面図で分かるように平坦な部分が無く、地山面で浅い窪地のような状態で検出されたことなどから、堀り方を含む住居址残欠と呼ぶべきかもしれない。残存する最大幅は南セクションに見られる3.5mである。ほぼ中央部から弥生時代中期の甕 (177) が立ったような状態で出土しており、基本的には弥生時代中期の住居址残欠である可能性が高い。周辺からの出土遺物は弥生時代後期以後のものが多く、住居廃絶後に堆積した遺物包含層からもたらされたものであろう。



※遺物実測図縮尺は175・177が約1/6、他は1/4

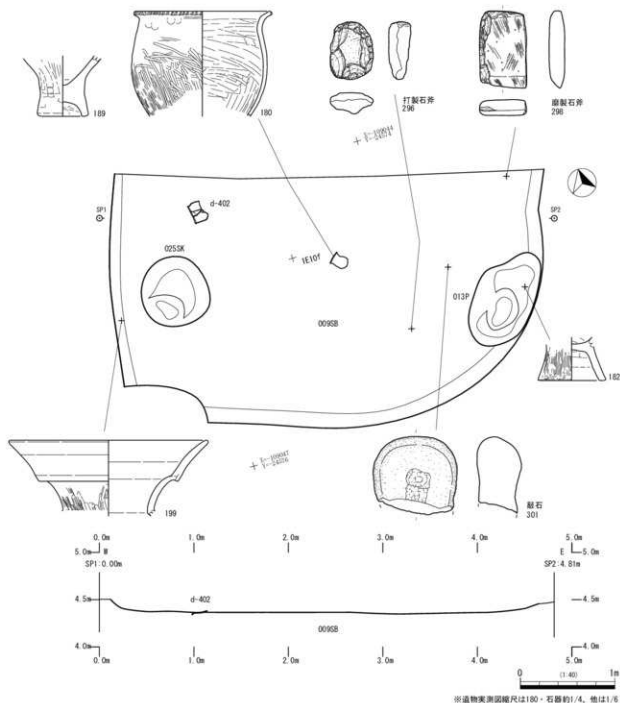


第55図 011SB住居址

#### 009SB：住居址（第56図）

調査区西部で検出した弥生時代中期の住居址で、一辺約4.5mの方形を呈する。床面の精査時に柱穴と思われる2基の遺構013P/025SKを検出した。台付甕の脚部が図示した以外にも数点存在し、床面からは凹石状の敲石（301）や磨製石斧（298）、小さな打製石斧（296）が出土した。床面に被熱の痕跡や炭化物の広がりがなどは確認出来なかった。有段口緑壺（199）は上層から入り込んだものであろう。

この他にも柱穴と思われる遺構023SK（105×65×深さ70cm）を確認したが、これと対になるものは発見できなかった。



第56図 009SB住居址

なお、調査区中央部北側で拡張区として追加掘削した部分において、焼失家屋とも思われる住居址の一部を検出している。炭化物に混ざり多くの土器片が出土しており、拡張区部分にも中期に属する住居址が存在している可能性があることを示していた。

## 3 出土遺物

弥生時代の遺物として特筆すべきものは、拡張区から出土した鹿線刻画だらう（巻頭カラー図版および付載参照）。知多半島地域では初めての発見である。この線刻画に関しては愛知県埋蔵文化財センターの石黒立人氏に実見していただき、観察結果を論考として寄稿していただいたので参照されたい。

今回の調査区では、線刻画の描かれた壺と同時期のいわゆる古井式段階の資料（受け口状口縁の壺や台付甕など）を最古に、後期から古墳時代前期にかけての資料が多く出土した。なかでも008SB床面から出土した甕(201)は興味深い資料で、胴部は深いハケ目による荒々しい調整で、頸部（口縁部下半）に付加した粘土紐の輪積み痕を意図的に残し、強調するような仕上げがなされている。内面についても、胴部の輪積み痕は概ね消されているが、やはり頸部のみ粘土紐の段差が残されている。口縁部外周にみられる横位のハケ目も、ナデによって容易に消し去ることが出来るにもかかわらず、意図的に残されているものかもしれない。このように目視可能な特徴をいくつも備えた甕は珍しく、何らかのアイデンティティーが反映された器と解釈すべきであろう。

相伴遺物としてはS字状口縁台付甕（205,208）が2個体出土しており、廻間II式期に属するものと考えられる。また、床面からは2点の石鏝（293,294）が出土しており、いずれもサヌカイトと下呂石という外来素材を用いて作られたものであった。

同じく古墳時代前期の資料としては、014SD/027SZの幅広床下周溝を持つ住居址から出土した一群の土器も注目される。台付甕や壺、高坏がそれぞれ複数出土しており、S字甕は含まれない組成である。よく研磨され明赤褐色に発色した高坏（219）は、脚部中段に突帯が巡らせてあり、祭祀用の可能性がある。小破片のため図示できなかったが小型の赤彩壺（パレススタイルか）も含まれていた。

S字状口縁台付甕に関しては、調査区全体で8点を検出したが調査区西半の住居址周辺にやや集中する傾向が見られる。

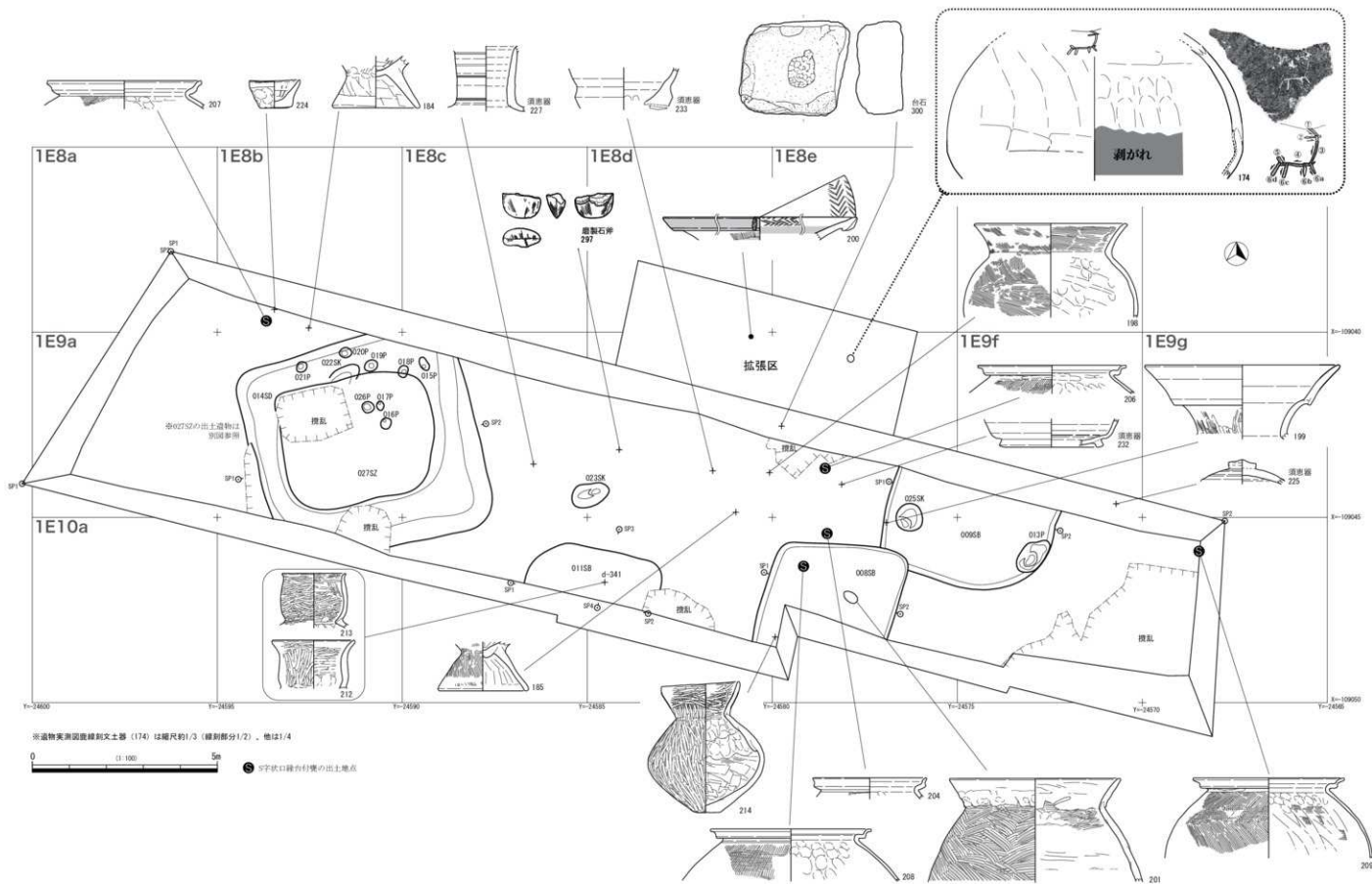
古代の遺物としては須恵器が数十点出土したが、いずれも接合性に乏しい破片ばかりで、他の調査区同様極めて希薄な様相である。器種は坏、坏蓋、長頸瓶、椀、甌などが見られ、いずれも8



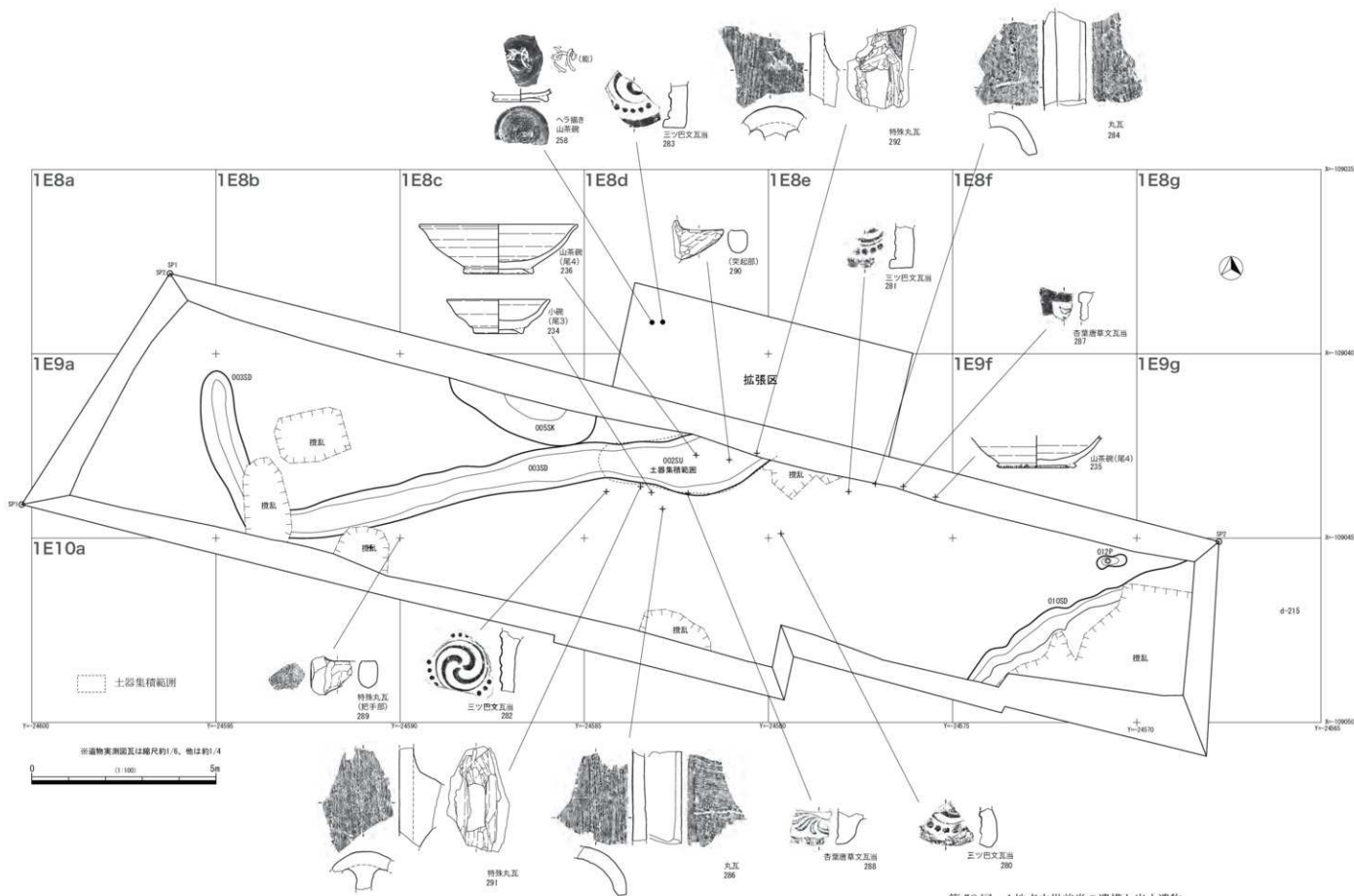
写真3 201 頸部に粘土紐の輪積み痕を残す（下は内面）



写真4 195 上例同様頸部に残された輪積み痕

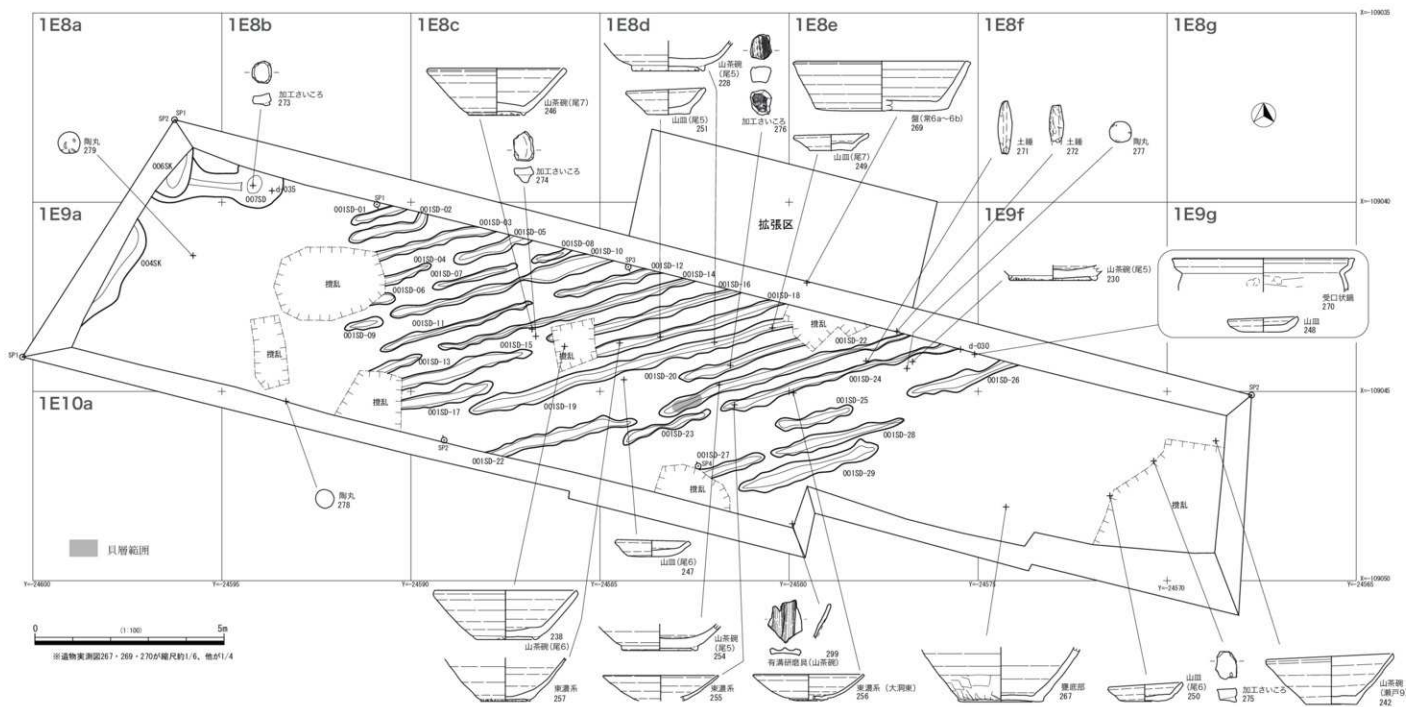


第57図 弥生時代～古代の遺構と出土遺物



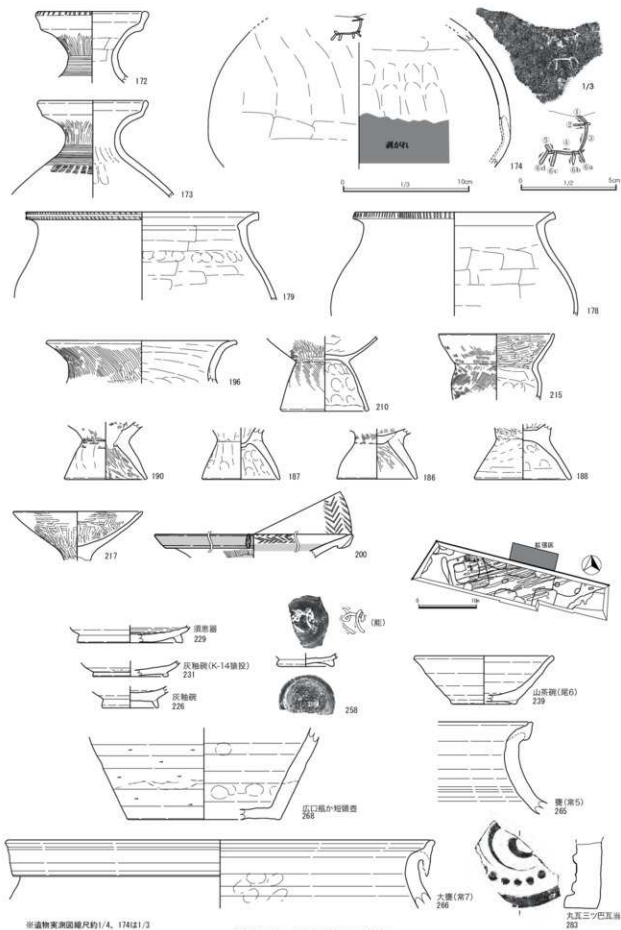
第58図 4地点中世前半の遺構と出土遺物





第59図 4地点中世後半の遺構と出土遺物

4地点 (HH-4)



第60図 拡張区出土の遺物

世紀中葉のものである。

中世資料は豊富に出土した。常滑窯産の山茶碗・山皿・片口鉢・甕や近隣の窯産である瓦類を中心に、東濃系の子茶碗(255~257)や瀬戸窯産山茶碗(242)などが出土している。時期的には、社山古窯などの加木屋谷の古窯址群で焼かれたと思われる瓦を中心とした一群の製品が見られることから、尾張第4型式(12世紀後半)から、第7型式(13世紀後半)までの約一世紀が想定される。

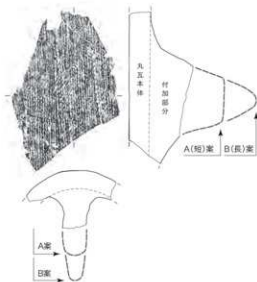
特殊な遺物としては、丸瓦に鱈状の把手または突起を付けた特殊製品が複数発見された(図版第38 291, 292ほか)。本体は加木屋谷の古窯址で焼かれたとみられる12世紀末の丸瓦で、いずれも内側に粘土を付加し、突起した部分を造り出している。291はその典型例で、厚さ2cm強の丸瓦本体内部にサメの鱈のような形状に復元できる突起が付けられたもので、鱈の付け根に近い部分で破損している。鱈の基部は左右に粘土が補充され、指先で豪快に撫でつけられて基部を固定している。丸瓦も破損しているが、原形は25cm以上の長さがあったものと推定される。鱈部分は先端の尖った形状のものを想定した場合、瓦表面からの高さは10cm前後となり、台形状の鱈を想定すれば高さは7cmほどとなる(第61図参照)。

292例も同様に、丸瓦内面中心に突起本体を置いた後、その裾部分を固定するように粘土を大量に補充し、篋や指先などで荒々しく撫でつけて仕上げている。鱈部分は基部に近いところで破損しているせいか、ぶ厚く、厚さは3.6cmほどある。

鱈の形状に関しては長短二種類が想定され、289例は途中で折れているが細長く尖った角のような形状に復元される。表面はやはり指ナデによって仕上げられているが、1面のみ柾目の板で掻き取ったような平坦面がみられる。290例も同様の遺物で、出土時には鬼瓦の一部が何らかの造形物かとも思われたが、剥離した接合面が丸瓦内面と同じ曲面をなし、一部に縄目が転写されていることから、前例と同様の部品であると判断した。

これら特殊な付加部分を持つ瓦の用途に関しては、さまざまな研究者に実現していただき用途などの意見をお伺いしたが、現在のところ不明のままである。

その他、「加工さいころ」と呼んでいるものが4地点全体で23点出土したが、うち18点は山茶



第61図 291把手復元案



写真5 289道具瓦?



写真6 「加工さいころ」

碗の高台部分を材料としており、他に古瓦製のものが3点と、甕の口縁部や胴部を四角く加工したものが2点という内訳であった。出土地点に偏りは無く、代表的なもの4点を図示した。いわゆる「つぶて」としての用途を想定しているが、検証は難しい。陶丸は3点出土した。他に、山茶碗の破片で何かを研いだ痕跡を残すもの(299)が出土した。古い時代の有溝砥石のような形状をみせるが、材料は常滑窯の山茶碗である。何が研がれていたのか用途不明である。



写真7 299 有溝研磨具

更に、拡張区から出土した山茶碗の底部内面に「能」の草書体を簡描きしたものがある。「能」の左下にもう一字別の文字の一部が書かれているが、欠損しており、どのような文字かは不明である。

近世資料としては瀬戸産と思われる陶磁器数点の他、17～18世紀の常滑産大甕や、赤物大甕の破片が多く見られた。

#### 4 4地点のまとめ

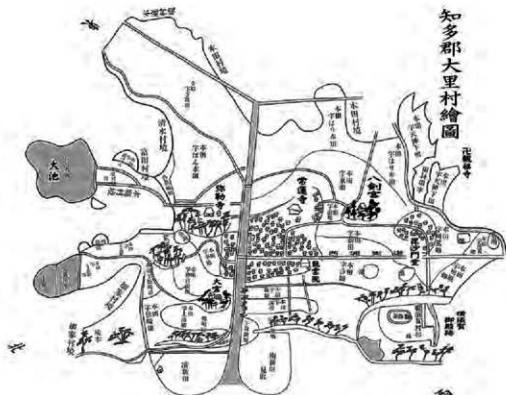
4地点の調査成果は多岐にわたる。

中世以降の成果としては、耕作地の痕跡が検出できたことであろう。現在までの調査で、第一砂堆上を中心とした大田地区では、中世初期の段階において既に堀のような区画溝で囲まれた居館跡や、土壁立ち構造を持つ仏堂などの建築物が存在していた可能性が高いことが判明している。集落としての中心は中世から近世にかけて、その中心を微妙に動かしながらも第一砂堆の中央部周辺にあり続けたと考えられる。

江戸時代後期の絵図に描かれた大里村＝大田の集落は、現在の郷中から常蓮寺にかけてのあたりに大きな中心があり、その南には周囲を巨樹に囲まれた八剱宮が鎮座し、さらに南の毘沙門堂を中心とするあたりにも小さな集落が存在していた様子がわかる(第62図)。家屋群と寺社が描かれた以外の部分は「本田・字前田」、「本田・字前畑」や、「字東畑」などという文字が書かれ、集落に付随した耕作地であったことがわかる。4地点はまさにこの絵図で「本田・字東畑」と書かれた文字の下あたりに相当するが、今回検出された溝群001SDは、ここに描かれた耕作地の一部だったのであろう。

昭和24(1949)年の航空写真を見ると、大田の集落は、郷中の中心部分と毘沙門寺側の小集落の中間部分にもまばらに家屋が点在し、八剱社の東側や毘沙門寺の西側には広大な畑地が広がっている様子をうかがうことができる。郷中を南北に直線状に貫くのが西浦街道(常滑街道)であり、集落内を何本かの往還が走る集落の構造は、江戸時代後半からほとんど変化していないようだ。この西浦街道(常滑街道)の方向はN-30°Eであり、これがそのまま近世集落の主軸になっており、その由来は大田の谷にみられる複数の砂堆列の方向、すなわち海岸線の方向に沿った結果生み出されたものだろう。

それでは中世前半の様子はどうかであったのかといえば、調査区内で確認した溝003SDと土器集積002SUの状況から推察するほかはない。溝の方向E-15°Nは後に営まれる畝の方向にも引き継



第62図 知多郡大里村繪圖（『東海市史』資料編別巻解説図に加筆）

がれていくが、土器集積とその周辺からは、平安時代末期の瓦がかなり多量に出土することから、この003SD自体が当時の耕作地などに伴う区画溝であった可能性を示すものであろう。土器集積部分の内容は廃棄土坑の様相を呈していたが、集落本体からやや離れたこの東畑地内<sup>2</sup>に、どうしてこのような瓦の散布が見られるのかということに関しては、いくつかの可能性を指摘しておきたい。

一つは、旧八劍宮または村内の社寺仏堂などに、当地の荘園の特産物として加木屋谷方面で焼かれていた瓦の余剰分を使用していた痕跡である、と解釈するもので、もう一つは、京都方面に出荷するための瓦を、当地で選別して荷造りしたことに由来するものという可能性である。この両説は密接に関係しており、実際に社山古窯や論田古窯などで焼成された瓦が鳥羽離宮安楽寿院に供給されていたことは分かっているが、加木屋谷で窯を営んでいた人々の居住域は周辺では見つかっていない。このことを鑑みると、彼らは大田または横須賀の集落に居を構えていた可能性があり、日常的な往来があったと思われる。もし窯の工人たちが加木屋谷から大府にかけての内陸部に居住する人々であったとしても、窯場から大田川（旧流路）沿いに山出しされた瓦類は一旦大田の集落又は高横須賀集落あたりに集められ、選別後荷造りされたことだろうから、選別に漏れた製品が大田の砂堆上に残されていても不自然ではない。

他方、これら加木屋谷産の瓦を葺いた社寺仏堂の存在に関しては、平成20年度調査区の3・4地点において、一辺20m四方の溝で囲まれた区画内とその周辺から、被熱した十数個の礎石や土壁に混ざりコンテナ6箱にも及ぶ瓦類が発見されている。これらの瓦類は今回と同じく、加木屋

<sup>2</sup> 東畑地内のみに限らず、畑間地内でも出土が見られることから、少なくとも第一砂堆南半の集落部分に広く散漫に分布すると言った方が正確だろう。現在までのところ瓦溜めのような遺構は見発されていない。

谷の古窯址群で焼かれた製品であり、礎石を使い土壁立ちで瓦葺き構造の、小規模な仏堂などが存在した可能性を強く示唆する遺構や遺物である。

また、今回4地点の調査によって得られた瓦類は、コンテナ約2箱分であるが、隣接する3地点にかつて存在した八剱社に伴う遺物であった可能性も検討されるべきであろう。すなわち、加木屋谷の古窯址群のうち論田古窯、及び社山古窯および、今回の4地点調査区から大田川旧流路をはさんだ指呼の距離にある古刹観福寺と、熱田神宮境内から出土した杏葉唐草文瓦の在り方に象徴されるように、ここには中世前期における荘園を介した産物の流通や、熱田大宮司家などの有力寺社勢力の中央との関係が如実に反映されており、政治的な視点と同時に、宗教的な観点からも検討されるべき遺跡であることを実感した。

古代に関しては他の地点同様、ほとんど希薄な状況であり、実態が不明と言わざるを得ない。数少ない須臾器とともに、当4地点の遺物包含層からは猿投窯の製品と推定される瓦塔が1片出土しており、先述した3地点出土の瓦塔(132)とともに注目される<sup>3</sup>。過去の瓦塔出土地点に関しては、平成21年度調査区2地点が本地点の南側に存在し、数十mの距離である。同調査区からは9世紀前半の灰釉浄瓶も出土しており、宗教的施設の存在を示唆している。また、平成19年度以前の調査でも、報告書においてB区とC区として紹介された地区からも瓦塔の一部が出土しているが、それらは本調査区の東北50m～100mの距離に位置しており、この4地点周辺は比較的瓦塔の散布密度が濃い地区であると言える。ともあれ第三砂堆北端に存在する松崎遺跡の吸引力が如何に強大であったにせよ、古代には広大な砂堆上が無人の荒野と化したわけではなく、幾許かの痕跡は残されていると考えるのが自然であるが、遺跡の消長を考察するためには大田の谷ばかりではなく養父・横須賀の谷も含めた巨視的な観点からの分析が必要となろう。

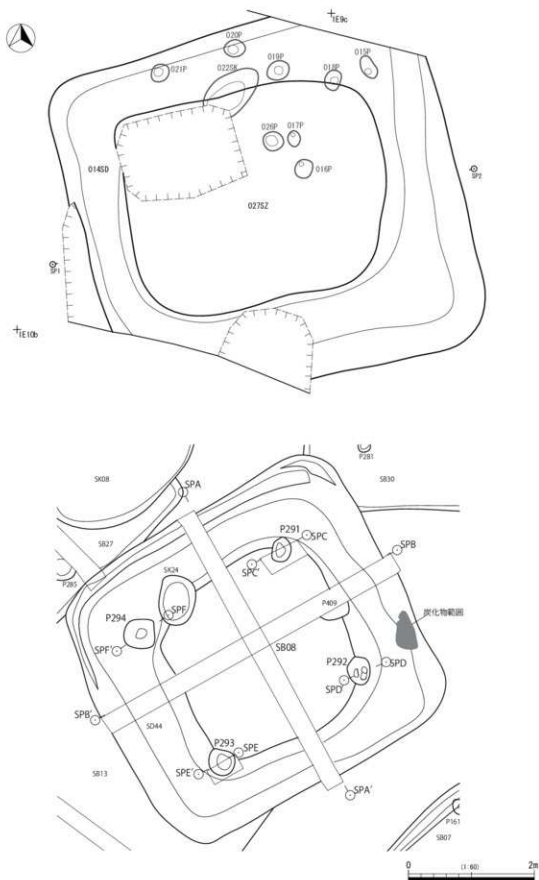
古墳時代前期以前に関しては、独特な構造を持つ住居址(幅広床下周溝)014SD/027SZや一般的な竪穴住居008SBを検出した。同時期の遺構は今回の調査区より南側にも広がりを見せることが判明しており、大田川旧河道右岸に沿って集落が展開していたことを推測させる。ほぼ同時期に、一般的な竪穴住居と幅広床下周溝を持つ構造の住居址が近距離で存在する様相は、西三河のいくつかの遺跡<sup>4</sup>やその他の遺跡でも確認されているが、知多半島部では初めてである。この構造の違



写真8 出土瓦塔(上:4地点、下:3地点132)

3 写真上。側面に半截竹管状工具による半円形の刺突痕＝丸瓦表現が連続して残ることから、屋蓋部の一部と思われる。

4 安城市竪下遺跡などはその典型である。『竪下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第168集(2012)参照



『畑下遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第168集(2012)より  
 第63図 今回検出した014SD/027SZ住居址(上)と畑下遺跡SB08住居址(下)

いは、ムラにおける出自の違いを現したものであるという解釈が有力であり、今後の調査によっても事例の増加が予想されるため、集落構造の解明に役立つであろう。

弥生期に関しては、中期凹線文系土器期の住居址を検出することができたが、拡張区の出土遺物から同時期のものと思われる鹿の線刻画を発見できたことは最大の収穫であろう。過去の調査では中期後半の遺構は、4地点から50mほど東の地点で住居址が多く発見されており、同期の中心地であると考えられていた。しかし線刻画資料や住居址の発見で、同時期の遺構や遺物が更に西側にも広がっていたことが明らかになった。平成23年度調査の4地点は本調査区の60mほど東に位置するが、そこでは4基もの土器棺が一行に並んで出土している。それらの土器棺も中期後半の資料(壺)であり、遺構の粗密こそあれ、第一砂堆南部には中期の集落が展開していたことを物語るものである。

### 【補遺】

4地点の調査終了後調査区は直ちに埋め戻されたが、続く道路工事に伴う各種埋設管工事に伴い、ウェルポイントが設置された。調査区の輪郭に沿って長さ4mのライザーパイプが打ち込まれていく過程で、水圧により地上に噴出した堆積物を採取することができた。

地上の標高は約4.5mであり、遺跡の地山標高は3.5m前後であるので、噴出物の多くは遺跡の基盤層である沖積層に包含されていたものと推測される。

肉眼による観察では、木材化石である亜炭(褐炭とも)がよく目立ち、次に数cmから5cmほどのシルト玉(円礫状になった固結シルト)、それと数cm以下の垂角礫から粗粒砂が主な組成であった。これらのうち亜炭は、少なくとも4地点の遺物包含層中には全く含まれておらず、シルト玉もごく稀に見つけることがある程度であった。

これら亜炭や固結シルトは、大田の谷を取り巻く丘陵地を構成する常滑層群(新第三紀層)に普通に含まれているものであり、侵蝕や風化によって遺跡の基盤層にもたらされたものであろう。

今回採取した亜炭の年代測定を行ったところ、4万数千年BPという数値が得られた。報告者も記している通り、亜炭の年代としては若すぎることから、新しい炭素に汚染された結果と見るのが妥当であろう(第3章参照)。

知多半島における亜炭層の一般的な在り方から推測すれば、やはり常滑層群からもたらされたという解釈すべきであろうから、亜炭そのものは数百万年前の年代を想定しうる。しかし、何らかの原因によってこれら亜炭が地層群から切り離され、大気中の炭素によって汚染を受けたのが4万数千年前とするならば、知多半島の生成過程の一端を物語るものとして評価すべきかもしれない。

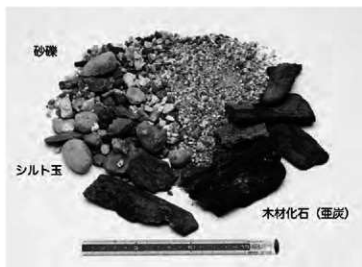


写真9 噴出物の様子



## 第5節 5地点 (HH14-4) の調査

## 1 5地点の概要と遺跡の構造

5地点は4地点の東隣に位置し、両者の距離は13mである。その中間部分の北側は、平成20年度調査区(2地点)になっており、東側は平成25年度調査区(3地点)と接する。

4地点と同時の9月24日にフェンスを設置し、翌25日から表土掘削を開始。9月29日より調査を開始し、10月10日に空撮を実施。10月14日から埋め戻しを開始し、同日中に全ての作業を終了した。

調査面積は100㎡である。

基本層序は以下のとおりである。

I層：表土層。現代の客土や道路、家屋解体時の攪乱層も含む。

II層：近世の遺物包含層で、中世以降の遺物も多く含まれている。南セクションにおける1・2・9・18層が相当する。層厚は薄く、中世層との明確な分層が難しい。

III層：中世の遺物包含層で、貝層も含む。しばしば弥生土器が混ざり、大量の貝殻を用い版築のように搦き固められた道路敷きと考えられる部分も含まれる。

IV層：弥生時代の遺物包含層で、遺構埋土も含まれる。調査区全面に存在するわけではなく、地山の窪みに残存した様相を呈する部分や純貝層として存在する部分もあった。

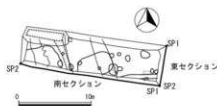
地表面の標高は4.5m前後で、地山面の標高は3.6m前後であるが、006SK底面では地山が粗砂層となり3mとなる。

この5地点の調査区内には、南北に縦断する瀬古道(生活道路)が存在していたが、これは平成20年度調査区の1地点と2地点を分断していた道に繋がり、南側は木田の観福寺方面に通じることから、地元の古老には「観音道」と呼ばれていた。舗装部分を撤去しながら表土掘削を行ったところ、大量の貝の出土が見られたことから分布範囲の検出を行った。その結果、純貝層と大量の中世遺物を含む貝層は、ほぼ瀬古道と重なり、帯状に広がっていることが判明した(001SM)。

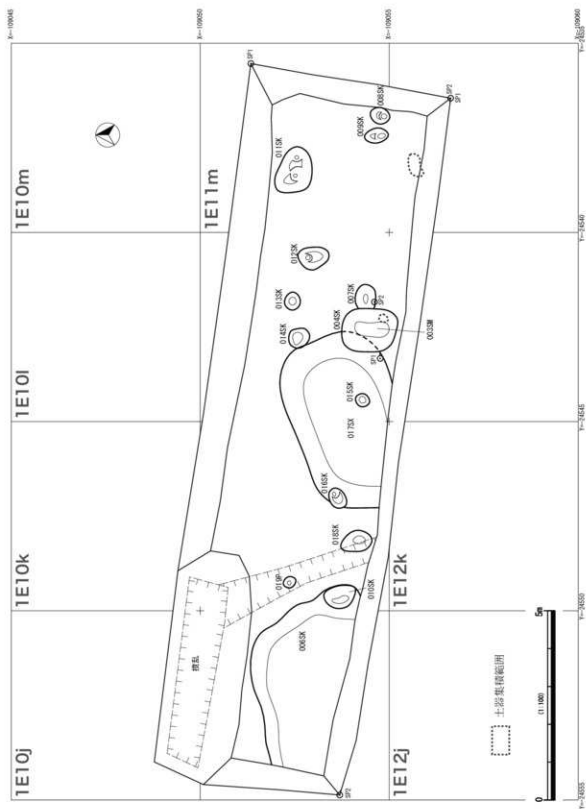
同時に調査区西端でも混泥土層が帯状に検出されたため、002SMとした。一方、調査区東部では、溝状遺構005SDが検出されたが、これはかつて平成23年度調査区4地点で011SDとして検出されたものの延長部分で、当時は時期不明であったため弥生時代の遺構面に表現しておいた。しかし平成25年度調査区3地点において、中世の遺構であることが確認されたため、先述した貝層などと同じ遺構平面図で取り扱うこととした。

これら中世の貝層や遺構直下からは弥生時代の遺構面を確認した。この様相は平成23年度調査区4地点と同様であり、いずれも弥生時代中期の遺構であった。更に最下層では地山を60cm近く掘り込んだ土坑006SKを確認した。土坑底面の標高3mあたりが、当部分での湧水レベルであった。

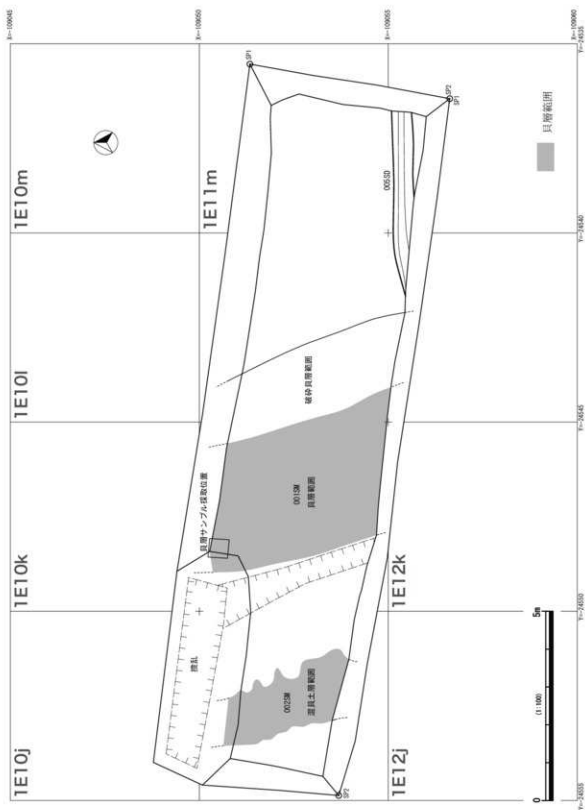
また、調査区東端部分では、遺構の壁面で液状化による連続した皿状構造の縞模様が観察された



第64図 5地点セクション位置 (1/500)



第65図 5地点遺構平面図(弥生)



第66図 5地点遺構平面図(中世)





ため、周辺を深掘りして確認を行った。その結果、皿状構造の上限は標高3.2mであり、やはり標高3m前後で湧水がみられた。隣接地における過去の調査では、標高3.5mまでの皿状構造の上限を確認している。(HH11-4地点)

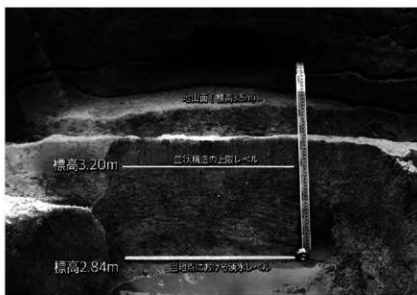


写真10 基盤層で確認された皿状構造の様子

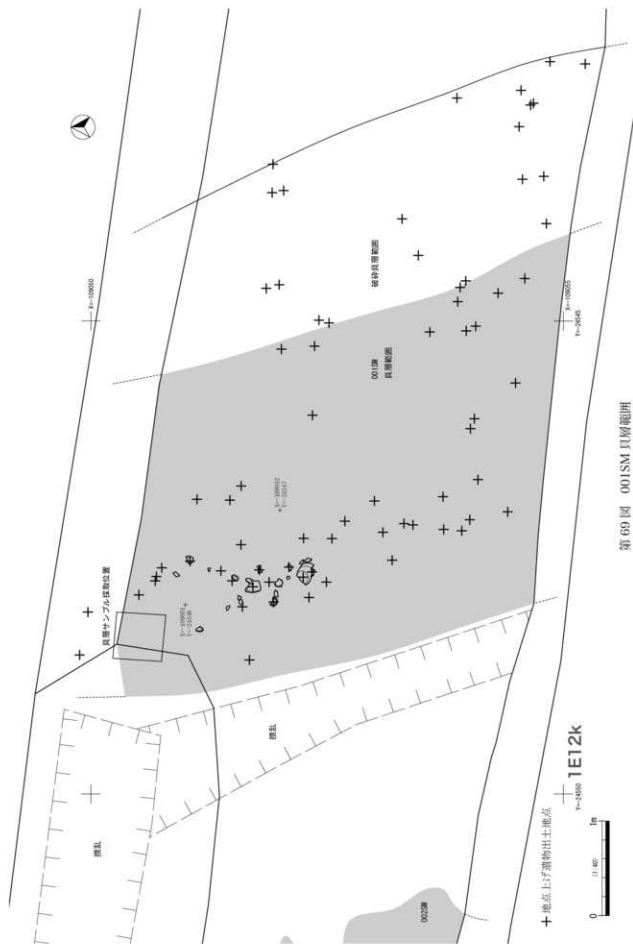
## 2 主な遺構

### 001SM：貝層範囲（第69図）

調査区のほぼ中央西寄りを南北に縦断する貝層である。主な貝種はシオフキとハマグリで、小巻貝や獣骨もみられる。断面構造は南セクション図で示した通り、純貝層や混土貝層、混貝土層、破砕貝層、炭化物層が10～20cmの層厚で版築されたように互層を成している部分と、10層として把握した混土貝層（ほとんど貝殻が破砕されており、中世遺物を多く含む）部分からなる。この10層部分が貝層本体であり、道路敷の東側法面に形成されたものと推定され、圧縮された部分が道路本体であろう。すなわち、断面図からもわかるように、貝層の分布範囲は、貝殻や炭化物、そして不要になった焼き物などを積み重ねた中世の舗装道路であり、圧縮されて固く締まった部分の幅は約2.5mである。この道幅はその後長い時間をかけて徐々に拡幅されていったようで、今回の区画整理が行われる直前まで残っていた幅約4mの瀬古道（生活道路）に引き継がれていき、近年表面がアスファルト舗装されて、集落内の主要な道路として現代まで利用され続けてきたのである。

この道路敷部分として把握した範囲から出土した最古の遺物は、尾張4型式の山茶碗・山皿であるが、大半は尾張5型式から7型式の陶器類であり、道路としての原形は少なくとも13世紀末までには完成していたことが推測される。なお、貝層の堆積や遺物の分布が濃厚な部分は、平面図でアミ掛けして示した範囲だが、破砕された貝層の広がりには東側にも展開し、全体の最大幅は5.5mほどになる。この破砕部分に関しては、断面水平に転圧された道路敷本体に付随する掘部分の様相を現したものであろう。

なお、貝種の同定および組成比率の分析結果と、当貝層に含まれていたハマグリ成長線分析結果はいずれも第3章を参照されたい。



第69図 001SM 貝塚範囲



写真11 001SM 貝層の拡がり



写真12 片口鉢 (346) と壺口縁 (350) の出土状況



写真13 10層 (混土貝層) と山茶碗の出土状況

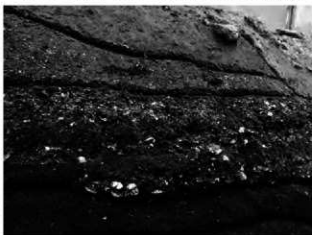


写真14 001SM 貝層圧縮部分の断面

#### 002SM：混貝土層の広がり (第66図)

調査区西端を縦断するように検出したもので、幅1.2～1.5m、001SMと数m離れつつも並行して存在することから、道路敷西側裾部の様相の一端として理解しておきたい。遺物としては、13世紀後半の陶器類が散漫に出土した。

#### 005SD：溝 (第66図)

平成23年度調査区4地点、平成25年度調査区3地点から続く中世の溝で、検出された部分だけでも全長27mほどある。方向はE-2°-Nとほぼ東西軸に沿うが、幅は50cm以下で深さは30cm弱あり、用途不明である。埋土はほとんど遺物を含まない。

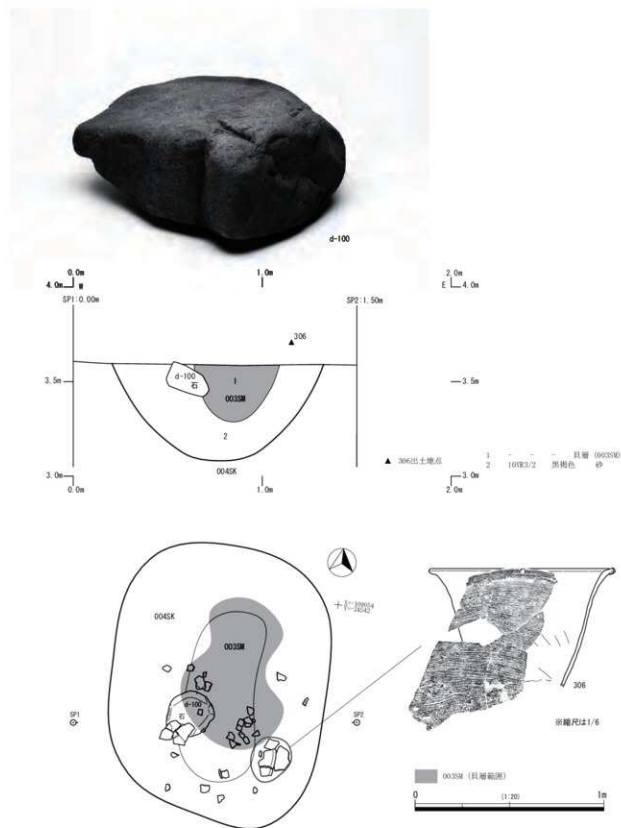
#### 004SK：墓壙と考えられる土坑 (第65・70図)

調査区中央部で検出した土坑で、1.1m×1.4m、深さ50cmの隅丸長方形を呈する。当地の弥生期独特の黒褐色を呈する埋土のほかに、ほぼ純貝層部分<sup>1</sup>と、大石d-100が埋土と貝層に埋もれるような状態で発見された。また遺構の検出面では弥生時代中期瓜郷式の甕(306)の大形破片が

1 003SM貝層は圧縮の少ない純貝層で、ヤマトシジミが全体の約70%を占める特殊な組成を示す。貝種の詳細は第3章参照。



発見されており、一般的な廃棄とはやや雰囲気を変にすることから、墓塚であった可能性もある。



第70図 004SK 墓塚と考えられる土坑

## 017SX：性格不明遺構（第65図）

調査区のほぼ中央に4.5m×3m、深さ15cmほどの窪地として検出した。地山面を浅く、底面はほぼ水平に掘り込んでいることから、住居址である可能性も検討しつつ掘削したが、柱穴らしきものも見つからず、隅丸長方形プランであることもあり、性格不明の遺構として扱った。埋土中からは中期の遺物が散漫に出土する程度で、楔形石器？(354)が1点出土した。

なお前述した004SKとの関係は、017SXが埋没した後に、004SKが掘削されたものと思われる。

## 006SK：大規模土坑（第65図）

調査区西端の地山面で検出した遺構で、断面図に現れた部分だけでも幅5mほどある。北辺と東辺での上端からの深さは50cmにも及び、底面はほとんど水平で、粗砂層が露出し、湧水がみられた。埋土の大半は中世層によって抉り取られたように消失していたが、残存している埋土の状況から勘案すると、弥生時代中期の遺構である可能性が高い。形状から竪穴住居の残欠である可能性も念頭に置いて掘削を進めたが、柱穴と思われる遺構は法面で010SK 1基を確認出来たのみであった。

これらの他に柱穴と思われる遺構011SKや、小形の土坑012～016SKを検出したが、いずれも建物としてのプランをなすものではなく、それらの並びに規則性も見出せなかった。

## 3 出土遺物

5地点出土の遺物として特筆すべきは、豊富な中世陶器であろう。001SM貝層部分を中心として、大量の山茶碗や山皿、片口鉢が出土した。年代的には尾張4型式のものを最古に5～6型式を中心に7型式までの在地産のものに加えて、猿投窯、瀬戸窯産の山茶碗や伊勢鍋などがみられるが、13世紀後半の資料が主体になっている。とりわけ001SM貝層上面には大量の遺物がみられ、貝殻や炭化物・灰などとともに道路の舗装材料として廃棄を兼ねて捨てられたものと推定される。器種別では圧倒的に山茶碗が多いが、他の地点に比して山皿や片口鉢の出土が多いのが特徴である。伊勢鍋も含めたこれらの焼物は日常雑器であり、生活と密着した道路敷の性格をよく現している。

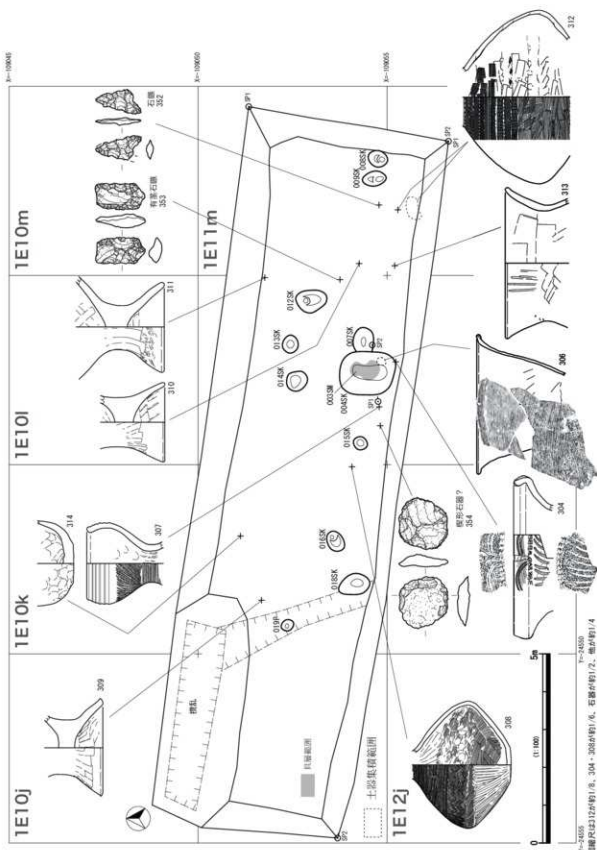
古代の遺物は、ここでは全くと言って良いほど出土していない。

弥生時代の遺物は、中期のものがほとんどであり、その多くが凹線文系土器期のものである。大形壺(312)については、復元の結果口縁部と底部を欠く胴部の約二分の一が地面に据えられたような状況で出土した。地下方向にほとんど掘り込みの痕跡が無かったことから、土器棺の身としての可能性も指摘しておきたい。

墓塚の可能性もある004SK上面から出土した甕(306)は器面全体をハケ目で仕上げた瓜郷式で、004SKの上面に伏せられたような状態で出土した。土坑内に落ち込むような状況で出土した大石d-100の大きさは28cm×22cm、厚さ11cm、重さ12.5kgで、平坦面の両面とも石皿のような使用痕が見られる。また石の縁辺部に変色部分があり、被熱の痕跡である可能性もある。

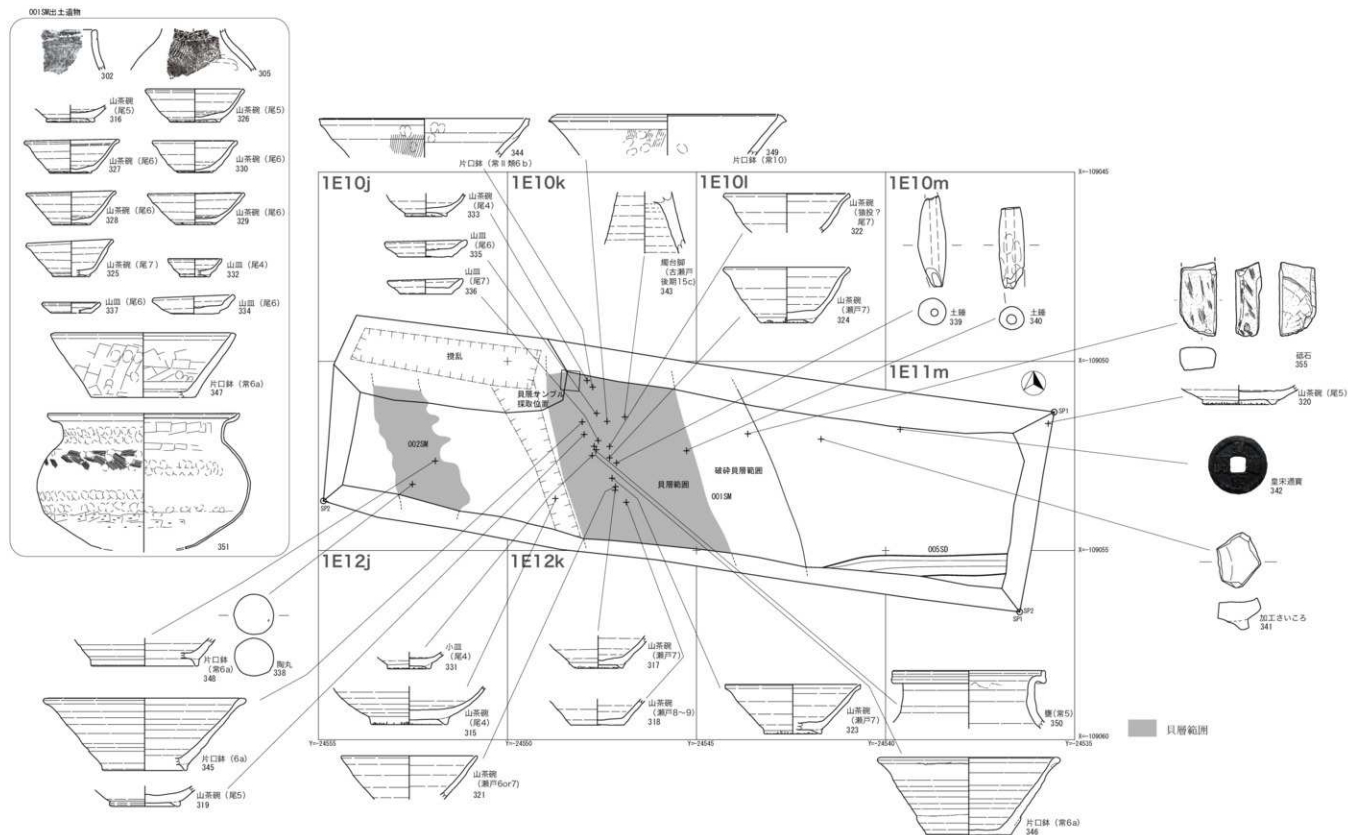
この他に高蔵式の細頸壺(307,308)や、受口状口縁の壺(304)、台付甕脚部(309～311)や、後期の可能性が高い小型壺(314)も出土している。

縄文土器としては厳密に型式を特定し得ないが、晩期の資料が2点出土した。302は壺型土器の口縁部で、わずかに横位の条痕文がみられる。五貫森式～馬見塚式の可能性がある。303は器面がケズリとナデで仕上げられた浅鉢で、やはり晩期中葉の資料である可能性がある。



第71図 5地点弥生時代の遺構と出土遺物

※遺構実測図幅尺は1/25の約1/8、304・306が約1/6、石器が約1/2、他が約1/4



※遺物実測図縮尺は338・339・340・341の1/2、305・344・345・346・347・348・349・350・351の1/4、他が約1/4 (342は任意)

第72図 5地点中世の遺構と出土遺物

## 4 5地点のまとめ

5地点の調査成果としてはまず、中世に遡る道路敷遺構の検出を挙げることができよう。当地方の古い集落を取り巻く歴史的な道路環境としては、大きな集落間を繋ぐ「街道」の存在がある。大田集落の場合、知多半島西岸の集落を繋ぐ西浦街道（常滑街道）が郷中を南北に貫通し、北は荒尾・名和方面、南は高横須賀から知多市八幡方面に通じていた。主要街道は「往還」とも呼ばれており、後に基幹的な主要道路に発展していったものが多い。集落内の主要な通りも「往還」と表現されることもあったが、多くは「瀬古道」や「アカ道」と呼ばれていた。これら瀬古道から各戸に通じる部分は「路地」である。

今回検出された遺構は瀬古道規模のものであり、構造や遺物の状況から見て少なくとも13世紀末までにはその原形が出来上がっていた可能性が高い。このように中世に形成された区画や道路が、形を変えながら現在に至るまで残存し続ける傾向は、大田地区の過去の調査で何カ所も確認されている。今回の瀬古道に関しては古くは幅2～3m規模で、地元の住民には「観音道」と呼ばれて親しまれていたものである。先述した通り、「観音道」とは大田集落南側の丘陵上にある木田の観福寺に通じる道という意味であり、中世には大田の砂堆と、木田の丘陵の間を流れていた大田川旧河道の渡河地点を示すという意味でも、重要な瀬古道であった。そして、最終的に昭和の時代には、車のすれ違いにも不自由な幅約4mの舗装道路として使われていた道が、700年もの歴史を持った道であったことがあらためて確認された意義は大きい。

弥生時代の成果としては、中期の遺構の広がりを確認出来たことがある。東に隣接する平成23年度調査区4地点では、直線状に並ぶ4基の土器棺（中期後葉）のほか、中期前葉に掘削された可能性の高い住居址001SBも発見されている。今回出土した大形壺（312）（中期後葉）は口縁部と底部を欠いており、胴部の二分の一弱が残存していたが、土器棺例の例と出土状況が似ており、先例と同様の土器棺であった可能性を指摘しておきたい。両者の距離は約20mである。また、この大形壺の4m西で検出された004SKは、その状況からみて墓壇であった可能性が高い。埋土として純貝層を用いる例は、縄文貝塚などではしばしばみられるが、弥生期の遺構ではあまり類例が無い。また同時に墓標とも思われる大石d-100や甕（306）を伴うことも特徴的である。全量採取した貝層003SMの分析結果によれば、ヤマトシジミが7割を占める特異な組成が指摘されている。過去の調査でも、ほぼ同時期の純貝層が分析されている（平成24年度調査報告）が、そちらの貝層はマガキとハマグリが主な貝種であり、著しい違いがある。

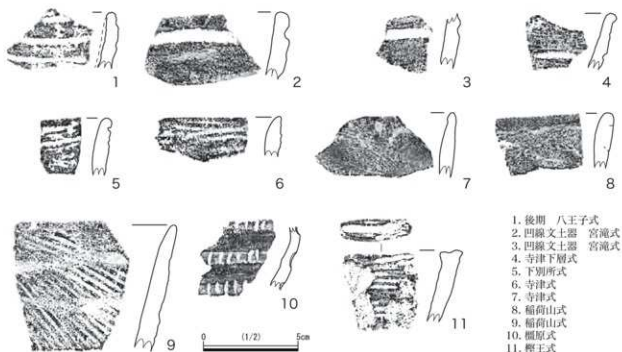
このような状況から、当地区では中期前葉には土坑墓が先行して存在し、続く中期後葉には土器棺を用いた埋葬法に変容していった様子を看取できるのかもしれない。

縄文期の資料に関しては、5地点の南側に隣接する過去の調査区（平成21年度2地点）から多くの晚期資料が発見されており、以前二度にわたって紹介した。（2013年度および2014年度発行の報告書を参照）量的には晚期前半の緑帯土器が優越するが、希薄な後半を経て弥生時代前期とされる水神平式期には再び資料の増加をみる。

今回の調査区は上記の晚期資料が多く発見された地区からは50mほど北に離れていたが、数点とはいえ晚期資料を検出することができた。同時に、今回の報告書を取りまとめるにあたり、平成23年度調査区4地点の出土資料を見直す機会があり、遺物包含層出土資料の中から未抽出の縄文

土器を発見することができたので、関連資料としてこちらで紹介しておく（第73図）。これらの資料は、過去に報告書付載として紹介した晚期資料を補完するものである。

以下に紹介する11点は、全て平成23年度調査区4地点の遺物包含層からの出土である。



第73図 平成23年度調査区4地点出土縄文土器拓影図

1はやや湾曲した口縁部に3本の平行沈線が引かれたもので、縄文時代後期八王子式と思われる。2は口縁部に沿って太い弧状の沈線が見られるもので、土器片下端にも、もう一条が存在する。3とともに後期の凹線土器（宮滝式）に類するものであろう。4は巻貝条痕の地紋の上に沈線が施されたもので、寺津下層式と思われる。5は研磨された黒色の器面に半截竹管で平行する弧線が描かれるもので、寺津下層から晩期初頭の下別所式に属するものと考えられる。6はやや肥厚させた口縁部に半截竹管状工具で上下対向する弧線を描くもので、寺津式と考えられる。7は尖り気味に仕上げられた口端部に指頭痕を残し、器面をハケ目で調整するもので、寺津式の無文土器であろう。8は深鉢の口縁部で、器面に粘土紐の輪積み痕を意図的に残した土器であり、稲荷山式と考えられる。9も同じく稲荷山式で、粘土紐輪積み痕部分を調整せず、塗ませたままでその上から二枚貝を用い斜状の条痕を施している。10は赤彩された器面に籠状工具を強く押し当て連続刺突を施すもので、三条を確認することができる。関西の樫原式文様を持つ土器と考えられる。11は平坦に作られた口端中央を沈線で凹ませる特徴を持つ。器面は二枚貝条痕で調整されており、樫王式土器と考えられる。

このように11片の資料は、縄文時代後期末から晩期末・弥生時代初頭まで幅広い時期差を有するものである。

## 第6節 6地点 (HM14-6) の調査

## 1 6地点の概要と遺跡の構造

6地点は第一砂堆の南西端に位置し、今まで遺跡としての情報がほとんど無かった場所である。7月17日にフェンスを設置し、翌18日から表土掘削を開始。7月24日から調査を開始し、8月5日の空撮で調査を終了し、8月8日に埋め戻しを完了した。

調査面積は164㎡である。

基本層序は以下のとおりである。

I層:表土層。現代の耕作土と、井戸の攪乱が含まれる。

本調査区の中央を横断する溝状の攪乱は、調査直前まで建っていた建築物の基礎撤去に伴う攪乱である。

II層:近世の遺物を散漫に含む褐色の砂層で、セクション図における1～2層がこれに相当する。

III層:中世の遺物を散漫に含む層で、セクション図における3層以下の層で、貝層も含まれる。

IV層:弥生時代の遺物包含層で、セクション図部分には表現されていないが、地山面の窪みに残存したような状況で、主に調査区の西端部から数カ所検出された。

調査前の標高は地表面で3.5～3.7mと、第一砂堆の中では低い部分に属す。地山の標高も平均2.7mと低く、調査区西端部では更に標高2m前後まで傾斜していく様相が検出された。このことは第一砂堆縁辺部の地形が反映されたものと思われ、実際に調査区から西方に数十mの地点の標高は地表面で2m以下となり、第一砂堆と第二砂堆の間の低湿地の様相が看取できる。

検出した遺構数は多くないが、調査区中央を横断する攪乱の影響で失われてしまったのではなく、基本的に遺構の希薄な地点であったと考えられる。

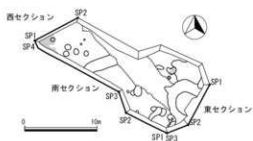
検出した遺構の多くは貝層も含めて中世後半から近世のものと思われるが、調査区西部の地山上で発見された弥生土器や石鎌の存在が注目される。

なお、地山砂層に掘り込まれた004SDの壁面で液状化にともなう連続した皿状構造が見られた。至近距離で二種類の竈模様認められ、両者とも上限標高は2.5mであった(写真16・17参照)。

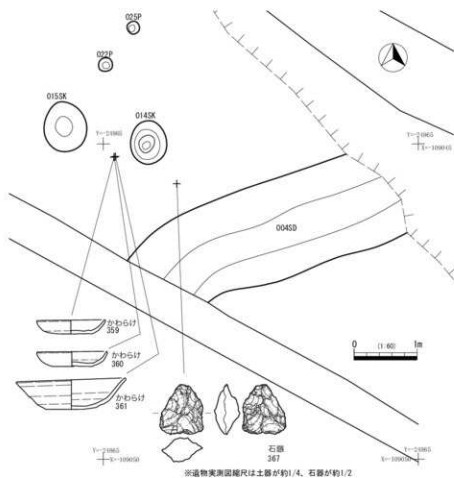
## 2 主な遺構

## 004SD:溝(第75・76図)

調査区西部を横断するように延びる溝で、幅は約1.6m、深さは50cm前後で、南側がやや湾曲する。セクションにおける堆積状況や検出状況を見る限り、近世の所産である可能性が高いが、埋土に遺物を含まないことから確定できない。溝下半は地山層まで掘削されており、規模から見れば一種の区画溝と考えるべきであろう。溝が延びる方向は、今回の調査着手直前まで残っていた旧瀬古道(生活道路)にはほぼ並行するものである。



第74図 6地点セクション位置(1/500)



第75図 004SD 溝

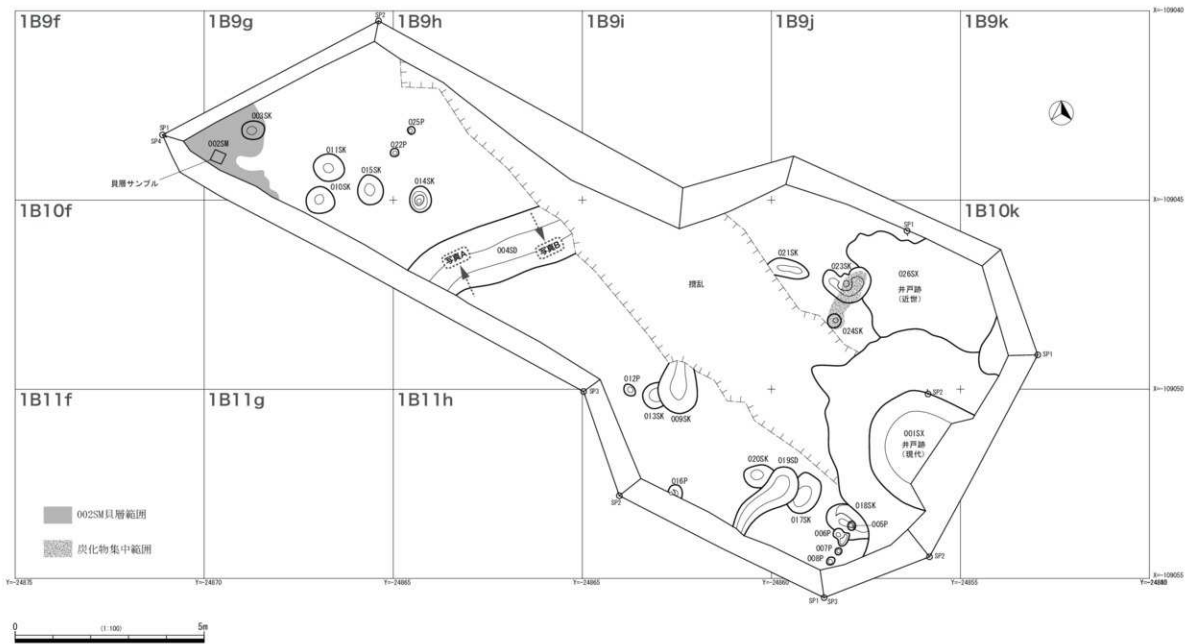
なお、遺構完掘に際し壁面に露出した地山層には、液状化による皿状構造が見られた。その上限は標高2.6mであった。

002SM：貝層（第76図西端のアミ部分）

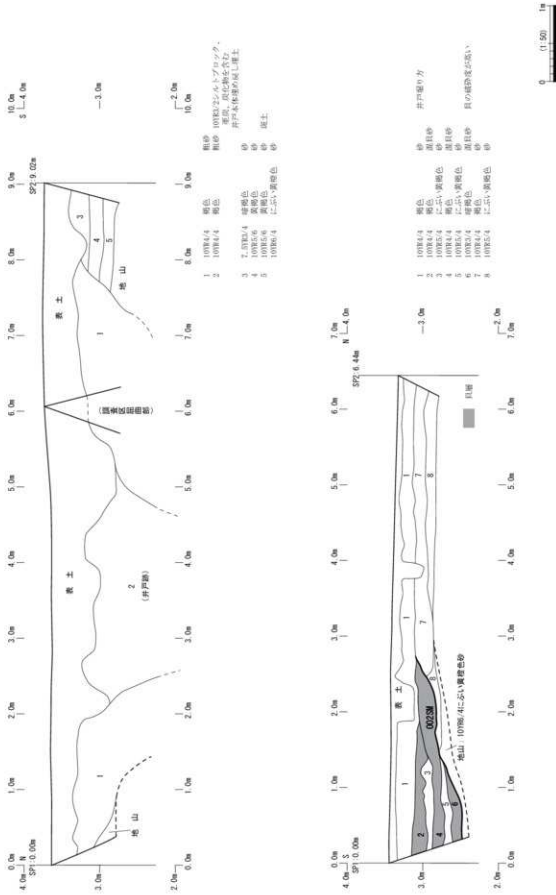
調査区西端で検出した貝層で、断面観察の結果、上中下三枚の貝層からなることが判明した。上層は褐色の混貝砂層で、比較的形状を保ったままの貝殻が含まれていた。中層も褐色砂の混ざる貝層で、純貝層部分が多かった。下層は貝殻の破砕度が高い暗褐色の混貝砂層であった。貝種はハマグリを主体とし、シオフキやウミナガが混ざる様相を呈する。この上中下三層の間には二枚の黄褐色砂層が間層として存在し、5層構造になっていた。いずれの層からもごく少量の中近世遺物が出土したことや、堆積状態などから、近世の所産である可能性が高い（分析結果は第3章参照）。

これらの他にもいくつかの土坑やピットを検出したが、いずれも時期を特定できず、平面的にもプランをなさないものがほとんどであった。（005P～008P ピット列は現代の井戸跡 001SX に伴うものであり、平面図には表現したが遺構としては取り扱わない。）



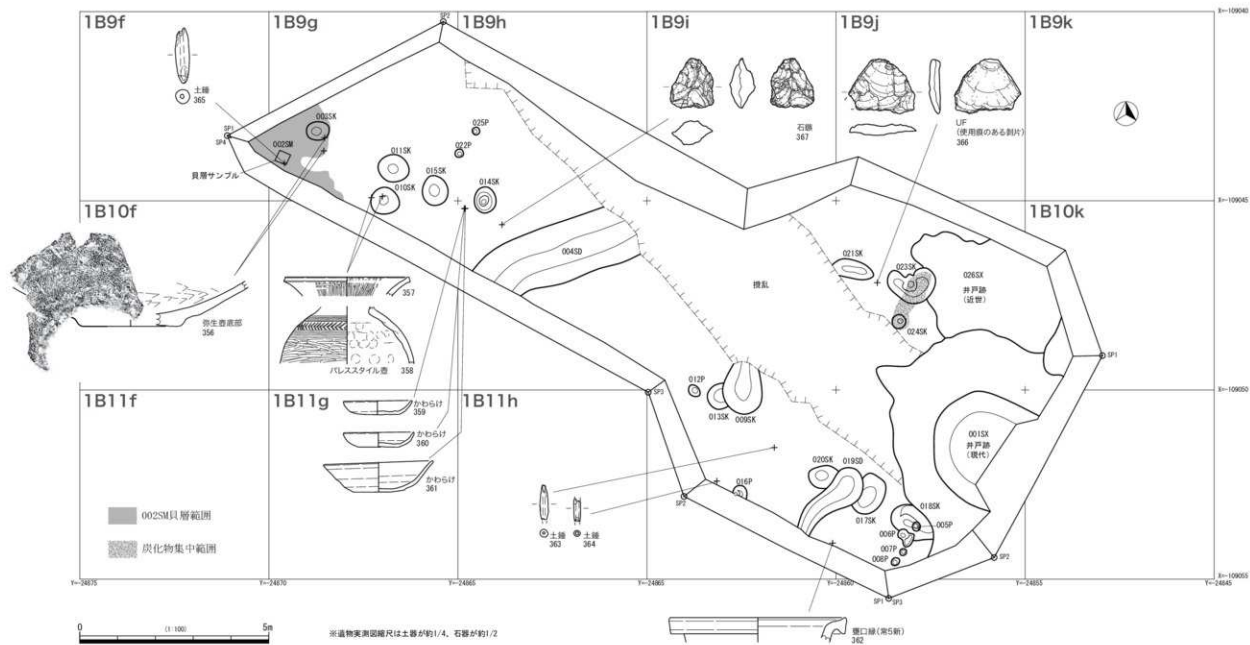


第76図 6地点遺構平面図



第77図 6地点東・西セクション図





第79図 6地点主要遺物分布図

### 3 出土遺物

本調査区の出土遺物は少なく、全てを合わせてもコンテナ2箱に満たない量であった。その大半は近世の常滑製赤焼陶器の破片で、001SXと026SXとして平面図に示した井戸跡に伴うものであった。

弥生時代の遺物としては、西端部の地山直上より中期の壺型土器残欠(356)が出土している。底部周辺の一部のみの出土であるが、すぐ脇の浅い土坑003SKに埋納されていた土器棺の残欠とも解釈可能かもしれない。また、調査区西側の地山面から1点チャート製石鏃(367)が出土しており、同じくチャート製のUF(使用痕のある剥片)(366)とともに弥生期のものと思われる。これらとは別に、直径75cmほどの浅い土坑010SK埋土から、赤焼の小形のバレススタイル壺形土器(358)が出土しており、こちらは廻間式期の遺物と思われる。

中世以後の遺物としては常滑窯5型式の甕口縁(362)や土鍾(365)の他、大小のかわらけ3枚(359～361)が出土した。

出土状況は、地面に伏せられた大の下に、やはり伏せられた小1枚と、すぐ脇に伏せられた小1枚が添えられていた。薄手で轆轤引きのかわらけが完器の状態で掘り出されることは稀であり、表土掘削時には直上で重機が稼働していたことを考えると、まさに幸運な発見と言わざるを得ない。

最初に大の底部が顔を出し始めた時、土坑などへの埋納という状況も想定して遺構プランの検出も試みたが、結果的には3枚(2枚)の全容が検出されるまで、地面を掘り込んだような痕跡は見できなかった。出土レベルは南セクションにおける第2層に相当する高さであり、当時の地表面に伏せ置かれたとも考えられる。いずれにせよ何らかの祭祀行為の痕跡ではないかと思われる。なお、伏せられたかわらけの内部の土を精査してみたが、炭化物や種子類などは検出できなかった。かわらけの時期については、共伴遺物も無く詳細は不明だが、形状や技法などから17世紀以降のものであろう。

### 4 6地点のまとめ

6地点は畑間遺跡の西側周縁部に位置し、周辺での調査実績がほとんど無く、遺跡としての情報もほぼ皆無であった。調査の結果、極めて断片的ではあるが弥生時代から古墳時代前期の遺物が発見され、中世以後の活動痕跡も垣間見ることが出来た。

6地点の位置はまさに、第一砂堆の西縁が大田川旧河口の低地に向かって落ち込みはじめる、文字通りの縁辺部に位置し、調査区西端の002SM貝層の地山として検出された斜面がそのまま低地部につながっていくものと考えられる。その低地部と砂堆縁辺との比高差は2m以上あり、他の砂堆縁辺が比較的緩やかな傾斜で低地部につながっていることから見ると、大田川旧河口部における水流の影



写真15 かわらけ(359～361)の出土状況

譬がこのような急斜面を生み出したのかもしれない。

貝層に関しては、区画溝の外側への廃棄ということで、ごく自然な行為だろう。また、かわらけを伏せ置いた祭祀行為の痕跡に関しても、より生活に密着した区画溝の内側ではなく、区画のすぐ外側でおこなわれたという意味では、穢れや魔物の侵入を防ぐと同時に、それらを彼岸に追い遣った痕跡とも解釈出来る。かわらけの出土地点のすぐ脇には、柱穴状の土坑 014SK が存在し、仮にもし、そこに木製の標柱のようなものが立てられていたとすれば、かわらけはそこに供えられていたものだろう。

本地点でも基盤層から地震による液状化にともなう連続した皿状構造が見つかった。竊模様は二種類あり、いずれも地山砂層に掘り込まれた 004SD 溝の壁面で観察されたもので、両者の距離は数 m 以内、上限標高は 2.5m であった。竊模様 A (写真 16) は従来他の調査区でも検出された網状の竊模様であるが、竊模様 B (写真 17) は数 cm から 5 cm ほどの横溝がミルフィーユのように積み重なった構造のものである。いずれも自然層中に発現したものであるが、後者のような例は今回初めて観察されたものであり、竊模様 A と同様に、地震による液状化に伴うものであろうか。



写真 16 竊模様 A



写真 17 竊模様 B

## 第3章 自然科学分析

### 第1節 貝層分析の結果

西野 順二(国際文化財株式会社)

#### 1 はじめに

平成26年度に調査された畑間・東畑遺跡において、小規模な地点貝塚を検出した。それらの貝塚から一部を採集し、貝類の分類を行った。分析に使用したサンプルは、一部を除き任意に設定した範囲内で採集したブロックサンプルである。採取した試料は、5mmメッシュ及び3mmメッシュの網かごを使用し水洗選別を行ったあと、貝種ごとに分類した。

分類及び個数に関して、二枚貝は蝶番を判断基準とし分類し、その個数をもって総計を求めた。また左右の個数が多い側を最小個体数としている。巻貝は、殻頂から殻口が残存しており、種同定可能なもののみを数えた。同定及び分析は、筆者がすべて行った。

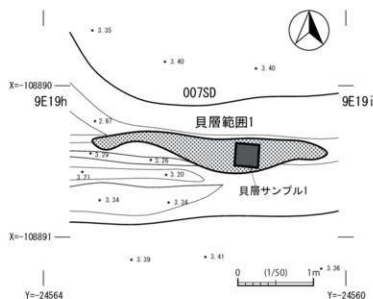
#### 2 各地点の貝層

##### 畑間遺跡2地点(HM14-2)

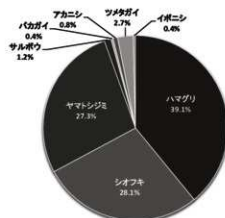
##### 貝層サンプル1(中世の貝層)

003SD内貝層範囲1の最も残存状態がよい部分を30cm×30cmのブロックサンプルとして採取した。またヤマトシジミが集中している箇所があり、任意に採取して分析を行った。

ヤマトシジミ集中部を除くと、ハマグリが最も多く、次いでシオフキとなっている。ヤマトシジミ集中部は、ヤマトシジミのみが認められ、シオフキとほぼ同数となっている。グラフでは、ヤマトシジミ集中部を含めた構成比を表している。その他に、サルボウ、バカガイ、アカニシ、ツメタガイが少数認められた。



第80図 HM14-2貝層サンプル1

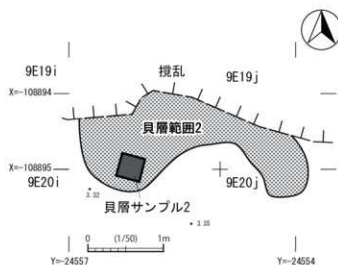


第3表 HM14-2貝層サンプル1

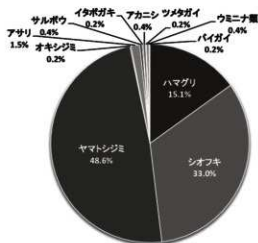
貝層サンプル2 (中世の貝層)

貝層範囲2において採集した30cm×30cmのブロックサンプルである。

主体はヤマトシジミで、次いでシオフキ、ハマグリと多い。小数ではあるが、オキシジミ、アサリ、サルボウ、イタボガキ、アカニシ、ツメタガイ、ウミナナ類が認められた。



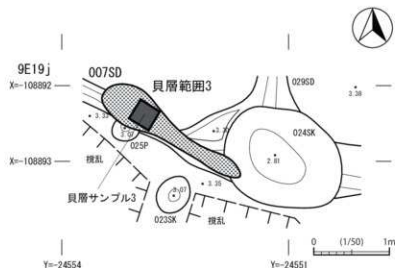
第81図 HM14-2 貝層サンプル2



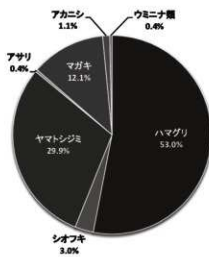
第4表 HM14-2 貝層サンプル2

貝層サンプル3 (中世の貝層)

貝層範囲3で採取した30cm×30cmのブロックサンプルである。主体はハマグリであり、次いでヤマトシジミが多い。ここでは、他の貝層サンプルに多く見られたシオフキが少ないという特徴がある。またマガキがやや多く認められた。他には、アサリ、アカニシ、ウミナナ類がある。



第82図 HM14-2 貝層サンプル3

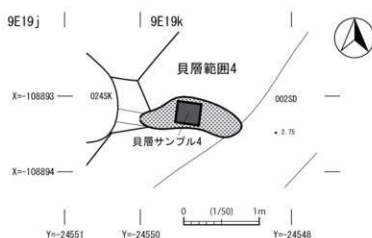


第5表 HM14-2 貝層サンプル3

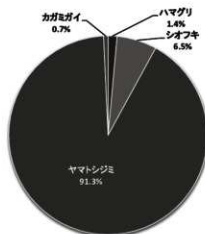


## 貝層サンプル4 (中世の貝層)

貝層範囲4で採取した30cm×30cmのブロックサンプルである。主体はヤマトシジミであり、ハマグリ、シオフキ、カガミガイが少数認められた。



第83図 HM14-2 貝層サンプル4

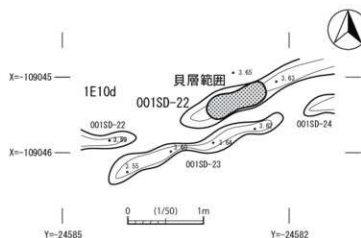


第6表 HM14-2 貝層サンプル4

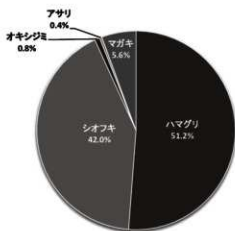
## 期間遺跡4地点 (HM14-4)

## 001SD-22 (中世～近世の貝層)

001SD-22 内で出土した貝層範囲は、畝間の耕作痕と思われる細長い溝の中に廃棄された貝層である。主体はハマグリとシオフキであり、近隣の中世貝塚の特徴とよく似ている。しかし、ウミニナ等の腹足綱は含まれていなかった。他は少数ではあるが、オキシジミ、アサリ、マガキが認められた。



第84図 HM14-4 001SD-22 貝層サンプル



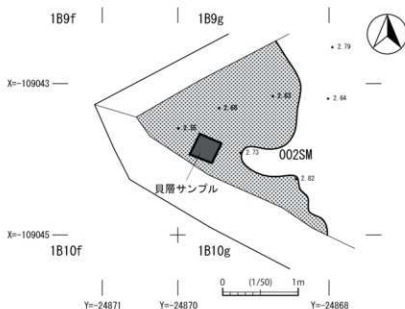
第7表 HM14-4 001SD-22 貝層サンプル

知間遺跡6地点 (HMI4-6)

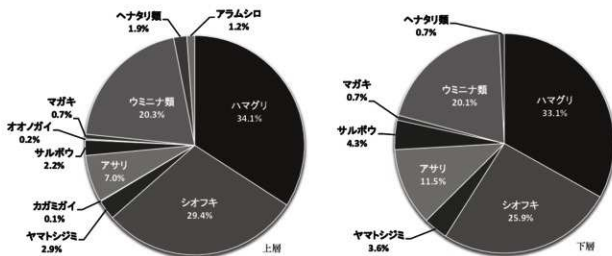
002SM (中世～近世の貝層)

002SMにおいて、30cm×30cmの範囲で上層と下層のコラムサンプルとして採取した。上層と下層共にハマグリが最も多く、次いでシオフキ、ウミナ類と続く。他にアサリ、ヤマトシジミ、サルボウ、マガキ、ヘナタリ類が共通して認められる。それらの構成比は上層と下層において大きな違いはない。上層では、他にカガミガイ、オオノガイ、アラムシロが含まれているが、下層では認められなかった。

上層と下層で貝種の構成比にあまり変化がないことから、002SMは廃棄時期に時間的差がほとんどなく形成した可能性がある。



第85図 HMI4-2 002SM 貝層サンプル

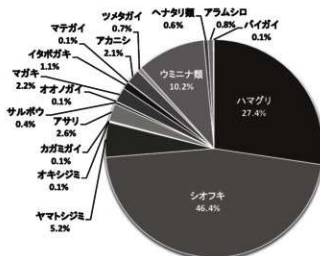


第8表 HMI4-2 002SM 貝層サンプル

## 東畑遺跡5地点 (HH14-5)

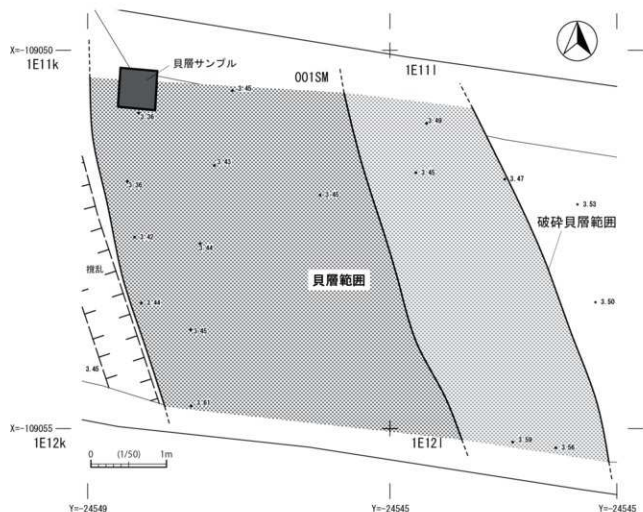
## 001SM (中世の貝層)

帯状に堆積した001SMにおいて残存状態の良好な部分を50cm×50cmのブロックサンプルとして採取した。シオフキが最も多く、次にハマグリが多い。他の地点と比べ貝種が多く、上記以外にヤマトシジミ、オキシジミ、カガミガイ、アサリ、サルボウ、オオノガイ、マガキ、イタボガキ、マテガイ、アカニシ、ツメタガイ、ウミナナ類、ヘナタリ類、アラムシロ、バイガイが含まれていた。その中でもイタボガキは数こそ少ないが、その大きさからサンプル内に占める割合は大きい。



第9表 HM14-5 001SM 貝層サンプル

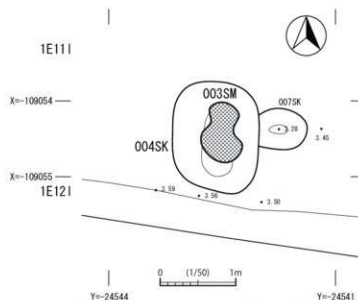
また貝層内からウマ (下顎骨・歯牙等) が出土している。



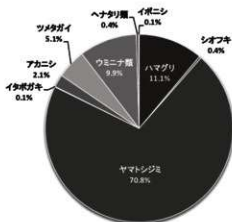
第86図 HM14-5 001SM 貝層サンプル

003SM (弥生時代中期の貝層)

003SMは、004SKに堆積した貝層で、全量採取している。主体はヤマトシジミで約70%を占める。次いで、ハマグリ、ウミナシ類が約10%となっている。他は少数で、イタボガキ、アカニシ、ツメタガイ、ウミナシ類、ヘナタリ類、イボニシを含んでいた。他の貝サンプルと異なり、アカニシやツメタガイの出土量が多い。



第87図 HM14-5 003SM貝層サンプル



第10表 HM14-5 003SM貝層サンプル

### 3 おわりに

これらの貝塚の貝類の出土傾向をみると、それぞれの遺跡及び調査地点によって特徴が異なることが分かる。

HM14-2では、他の地点と比べヤマトシジミの出土量が多いという特徴がある。これまでの中世貝塚でよく見られたハマグリ及びシオフキの出土量が少ない。また、ヤマトシジミが集中する箇所があるなど、この地点周辺においてヤマトシジミが多く消費されていた時期があったと考えられる。

HM14-4では、ハマグリ及びシオフキの2種を主体としており、これはこれまで周辺で調査された中世貝塚の様相と酷似している。このような貝種の傾向は、非常に興味深い。ハマグリとシオフキの外見上の特徴はよく似ており、また生息域も共通しているため、ハマグリとシオフキの区別を判断せずに鹵獲され消費されていた可能性がある。

HM14-6では、002SMの貝層を上層下層に分けたコラムサンプルとして採取したが、その貝種の構成比は上下共に違いはあまりない。002SMは時間的差がほとんどなく廃棄されて形成した可能性がある。またここでもハマグリ及びシオフキの総数が過半数を超えている。

HM14-5では、001SMは貝種が多く存在している点他の地点との違いであるが、ハマグリとシオフキが70%以上を占めている点は、他の中世貝塚と類似している。003SMは、弥生時代中期の土壌層である可能性の高い004SK内に堆積した貝層である。主体がヤマトシジミであり、墓塚に遺棄されたとすれば大変興味深い例となる。また出土した二枚貝の左右が、ほぼ同数となってい

る点も注目したい。そして、アカニシやツメタガイといった比較的大型の巻貝が多く出土している。これだけの情報ではその真意は明らかにはできないが、被葬者の趣向に合わせた食糧が用いられていたとすると、非常に興味深い。

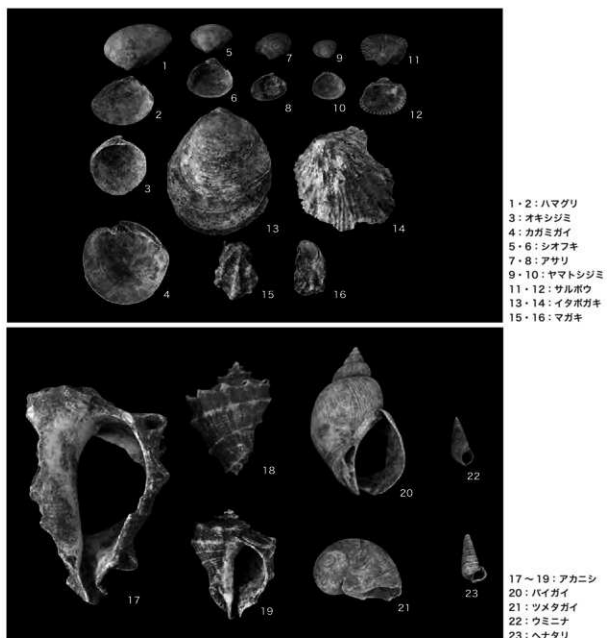


写真18 東畑遺跡5地点001SM貝層の貝相

#### 《参考文献》

- 東海市教育委員会 1997 『愛知県東海市 東畑遺跡等試掘調査報告』  
 東海市教育委員会 1999 『愛知県東海市 上浜田遺跡発掘調査報告』  
 東海市教育委員会 2004 『愛知県東海市 畑間遺跡発掘調査報告』  
 東海市教育委員会 2005 『愛知県東海市 松崎遺跡確認調査報告』  
 愛知県東海市教育委員会 2009 『畑間・東畑遺跡発掘調査報告』  
 愛知県東海市教育委員会 2013 『畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告』  
 愛知県東海市教育委員会 2014 『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』  
 奥谷喬司 2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会

第3章 自然科学分析

	二枚貝類																							
	ハマダ グ リ R L	ハマ グ リ R L	シ オ フ キ R L	ヤ マ ト シ ジ ミ R L	ヤ マ ト シ ジ ミ R L	オ キ シ ジ ミ R L	オ キ シ ジ ミ R L	カ ガ ミ ガ イ R L	カ ガ ミ ガ イ R L	ア サ リ R L	ア サ リ R L	セ ル ボ ウ R L	セ ル ボ ウ R L	オ ノ ガ イ R L	オ ノ ガ イ R L	マ ナ ガ イ R L	マ ナ ガ イ R L	イ タ ボ ガ イ R L	イ タ ボ ガ イ R L	マ ナ ガ イ R L	マ ナ ガ イ R L	バ カ ガ イ R L	バ カ ガ イ R L	
BH14.5.001SM 合計	451	427	735	784	65	85	0	2	1	2	36	43	6	4	0	1	36	16	18	16	0	1	0	0
BH14.5.003SM 合計	114	112	3	4	726	712	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
BH14.2 貝層サンプル1 合計	100	85	64	72	0	0	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
BH14.2 貝層サンプル1 ヤマトシジミ集中 合計	3	0	0	0	70	66	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル1 総合計	100	85	64	72	70	66	0	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
BH14.2 貝層サンプル2 合計	80	83	182	177	268	268	1	0	0	0	0	8	4	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル3 合計	138	140	6	8	65	79	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	32	22	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル4 合計	2	2	9	6	126	110	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
BH14.4 貝層サンプル 合計	116	128	89	105	0	0	2	1	0	0	1	1	0	0	0	0	14	14	0	0	0	0	0	0
BH14.6.002SM (1層) 合計	352	303	303	292	22	30	0	0	0	1	53	72	23	16	2	1	5	7	0	0	0	0	0	0
BH14.6.002SM (1層) 合計	284	46	36	36	5	2	0	0	0	0	16	6	4	6	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
BH14.6.002SM 総合計	390	349	339	328	27	32	0	0	0	1	71	78	27	22	2	1	6	8	0	0	0	0	0	0

※太字は最小個体数を示す。

	殻足類					推 生 具 類	ウ マ
	ア カ ニ シ	ツ メ タ ガ イ	ウ ニ シ	ア ラ ム シ ロ	バ イ ガ イ		
BH14.5.001SM 合計	35	11	168	10	13	2	0
BH14.5.003SM 合計	22	52	102	4	0	1	0
BH14.2 貝層サンプル1 合計	2	7	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル1 ヤマトシジミ集中 合計	0	0	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル1 総合計	2	7	0	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル2 合計	2	1	2	0	0	1	0
BH14.2 貝層サンプル3 合計	3	0	1	0	0	0	0
BH14.2 貝層サンプル4 合計	0	0	0	0	0	0	0
BH14.4 貝層サンプル 合計	0	0	0	0	0	0	0
BH14.6.002SM (1層) 合計	0	0	209	20	12	0	0
BH14.6.002SM (1層) 合計	0	0	28	1	0	0	0
BH14.6.002SM 総合計	0	0	237	21	12	0	0

第11表 各貝層サンプル集計

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA	異歯亜綱 Subclass HETERODONTA
腹足綱 Class GASTROPODA	マウスダレガイ目 Order Veneroidea
前腹足綱 Subclass PROSOBRANCHIA	バカガイ目 Superfamily Macrastreia
盤足目 Order Discopoda	バカガイ科 Family Macrastreidae
カネモリガイ目 Superfamily Centhioidae	シオフキ Mactra veneniformis
ウミニナ科 Family Basiliariidae	バカガイ Mactra chinensis
フトヘナタリ科 Family Potamididae	マナガイ目 Superfamily Solenacea
タマガイ目 Superfamily Naticoidae	マナガイ科 Family Solenidae
タマガイ科 Family Naticidae	マナガイ Solen strictus
ツメタガイ Glossaulax didyma	シジミ目 Superfamily Conbuculacea
新腹足目 Order Discopoda	シジミ科 Family Corbiculidae
アキガイ目 Superfamily Muricoidea	ヤマトシジミ Corbicula japonica
ムシロガイ目 Family Nassariidae	マウスダレガイ目 Superfamily Veneracea
アラムシロ Reflicumassa festiva	マウスダレガイ科 Family Veneridae
エゾバイ目 Family Buccinidae	カガミガイ Phacosoma japonicum
バイ Balytonia japonica	アサリ Rditapes philippinarum
アキガイ目 Family Mucidae	ハマグリ Meretrix lusoria
アカニシ Rapana venosa	オキシジミ Cyclina sinensis
イボニシ Thais chaviera	
二枚貝綱 Class BIVALVA	オノノガイ目 Order Myoida
翼形亜綱 Sub class PTERIOMORPHIA	オノノガイ亜目 Suborder Myina
カキ目 Order Ostreida	オノノガイ目 Superfamily Myacea
カキ亜科 Suborder Osteina	オノノガイ科 Family Myidae
カキ目 Superfamily Ostreacea	オノノガイ Mya arenaria onogai
イタボガキ科 Family Ostreidae	
イタボガキ Ostrea denselamellosa	
マガキ Crassostrea gigas	
フネガイ目 Order Arcoida	脊椎動物亜門 Subphylum VERTEBRATA
フネガイ目 Superfamily Arcoacea	哺乳綱 Class MAMMALIA
フネガイ科 Family Arcoidea	奇蹄目 Order Perissodactyla
サルボウ Scapharca kagosimaensis	ウマ科 Family Equidae
	ウマ Equus caballus

第12表 検出動物分類一覧表

## 第2節 東畑遺跡 2014年度調査出土ハマグリ の成長線分析

畑山智史 (埼玉大学大学院)

## 1 はじめに

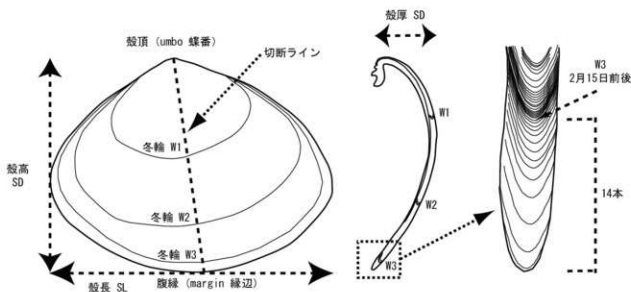
東畑遺跡では、貝層を伴う遺構が検出されている。発掘調査の結果、この遺構は、弥生時代、中世にそれぞれ帰属する。これまでに東畑遺跡では、1999年の発掘調査時に出土したハマグリを資料として、中世における貝採集活動が推定され、春季の集中的な採集が報告されている(畑山、2015)。本報告では貝殻成長線分析を用いて、主に弥生時代のハマグリを資料として、その季節性ならびに遺構の形成期間、人類の捕獲圧について推定した。

## 2 試料と方法

試料は、ハマグリ *Meretrix lusoria* 15点である(第13表)。出土遺構は、弥生時代中期の003SM貝層(11点)、中世(13c~14c)の001SM貝層(4点)である。2014年に発掘調査現場にて提供していただいた。資料の出土層位や帰属年代は報告書に順ずる。

貝殻成長線分析のレプリカ法は、常法(Koike, 1980)を用いた。殻頂から腹縁までの正中線を記入した後、ダイヤモンドカッターを用いて貝殻を切断した。切断した試料を樹脂で包埋し、固化後、耐水ペーパーで切断面を研磨する。希塩酸によるエッチングを行った後、酢酸エチルを滴下し、Bioden R.F.A レプリカフィルム(100×100×0.127 mm)に成長線を転写した。転写したフィルムをプレパラートに挟み込み、貝殻成長線分析の観察用プレパラートとした。検鏡は生物顕微鏡を用いて40~200倍下で観察を行った。

貝類の採集(死亡)時季は、縁辺に最も近い冬輪(最終冬輪)から縁辺までの日周線の本数(最



貝殻成長線分析における二枚貝の計測点と切断箇所  
ハマグリを基に計測点と切断箇所を示している。切断箇所は、殻頂から腹縁である。

第88図 貝殻の計測点と切断面の模式図

分析 No.	遺構	時期	No.	L R	殻長 [mm]	殻高 [mm]	殻厚 [mm]	欠損部	備考
779	003 SM 貝層	弥生 中期	TH14-01	R	-	45.79	14.89	前・後位欠損	分析不可
780			TH14-02	R	[54.98]	43.52	13.89	前位欠損	
781			TH14-03	L	[51.19]	44.03	14.76	後位欠損	
782			TH14-04	L	[59.55]	49.05	15.83	後位欠損	分析不可
783			TH14-05	L	[54.97]	48.93	16.12	前位欠損	
784			TH14-06	L	[51.13]	45.62	14.16	後位欠損	分析不可
785			TH14-07	R	[49.75]	41.78	14.62	後位欠損	障害輪あり
786			TH14-08		[61.85]	50.45	16.45	後位欠損	
787			TH14-09		[56.20]	49.38	16.42	後位欠損	
788			TH14-10		[70.66]	57.66	19.45	後位欠損	
789			TH14-11	L	[54.50]	47.86	14.87	前・後位欠損	
790	001 SM 貝層	中世	TH14-12		45.04	37.74	12.07	完形	分析不可
791			TH14-13		[61.51]	52.01	17.17	後位欠損	
792			TH14-14		61.24	50.33	16.22	後位欠損	
793			TH14-15		[70.96]	62.52	18.58	完形	

[]は残存値、L、Rはそれぞれ左、右を示す。

第13表 貝殻成長線分析のサンプルリスト

日周線数	月日	時季	主な行事
0-45	2月15日 ~ 3月31日	春季前半	雛祭(3月3日)
46-90	4月1日 ~ 5月15日	春季後半	端午(5月5日)、立夏(5月6日頃)
91-135	5月16日 ~ 6月29日	夏季前半	夏至(6月21日頃)
136-180	6月30日 ~ 8月13日	夏季後半	立秋(8月7日頃)
181-225	8月14日 ~ 9月27日	秋季前半	
226-270	9月28日 ~ 11月11日	秋季後半	立冬(11月7日頃)
271-315	11月12日 ~ 12月26日	冬季前半	冬至(12月22日頃)
316-365	12月27日 ~ 2月14日	冬季後半	元日(1月1日)、立春(2月4日頃)

Koike, 1980などを基に作成した。旧暦1月1日は、毎年1月22日頃~2月19日頃までを移動する。

第14表 日周線による季節区分

終日周線)がその後に生存した日数を表していることから、これを計算し求めている。冬輪は、2月~3月初旬頃と推定されている。多くの日本産二枚貝の場合(ホタテガイなど除く)、毎年繰り返し観察される成長不良な部分は、冬季における成長部分と考えられることから冬輪と認定して、その中心が日本沿岸において海水温度の最も低くなる2月15日に近接すると推定されている(Koike, 1980)。

よって、採集時季は、(2月15日) + (日輪の本数) = (貝の死亡日)として算出し、それを四季の二分程度の大別当てはめ直してから採集季節の推定に利用している(Koike, 1980)。

貝の死亡時季を推定するために小池が定めた日周線の本数を基準とした季節の時期は、1年を8期に区分しており、今回採用した(第2表)。

また成長速度の算出は、水産学で用いられる Walford 法より算出した(Walford, 1946)。

### 3 結果

#### ① サンプルの状態及び分析結果の概要

サンプルの状態は、計測可能であるが、欠損個体が多い。特に弥生時代のハマグリは、切断面の空洞化が著しく、検鏡できた点数は8点のみであった。同様の状態は、愛知県朝日遺跡や徳島県三谷遺跡の分析でも確認されている。一方、中世のハマグリは、殻体破片が多く、分析資料の抽出が



難しいが、切断面は比較的良好であった。

分析 No.	推定季節	最終日周線	推定日	年齢	殻高 (2年)	殻高 (3年)	殻高 (4年)	殻高 (5年)	殻高 (6年)
779	分析不可			* 4					
780	春季前半	10	2月25日	3	-	43.8			
781	春季前半	8	2月23日	3	36.5	43.7			
782	分析不可			* 4					
783	春季前半	9	2月24日	4	26.2	39.1	48.6		
784	分析不可			* 4					
785	春季後半	53	4月8日	3	30.9	39.7			
786	春季前半	冬輪		5	-	-	-	50.4	
787	春季後半	73	4月28日	5	22.9	30	40.2	47.9	
788	春季前半	19	3月5日	5	-	-	-	54.1	
789	春季前半	6	2月21日	5	-	30.3	42.2	47.8	
790	分析不可			* 2					
791	春季前半	20	3月6日	4	-	51.2	54		
792	春季後半	56	4月11日	3	20.9	36.7			
793	春季前半	10	2月25日	6	-	38.1	47.7	56.1	59.7

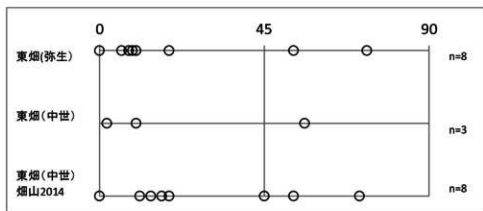
\* の年齢は、Walford 法に基づき、計測値より算出した。

第15表 貝殻成長線分析の結果

## ②推定季節

推定できた個体は、全て春季であった。弥生時代のサンプルでは最終日周線が春季前半の6～10本(平均8本、2月24日に相当)に集約しており、この時期に廃棄した可能性がある。また春季後半の53～73本(平均63本、4月18日に相当)にも廃棄した可能性があり、推定季節からみた結果、少なくとも2度の廃棄により、埋没した遺構と考えられる。冬輪の形成日を2月15日と仮定し、この2度の廃棄期間を同年と見做した上で考えると、この遺構は2月24日前後に廃棄が開始し、4月18日前後には埋没したと解釈できる。またこの時は、田植え前の農閑期に相当すると考えられ、農耕に関わる時間的制約が少なかったであろう。

中世のサンプルも同様に春季のみ季節性であった。この結果は、前回の分析(畑山, 2014)と調和的である。春先より採集活動を実施している点は、弥生時代や前回の分析と同様であり、この地域の特徴と考えられる。なお現生ハマグリ(畑山, 2014)の調査によると推定日に±20日の誤差があり(Koike, 1980)、本結果も注意が必要である。

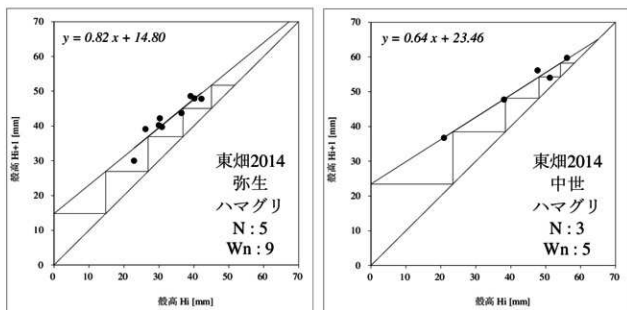


第89図 出土ハマグリ(畑山)の最終日周線数

③成長速度

弥生時代におけるハマグリは、初期成長 14.8mm、その後 26.9mm（2年目）、36.9mm（3年目）、45.0mm（4年目）、51.7mm（5年目）となり、最終的に 82.0mm に達すると推定された。2009年の三重県伊勢湾産ハマグリは、初期成長 18.7mm、その後 32.5mm（2年目）、42.7mm（3年目）、50.1mm（4年目）、55.7mm（5年目）となり、東畑遺跡出土のハマグリはやや緩やかな成長であることから、生育環境が現在の伊勢湾よりも不適であった可能性がある。

中世におけるハマグリは、初期成長 23.5mm、その後 38.5mm（2年目）、48.1mm（3年目）、54.2mm（4年目）、58.2mm（5年目）となり、最終的に 65.0mm に達すると推定された。弥生時代よりも初期成長が高く、早熟な成長パターンである。また現在の伊勢湾よりも生育環境が良好であったとされる。

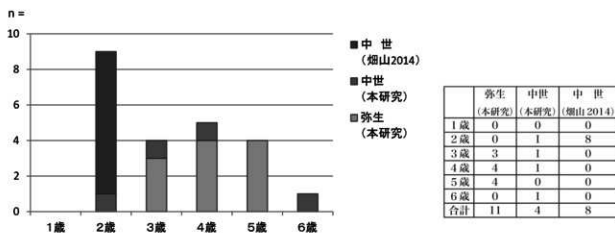


第90図 Walford 法による東畑遺跡出土ハマグリ成長速度

④年齢組成

検鏡ならびに Walford 法により求めた年齢組成は、弥生時代、中世ともに 3～6歳の個体がみられた。この年齢群は、成熟個体群であり、人類の捕獲圧が低調と評価できる。

既報によると中世のハマグリは、全て 2歳の若歳であり、人類の捕獲圧が高く、資源の枯渇が危惧される結果であった（畑山 2014）。だが、本報告の中世サンプルは高齢であり、同じ中世であっても時期によって海産資源の依存度が多様な可能性がある。



第16表 東畑遺跡における年齢組成

## 4 考察

### ①弥生時代における東畑遺跡の貝採集活動

これまでに弥生時代を対象とした成長線分析は、高地性集落の事例（池田、1999）、柳川市東蒲池門前遺跡（畑山・米田、2010）、朝日遺跡（畑山、2015）がある。

池田研の分析によると高地性集落では、夏や秋といった農繁期に重複する採集季節であった（池田、1999）。この結果が弥生時代の特徴なのか、それとも高地性集落の特徴なのか、この報告における時点では比較可能な事例がなく、池田自身も低地に位置する遺跡の分析を必要とした。

その後、畑山と米田が実施した福岡県東蒲池門前遺跡において検出した貝塚の分析によって初めて、弥生社会における貝採集季節の推定がなされた。その結果、春14点、夏16点であり、採集季節は春から夏が報告されている（畑山・米田、2010）。ただし、分析試料の多くは、大型個体であったため、分析結果に誤差が生じていると考えられる。

朝日遺跡でもその採集季節は、春5点と夏2点であり、春から夏と推定され、農繁期を避けた可能性がある（畑山、2015）。なお山崎健は、朝日遺跡より出土したマイワシの骨の計測値から算出した体長とその生態的特徴より、漁撈の季節を推定している。その結果によると、朝日遺跡におけるマイワシの漁撈活動は、周年的な季節性を示している。（山崎、2015）。

弥生時代における東畑遺跡の貝採集活動は、春季の集中であり、農閑期に実施されていた。この結果は、高地性集落の事例とは異なり、平野部に位置する弥生貝塚の分析事例と調和的である。また、稲作に支障をきたさない時期に限り、実施している点から、貝採集活動は専門的な漁撈民を想定するよりも、農耕民が担っていると考えた方が問題なかろう。003SM 貝層は、小規模な遺構である点も東畑遺跡の人類にとって貝類が副食的な位置付けであると思われる。

### ②中世における東畑遺跡の貝採集活動

これまでに中世を対象とした成長線分析は、豊橋市内田貝塚（中近世、樋泉・岩瀬 2002）、岡山市左古谷遺跡（富岡、2001）、福岡市博多遺跡 165 次調査地点（畑山・富岡、2010）、徳島市大松遺跡（小林ほか、2015）、また東海市東畑遺跡 1999 年調査（畑山、2014）と事例に限られている。

内田貝塚は、中近世の貝塚遺跡である。近世の資料も含まれるが、その季節は、冬季後半から春

季前半に収斂する（中近世、樋泉・岩瀬2002）。部分的なブロックサンプルであるため、たまたま冬季に形成した貝層を分析した可能性もあるが、近隣の近世に帰属する築根遺跡でも類似的な季節性であるため、この地域の特徴なのかもしれない。

博多遺跡は、都市部の利用を示す資料であり、他に嗜好性の高い貝種がみられる。その季節性は、春季前半1点、後半2点、夏季前半1点である（畑山・富岡、2010）

大松遺跡は、本稿の東畑遺跡とその様相が他の遺跡よりも類似的な半農半漁の集落ではある。大松遺跡の貝採集活動の季節性は、春季1点、夏季5点、秋季3点、冬季1点で夏季を中心に各時季がみられる。また本遺跡では、出土人骨や土器付着炭化物の炭素・窒素の安定同位体比が測定されており、海産物資源の利用を示唆する結果が得られている（小林ほか、2015）。

左古谷遺跡は、海産貝類の採集に長けた集団とされ、貝塚を形成するほどの大規模な活動がみられる。

分析の結果、その採集季節は3月上旬（貝塚2）や4月（貝塚3）に収斂する可能性が指摘されている（富岡、2001）。本遺跡の結果は、この左古谷遺跡（富岡、2001）とも類似であった。ただし、左古谷遺跡は、異なる貝種のハイガイを分析資料としており、さらに遺構の規模も大きく貝塚である。より海産資源の採集に特化した遺跡であり、東畑遺跡とは異なる様相であるが、集落の構造とその利用季節を考える上で左古谷遺跡は重要であろう。

それぞれの結果は、遺跡の性格が異なり、現状では一概に中世の貝採集活動の季節を語ることができない。しかしながら、現段階では中世の成長線分析が少例であるため判断し難いが、これらの結果から考えると、各遺跡で異なる季節性を示すことが中世における貝採集活動の特徴であろう。

以上の結果を踏まえ、東畑遺跡における中世の貝採集活動は、春季の集中であり、弥生時代と同様、農閑期に実施されていた。本結果は、1999年調査の分析結果と調和的であり、この地域の特徴と評価できる。しかしながら、1999年調査の結果では若齢が主体であることから、地点によって年齢組成が異なる傾向があり、海産資源の依存度が中世の中でも時期によって多様な可能性がある。

## まとめ

本稿は、東畑遺跡（HH14-5地点）で検出した貝層より得られた、弥生時代中期003SM貝層と001SM中世貝層のサンプルを分析し、その採集季節や年齢組成について検討した。その結果、採集季節は、春季のみであった。また年齢組成は、全て3歳以上の成熟個体が占められており、人類の捕獲圧が低調と評価された。

## 謝辞

分析にあたり、東海市教育委員会の永井伸明氏、宮澤浩司氏、国際文化財株式会社 坂野俊哉氏、東京大学総合研究博物館年代測定室の米田 穰教授、大森貴文氏、宮崎ゆみこ氏、埼玉大学の中村大介先生に協力頂いた。最後に成長線分析について、岡山理科大学総合情報学部富岡直人教授にご指導頂いた。記して感謝の意を表します。

本稿は、平成26・27年度サントリー文化財団 地域文化におけるグループ研究助成「加賀藩関連資料を用いた近世日本食文化の総合的研究」における成果の一部である。

## 《参考文献》

- 池田 研 1999 「高地性集落の機能と生業 —出土貝を中心として—」『国家形成期の考古学』: pp. 149-166
- Koike, H. 1980 'Seasonal dating by growth line counting of the clam, *Meretrix lusoria*', "The university museum, The university of Tokyo, Bulletin" 18: pp. 1-104.
- 小林謙一・遠部 慎・畑山智史 2015 「大松遺跡出土試料の自然科学分析」『大松遺跡』徳島県埋蔵文化財センター: pp. 577 - 598
- 富岡直人 2001 「左古谷遺跡出土の動物遺存体分析」『左古谷遺跡』: pp. 69 - 88
- 樋泉岳二・岩瀬彰利 2002 「内田貝塚出土の動物遺体」『豊橋の環境史と貝塚』: pp. 69 - 74
- 畑山智史 2014 「東畑遺跡出土ハマグリ貝殻成長線分析」『畑間・東畑・畑中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査—』東海市教育委員会: pp.223-227
- 畑山智史 2015 「農耕社会における貝殻成長線—貝殻成長線からみた日韓の比較—」『日韓次世代学術フォーラム 第12回国際学術大会』pp. 270 - 273
- 畑山智史・富岡直人 2010 「博多遺跡群におけるハマグリ類の採集季節」『福岡市史資料編』考古③
- 畑山智史・米田恭子 2013 「貝殻成長線分析」『東蒲池門前遺跡』:pp.133-141
- 山崎 健 2015 「農耕開始期における漁撈活動の変化—伊勢湾奥部を事例として—」『日本考古学』第39号: pp.17 - 30
- Wolford, L. A. 1946 'A new graphic method of describing the growth of animals' Biol. Bull. Woods hole, 90:pp.141-147



写真19 作成した検鏡用プレパラートの一部



写真20 観察用レプリカとその保存用貝殻片



写真21 観察用レプリカの切断面

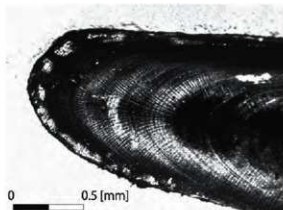


写真22 最終冬輪と夏輪の顕微鏡写真

## 第3節 畑間遺跡のプラント・オパール分析と微粒炭分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

## 1 はじめに

愛知県東海市に所在する畑間遺跡3地点において、溝や土坑が検出されている。これらの遺構では、黒色を呈する砂が堆積しており、黒色土の形成やイネの有無を検討するために、プラント・オパール分析と微粒炭分析を行った。

## 2 試料と方法

分析試料は、096SKから採取された4点と、102SDから採取された1点の計5点である(第17表)。放射性炭素年代測定の結果では、096SKの1層が弥生時代中期～後期、096SKの3層が弥生時代中期、102SDの1層が縄文時代晩期を示す年代値が得られている(放射性炭素年代測定の節参照)。これらの試料について、次の手順で各分析を実施した。

遺構	層位	時期	土相
096SK	1	弥生時代中期～後期	暗褐色(10YR3/3)砂
	2	-	暗褐色(10YR3/2)砂
	3	弥生時代中期	黒褐色(7.5YR2/2)砂
096SK	4	-	暗褐色(10YR3/4)砂
102SD	1	縄文時代晩期	黒色(7.5YR2/1)砂

第17表 畑間遺跡3地点における年齢組成

## 2-1. プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルソーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、写真23に載せた。

## 2-2. 微粒炭分析

計量した試料に、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計

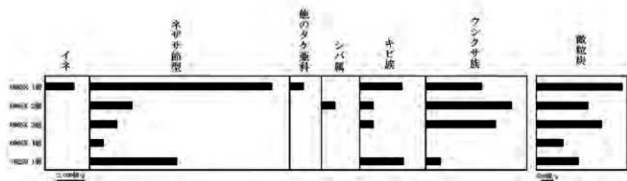
量した。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り、10μm以上の微

	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	他のタケ類科 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	ポイント型珪酸体 (個/g)
096SK 1層	2,100	13,400	1,000	0	3,100	4,100	0
096SK 2層	0	3,100	0	1,000	1,000	6,300	0
096SK 3層	0	2,000	0	0	1,000	5,100	0
096SK 4層	0	1,000	0	0	0	0	0
102SD 1層	0	6,400	0	0	3,200	1,100	1,100

第18表 試料1g当りのプラント・オパール個数

	096SK 1層	096SK 2層	096SK 3層	096SK 4層	102SD 1層
分析に用いた試料 (g)	8.93	10.11	10.67	8.58	8.19
残渣+グリセリン (g)	0.8789	0.8395	0.6931	0.4609	0.714
封入に用いた量 (g)	0.076	0.088	0.073	0.0106	0.052
微粒炭数	2804	2315	3102	224	1058
(試料 1g 当たりの個数)	3631	2184	2760	1135	1774

第19表 微粒炭分析に用いた試料の計量値と微粒炭数



第91図 潮間道跡における植物珪酸体および微粒炭分布図

粒炭を検鏡した。なお、試料 1g 中の微粒炭含有数は、次式で求める。

$$X = BD/AC$$

X: 試料 1g 中の微粒炭含有数、A: 分析に用いた試料の重量 (g)、B: 濃縮試料+グリセリンの重量 (g)、C: 濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量 (g)、D: プレパラート中の微粒炭数

### 3 結果

#### 3-1. プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求め (第18表)、分布図を第91図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の6種類の機動細胞珪酸体が確認できた。096SKの4層では機動細胞珪酸体が殆ど産出しなかったが、1～3層においてはネザサ節型機動細胞珪酸体とキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。これらは上位層に向かって増加傾向にある。また、イネ機動細胞珪酸体が096SKの1層から産出しており、2,100個である。102SDの1層においてもネザサ節型機動細胞珪酸体とキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立ち、ネザサ節型機動細胞珪酸体が6,400個、キビ族機動細胞珪酸体が3,200個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が1,100個である。

#### 3-2. 微粒炭分析

計量し、検鏡した結果を第19表に、分布図を第91図に示す。いずれの試料にも微粒炭が含まれていた。最も量が少ないのが096SKの4層で試料 1g あたり 1135個、最も量が多いのが

096SK1層で試料1gあたり3631個である。

#### 4 イネ科植物相について

096SKの1層ではイネ機動細胞珪酸体が検出された。畑間遺跡とおよそ50m離れた東畑遺跡においても、弥生時代中期の土器棺内埋土からイネ機動細胞珪酸体が検出されている(森, 2013)。東畑遺跡のイネの産出については人為的要因や後世からの混入など、いくつかの可能性が考えられているが、土坑や土器棺など、同じ時期のいくつかの異なった場所でもイネ機動細胞珪酸体が検出されるため、イネ機動細胞珪酸体の産出は遺跡周辺の一般的な事象で、遺跡周辺におけるイネの存在を証明していると思われる。イネ機動細胞珪酸体以外では、ネザサ節型機動細胞珪酸体とキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。この3種類は畑間遺跡の096SKと102SD、東畑遺跡の方形周溝墓の埋土(森, 2013)において優占している。よって、遺跡周辺に広がるイネ科植物相のなかでは、ネザサ節型のササ類やキビ族、ウシクサ族が優勢であったと考えられる。ただし、096SKを見ると、層位によって産出量が異なっており、3種類ともに下位層では産出量が少なく、上位層に向かって増加傾向にある。これは、時期によって分布範囲が異なっていたか、時期による堆積環境の相違を反映しているなどの可能性が考えられる。

#### 5 微粒炭量と試料の色調について

分析試料は色調を基にすると、暗褐色系(096SKの1層と4層)と黒～黒褐色系(096SKの2層と3層、102SDの1層)の2種類に区分できる。これらの試料の微粒炭数は、黒～黒褐色系(096SKの2層と3層、102SDの1層)が試料1g当り1774～2760個となり、その差は1000個以内の範囲に収まっている。一方で、暗褐色系(096SKの1層と4層)は試料1g当り1135個と3631個であり、微粒炭数にはかなりの相違がある。この結果から、黒褐色系試料には一定量の微粒炭が含まれているが、暗褐色系に含まれている微粒炭数にはばらつきがある状況が読み取れる。

次に、暗褐色系の試料における微粒炭数の多少について検討する。微粒炭数の少ない096SKの4層には、粗粒砂などが含まれており、堆積物の粒径が他の試料に比べるとやや大きい。一般的に粗粒堆積物と花粉や植物珪酸体などの微化石は、堆積環境における挙動が異なるため、同一箇所には堆積しにくい。096SKの4層では含まれる植物珪酸体量も少なく、植物珪酸体と同じような粒径である微粒炭も堆積しなかったと思われる。一方で、同じく暗褐色系の096SKの1層では多くの微粒炭が産出している。096SKの1層は砂であるが、中粒砂を主体としており、096SKの4層よりも粒径が小さいため、微粒炭も堆積しやすかったと思われる。また、微粒炭は人間活動や自然現象に伴う植物燃焼によって生じる。096SKの1層ではイネ機動細胞珪酸体が産出しており、稲作などの人間活動の痕跡が読み取れる。よって、焚火や野焼きなどの人間活動が他の層準よりも活発であったと推測され、微粒炭を生じさせる事象が多かった可能性も考えられる。

#### 《引用文献》

森 将志(2013)東畑遺跡のプラント・オパール分析。国際文化財株式会社編「畑間・東畑・龍雲院遺跡発掘調査報告：愛知県東海市」：115-116、愛知県東海市教育委員会。



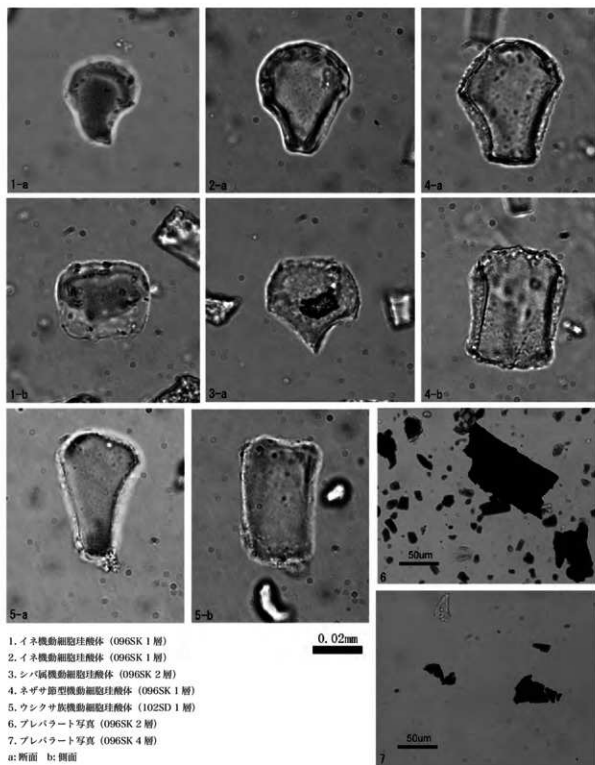


写真23 産出した植物珪酸体と微粒炭分析のプレバート写真

## 第4節 畑間遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林敏一  
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・森将志・小林克也・中村賢太郎

## 1 はじめに

愛知県東海市に位置する畑間遺跡において、遺構の時期を検討する目的で、遺構より検出された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

## 2 試料と方法

試料は、畑間遺跡3地点（HM14-3）の016SK、096SK、102SDより採取された。016SKでは、樹皮直下の最終形成年輪が残る炭化材を試料とした（PLD-29265）。096SKでは、遺構覆土のうち、第1層と第3層より検出された微小な炭化材片計2点を試料とした（PLD-29268、29269）。102SDでは、遺構内の黒土層より検出された微小な炭化材片1点を試料とした（PLD-29270）。096SKと102SDの微小な炭化材片は、3点とも最終形成年輪が確認できなかった。

測定試料の情報、調製データは第20表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29265	遺跡名：畑間遺跡 調査区：HM14-3 遺構：016SK	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29268	遺跡名：畑間遺跡 調査区：HM14-3 遺構：096SK 層位：第1層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29269	遺跡名：畑間遺跡 調査区：HM14-3 遺構：096SK 層位：第3層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29270	遺跡名：畑間遺跡 調査区：HM14-3 遺構：102SD 層位：黒土層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第20表 測定試料および処理

## 3 結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第92図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行う

ために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730\pm 40$ 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲		
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲	
PLD-29265	-29.05 $\pm 0.11$	128 $\pm 17$	130 $\pm 15$	1683-1700 cal AD (11.1%)	1681-1739 cal AD (27.6%)	
				1720-1735 cal AD (8.3%)		1745-1763 cal AD (3.3%)
				1806-1819 cal AD (7.4%)		1802-1892 cal AD (49.5%)
				1833-1880 cal AD (31.4%)		1908-1939 cal AD (15.0%)
				1915-1930 cal AD (9.9%)		
PLD-29268	-26.87 $\pm 0.16$	1984 $\pm 22$	1985 $\pm 20$	20-12 cal BC (6.7%)	41 cal BC-65 cal AD (95.4%)	
				0-55 cal AD (61.5%)		
PLD-29269	-24.00 $\pm 0.17$	2129 $\pm 22$	2130 $\pm 20$	200-152 cal BC (47.7%)	346-321 cal BC (5.0%)	
				138-113 cal BC (20.5%)	206-88 cal BC (87.3%)	
PLD-29270	-27.42 $\pm 0.14$	2747 $\pm 21$	2745 $\pm 20$	911-889 cal BC (25.8%)	930-831 cal BC (95.4%)	
				881-844 cal BC (42.4%)		

第21表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

#### 4 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して、遺構ごとに結果を整理する。縄文土器編年と暦年代範囲との対応関係については小林 (2009) を、弥生土器編年と暦年代範囲との対応関係については赤塚 (2009a, 2009b) を参照した。

016SKの炭化材 (PLD-29265) は、 $2\sigma$ 暦年代範囲が1681-1739 cal AD (27.6%)、1745-1763 cal AD (3.3%)、1802-1892 cal AD (49.5%)、1908-1939 cal AD (15.0%) で、17世紀後半～20世紀前半であった。これは江戸時代～昭和時代に相当する。

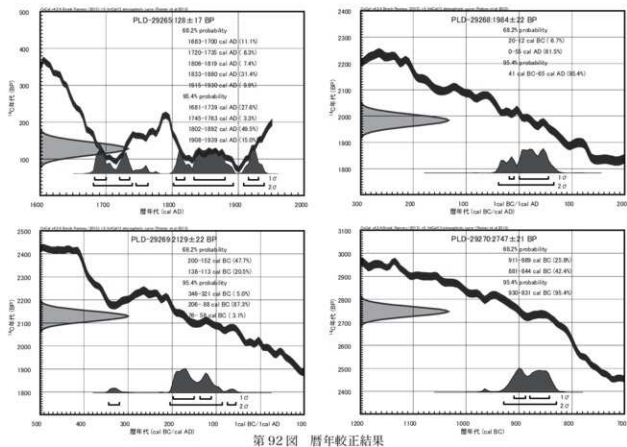
096SKの遺構覆土のうち、第1層より検出された微小な炭化材片 (PLD-29268) は $2\sigma$ 暦年代範囲が41 cal BC-65 cal AD (95.4%) で弥生時代中期～後期 (高蔵式～山中式ころ) 相当、第3層より検出された微小な炭化材片 (PLD-29269) は346-321 cal BC (5.0%)、206-88 cal BC (87.3%)、76-58 cal BC (3.1%) で弥生時代中期 (貝田町式～高蔵式ころ) 相当の年代であった。

なお、096SKの微小な炭化材片は、2点とも最終形成年輪が確認できないため、古木効果の影響が表れ、材の枯死年（伐採年）より幾分か古い年代が得られている可能性がある。

102SDの黒土層より検出された微小な炭化材片（PLD-29270）は、2 $\sigma$ 暦年代範囲が930-831 cal BC（95.4%）で、縄文時代晩期（稲荷山式～西之山式ころ）に相当する年代であった。なお、102SDの微小な炭化材片も、最終形成年輪が確認できないため、古木効果の影響で材の枯死年（伐採年）より幾分か古い年代が得られている可能性がある。

#### 《参考文献》

- 赤塚次郎（2009a）朝日遺跡標準層序の暦年代、赤塚次郎編「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第154集 朝日遺跡 VIII 総集編」：134-137、愛知県埋蔵文化財センター。
- 赤塚次郎（2009b）弥生後期から古墳中期（八王子古宮式から宇田式期）の暦年代、日本文化財科学会第26回大会実行委員会編「日本文化財科学会第26回大会研究発表要旨集」：14-20。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」：55-82、雄山閣。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20、日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haffidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.



第92図 暦年校正結果

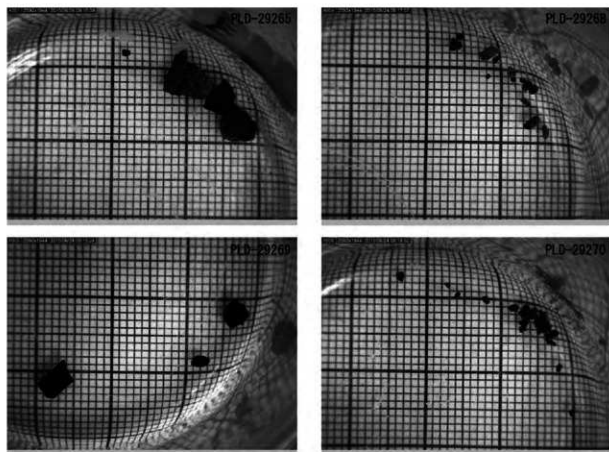


写真24 畑間遺跡放射性炭素年代測定試料(格子の最小目盛は1mm)

## 第5節 東畑遺跡出土木材化石の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一  
Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎

## 1 はじめに

愛知県東海市に位置する東畑遺跡より検出された木材化石について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

## 2 試料と方法

試料は、木材化石 1 点である。木材化石は、東畑遺跡 4 地点 (HH14-4) において、発掘調査終了後の埋設管工事に先立ち、ウェルポイント工法のためのライザーパイプ打ち込み時に噴出した堆積物中より採取された。噴出した堆積物は礫からなり、地表下 4～5m の深度より噴出した。測定試料の情報、調製データは第 22 表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 I.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29266	遺跡名: 東畑遺跡 調査区: HH14-4 位置: ライザーパイプ打ち込み時に噴出 層位: 礫層 深度: 地表下 4～5m 堆積物の特徴: 円礫～亜角礫 最大径 5cm 礫に生痕あり	種類: 木材 試料の性状: 最終形成年輪以外 樹皮に近い部分を採取 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

第 22 表 測定資料および処理

## 3 結果

第 23 表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、第 93 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

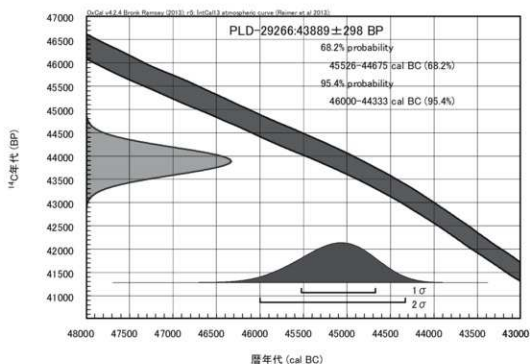
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730\pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-29266	-25.03 $\pm$ 0.14	43889 $\pm$ 298	43890 $\pm$ 300	45526-44675 cal BC (68.2%)	46000-44333 cal BC (95.4%)

第23表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果



第93図 暦年較正結果

#### 4 考察

木材化石は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $43890\pm 300$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.4%)が46000-44333 cal BC (95.4%)つまり47949-46282 cal BP (95.4%)であった。

木材化石は、生の木材に比べていへん硬かった。実体顕微鏡観察では、炭化がやや進行し、材組織が潰れていた。こうした特徴から、木材化石は亜炭と判断された。亜炭が形成される時間として4万数千年は短すぎると考えられる。

バックグラウンドを評価するために木材化石と同時に測定したIAEA-CI(大理石)の $^{14}\text{C}$ 年代はおよそ55000  $^{14}\text{C}$  BPであった。木材化石の $^{14}\text{C}$ 年代はIAEA-CIの値より新しい。しかし、古い試料ほど新しい炭素による汚染に対して敏感であるため、亜炭が新しい炭素により汚染された結

果として4万数千年前の年代が得られたと解釈できる。

木材化石は4万数千年よりもはるかに古い亜炭と考えるのが妥当であろう。なお、東畑遺跡の位置する知多半島に分布する中新世～鮮新世の東海層群は亜炭を産出する(吉田・尾崎, 1986)。周囲の東海層群に含まれる亜炭が河川による浸食で洗い出され、礫と共に堆積した可能性が高い。

《参考文献》

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.  
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代編集委員会編「日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。  
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.  
吉田史郎・尾崎正紀 (1986) 半田地域の地質。98p, 地質調査所。



写真25 木材化石片



写真26 測定用に切り分けた小片 (最小目盛1mm)



写真27 分析試料



## 第4章 まとめ

今回の発掘調査で炙り出されたさまざまな問題について、いくつかのテーマを採り上げて考察してみた。同時に、時期毎に主な課題を列挙し、今後への提言も含め、報告書のまとめとしたい。

### 1 黒色土の提起する諸問題

当地区の遺跡では、弥生時代の遺構特有の土色がある。すなわちそれは、黒色・黒褐色・暗褐色（『標準土色帖』では7.5YR2/1～2/3・同3/1～3/4、10YR3/1～3/4・同2/1～2/3など）を呈する埋土である。もちろん弥生期に属する全ての遺構埋土がこのような黒系の土色を呈するわけではないが、多くにこのような傾向が見られることは確かである。

黒色の由来に関しては諸説あるが、一般には含まれる有機物<sup>1</sup>によるものとされる。

3地点（HM14-3）096SK埋土を4層に分層して各層の土壌をサンプリングし、プラント・オパールと微粒炭をターゲットにした分析をおこなった。その結果、第1層～第3層には多くの微粒炭が含まれていることが明らかとなり、とりわけ強い黒色を呈していた第3層が最も多い数値を示した。これら微粒炭の成因は、人為的または自然現象に伴う植物の燃焼と考えられる。

プラント・オパール分析に関しては、結論から言えば弥生時代中期後半には遺跡周辺にイネが存在していた可能性を補強する結果であった。以前、平成23年度調査区4地点で発見された中期の土器棺内部の土壌から大量のプラント・オパールを検出したが、それらが例えば稲藁のような状態で他地域から持ち込まれた可能性や、直上に堆積した中世層からもたらされた可能性が指摘されていた。今回分析対象とした096SKの場合も直上には中世層の堆積がみられたが、プラント・オパールに関しては第1層からのみの検出であった。この第1層は15センチほどの層厚であったが、直下の第2層におけるサンプリングポイントとは垂直距離で15センチ弱離れているに過ぎない。土色は第1層が暗褐色、第2層が黒褐色と、見た目は第2層の方が黒く見えたが、微粒炭の含有量に関しては第1層の方が多かった。土質は第1層から第3層までほぼ同質の砂であり、第4層は粗砂の割合が若干高めであった。

以前プラント・オパールは透水層内を移動することがあるので検出結果の評価は注意すべしと忠告を受けたことがあるが、第2層におけるゼロ検出という結果は、少なくとも本遺跡においては上層からの混入の可能性が限りなく低いことを表している。報告者の森待志氏も、「同じ時期のいくつかの異なった場所でイネ機動細胞珪酸体が検出されるためイネ機動細胞珪酸体の産出は遺跡周辺の一般的な事象で、遺跡周辺におけるイネの存在を証明していると思われる。」（第3章第3節

1 植物が作り出したさまざまな有機物質で、動物や微生物の作用で土壌特有のものとなったもの。

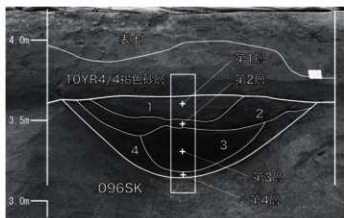


写真28 096SK 土壌サンプル採取位置

参照)と述べている。

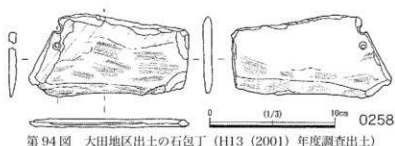
各層に含まれていた微粒炭の年代測定をした結果は、第1層の2σ暦年代範囲は41cal BC-65 cal AD (95.4%) = 弥生中期から後期、第3層は206-88cal BC (87.3%) = 弥生中期の年代を得ている。この二つの分析結果からみれば、東畑遺跡周辺においては少なくとも弥生時代中期後半までにはイネの栽培がおこなわれていた可能性が高いということになる。

しかしここで気になるのが、プラント・オパールとともに検出された大量の微粒炭の存在である。微粒炭の成因に関しては、「人間活動や自然現象に伴う植物燃焼によって生じる。」(同前)と報告されており、もし人為的な成因を想定するならば、例えば焼き畑農法に伴う陸稲種の栽培なども考慮すべきであろう。

陸稲(おかば)と水稲<sup>2</sup>は植物学的には差異は無く、陸稲でも水田で栽培すると収穫量が多くなるという。また、陸稲は種籾を直播きするので一般的な畑地での栽培が可能なることから、水田より管理は容易であるとされる<sup>3</sup>。

弥生時代当時、この第一砂堆周辺はその南側を圍繞するように大田川(旧河道)が流れており、砂堆東側に広大な低湿地を擁していたと考えられる。そこは北側からは渡内川が、東側からも小さな支流が流れ込む合流地点でもあるが、少なくともそのあたりまでは満潮時に海水が遡上する汽水域であったことが推測されている。よって塩水くさびや高潮などによる塩害の可能性を考慮した場合、低湿地部分が全て稲作水田化されていたとは考えられないが、周辺の支谷部には水田開発に適した地形も存在することから、大田の谷全体で考えれば砂堆上の弥生集落を支える程度の生産力はあったと言ってよい。同時に、日常的には集落内や隣接地でさまざまな生産が行われていたであろうから、狩猟・漁撈を除く農耕という分野に限っても、今後は縄文時代以来の伝統である各種根菜類の栽培や、焼き畑的な過程を伴った陸稲種の栽培も視野に入れた上で発掘調査や研究を進めるべきであろう。

ともあれ、大田地区の弥生期(中期)における稲作に関する現在までの調査成果としては、プラント・オパールの検出、籾殻および米粒圧痕の発見、石包丁の存在などと、状況証拠は揃いつつある。



第94図 大田地区出土の石包丁(H13(2001)年度調査出土)

次に微粒炭に関する分析結果関連としては、同時におこなった3地点102SD埋土の黒色砂からも大量に検出されており、その年代測定結果は2σ暦年代範囲が930-831 cal BC (95.4%)で、縄文時代晩期範疇という結果が出ている。この数値に関しては、先述した096SKの分析結果と

- 2 陸稲と水稲の違いはプラント・オパールでは判断不可能だが、炭化米が採取できれば窒素の安定同位体比( $\delta^{15}N$ )の差で判断可能とのこと。(パレオ・ラボ、中村賢太郎氏の御指示による。)
- 3 畑で作られるため連作障害が発生しやすく、雑草の除去が大変であることや、水稲以上に乾燥に弱いとも言われている。

もに、炭化材が余りにも小さいため古木効果の影響で材の枯死年より幾分古い年代が得られた可能性を指摘されているが、古木効果を配慮した場合でも数百年の誤差は考えられないことから、102SDの場合は弥生時代前期を下る年代は考慮しなくてもよいだろう。

ちなみにこの102SDセクションの堆積状況は奇妙で、ここに示す分層後の画像からもわかるように同心円状に土色のグラデーションがみられた(写真29)。土質は最下層の粗砂部分以外はほぼ全て中粒砂で、砂粒の違いからの分層は不可能であった。どのような条件下でこのような土色の在り方が生じるのかは、未解決のままである。

土壌サンプリングを行った第1層の中央部分は7.5YR2/1黒色と、今回の調査でみられた全ての遺構埋土のなかでいちばん黒味が強かった。含まれている微粒炭量も、096SK第2層に次いで多いという結果を得た。もしこの微粒炭も人為的な成因によるものとすれば、遺跡周辺における焼き畑系農耕の可能性が縄文晩期まで遡ることになり、重要なデータである。なおこの102SD土壌からはプラント・オパールは検出されていない。



写真29 3地点102SDセクション  
(堆積学的な分層でなく、土色による分層である)

## 2 古代から中世前半における相関する複数の問題

薬王山法海寺は知多市八幡の谷の砂堆上に存在する天台宗の古刹である。境内地全体が遺跡であり、古代寺院址としての一面も持ち合わせる歴代遺跡と形容すべきかもしれない。知られる限りにおいては、知多半島北部では唯一の古代寺院址と言ってよい<sup>4</sup>。

寺伝や縁起によれば寺の開創は新羅国明信王の太子道行法師によるもので、天智7年(668)のこととされている。荒唐無稽とも思われる縁起だが、法海寺遺跡の調査で出土した最古の瓦から年代を推測すれば白鳳期となり、奇妙に符合する要素はある。

法海寺の創建時期を白鳳時代と仮定すれば、大田から八幡の谷では北端に松崎遺跡のような製塩を中心とした生業の核と、南端に法海寺を中心とした信仰の核が存在していたことになる<sup>5</sup>。すでに7世紀初頭には築造されていた岩屋口古墳にも8世紀代の須恵器の追葬がみられ、仏教寺院の建立後にも言わば古式な信仰形態が存続していた様子をも窺い知ることができるのである。

同時に、第一砂堆の各地から断片的に出土する瓦塔に関しては、そのほとんどが猿投窯製品であり、8世紀代の年代が想定されている。第一砂堆上の調査結果を見る限り、古代の活動痕跡は極めて局所的であり、遺跡の動態を窺い知ることができないほど希薄な様相である。そのような言わば空白期間のなかでも8世紀から9世紀にかけては、須恵器を中心とした遺物が比較的多く発見されている。奈良時代から平安時代への過渡期に相当するこの時期には、日本各地に糸里制が布かれたことが知られており、知多市側の谷ではその痕跡とされる方形に区画された水田が整然と並ぶ様

4 東海市名和町のトドメキ遺跡では白鳳期の瓦溜め遺構が見つかったが、寺院の建築物に関連する遺構は発見されていないことから、寺院址としての扱いは除外した。

5 松崎遺跡と法海寺遺跡は直線距離で約4.5kmの距離がある。

子が、地形図の分析や地表観察の結果指摘されている。

これら知多市側の谷（沖積平野部）は東海市側より二倍ほどの面積を持つものの、復元される水田区画の規模は合計しても数十坪程度である。尾張平野部における島畑のような例もあり、溝で囲まれた区画や正方形区画の全てが水田であったとは言いが切れないが、大半は農作物の生産地であったと考えてよいだろう。一方東海市側の拠点集落は松崎遺跡で、言うまでもなく塩の生産を中心とした海浜集落が展開していた。このように、東海市から知多市にかけての谷の一つの文化圏または生産圏と捉えた場合、北部における漁撈を伴う塩生産と、南部における農作物の生産という役割の違いがより出されてくるのである。



(図説『知多平島の歴史』上巻より)  
 第95図 東海市南部～知多市北部の条里制遺構と土地条件

宗教的観点からみれば、かつて東畑地内に存在していた八劍宮をはじめ、『萊王山法海寺儀軌』で象徴的に語られているような、神剣を介した熱田神宮との密接な関係が、当地の古代末期から中世に通底する原理の要であるといっても過言は無い。

東畑に存在した旧八劍社について『張州雜志』には「祭神熱田八劍宮（中略）往古熱田ノ男神、暫ク此地ニ鎮座在リシ」という気になる記載がある。熱田神宮側の縁起には見られない動きなので、東畑の八劍社がより神格を高めるための付会であろうが、両社の直接的な関係を物語る一端と捉えたい。また、記録に残る熱田社領としては、大郷郷・御幣田郷・木田郷・藪郷・生路郷・英比郷・などがあり、これらが鎌倉時代から室町・南北朝時代にかけて次々と成立していく背景には、古代にまで遡る宗教的繋がりがあったとも言えよう。

大田の谷に限れば、北の丘陵上には天平勝宝元（749）年創建という伝説を持つ真言宗の古刹弥勒寺が、南側の木田の丘陵には大宝2（702）年創建とされる天台宗の古刹観福寺が存在し、第一砂堆に広がる集落や伊勢湾方面を睥睨していた。これら密教的な教線は現代まで保たれ、熱田社勢力を介さずとも直接畿内の有力寺院勢力との繋がりを有していた可能性がある。後に荘園領地や国衙領としてのまとまりを見せていく地域の先導役として、これらの寺院が果たしていた役割が解明されるべきであろう。

このような目に見えない繋がりを象徴する遺物としては、その一例として瓦類がある。極めて特徴的な文様である杏葉唐草文を持つ瓦は、大田地区の調査でしばしば発見されてきた。出土分布図を見ると一箇所に集中することはないが、砂堆東縁部の南北での発見が多いようだ。古くから観福寺と熱田神宮境内（神宮寺跡）での出土が知られてきた資料だが、その生産地が加木屋谷（社山古窯と論田古窯）である。近年の調査で、ここ大田の砂堆上でも発見が相次いだのだが、熱田社と当地の関係を雄弁に語る考古資料と評価することもできよう。同時に加木屋谷の古窯（社山古窯）で



第96図 大田地区出土の瓦塔・杏葉唐草文瓦当およびプラント・オパール検出位置

焼かれた瓦が、京都烏羽離宮の安楽寿院に納められていたことも明らかにされており、荘園における産物としての瓦の役割を推察できる。

現在までのところ大田地区で発見される瓦当は巴文と杏葉唐草文のみであり、加木屋谷の古窯址で見られた蓮華文や宝相花唐草文などは見つかっていない。文様の種類によって用途や流通先が厳密に決まっていた可能性を示唆する状況である。

遠隔地で生産された瓦が畿内にもたらされる例はいくつもある。伊良湖畔や備前・万富で焼かれた瓦が東大寺へ運ばれた事例はよく知られているが、これは源平合戦の戦火<sup>6</sup>を受け焼失した堂宇再建に関わる貢納である。万富例は勅進職に任命された僧重源が造営料国として賜った備前国吉岡郷で焼かせたものであり、その総生産量は数十万枚と言われている。生産量に余裕があったからこそこのことであろうが、岡山県内のいくつかの寺院でもこの万富産の瓦が確認されている。

一方加木屋谷で焼かれた瓦は寄進地系荘園の特産品として烏羽離宮に運ばれたものであり、万富例とは違う原理で流通したものである。一概に比較することは意味が無いことだが、大田地区から出土する瓦の量は生産現場である古窯址に次ぐものである。当然窯場での一次選別を経て運ばれてきた製品であるので、大田地区は遠隔地に向けて荷造りがおこなわれた場と考えるのが普通であろう。このような状況を想定してもなお、大田地区からの瓦の出土量は異常であり、中には一見焼成不良とも思われるような状態の瓦も含まれていることなどから、当地にもこれらの瓦を用いた堂宇(具体的には仏堂や官衙に類する建築物など)が存在していた可能性を指摘しておきたい。

瓦に関連して、もう一点言及しておかなければならないのが特殊な瓦のことである。なんと呼称すべきか分からないものなので、遺物観察表では「特殊丸瓦」などと表記しておいたが、前述した加木屋谷を中心とした古窯で焼成された12世紀末の丸瓦の内面に、把手または突起のような部分を付加したもので、部分も含めて今回5点出土した。用途や使用方法についてさまざまな研究者に尋ねてみたが、いまだに決定的な答えを見出していない。各古窯址の調査でも報告されておらず、道具瓦や建築部材としての実用例も無く、陶製の道具類という観点からも思い浮かぶものが無い。敢えて形容すれば、「丸木舟の中に魚の鰭を立てたような形状のもの」であるが、これではなんともしにくい。



写真30 特殊丸瓦 (291)



写真31 特殊丸瓦とその仲間たち  
(A・Bは無文瓦当平瓦)

6 治承4年(1180)の治承・寿永の乱で焼失した。

特殊丸瓦 291 の場合、丸瓦本体は外面に自然釉がかかり、内面の突起部も良く焼成されている。通常の方法で丸瓦を製作した直後、内面の中央に粘土板を立て、接合面周囲に大量の粘土を付加して裾部を形成したのだろう。中心線に沿う裾部は両端の立ち上がる角度が違い、両辺をそのまま延長していくとそれこそ鮫の鱗のような形状となる。途中から欠損しているために先端形状は不明だが、別の遺物に鬼の角のように尖った形状のものが存在することから、突起部にもいくつかのタイプが存在するらしい。いずれの例も丸瓦の内面に突起が存在することから、例えば屋根の「けらば」とか降棟、または隅棟のどこかに差し込んで使われたものではないかとの指摘も受けたが、具体的な使用方法や実例を知らない。もし建築物に葺かれた屋根瓦の一部や道具瓦などとして機能していたものであれば、古窯址の調査などで見出され報告されていてもおかしくないと思うのだが、調べた範囲では類例はみつからなかった。大田地区に古瓦を葺いた堂宇が存在していた可能性も含め、引き続き分析と調査を続けたい。

### 3 弥生中期後半の土器群と古式土器再編へのつながり

学史的な背景を含み広範な内容及ぶ問題なので、ここではごく簡易に記すことにする。

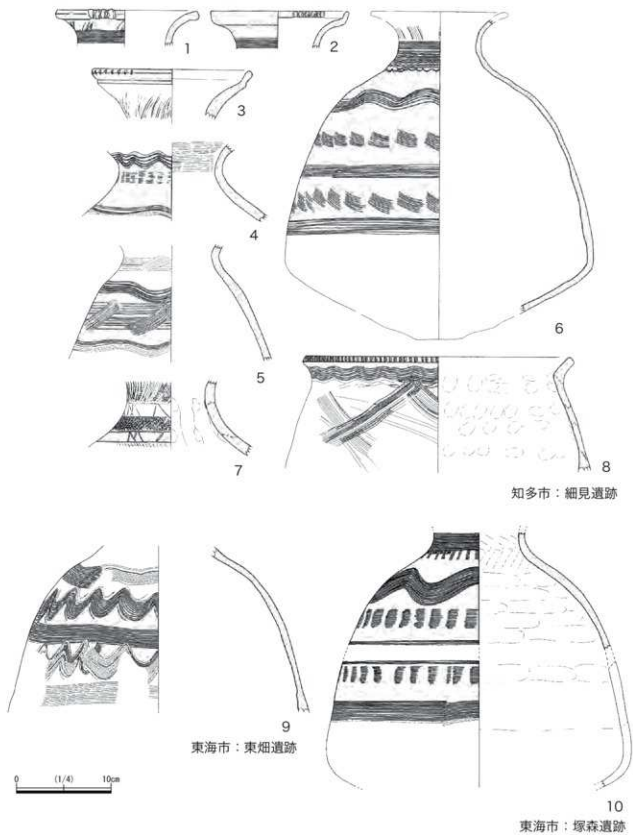
昭和 20 年代後半になると、地元の考古学研究者である杉崎章氏により、知多市八幡の谷の遺跡が次々と発掘調査されはじめた。養父・横須賀の谷から八幡の谷の低地にも三列の砂堆列が確認されており、いちばん奥の第一砂堆には東海市側に柳ヶ坪遺跡と、知多市側に野崎遺跡が、第二砂堆には獅子懸遺跡が、そしていちばん広い第三砂堆には荒古遺跡群や最南端に細見遺跡が存在する。昭和 29 年の野崎遺跡の発掘調査から、知多半島における本格的な弥生土器編年研究が始まったといってもよいだろう。

野崎遺跡で出土した土器は大きく三つに群別され、第一群は続水神平式（岩滑式）に朝日式土器がともなうもの、第二群は瓜郷式に類似したものと貝田町式が混在するもの、第三群は瓜郷式の影響を強く受けた地方色豊かな土器で、尾張の外土居式土器をともなうもの＝獅子懸式として報告されている。これらの分析は今から半世紀以上前のものである。

その後残念ながら、型式名祖の遺跡を擁する知多半島地域で獅子懸式土器の研究はほとんど深化されないうまま現在に至っている<sup>7</sup>。しかし、ここ数十年の大田地区を中心とした発掘調査の進展により、かなり多くの中期資料を得ることができ、中には遺構一括資料として検討に値する例も増えてきた。筆者にその詳細や個々を語る能力は無いが、中期以降の土器の組成で主体となる要素が西三河地域と同系であることは、今では多くの研究者が認めるところであろう。

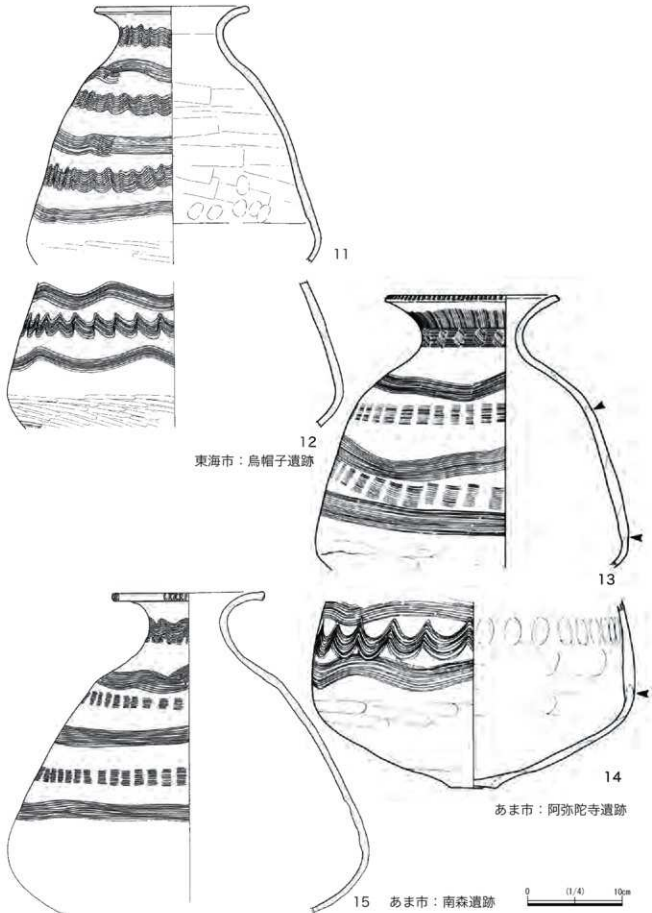
中期後半には尾張地域では凹線文系の高蔵式が成立し、三河地域でもその影響下に長床式が成立する。この時期には、上記二つの大地域の影響を受けた小地域も形づくられるようになり、知多半島から東三河にかけての地域では獅子懸式土器が、矢作川流域を中心に古井式土器が、豊川流域では下長山式土器が文化圏としての広がりをみせる。これらの土器は基本的に尾張の高蔵式と三河の

7 石黒立人氏は 1996 年の『烏帽子遺跡』報告書の付論「烏帽子遺跡をめぐる問題群」において、端的にこの問題点を指摘された。久永春男氏によって提示された三地域分立説のイメージが先行し、具体的な一括資料を用いた検証作業がほとんどなされていないことなどから、「極論すれば、現状では果たして知多半島で通時的に安定して弥生土器が生産されていたのかどうかということさえ検討課題と言わねばならないのであり、そもそも知多半島に固有の土器型式あるいは様式が分布しているということさえも疑わしくなってきたのである。」とも述べられている。



第97図 各遺跡出土の獅子懸式土器(1)





第98図 各遺跡出土の獅子懸式土器 (2)

瓜部式が接触を重ねるうちにそのゆらぎの中から発生したもので、それぞれの個性が発露した背景には大地域との関係性や紐帯の変化とともに、自然環境の変化なども大きな要因であったと思われる。

今回石黒立人氏に分析していただいた鹿線刻画を持つ壺は、その特徴などから中期後葉古井式と評価された（付載1参照）。知多半島地域と隣り合う矢作川流域の交流に関しては、例えば拠点集落であった西尾市岡島遺跡の周溝墓において長床式土器と獅子懸式土器の共伴が確認されるなど、小文化圏間の日常的な交流が想像される。特徴的な獅子懸式の壺は尾張平野からも出土し、例えばあま市基目寺町阿弥陀寺遺跡例や南森遺跡出土例は海上から運ばれたものであろう。

後期に入ると知多半島地域でも高所にまで遺跡の拡散が見られ、列島規模の大きな動態に巻き込まれていく様子が想像出来るが、何らかの再編を経て古墳時代前期までには再び低地部の集落が復活する。大田地区においては、S字状口縁台付甕が出現する頃には東畑地内に遺構や遺物が集中する地点が出現し、大田川旧河道に面した砂堆南部に集落が営まれたようである。

今回の調査では廻間式～松河戸式期の住居址を検出することができたが、幅広床下周溝を持つ住居址（014SD/027SZ）は初めての発見例となった。ほぼ同時期の008SB床面から出土した甕（201）の特徴に関しては第2章第4節の3に詳しく書いたが、この頸部に付加した粘土紐の輪積み痕を意図的に残す一群の土器は、琵琶湖沿岸から大垣市荒尾南遺跡や、西三河のいくつかの遺跡、豊橋市の若宮遺跡にも類例があることを、石黒立人氏よりご指摘を受けた。東畑遺跡からの出土例は、この特徴的な土器が東方に進出していく過程を示すものであり、貴重な発見となった。

前期古墳は名和町の兜山古墳のみであり、それ以南の知多半島部では発見されていない。天白川河口周辺はアユチ潟文化圏であり、大田地区以南の知多半島部とは異なる領域という印象はある。縄文以来の伝統でもあるが、知多半島地域は尾張と三河という大領域の中間にあって、常に両者の影響を受けながら独自の個性を育んできた地域である。これからの研究では、例えば獅子懸式土器に象徴されるような地域の特色を各段階で見出したり、他地域から伝播してきた粘土紐の輪積み痕技法の甕を受容した母体の土器組成や集落の構造を解明していくべきであろう。

#### 4 縄文時代について

縄文時代の遺物としては、2地点における咲畑式土器の発見が注目される。中期の資料としては以前に報告した北裏C1式土器が最古のもので、咲畑式はそれに次ぐものであり、第一砂堆地域に中期の遺跡が存在する可能性を示唆している。同時に、後期凹線文系の土器も発見されたが、この段階の資料は初めての発見となる。

また、数片であるが下別所式など晩期初頭の可能性が高い資料が発見された意味は大きい。さらに、3地点102SDが年代測定結果通り晩期の遺構とすれば、こちらも大田地区では初めての発見となる。

#### 5 中世の諸問題

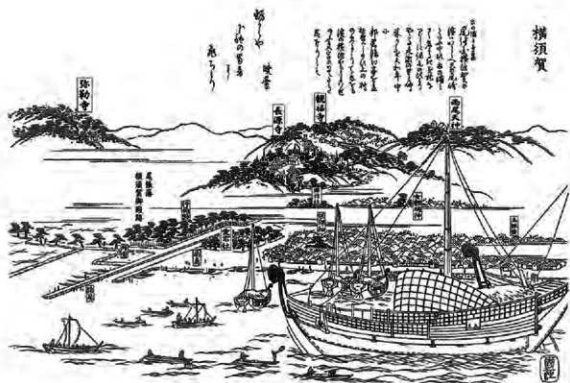
従来同様、13世紀後半における地元常滑窯製品の減産に伴い、瀬戸・美濃窯や浪投窯製品が数多くもたらされていた様子が追認されたが、これら陶器類を鑑定していただいた愛知学院大学の藤澤良祐氏によって、山茶碗の一部に渥美窯製品が存在する可能性を指摘された。今回は具体的に図

示できなかったが、過去の出土遺物も含め、陶器類の産地特定はより慎重におこなわれるべきであろう。

## 6 近世の諸相

大田集落の郷中周辺で近世の生活を物語る大量の陶磁器が発見された(1地点)。地元常滑や瀬戸・美濃産の陶磁器を中心に、火鉢、鬘皿、灯明皿、手塩皿、握ね鉢、茶碗、湯呑みなど、庶民の生活を彷彿とさせる豊富な器種がみられた。また、旧八劍社境内地であった3地点からは、江戸時代後半に神社の建物で用いられていた瓦や社殿に供えられていたであろう小皿などが出土し、巨木の抜根痕とともに往時の八劍社の様子を偲ばせる様相が明らかになった。

八劍社は明治42年(1909)大宮神社に合祀され、近隣に名を馳せた境内の巨木も全て抜かれて競売にかけられた(『横須賀町史』1967)。旧八劍社境内を画していた江戸時代以前から続く瀬古道(生活道路)も、今回の中心街整備によって今やほとんど姿を消しつつある。



＊尾張名所圖繪「横須賀」に一部加筆

《参考文献目録》

- 『八幡のむらのおいたち』八幡町史資料第2集 1956 八幡町史編纂会編  
 『権現山古窯址』白菊古文化学報第2集 1965 白菊古文化研究所  
 『横須賀町史』1928 愛知県史蹟編纂会・知多郡横須賀町役場発行  
 ○『横須賀の道跡』横須賀町史別冊 1956 横須賀町史編纂委員会  
 『横須賀町史』1967 横須賀町役場  
 ○『高ノ御前道跡第3地点試掘調査報告』『中ノ池道跡群発掘調査報告書』付載1 1982 東海市教育委員会  
 ○『塚森道跡』松崎貝塚第2次発掘調査報告書』付載 1984 東海市教育委員会  
 ○『ト、メキ道跡』1988 東海市教育委員会  
 ○『愛知県東海市東郷道跡等試掘調査報告』1997 東海市教育委員会  
 ○『知多赤松寺道跡発掘調査報告』1998 東海市教育委員会  
 ○『大木之本道跡第Ⅱ地点発掘調査報告』1998 東海市教育委員会  
 ○『上原田道跡発掘調査報告』1999 東海市教育委員会  
 『細間・東郷道跡発掘調査報告』2009 東海市教育委員会  
 『平成22年度 細間・東郷・郷中道跡発掘調査報告』2012 東海市教育委員会  
 『細間・東郷・郷中道跡発掘調査報告』2012 東海市教育委員会  
 『細間・東郷・郷中道跡発掘調査報告 —平成11～19(1999～2007)年度調査—』2014 東海市教育委員会  
 永井伸明・宮澤浩司『伊勢湾を望む海辺の道跡-東郷道跡等発掘調査概観-』『研究報告とうかい』創刊号 2007 東海市教育委員会  
 宮澤浩司『伊勢湾を望む海辺の道跡(2)-平成19年度細間・東郷道跡発掘調査の概要-』『研究報告とうかい』第2号 2009 東海市教育委員会  
 立松 彰『柳ヶ坪道跡第3次調査報告』『研究報告とうかい』第5号 2015 東海市教育委員会  
 『法海寺道跡 知多市文化財報告書第15集』1979 知多市教育委員会  
 『細見道跡(第三次発掘調査)』1986 知多市教育委員会  
 ○『阿弥陀寺道跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 1990 愛知県埋蔵文化財センター  
 \*『鳥帽子道跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第117集 2003 愛知県埋蔵文化財センター  
 『愛知県知多半島道跡詳細分布調査報告書』1999 愛知県教育委員会  
 『愛知県史資料編1 考古1 旧石器・縄文』2002 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史資料編2 考古2 弥生』2003 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史資料編3 考古3 古墳』2005 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史資料編4 考古4 飛鳥～平安』2010 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史別編業業1 古代 旗投系』2015 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史別編 中世・近世 瀬戸系』2007 愛知県史編さん委員会  
 『愛知県史別編 中世・近世 常滑系』2012 愛知県史編さん委員会  
 『知多の古瓦』1993 半田市立博物館  
 『日本の地質 中部地方2』1988 共立出版株式会社  
 『モノリス・真下の宇宙』INAXミュージアムブック 2008 INAX出版  
 前川明久『熱田社の起源について』法政史学15 1962 法政大学史学会編  
 藤本元啓『中世熱田社の構造と展開』2003 統群書類従完成会  
 池橋宏『創作の起源 イネ学から考古学への挑戦』2005 講談社選書メチエ350 講談社  
 井上新太郎『木瓦葺の技術』複製版 2009 朝国社  
 山崎信二『瓦が語る日本史』2012 吉川弘文館  
 杉崎章『知多半島における古代漁村集落の土曜』『古代学研究』第15・16号 1956 古代学研究会  
 杉崎章・河合克己監修『図説 知多半島の歴史』1995 株式会社郷土出版社  
 杉崎章『東海地方の古代海浜集落』『知多古文化研究2 磯部幸男先生追記論文集』1986 知多古文化研究会  
 柴垣秀夫『十二世紀の常滑窯の瓦生産業』水原慶二編『常滑焼と中世社会』1995 小学館  
 増子康訓『愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推察』『古代人63』2003 名古屋考古学会  
 石黒立人『鳥帽子道跡をめぐる問題群』『鳥帽子道跡』1996 愛知県埋蔵文化財センター  
 \* 石黒立人『弥生集落史の地平 その2』2004 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第5号  
 \* 石黒立人『伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について』2006 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第7号  
 \* 永井邦仁『東海地方の古代瓦塔研究ノオト』2006 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第7号  
 \* 永井邦仁『旗投壘型瓦塔の展開(Ⅰ)』2008 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第9号  
 \* 永井邦仁『尾張国陶器の研究(Ⅰ)』2013 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第14号  
 \* 永井邦仁『愛知県における中世瓦の展開とその特徴』2014 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第15号  
 \* 赤塚次郎・早野浩二『松河戸・宇田様式の再編』2001 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第2号  
 \* 早野浩二『臨海の古墳時代集落 —松崎道跡の歴史的素顔—』『研究紀要第6号』2005 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
 \* 鬼頭 剛『濠尾平野における道跡基盤群の14C年代値』2006 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要 第7号

○印は全国道跡報告総覧(奈良文化財研究所)のホームページからダウンロード可能なものです。url=http://sitereports.nabunken.go.jp/ja

\*印は愛知県埋蔵文化財センターのホームページからダウンロード可能なものです url=http://www.maihun.com/top/

付 載



## 愛知県東海市東畑遺跡の“鹿”線刻画をめぐる断想

石黒立人（愛知県埋蔵文化財センター）

## 1. 本資料の特徴

以下で検討するのは、平成 26 年度 4 地点拡張区から出土した鹿の線刻が施された壺片である。

壺片は、胴部大形破片の他に部分的な接合にとどまる破片等からなるので、出土地点で破損したものではないようだ。胴部の円周 2 分の 1 程度が残存し、径は約 24cm とやや小さい中形である。同区からは底部片も出土しているが、砂粒の含み具合がやや異なるので同一個体と判断できない。頸部につながる破片は無い。

図化は、胴部最大径の屈曲部を含み下胴部に及ぶ大形破片についておこなった。鹿の線刻をのこす破片は別破片で胴部の上位にあたり、掲載図は合成である。

胴部外面はナデ仕上げで、屈曲部から下が横方向、上位が左上がりに施され、強いナデが凹面をつくっている部分もある。ハケメの条線痕は認められない。一部に指紋の条線を残しており外面の

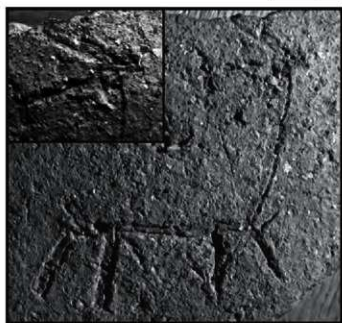
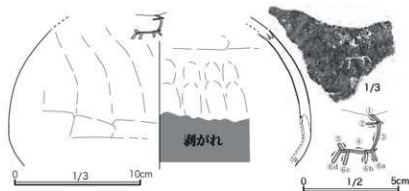


図1 東畑遺跡出土の鹿線刻画土器片

残存は良好である。砂粒の移動が上部に認められるので、線刻前に再度器面を整えた可能性もある。内面は残存部に指押圧痕が顕著であるが、外面と対照的に大半は剥落して器壁も薄くなっている。部分的に擬口縁が認められる。

色調は、外面が灰色からくすんだ黄褐色、内面の残存部は灰色である。剥離部分は風化が著しい。長石や石英の砂粒を多く含むが雲母は目立たないのが在地産であろう。

鹿の線刻は、タテ・ヨコ 3cm の範囲に、単沈線で右向きに施されており、頭部上端をわずかに欠くようである。沈線は幅 1mm 強で両縁が深くなり、その部分が平行する条線を

なす。条線間は盛り上がって断面が弧状を呈する。よって、工具は接着面の屈曲度合いからみて管状の茎をミカン割りしたものを使用しているのであろう。

掲載図には砂粒の移動によって認定した工具の動きを図示した。鹿の頭部はV字形で①②と描く。②の幅は狭く、切り込み状で深い。長い頸部③は浅く、平行する条線もやや不明瞭である。それより深い胴部④は描き始めの右端が鋭く尖ったままで消えていない。左上がりに立つ尾⑤の後に足⑥が描かれている。足を描く順序は不明だが、前足⑥a・⑥bは後足⑥c・⑥dと異なって工具が斜めに当たって②と同様に深い。つまり、沈線の調子は、③⑤と①④/⑥c⑥dが深さで、それらと②/⑥a⑥bは工具の当て方が異なる。その違いが描き分けであったのか、単に工具の持ち方の違いであったのかどうか問題になろう。

さて、鹿の線刻が施された壺片の帰属時期は、体部が無紋のため直接判断する材料は形態以外に無い。もし、貝田町式壺の模倣品であれば弥生中期後葉でも古い段階だがナデ仕上げで無紋ということはないので、古井式の後半になろう（中期3区分なら中期3a、もしくは中期3c、中期4区分なら中期4aもしくは中期4cとなる）。

## 2. 関連資料の変遷と分布

### (1) 伊勢湾岸域から以東

伊勢湾岸域の鹿線刻資料は、西岸域において弥生中期に遡る資料はこれまでのところ不明である。濃尾平野では東部の朝日遺跡や西部の稲沢市一色青海遺跡から弥生中期3に遡る資料が出土しているものの、名古屋台地周辺以東では名古屋市高蔵遺跡が知られているにすぎない。より東方の太平洋岸では、浜名湖東岸の浜松市角江遺跡、安倍川を越えた静岡市川合遺跡、さらに関東南部の相模湾岸域では平塚市北金目塚越遺跡、藤沢市伊勢山遺跡（荷台地遺跡群引地脇遺跡第一地点）、横浜折本西原遺跡・同藤林遺跡等の複数の資料があり、これらの分布のまとめが70～100kmの間隔をなす遠距離である点が注目される。伊勢湾岸域における弥生中期後葉の鹿表現は、頭部・頸胴部とも単線表現（a類：図4●表示）の高蔵例が最も単純で、以東では太平洋岸域の角江遺跡・川合遺跡・藤林遺跡と同類がある。そして、これらに頭部・頸部単線に胴部三日月形表現（b類：図4▲表示）が伴う点は重要である。

高蔵例は壺の胴部片で、鹿が3頭群れる。左側の上下に微妙に重なって単線Y字の頭部に頸胴部単線が2頭、その右に胴部の前後足間に下線が追加されて複線となる鹿線刻がある。下弧線に前後の足の上端を重ねるのがb類なので、これはそれと異なりa類でもb類でもない。いずれの鹿も明確な尾を欠き、右の鹿は左足が胴から弧を描いてつながる一筆描きになっている。なお、土器片の左端にも縦の沈線があり、頸部ならさらに頭数は増えることになる。

問題はこの線刻が施された壺の帰属について単純に貝田町式系といえない点である。色調は明るくハケメ仕上げで、施紋も貝田町式に共通する櫛工具によるが、先行する縦帯櫛描紋は左右に揺れ、左回りの横帯櫛描紋も上下に揺れて末端が横帯からはずれ、胴部の傾斜も強いなど多くの点で古井式に類似しているからである。技術基盤は明らかに貝田町式にあるとしても、古井式の要素も備えており両者の《折衷》となっている。高蔵遺跡ではF地点出土の台付甕口縁部の部分圧痕など古井式に共通する要素が認められ、同類は知多半島北岸にも分布して、かつて「獅子懸式」の一部とされたこともある。それを含めて貝田町式と古井式の折衷型が分布するエリアに鹿線刻画が存在す





左上：土器片左端の沈線 右上：鹿全体  
 左下：鹿頭部 右下：右の鹿

図2 高蔵遺跡出土の鹿線刻土器片

ることは東畑例への連続を考える上で重要である。

濃尾平野西部、朝日遺跡の西約10kmに位置する一色青海遺跡からは2例出土している。土製垂飾は頭部単線V字で頸胸部も単線（a類）として報告されたが、当の報告書の写真を見れば三日月形輪郭線のb類である。もう1例は筒形容器片の側面に6頭を右向きにして上下に配置するもので、頭部単線変形Y字のb類描線を下書きにしてベンガラ（酸化第二鉄）赤彩する正しい意味での「絵画」資料である。身の半分と口縁部付近が欠損しているため、最上段の鹿の頭部表現と全体の頭数は不明である。弥生後期には濃尾平野でも赤彩表現が盛行するが、一色青海例のような具象表現はない。

朝日遺跡では弥生中期から後期にかけての資料が出土している。そのうち中期3に属す資料は、①凹線紋系壺の胴部片（左向きの鹿の後ろ足付近：b類）、②貝田町式系の櫛描紋壺（双頭の鹿+1頭：b類）、③筒形土器（左向きの鹿5頭のうち左端が角枝をもつ：d類）の3例で、②③が注目される。②は胴部の櫛描直線帯の施紋工程中に組み込まれており、まず上段の横帯を描いて左側は双頭に、右側は頭部を描かないまま下段に横帯を重ねて頸部の線刻が櫛描紋の下に埋め込まれている。双頭は異例だが、左右に頭を向ける点は次に触れる吉武高木例との共通点である。③は筒形土器の外面を綾杉紋と複合鋸歯紋で横帯構成に配置する中に組み込まれたもので、施紋の繊細さは銅鐸表現を彷彿とさせる。とはいえ銅鐸絵画にはd類が無い点で区別されるが、ともかく近畿に関する資

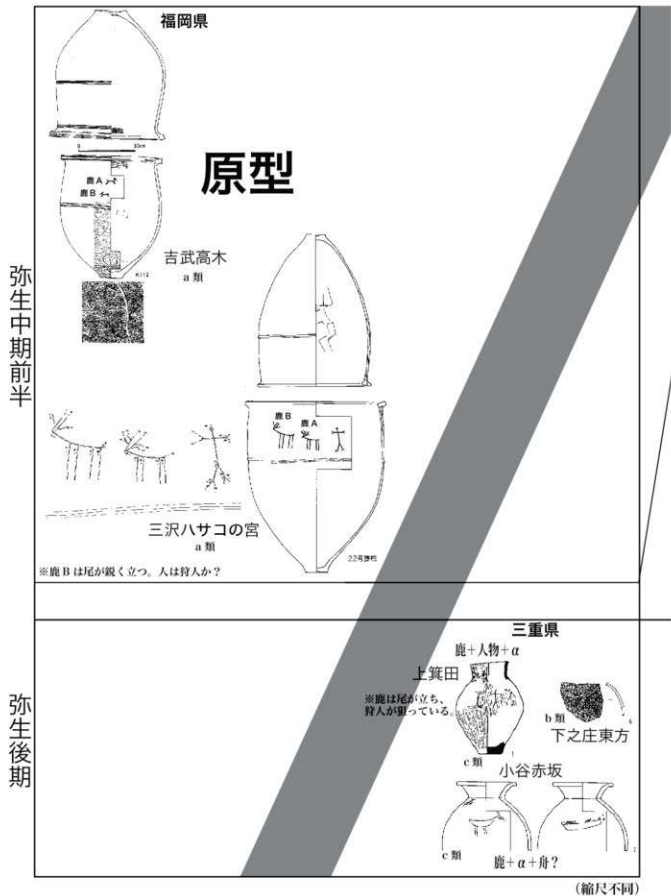
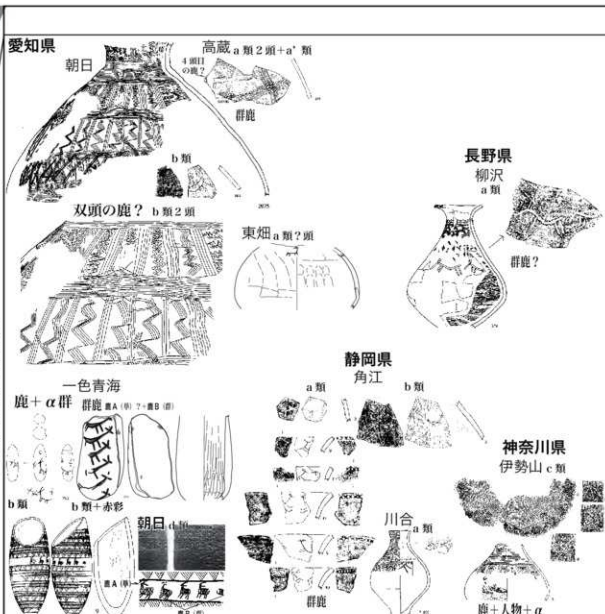


図3 北部九州及び伊勢湾岸以東を中心とする主要な鹿彫刻土器の変遷

弥生中期後葉



弥生後期



古墳中期



(縮尺不同)

料であり、朝日遺跡の相関の一端を垣間見ることができる。

上記 a・b 類は一色青海遺跡の筒形土器を除いて頸部が異様に長く、また胴部へは角度をもって折れる点で共通している。奈良県唐古・鍵遺跡にも胴部三日月形輪郭線に斜格子紋による体内充填の d 類で、頸部が単線で長いく似たものがあるが、唐古・鍵遺跡との関係性を考慮すればこれらは地域的な特徴である可能性がある（奈良県立橿原考古学研究所 2003）。

なお、伊勢湾岸域の a・b 類は、朝日遺跡では弥生後期まで存続し、b 類はさらに古墳中期（北名古屋市高塚古墳の埴輪）まで続き古式が継承されている。

## (2) 伊勢湾岸域から以西・以北

以上のように濃尾平野では頭・頸部単線の a 類・b 類が基調であり、深澤芳樹が指摘するように a 類は北部九州に辿れるのであろう。

北部九州の初例（原型）は確実に弥生中期初頭に属し、弥生前期まで遡る可能性もあるという。ともかく、伊勢湾岸域より遙かに時代を遡ることは確かである。福岡市吉武高木遺跡の上下外向き 2 頭の鹿のうち、上が明確に角枝をもち下と異なる。それが果たして角の有無（オス・メス区分）を示しているのか。橋本裕行は牡・牝と判断し（橋本 1996）、常松幹雄も「上は、枝分かれした角をもつ牡鹿で、下は、角のない牡鹿か角の生えていない時期の牡鹿であろう」（常松 2006:p.318）とする。「角の生えていない牡鹿」という考え方は佐原 眞や春成秀爾にもとづくが、他方で桑原久男によれば唐古・鍵遺跡を基準に「角のあるシカ」と「角のないシカ」の描き分けは厳密であり、



図 4 鹿線刻土器の分布

「絵画土器ではシカの耳は原則として描かない」（桑原 2015：p.105）というのであれば、どちらもオス鹿となる。小郡市三沢ハサコの宮例は角枝 1 本と 2 本なので明らかにオス鹿 2 頭となるが、この場合は角枝の描き分けが気になる所である。他方、小郡市大板井例は同じ表現の 2 頭であり、橋本流ならメス 2 頭、桑原流ならオス 2 頭となる。

角枝の無い V 字形頭部をメス鹿とする佐原流は、春成秀爾以下多くの指示を得て主流であり、安藤広道も同門である。それに対して桑原は頭部 V 字形も「角のあるシカ」とし、ほとんどがオスであるとする。この場合角枝の有無はオスの成熟と若年の違いということになるが、果たして後出の唐古・鏡例が基準になるのどうか時期差の問題は残る。これらに対して深澤は、角枝の無い鹿を「角耳」に一括してオス・メスを区別せず、それに対して桑原久男が苦言を呈する（桑原 2015）。

本稿では雌雄にこだわらず 2 頭 1 対である点を重視して、両者に差異がある場合に角枝有り（もしくは枝が多い）を鹿 A、角幹のみ・深澤の「角耳」（もしくは枝が少ない）を鹿 B とする。よって、吉武高木例は [鹿 A + 鹿 B]、小郡市三沢ハサコの宮例は [鹿 A + 鹿 B + 人物]、同大板井例は区別が無いのでただ「群鹿」（佐原 1980）となる。

この他に鹿 A と鹿 B の区分は、島根県美談神社下遺跡（a 類：[鹿 A + 鹿 B] 2 単位）、和歌山県太田黒田遺跡（d 類）、奈良県清水風遺跡（c 類：鹿 A（単）+ 鹿 B（群）+ 巫女・人物）、石川県宮永遺跡・朝日遺跡（d 類：[鹿 A（単）+ 鹿 B（群）]）等があり、極めて広域に及ぶ点が注目される。

「群鹿」の場合には、配置の切れ目が不明確な石川県八日市地方例は「尾を立てる鹿」が「矢を射る人物」の近隣に位置する以外に差異は無い。別に鼻先表現がへ字形とそうでないものもあるが、むしろ [矢を射る人物 + 尾を立てる鹿] の組み合わせに注意する必要がある、安藤が指摘するように矢の先に逃げる鹿が群れをなすと見れば、この人物が起点となる。佐原は早くに伊勢山例、上箕田例、広島県新迫南例、佐賀県川寄若宮例の関連性に注目し「神奈川県から佐賀県まで似た構図が、そしてひいてはそれにまつわる物語りがひろがっていることになる」（佐原 1980：p.110）と評価している。

### (3) 分布の特質と意義

分布の点では、弥生中期までは a 類が北部九州に始まって以降、東方へは日本海沿岸を通り北陸

陸を經由して長野県北端の中野市柳沢遺跡（b 類：群鹿？）、太平洋岸は名古屋市高蔵遺跡（a 類：群鹿？）、東海市東畑遺跡、浜松市角江遺跡（a 類：群鹿）、静岡市川合遺跡、横浜市藤林遺跡へと非常に疎らな線態を形成する一方、a 類が分布しない瀬戸内から近畿では c 類・d 類が面態を形成するだけでなく、d 類も多様化が顕著となる。a 類の起源地となった北部九州は、その後土器の鹿線刻例が低調となる中で糸島

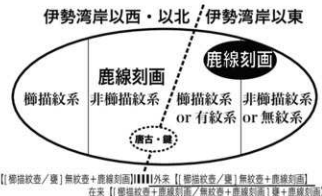


図 5 鹿線刻画の土器相

市上籬子遺跡から弥生中期から後期に属す鹿線刻木製板が出土したが、そこに a 類は無く瀬戸内・近畿と同様の c・d 類が踊っていた。

いっぽう近畿の d 類は表現の多様化が進む。それに対して深澤は鹿線刻の写実性を指摘するが、写実性に多様性をからめれば“絵画”化を意味するものとなる。しかし、それでも「尾を立てること」に限れば、むしろ写実性と離れて図像の意味（的世界）を厳密に規定するものといえる余地はある。

つまり、ここには a 類の時空的な反復によって意味を規定する“記号”的（原型の保持）関係と、そうではなく表現が多様となる“絵画”的（表現の自由化）関係の二つのベクトルが存在する。それは《“絵画”から“記号”へ》（あるいは、“具象”から“抽象”へ）という進化論ではなく、鹿線刻をめぐるのは反復を基調とする[“記号”から“記号”へ]という厳格な境界設定と内的かつ外的な変化を伴う[“記号”から“絵画”へ]が弥生中期までは明確に区別されていた可能性がある。高床建物の線刻表現が噴出する瀬戸内から近畿において金岡 恕が指摘するように「稲倉」（あるいは「穂倉」）が象徴化されているとするなら、それは a 類が属す世界とは別の世界にみえる（金岡 1985）。

もちろん、北部九州の初現例と東方の資料には時間的な空隙があり、現象としてなめらかに連続するわけではない。そうではあるが、むしろ時空の裏を超えて原型が保持されているところに、土器面における悠久不変の形象化のそもその根幹となる「語り」を含めた身体技法の継承を考慮する必要がある。

ただし、以上の点はあくまで弥生中期までを対象とした議論であり、弥生後期については新たな視点を必要とする。しかし、それでもなお濃尾平野において a 類や b 類が存続する点には、濃尾平野における内的変化が小さいという点以上に、それを選択する社会的強度（“記号”としての不易性）が表れていると考える。

### 3. 鹿線刻画の意味

#### (1) 土器論から

鹿線刻画は、初現の北部九州では甕棺に施された。墓葬専用土器だから墓葬に関わるものと考えるのが当然だが、それでも鎮魂を超えて農耕儀礼に関わるというのでは土器論を超えている。

その後、弥生中期中葉以降の鹿線刻画は中四国・近畿では無紋の壺に施されるのが基本となる。甕棺との関連で無紋壺が《非日常》と言えるのか簡単ではないが、そもそも壺の有紋・無紋の対関係において中四国では弥生中期前葉まで壺・甕ともに有紋で無紋器種が周辺的であったのが、弥生中期中葉に甕が無紋化する中で櫛描紋壺も無紋化が進む経緯に要点がある。

無紋壺は日常的な枠内において[櫛描紋壺/甕]の対関係とは別に新たな位相を獲得し、そこに鹿線刻画が重なったと安藤広道は指摘する。まず【[櫛描紋壺/甕]無紋壺+鹿線刻画】という関係があり、それが櫛描紋壺に対する甕と無紋壺の関係が揺らいで【[櫛描紋壺/甕]甕 or 無紋壺+鹿線刻画】と拡張することも有り得る。甕の口縁部内面に「群鹿」線刻画が施された角江例も決して特殊なものではなく、無紋壺の多くが煮沸痕を残す点にも示されているように、両義的というより櫛描紋土器相における[壺/甕]カテゴリーの周辺現象として【[櫛描紋壺/甕]無紋壺+鹿線刻画】が【[櫛描紋壺+甕]無紋壺+鹿線刻画/甕+鹿線刻画】を派生させたといえるのではないかと。

ところで、櫛描紋系土器が玉作を伴い典型的に成立する石川県八日市地方遺跡では、条痕紋系

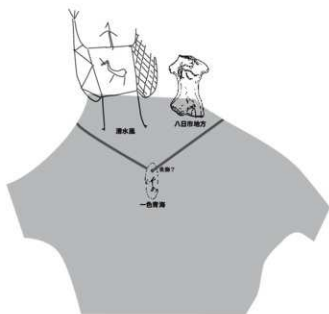


図6 鹿線刻画が占める場所

土器衰微後にハケメ調整を基調とする〔櫛目紋壺／甕〕（A系統）と〔無紋壺／甕〕（B系統）の対関係が確立する。B系統の壺が初期にはハケメ工具で連弧紋や直線紋が施されている点は条痕紋系土器の系譜にあることを示すだけでなく、〔壺／甕〕の頸胴部の調整や口縁部仕上げが共通する点も同様である。そのB系等壺に鹿線刻画が施される点に、近畿以西と同様に非櫛目紋系土器的存在であることが示されている。

伊勢湾岸以西・以北における〔櫛目紋壺＋甕〕と位相を異にする〔無紋壺＋鹿線刻画〕の関係は、濃尾平野周辺では凹線紋系土器波及期に〔櫛目紋壺＋鹿線刻画〕の関係に置換する。それは、凹線紋系土器における〔櫛

目紋系／非櫛目紋系〕の対関係ではなく、凹線紋系土器をも包括するより大きなカテゴリー区分である〔外来系土器／在来系土器〕の対関係において後者に鹿線刻画が組み込まれたことを示す。構造的には八日市地方遺跡の〔A系統／B系統〕とパラレルであり、それを「二重構造」と呼べるなら近畿にも存在した可能性が高い。その点では、桑原久男が指摘した〔櫛目紋型器種／非櫛目紋型器種〕の対関係は、弥生後期に顕著となる土器粗雑化の前段としての無紋化ではなく、「二重構造」を生み出す基盤としての異系統の併存への視点を構築する必要性を示している。

一方、「琵琶湖地方」南半部では櫛目紋系土器とは異系統である「ハケメ紋系土器」が凹線紋系土器波及期に至って土器相が崩壊することなくむしろその特徴を一層強めており、八日市地方遺跡のように統合されず「二重構造」にはならない。そうであるからといって〔外来系土器／在来系土器〕の相互影響による構造化も見受けられない。その点が男女一對の木偶が盛行することと土偶形容器の出土に、また「ハケメ紋系土器」に鹿線刻画が見当たらないことに深く関係するように思える。つまり、琵琶湖地方には〔櫛目紋型器種／非櫛目紋型器種〕や〔外来系土器／在来系土器〕とも異なる構造が存在し、その点で近畿西部や伊勢湾岸域とは大きく異なるのだと考える。

伊勢湾岸域では凹線紋系土器期における〔櫛目紋系／非櫛目紋系〕の対関係が外部へと反転する中で在来系土器に櫛目紋の有無に関わらず鹿線刻画が施されたと考える。それは先に述べたカテゴリーの揺らぎ、拡張による〔〔櫛目紋壺＋鹿線刻画〕無紋壺＋鹿線刻画／甕＋鹿線刻画〕の成立である。そして、伊勢湾岸以東の紋線壺の施紋工程あるいは紋線構成に組み込まれた鹿線刻画は、朝日例に始まり、高蔵例や角江例に続き、それが〔櫛目紋に関連する紋線の壺＋鹿線刻画〕として伊勢山例や折本西原例へとつながる。安藤広道が発見した朝日例と折本西原例の文様パターンや施紋作法上の類似性は、遠隔地間において単なる技術論を超えて固有の意味を規定する微細な《場》が存在したことを示す。

## (2) 解釈論から

見る／見られる ところで、角江遺跡の甕は口縁部内面に鹿線刻が施されており、煤けて見えなくなることは無い。この「見せる場の状況」に関係して東畑遺跡からは離れるが、鹿と人体との関係を考える必要がある。それは一色青海遺跡から出土している土製重飾である。ペンダントのように頸に掛ければ鹿はちょうど胸のあたりにくる。そこで注目されるのが石川県八日市地方遺跡の胸に鹿線刻が施された土偶である。さらに、奈良県清水風遺跡では鳥装のシャーマン？の胴衣中央に鹿が描かれており、やはり人体に関係する。安藤は弥生時代の巫女表現に埴輪の巫女例を加えて清水風例を巫女（女性）と捉え、鹿と女性の関係の深さを指摘する。一色青海例を女性が直接頸にかけたのかどうかはともなく、何らかの形で“鹿”（の意味）を纏うことを必要とする場面があり、それがまずは“祭儀”に関わることは想像し易いだろう。こうした鹿意匠について春成秀爾は、弥生時代には鹿が聖獣とされ、水田稲作がよるべき地霊の象徴と捉え（春成 1991）、安藤広道も土器や銅鐸絵画の構造から水田稲作を営む人間にとって自然は水源や大地として拠って立つ基盤でありつつも、一方でその枯渇や過剰は深刻な災厄をもたらす超越的存在であり、鹿がその象徴であると説いた（安藤 2006）。

“祭儀”と《普遍性》 言語はあるが文字を伝達手段にもたない弥生時代の大多数の人々にあって、日常的な土器等の形態や配列、紋様や色彩にはじまり、それらのある部分が抽出された特有の《場》における組み合わせ、さらには銅鐸や土器等の絵画を含めた限定された造形物を介して、それぞれに照応した特定の《価値観》を表現し伝えることが日常的な接触圏（類似した習俗の範囲）を超える場合には、それに見合った《共通基盤》が必要となる。通かに日常性を超越する場面では、異なる社会単位において価値の共有や社会統合・進歩を進める上で遠方からも人々が集う大掛かりな“祭儀”こそが《普遍性》を開示して参加者に刻み込む重要な手段であったろう。あるいは、親族集団の分枝（「分村」）が意図的であるか否かを問わず各地に播居することも、内外にわたるネットワークの基盤形成を促したことは想像に難くない。

弥生時代における水田稲作の拡散は、耕作地となる極緩傾斜地の発見と水源地の確保や用排水路の整備を前提にする以上「リレー式」といわれるような単なる情報伝播であろうはずがなく、親族集団分枝のパイロット的進出が重要であったことが弥生前期に頻出する短期・小規模集落の消長や拡大状況からも窺われる。分枝が遠方へと拡散する中で帰属意識を確認する《場》である適時の“祭儀”に加えて、親族集団全体にとっては本貫地で執り行われる大掛かりな“祭儀”が《同族》分枝間の序列関係を示し、かつ拡散した分枝にあらためて《同族》への求心性を付与して末端分枝間の緊密な関係を確かなものとし、パイロット的分枝が抱えるリスクの緩和や解消に寄与することになる。しかし、《同族》の延長のままで分枝の《内なる価値》を超え出ることにはできない。《普遍性》へと上昇するには《外なる価値》との調整が必要になる。その点で、分枝周辺の異なる親族集団（異族）との婚姻関係の進展こそ、それがまさに血縁から地縁への転換として《普遍性》の形成にとって重要な意味をもつ。《同族》であることを確認する《場》であった従前の“祭儀”は、《異族》を編入することによって《同族》の枠を拡大しつつ“祭儀”の《普遍性》への階梯を上昇する。それは当然《同族》中枢にも作用を及ぼしたであろう。

したがって、“祭儀”が生成から発展を経る中で変形することは当然であり、むしろ考古学事実としての差異をどのように時系列に整序するかが課題となる。“祭儀”における3要素（大陸的／



縄文的／独自の)の並列ではなく、生成・変容過程の時空的把握が不可欠である。その意味で鹿線刻画 a 類の持続性の強さは注目に値する。

管玉の威力 弥生時代には青銅器が祭具として中心的な役割を果たしたが、初期の銅鐸は数も少なく、さらに製作者と使用者が近隣関係にあった証拠も無く使用場面も限定されるから、《普遍性》の基準点であるという以上のことは言えない。しかし、「語り」をめぐる[話す(演じる)／聞く(見る)]関係や歌舞飲食を伴う固有の「振る舞い」【[演じる(話す／話さない)]見る／見ない(聞く／聞かない)】からなる「祭儀」が《異族》を取り込んで繰り返される中で意味の共有が進み《普遍性》が形成されていくとしても、不特定を対象とする社会的ネットワークの形成に際して、やはり管玉の生産(及び配布)が銅鐸製作と不可分な点は無視できない。

当初管玉は、単なる装身具、属人器ではなかった。管玉が玉作遺跡(遺構)からまとまって出土するのと対照的に居住地や墓地からほとんど出土しないのは、《現有》を基本にしていたからである。副葬したり埋納(あるいは廃棄)することなく世代をこえて、集団をこえて保管し続けられたからである。

管玉の入手については、生産地(者)との関係でいえば商品交換ではない前近代に「贈り、受け取り、返礼する」贈与が基本であり、消耗品ではないので必要量にも限度があろう。管玉に装身具としての使用場面があったとしても、わたしは管玉は「祭儀」に付随する、または「祭儀」を構成する対面的な《場》における交換を介して流通していたと考える。この場合はクラ交換にも似た役割を担っていたと考える。あるいは「カミ」を通じた交換になれば「奉獻と下賜」となり、この場合には「再配分」の性格が強まって「祭儀」執行者へ権力を付与することになる。いずれにしても、管玉は「価値があるから交換されるのではなく、交換されるから価値がある」ことによって周辺へと価値共有圏が拡大することになる。まさに《普遍性》への起動因が埋め込まれているのである。

こうした管玉をめぐる互酬的交換や再配分に新たな品目を加えて関係の厚みを増せば、さらに太い関係性へと発展させることができる。中部高地では弥生中期には「榎田型磨製石斧」が実用品を超えた贈与物となり社会的紐帯を強めたが、それに青銅器(柳沢遺跡)や玉(小泉遺跡)が加わることでさらに世界を拡大した。太平洋岸における弥生中期前半唯一の玉作遺跡である朝日遺跡を起点とする四隅切れ方形周溝墓や貝田町式細頸壺分布圏の東方拡大も、時期は先行するが構造的には共通する現象である。

このように弥生中期を通して青銅器と玉が《普遍性》を押し広げ、その先に土器絵画の盛行が実現した。それは弥生中期後半の凹線紋系土器成立前後であり、「櫛描紋系土器」が瀬戸内以西で払拭されて近畿以東に減退するまさにその時に、土器絵画はより人々の日常に根ざして反復し、同様に銅鐸が土製品に模造されることで両者が関わる《普遍性》が日常まで降りてきた。

ここに至ってようやく関東以西において、鹿線刻画は鹿ではない何かを表す「記号」として世界を覆ったといえる。

再び鹿をめぐる観念 水田稲作を始めた弥生時代の人々が、自然を人間世界外の存在に措定して、どうか制御する中で人間世界内の存在へと馴化していこうとする意志を、鹿を始めとする図像配置に象徴化していたと考える点をめぐっては、その後も畜獣であり続けた鹿と異なつてすでに一部が馴化されていたイノシシが図像から脱落したことに示される。よって、あえて鹿が人々の身近に表現され続けたことの意味はそれだけ大きいはずである。

すでに北部九州の初例には、後に現れる土器や絵画の複数モチーフ配置（物語風）表現と異なって大板井例のような鹿のみの例があり、シンプルゆえに意味の在処を端的に示しているようにみえる。それが刻まれた甕棺は墓葬に関わる基本的な器物であり、製作者には使用の場も当然念頭にあったはずで、さらには被葬者に対する知識も保有し、あるいは甕棺の発注者が鹿の線刻を指示したかもしれないのだが、ことさら被葬者が社会上層に属した形跡はない。むしろ、“祭儀”に関わっていたと考える必要があるのかもしれない。

この鹿線刻は光線の状況によっては間近でないとは視認できないものもあり、葬儀参列者のすべてが視認できたのかも不明であるが、時制ではまず刻画すること、そして見せること、と続く。もし、a類の「鹿A+鹿B」が「記号」であるなら、刻画と視認における意味の理解はどちらも同じであったはずで、後のa類の時空的連鎖からみて意味の逸脱があったとは考え難い。むしろ、意味を正しく保つための補助として「矢を射る人」や「巫女」「群鹿」が後に描かれるようになったとすれば、三沢ハサコの宮例[鹿A+鹿B+腕を広げた人物]の鹿2頭は「群鹿」、人物は「巫女」を表していた可能性が高い。問題は吉武高木例や大板井例のように人物を描かない場合だが、これらはオス・メスあるいは熟若の鹿であり、よってとりあえずは「群鹿」でよいだろう。鹿は群れをなすのが習性であり、それ故の[複=多]である。

そうすると単数はどうなるのだろうか。しかし、実は線刻画資料には破片が多いために東畑例を含めて明白な単数例は確認できない。いちおう、一色青海遺跡の土製垂飾、八日市地方遺跡の土製人形、清水風遺跡の鳥装人物の鹿は多くが単数であり、それで十分に意味を表しているとするなら、銅鐸絵画にもある「矢負いの鹿」や「角を掴まれた鹿」を含めて単数が《祭儀の場》に関わる表現とみることは可能である。

ところで人物は、銅鐸にみるように総て役割を担っており、ただ登場するのではない。鹿との関係では「矢を射る人物」と「巫女」の両者があるが、一個体の土器には共存しない。銅鐸の場合には弓を持った人物が鹿の「角を掴む」か「頭を押さえる」こともあるが、土器にはない。つまり土器では、「矢を射る人物」と「両腕を広げた巫女」の区別が重要であったことを示し、伊勢山例も人物の頭にある放射線表現が「巫女」を示す可能性がある。

以上のように、複数の鹿は多数と同義であり、安藤にならえば人間世界と自然との対立と超克（大きな物語・起源譚）に関係し、単数は人間世界内における鹿の取り扱い（小さな物語・叙事）に関係するということができる。その意味では、朝日例や折本西原例のような紋様に織り込まれた鹿図像において、まずは「櫛描紋」の語る世界が前提となるが、それが果たして何を意味するのか。銅鐸や玉と不可分な世界観が「非櫛描紋」に込められているなら、ひとまず近畿が起源地であるとはいえなくなるが。

#### 4. 東畑遺跡例の意義

東畑遺跡の出土例は、朝日遺跡で認められた外来：凹線紋系と在来：貝田町式系における“鹿”意匠の交換の先に、在来：古井式系への連絡を示すのみならず、それがさらに以東へと連続する中継点をなす点で見逃せない、貴重なものである。しかもアーキタイプであるa類を伝える点に、多少の変異を含みながらも表現の単純さに込められた明確な意味の連鎖・反復が示されている。

つまり、東畑例（a類）とは、近畿で華やいだ弥生“絵画”という多様な図像群（同時に物語構

成がある)とは別に、北部九州で発見した原型を保持する確固とした《体系》を担った“記号”であったことを示している。より踏み込んで言えば、自然の統御によって水田稲作を含めた豊穡な成果物を獲得できるように祈念する言葉や語りが織り上げる世界像を a 類が表していた、と。

すでに言語化された人為的環境においては、あらゆる存在は言語化され、言語も再び物象化されたことは想像に難くない。土器絵画はより人々に近いところで特定の言語表現が共有されていたこと、そしてその枠組みの安定度の高さを a 類が示していたと考える。果たしてそれがどのような物語と一体であったのか、キリスト教の宗教画が充実した語りと対照的に断片的であることをみれば、表現されたものが肝心な部分であることは間違いないし、それが物語の起動スイッチということも有り得るだろう。

[語り、聞き、記憶し、再び語る]という一連の流れのはざまに刻まれたのが腕線刻画であるなら、それから何を導き出すのか、これからの私の課題である。

謝辞 本稿を成すにあたり、まず熱心に執筆をすすめてくれた坂野俊哉氏に、そして原始絵画の研究に誘ってくれた設楽博己氏にも深く感謝したい。絵画世界に深く没入する常松幹雄氏や論理的な安藤広道氏には遠く及ばないが、頭の片隅に図像学的視点が埋め込まれたのは、彼らとともに設楽氏代表の共同研究に参加できたおかげである。

なお、高蔵遺跡の腕線刻画資料の観察と写真掲載については名古屋市教育委員会の許可を得ている(仲介:木村有作氏、現地対応:竹内宇哲氏にも感謝したい)。

#### 《参考文献》

- 愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡Ⅴ』  
 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海Ⅱ』  
 愛知県埋蔵文化財センター 2014 『一色青海Ⅲ』  
 安藤広道 1999 「弥生土器の絵画と文様」『古代』第 106 号 早稲田大学考古学会  
 小郡市教育委員会 2002 『三沢ハサコの宮遺跡Ⅲ』  
 神奈川県教育委員会 2012 『平成 23 年度神奈川の遺跡展・巡回展 弥生時代のかながわ—移住者たちのムラと社会の変化—』  
 金関 恕 1985 「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集、国立歴史民俗博物館  
 北名古屋(旧西春町) 1994 『高塚古墳発掘調査報告書』  
 黒沢 浩 1987 「神奈川県伊勢山遺跡出土の弥生式土器」『明治大学博物館館報』NO.3、明治大学考古学博物館  
 桑原久男 2015 「角のあるシカ—絵画土器と銅鐸絵画にみるシカ図像の頭部表現」『弥生研究の交差点』みずほ別冊 2 大和弥生文化の会  
 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—(第 2 分冊 遺物報告編)』  
 佐原 真 1980 「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』第 66 巻第 1 号、日本考古学会  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『川合遺跡 遺物編Ⅰ 平成 3 年度静岡バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査報告書(土器・土製品図版編)』  
 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『角江遺跡Ⅱ 遺物編Ⅰ(土器・土製品図版編)』  
 常松幹雄 2006 「鹿と鉤の廻廊」『原始絵画の研究 論考編』(設楽博己編)六一書房  
 豊田市教育委員会 1996 『神明遺跡』  
 長野県埋蔵文化財センター 2012 『中野市柳沢遺跡 千曲川伴佐・柳沢築堤事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内その 3—』  
 名古屋市教育委員会 1969 「見晴台遺跡」『南区の原始・古代遺跡』文化財叢書第 47 号

- 名古屋市教育局 2004 『埋蔵文化財調査報告 46 高蔵遺跡 (第 34 次・第 39 次)』
- 奈良県橿原考古学研究所 2003 『奈良県の弥生土器集成』 本文編
- 野田純子 1998 『前原市上籬子遺跡出土の線刻絵画板について』 『考古学ジャーナル 特集弥生時代の絵画木板』 No.432 ニュー・サイエンス社
- 橋本裕行 1996 『弥生時代の絵画』 『弥生人の鳥獣戯画』 香芝市二上山博物館編、雄山閣出版
- 橋本裕行 2006 『弥生絵画研究のあゆみと展望』 『弥生画帖 弥生人が描いた世界 平成 18 年度特別展』 大阪府立弥生文化博物館図 33
- 浜松市教育局 2014 『梶子遺跡 15 次』
- 原田恵理子 1999 『三重県下の絵画・記号土器』 『研究紀要 - 創立 10 周年記念論文集 -』 第 8 号、三重県埋蔵文化財センター
- 春成秀爾 1991 『角のない鹿 - 弥生時代の農耕儀礼 -』 『日本における初期弥生文化の成立』 横山浩一先生退官記念論文集 II 横山浩一先生退官記念事業会
- 久田正弘 2006 『北陸地方の絵画資料』 『原始絵画の研究 論考編』 (設楽博己編) 六一書房
- 深澤芳樹 2014 『一色青海遺跡出土弧形壺の鹿絵をめぐって』 『一色青海遺跡 III 遺物・自然科学分析・総括編』 愛知県埋蔵文化財センター
- 福岡市教育局 1998 『古武遺跡群 X 飯盛・古武圃場整備事業関係調査報告書 4 - 弥生時代の墓地の調査報告 -』
- 村田幸子 2012 『弥生時代絵画の一断面』 『日本考古学』 第 33 号 日本考古学協会
- 山田康弘 2006 『山陰地方の弥生絵画』 『原始絵画の研究 論考編』 (設楽博己編) 六一書房

## 弥生時代中期の石鏃について

～東海市中心街整備事業調査資料を中心に～

小栗 康寛（とこなめ陶の森資料館）

## はじめに

東海市中心街整備事業に伴う埋蔵文化財調査によって、これまでに弥生時代中期後半を中心とする石鏃、石錐、石斧、磨石、石皿、石包丁をはじめと多数の石器が出土している。これらは知多半島に点在する弥生時代の遺跡において、資料的にも内容的にも一線を画する良好な状況を示している。特に石鏃は多数出土している器種の一つで、今回の報告を含めて計60点が確認されている。遺跡周辺から縄文土器も出土している以上、そのすべてが弥生時代中期である保障はないが、遺構から出土した資料や包含層の状況から弥生時代中期を主体としていることは間違いない。

出土した石器に関しては、2014年に刊行された『畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告』の付載で、石鏃は筆者が、石斧は安津由香里氏が考察を述べた。石鏃は下呂石に着目し、木曾川下流域における利用について、第3砂帯に位置する遺跡に円礫状の原石が搬入され、その周辺地域に分配される在り方を指摘した。次に下呂石で作出される素材割片をみたときに、製品単体で搬入されたと考えられる50mmを超える長身の有茎石鏃の存在も改めて指摘した。こうした下呂石を取り巻く状況は当該遺跡だけに限らず、東海地方の拠点的な集落であった朝日遺跡をはじめ、同様の傾向を読み取ることが可能である。そこで、今回の付載はこれまでの調査で出土した石鏃60点に注目して、遺跡内での石鏃の諸特徴を把握し、当該期に見られる周辺遺跡との石鏃の差異を提示することを目的とする。そのため、他の遺跡との客観的な検証ができる方法として、形態分類、石材、法量分析、製作技術による検討をおこなう。

## 1 形態分類 (図1)

「鋭利な先端部が作り出された、扁平で小型の石器」(阿部2000)と定義される石鏃について、平面形態による分類をおこなう。当該期の石鏃は茎部をもつ有茎石鏃と茎部をもたない三角形の無茎石鏃に大きく分類ができ、側縁部(身部)や茎部、着柄部によってさらに細分することが可能である。また、時として側縁部が鋸歯状に加工されるものや身部中央部付近に瘤状の突起を持つもの、身部中央から着柄部にかけて研磨痕跡がみられる石鏃等、その特徴によって分類されることも

着柄部(基部)					側縁部(身部)				
				判別不可					判別不可
I類	II類	III類	IV類	V類	A類	B類	C類	D類	E類

図1 石鏃分類図

見受けられるが、今回の付載では製作技術の中で取り扱う。

石鐮の平面形態による分類は報告者の主観が入り込む要素が最も高く、折衷的な形態も見受けられることから細分は極力少なくする。さらにいえば、今回の分類では総数が60点であり、平均的な値を出すには量が足りないという指摘もあろう。このことから、今回の細分は最小限にとどめ、基部（着柄部）はⅠ～Ⅴ類、側縁部の形状はA～E類とそれぞれ5つに分類する（図1）。

基部形態のⅠ類は着柄部に挟り込みをもつ形態で、「凹基鐮」と呼ばれる石鐮である。この形態は挟り込みの深度によってさらに細分が可能である。Ⅱ類は挟り込みを持たない形態で、「平基鐮」と呼ばれるものである。Ⅲ類は茎部を持つ有茎石鐮で逆刺から茎部までの作出方法によって細分することが可能である。Ⅳ類は逆刺を持たない柳葉状の下半部をもつものである。Ⅴ類は破損によって判別不能なものとした。

以上の方法によって基部形態を分類した結果、Ⅰ類が18点、Ⅱ類が6点、Ⅲ類が29点、Ⅳ類が2点、Ⅴ類が5点と分類でき、Ⅲ類の有茎石鐮が約半数、Ⅰ類の凹基鐮がそれに続く。Ⅰ類とⅡ類はともに無茎石鐮であることを加味すれば、有茎石鐮が5割、無茎石鐮が4割ということになる。当遺跡に限って言えば、有茎石鐮と無茎石鐮が安定的に使用された遺跡であったことが理解できる。一般的に、当該期の遺跡は有茎石鐮が大きな割合を示すことが多いが、知多半島北半部の様相は他地域と異なる傾向といえる。

側縁形態のA類は側縁が身部の内側に向かって弧状を描く形態である。そのため無茎石鐮の脚部及び、有茎石鐮の逆刺部付近が膨らむ形状を呈するものも存在する。B類は側縁が直線状を呈する形態である。C類は側縁部に肩をもつ形態で、「五角形鐮」と呼ばれる石鐮である。肩部は尖頭部付近に作出されるものから身部中央部付近に作出されるものまで様々あり細分が可能である。また、肩部は使用や製作上で破損する確立の高い部位で左右非対称を呈するものも少なくない。このことから、今回は側縁部の一方でも肩をもつ石鐮はC類とした。D類は側縁部が外側に向かって弧状に膨らむ形態である。D類はC類でいう肩部に当たる部分が緩やかな形状であることをその分類の根拠としている。E類は破損によって判別不能なものとした。上記の5分類で側縁部を根拠として細分をした結果は、A類が2点、B類が25点、C類が13点、D類が11点、E類が9点、B類が4割を占め、C類、D類がそれに続く。

平面形態と基部形態との組み合わせは、Ⅴ類とE類を除外すると、16種類存在することになる。主な形態はⅠB類が13点、ⅢB類が10点、ⅢC類が9点、ⅢD類が9点の4形態に集中し、他の形態は数点のみという状況がうかがえた。無茎石鐮はⅠB類の側縁部が直線的で、着柄部に挟り込みのある「凹基鐮」が意外にも高い割合を示す結果となった。対して、有茎石鐮のⅢ類の側縁形態はB・C・D類ともに偏った選択はみられず、ヴァリエーションを示すことも特筆されよう。

以上の結果から、有茎石鐮は多様な様相があり、無茎石鐮はⅠB類の側縁部が直線的な「凹基鐮」を採用する傾向が読み取れる。また後に述べるが、Ⅴ類あるいはE類としたものの中には未成品と考えられるものもある。未成品に関しては、法量分析や製作技術の中で述べる。

## 2 石材（表1）

当遺跡群の石鐮に用いられた石材は出土点数の順に挙げると、下呂石、チャート、サヌカイト、安山岩、黒曜石の5種類である。

下呂石は岐阜県下呂市湯ヶ峰で産出する石材で、これまでに 31 点出土しており全体の半数を超えている。下呂石製の石鏃、あるいは剥片類を実見した結果、露頭で採取される角礫素材は見当たらず、木曾川下流域で採集することができる拳大以下の円礫ばかりであった。下呂石が知多半島に流通するシステムが確立する時期を明らかにすることはできていないが、当該期には下呂石が主体になるほど安定しており、こうした状況は縄文時代に遡ると考えられる。下呂石と形態分類との関係をみると、無茎石鏃は I B 類が 9 点、III B 類、III C 類がともに 4 点、III D 類が 3 点、残りは I C 類、II A 類、II B 類などが挙げられる。これは流通した円礫の長軸が 60mm 前後であったため、素材の制約を大きく受けていると考えられる。そのため、50mm 以上の素材剥片については有茎石鏃に用いられ、それより小さな素材剥片や再加工、製作途上の段階で破損した素材は無茎石鏃に転換されたと考えられる。

チャートは知多半島の剥片石器の素材として多用される石材とはいいつつも、どのような素材形態で遺跡内へと持ち込まれたのかは判然としにくい。20 点出土した石鏃と剥片類をみると、円礫、角礫、剥片素材のいずれの形状も搬入されていた可能性がある。つまり、地元石材であったとしても、製品として搬入された可能性を考慮すべきであろう。チャートと形態分類との関係をみると、III C 類が 5 点、III D 類が 5 点、III B 類が 3 点、I B 類が 2 点、II B 類が 1 点となり、III 類の有茎石鏃を主体にして、わずかに無茎石鏃も認められるということになる。過去の報告によると、縄文土器が集中した付近から出土した無茎石鏃もあり、一部は縄文時代に遡る資料も存在していると考えられる。こうした状況を見ると、下呂石とチャートは同様に遺跡内で製作された可能性のある石材ではあるが、石材戦略は異なっていたと考えられる。具体的に述べれば、下呂石は有茎石鏃と無茎石鏃を素材に合わせて柔軟に対応している反面、チャートの場合は、有茎石鏃の製作が主目的に行われていたことになろう。それはチャートの供給方法が下呂石とは異なっていたことを示唆している。

安山岩は 4 点出土している。遺跡内で出土している安山岩は量的には少ないが、三河地方を中心に縄文時代から普遍的に用いられる石材である。これらは III B 類が 1 点、III D 類が 3 点と有茎石鏃に集中するのが特徴である。現状では只持安山岩の剥片類や原礫面を持つような資料は発見されておらず、製品として他遺跡から搬入された可能性が高い。また、石鏃に転用された資料もあることから、当遺跡においては希少かつ有用な石材であったとみることもできる。

サヌカイトは 4 点出土している。近畿圏内で主流の石材で、縄文時代晩期の遺跡や清須市朝日遺跡でもサヌカイトが多く用いられるが、当遺跡では主体となる石材ではない。伊勢湾の対岸に位置する三重県ではサヌカイト製石鏃が顕著であり、海上流通を考えると、この出土量の少なさは搬入土器との関連も含めて新たな解釈が必要であろう。石材と形態分類の関係からみれば、I B 類、II C 類、II D 類、IV D 類が 1 点ずつで、石材との顕著な関係性を想定することはできない。

黒曜石は 1 点出土しており、形態は I B 類である。肉眼観察ではあるが諏訪屋ヶ台産と考えられる。過去の調査でも黒曜石の剥片素材が出土していることから、小規模ながら搬入されていたとみられるが実態は不明である。また縄文時代にまで遡る可能性がある。

補足として、石鏃の出土はないが、同じく石鏃を製作できる熔結凝灰岩の素材剥片も出土している。熔結凝灰岩は三河地域を主な流通圏としているが、安山岩等と同様に知多半島内に供給されていたと考えられる。

### 3 法量分析 (第2～6図)

今回対称となる石鏃 60 点の内、欠損のあるものを除外した 44 点で法量分析をおこなった。グラフは石器の最大長を y 軸に、最大厚を x 軸にして図 2～6 までを作成した。グラフの作成に石鏃の長さと同厚を採用した理由は、石鏃は矢柄の先端に装着して刺突する道具であり、厚さは先端部や重量とともに重要な要素である。さらには、完成品と非完成品（未成品、製作途上で廃棄された石鏃を含む）を分ける指標とも成り得る部分でもある。また、脚部や先端部は破損する確率が高いのに対して、器体の厚さは再加工をしなければ大きな変化は少ない。このことから器体の最大長と最大厚を基にグラフを作成した。

図 2 は総数 44 点をまとめたグラフである。石鏃の形態は破損の問題と点数の少なさもあり、VE 類を除くと 9 種類となる。総数全体をみると、長さは 15～65mm、厚さは 2.6～13.5mm の範囲に散布している。このなかで、①長さ 15～30mm 前後、厚さ 2.5～6mm 前後の一群と②長さ 27～50mm 前後、厚さ 5～9.5mm 前後に集中する一群に大きく取束していることが理解できる。本論ではこの結果を踏まえて、前者を小型、後者を大型として表現する。またこれに付け加えるものとして、完形品で

あれば最大長が 70mm 前後と考えられる長身の有茎石鏃(図 7-20)は超大型ということになる。

図 3 は石鏃を無茎石鏃 (I・II 類)、有茎石鏃 (III 類)、未成品の 3 種に分類したグラフである。無茎石鏃は図 2 で示した小型の一群に取束する傾向がみえる。これに対して、有茎石鏃は大型の集中域と小型の集中域があり、さらに小型の一群よりも最大長と最大厚が数 mm 大きなサイズにも集中域が認められる。このような関係から図 2 で提示した石鏃の基準を①小型の無茎石鏃の一群、②小型の有茎石鏃の一群、③大型の有茎石鏃の一群、④超大型の有茎石鏃の一群と大きく 4 群に細分することができる。ただし②の一群は①の一群と同一の様相とみるべきかもしれない。また、石鏃の大きさによって狩猟対象や着柄方法あるいは、使用方法にも差異がみられるかもしれないが、現時点では判別できない。

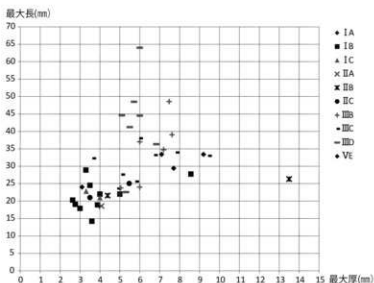


図 2 出土石鏃の長厚比

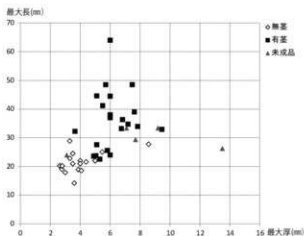


図 3 無茎石鏃・有茎石鏃・未成品の長厚比



図4は側縁部形態によるグラフである。ここで注目できるのは、B～D類の密集域の在り方がそれぞれ異なっている点である。直線的な側縁形態のB類は小型に多く集中するものの、全体に散漫となっていることから、当遺跡群で最も採用される側縁形態であったと考えられる。五角形状の側縁形態C類はB類と近似する分布状況であるが、最大長20～40mm、最大厚3～9.5mmと帯状に分布するという点で差異のみられる。このことはすでに指摘した①小型の無茎石鏃の一群、②小型の有茎石鏃の一群、③大型の有茎石鏃の三群を含む要素である。ただし、最大長が30mm前後の小型と大型を分ける境界に集中するという意味で、C類の特徴として読み取ることもできよう。側縁が弧状に膨らむ側縁形態のD類は最大長20～65mm、最大厚5～7mmに分布が多くみられる。少ないながらも最大長40～50mm、最大厚5～6mmに分布が密となっている。D類の特徴は器体の最大長に限らず、厚さが5～7mmと安定した分布状況となる。

図5はⅢ類(有茎石鏃)を抽出したグラフである。Ⅲ類の側縁形態に注目すると、より顕著な傾向を読み取ることが出来る。ⅢB類はやや散漫に見られるものの斜状に分布している。ⅢC類は厚さの制約は弱いものの長さは一定の範囲がみられ、ⅢD類はⅢC類と対照的に厚さにまとまりが認められるが、長さは20～70mmにまで大きく変位幅がみられる。こうした状況は遺跡の特徴や時期差とみるべきか、製作者という個のレベルの問題として取り上げるべきか課題であるが、少なからず認められる事象であろう。

図6は石材から検討を試みたグラフである。下呂石とチャートはともに小型と大型に二分され

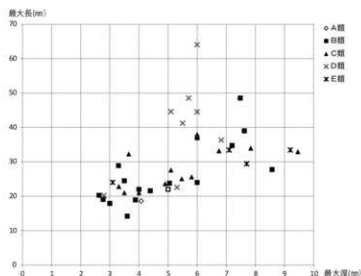


図4 側縁部の形態分類による石鏃の長厚比

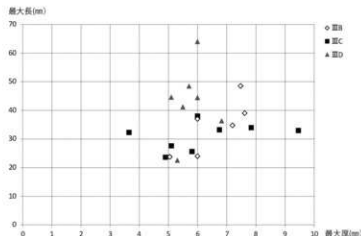


図5 Ⅲ類(有茎石鏃)の側縁形態別にみた長厚比

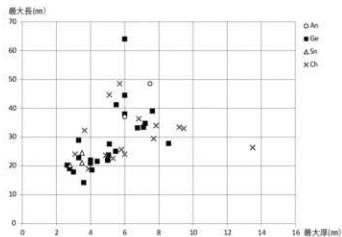


図6 石材別にみた石鏃長厚比

類似した散布状況がみられる。これに対して、安山岩とサヌカイトはそれぞれに異なった状況を示している。安山岩は点数こそ少ないものの、大型の有茎石鐮の集中域にあり、サヌカイトは小型の無茎石鐮の集中域にある。この状況は下呂石とチャートという主となる石材に対して搬入方法の異なる石材がそれぞれを補完するような関係にあったとみることができる。こうした状況は下呂石とサヌカイトが主流になる朝日遺跡とは異なる様相を示している。

#### 4 製作技術 (図7・8)

当遺跡でみられる石鐮はその多くが不定形な剥片を素材としている。剥離技術のみと周縁から押圧剥離が施され、器体の中心部にまで到達するものが多く認められる。そのため、器体の長軸に対して直交するように押圧剥離が展開され、最後に着柄部(基部)を加工するという志向性がみられる。平坦な押圧剥離あるいは、平坦剥離による技術レベルの熟達度は各個体のなかで認められるものの、基本的に大きな差はみられない。

石鐮にみられる平坦剥離は器体の成形と薄く仕上げる志向性が想定されることは明らかである。つまり厚さという視点から見ると、厚みを減じることが出来なければ、未成品のまま廃棄されることになる。制作途中で欠損した未成品は別として、問題となるのはどのくらいの厚さから未成品として捉えるべきかという境界線である。本論では、下呂石とチャートといった石材に着目し、無茎石鐮と有茎石鐮の最大厚を計測した。

その結果、有茎石鐮はⅢE類を除いたⅢ類の最大厚の平均値は6mmであった。またⅢB・ⅢC・ⅢD類と側縁形態ごとに平均値を出した結果、同様に6mm前後に平均値が求められる。一方で、無茎石鐮の最大厚の平均値は4.4mmで、その主流であるⅠB類は3.9mmとさらに薄い。無茎石鐮はⅠB類を除いて点数が少ないため検討することはできないが、無茎石鐮は有茎石鐮よりも2mm近く薄く製作されており、こうした状況から、最大厚と未成品との関係として、有茎石鐮の場合は6mm以上、無茎石鐮の場合は4.5mm以上の石鐮の場合、未成品として注目することができる。

石材から見ると、下呂石の無茎石鐮の最大厚の平均は4.2mm、有茎石鐮の最大厚の平均は5.9mm、チャートの有茎石鐮の平均は6.1mmという形で、石材と形態分類ごとに厚さが異なっている。これを有茎石鐮と無茎石鐮で厚さに対する志向が異なっていたとするか、素材剥片を意識的に選択していたと考えるべきなのかは判別できない。予見ではあるが、有茎石鐮は大型の剥片を素材とする状況が認められる以上、意識的に器体の厚さを減じる行為を抑制していた可能性も考えられる。

身体に残る瘤状のものは、一般的に剥離技術が低下することによって生じるものとされ、縄文時代晩期の石鐮が生産された遺跡で多く認められる。実際に未成品と考えるような石鐮にも多く見られる。本遺跡の資料の中には瘤状の突起が残存する資料が4点あり、有茎石鐮、無茎石鐮のそれぞれに認められ(図7-18、図8-33)、押圧剥離の失敗や節理によって止まったために起こったと考える。ただし、瘤自体も痕跡に近いような薄いものがある。これはもともとの素材が薄かったため、瘤が顕著に生長する前に完成に至った可能性もあろう。

側縁部に鋸歯縁加工が施された石鐮は計5点(図7-7・14・15・19、図8-32)で、緩やかな鋸歯縁加工といえる資料である。関連資料に知多市細見遺跡第4次調査で石鐮が15点出土している。これらは有茎石鐮を中心に無茎石鐮が認められ、下呂石とチャートの形態分類の傾向も近似しており、改めて注目される遺跡である。ただし、細見遺跡の有茎石鐮には顕著な鋸歯縁加工が施されて

いるものが多く、近接した時期と遺跡であっても個々の特徴があるため、周辺遺跡における差異も今後検討していく必要がある。

未成品と考えられる石鏃は9点が出土している(図8-33～40)。石材別にみると、下呂石は4点、チャートは5点で、上記の石材による遺跡内での製作が、積極的に行われていたことを示している。図8-34・37は薄手の素材剥片であったため、器体の厚さは完成品と大きな差はないが、それを除外した未成品の厚さの平均値は8.5mm前後となり、今回出土した未成品から2つの製作工程を見ることができる。1つはやや厚みのある不定形な剥片を用いたもので、押圧剥離によって大きな剥離面を形成し、ある程度加工が進行した段階で基部形態の作出を始めるものである。もう一方は、薄い剥片素材に対して厚みを均質にするように剥離面へ浅い周縁加工を施すものである。現時点では点数も少なく、予察の段階ではあるものの、石材と製作技法の固執性は認めることができない。

### おわりに

東海市中心街整備事業に伴う埋蔵文化財の調査で出土した石鏃について、形態分類、石材、法量分析、製作技術の4つの観点から検討した。本付載では、点数がそれほど多くないこともあり、今回指摘された結果は今後も続く調査で異なる展開を示す可能性もある。しかし、近接する遺跡との比較や、今後も面的に調査することによって遺跡内における地点やブロックごとの特徴も見出すことができるかもしれない。また今回は検討していないが、他遺跡で認められる銅製や骨角製の鏃形製品も含めて検証する必要がある。現時点では課題ばかりであるが、多面的な検討を重ねながら検証をおこなっていくことで当該期における狩猟具の実態が明らかにされていくと考えられる。

### 《参考文献》

- 阿部朝衛 2000 「先史時代人の失敗と練習—石鏃と磨製石斧の分析から—」『考古学雑誌』86—1 日本考古学会  
 石黒立人ほか 2003 『鳥帽子遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第117集  
 岩田 治 1995 「湯ヶ峰火山は溶岩ドームか・湯ヶ峰流紋岩の岩石的研究」『岐阜県地学教育』Vol.32  
 藍山誠一・馬場伸一郎 2007 「第三部出土遺物の分析—②石製品」『朝日遺跡Ⅶ(第2分冊出土遺物)』第138集  
 川添和暁 2005 「東海地域における縄文時代後晩期の石鏃について」『関西縄文時代における石器・集落の諸様相』関西縄文論集2 関西縄文文化研究会  
 齊藤基生 2005 「下呂石の動き」『地域と文化の考古学Ⅰ』明治大学文学部考古学研究室編  
 知多市教育委員会 2002 『細見遺跡第4次発掘調査』知多市教育委員会

下呂石

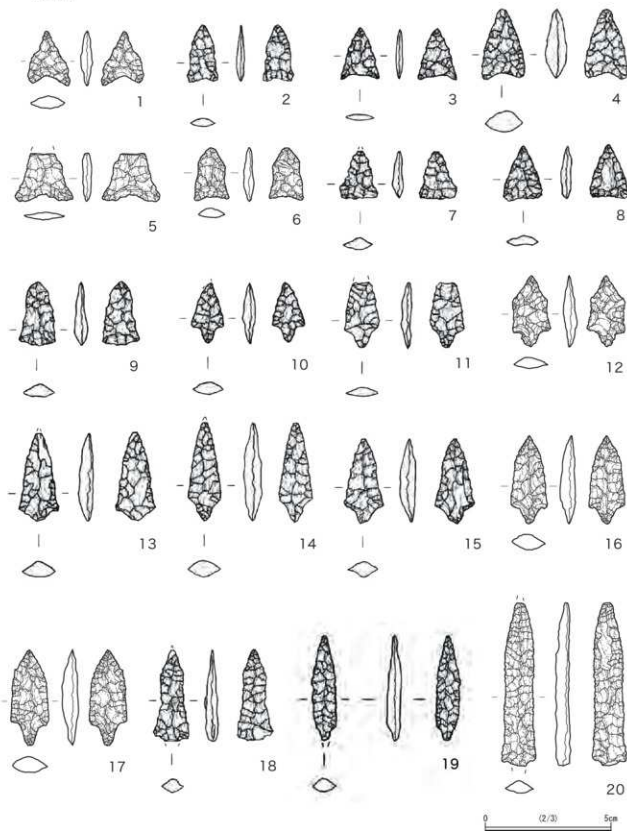
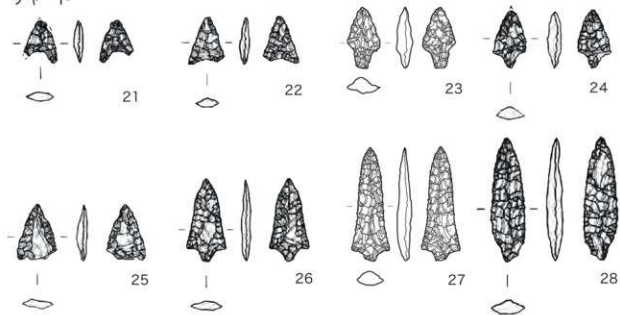
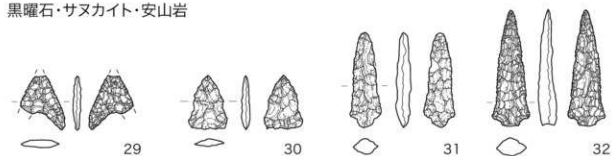


図7 東海市中心街整備事業調査出土石器 1 (S=2/3)

チャート



黒曜石・サヌカイト・安山岩



非完成品(未成品):下呂石・チャート

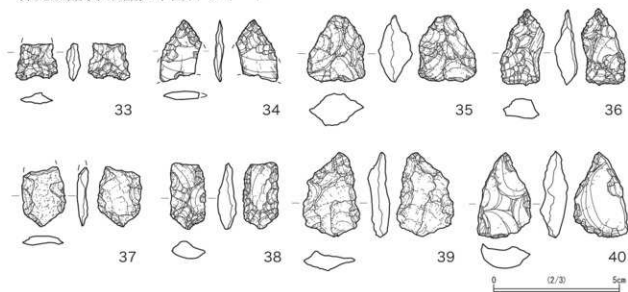


図 8 東海市中心街整備事業調査出土石器 2 (S=2/3)

図面No.	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	先端角	分類	備考	撮-図面No.
1	下呂石	22	16	5	1.0	38度	I A		※4-0177
2	下呂石	22.82	12.28	3.31	0.73	53度	I C		※1-0523
3	下呂石	20.26	15.17	2.63	0.68	55度	I B		※1-0519
4	下呂石	27.77	17.11	8.57	3.22	45度	I B		※1-0513
5	下呂石	(18.5)	22.5	4	1.26	-	I E		※6-0218
6	下呂石	21	13.5	4	1.00	66度	I C		※6-0219
7	下呂石	18.58	14.93	4.08	0.82	56度	II A	磨面伏加工	※1-0526
8	下呂石	21.58	15.17	4.39	1.15	46度	II B		※1-0514
9	下呂石	25.06	14.56	5.47	1.42	85度	II C		※1-0527
10	下呂石	23.77	12.64	5.05	1.10	54度	III B		※1-0524
11	下呂石	(25.69)	13.46	4.77	(1.35)	-	III B		※1-0507
12	下呂石	27.6	14.9	5.1	1.51	60度	III C	五角形	※5-0282
13	下呂石	(34.75)	15.85	7.20	2.76	40度	III B	衝撃剥離	※1-0521
14	下呂石	(39.01)	13.07	7.62	2.82	28度	III B	磨面伏加工	※1-0349
15	下呂石	33.20	15.23	6.75	2.45	40度	III C	磨面伏加工	※1-0518
16	下呂石	44.5	14.5	6.0	2.47	60度	III D		※7-0001
17	下呂石	38	15	6	2.7	64度	III C		※4-0175
18	下呂石	(35.89)	14.08	5.07	1.77	40度	III C	瘤・五角形	※1-0528
19	下呂石	(41.21)	9.87	5.50	1.91	28度	III D	磨面伏加工	※1-0367
20	下呂石	(64)	14	6	4.6	31度	III D		※4-0173
21	チャート	(16.63)	(12.99)	3.87	0.58	50度	I B		※1-0525
22	チャート	18.91	(13.62)	3.88	0.67	40度	I B	水磨	※1-0522
23	チャート	24	13	6	1.28	54度	III B		※4-0176
24	チャート	22.57	13.27	5.31	1.28	45度	III D		※1-0509
25	チャート	(21.87)	(15.48)	3.99	1.24	51度	III B		※1-0510
26	チャート	32.26	15.16	3.65	1.43	50度	III C		※1-0529
27	チャート	(44.6)	14.9	5.1	2.62	48度	III D		※5-0289
28	チャート	48.49	13.09	5.71	3.54	40度	III D		※1-0516
29	黒耀石	(20.8)	18.5	2.8	0.71	25度	I B		※5-0285
30	サヌカイト	21	15.5	3.5	0.96	65度	II C		※2-0022
31	安山岩	37	12	6	2.3	32度	III B		※4-0174
32	安山岩	(45.4)	14.6	6.5	2.81	25度	III B	磨面伏加工	※5-0290
33	下呂石	(14.8)	(16.2)	(5.3)	0.94	-	I E	瘤・未成品	※5-0284
34	チャート	24.0	(16.6)	3.1	1.10	70度	V E	未成品	※5-0288
35	チャート	26.3	23.2	13.5	6.40	70度	II B	未成品	※7-0020
36	チャート	29.4	(17.1)	7.7	3.73	66度	V E	未成品	※5-0286
37	下呂石	(24.0)	17.5	3.5	1.80	-	IV E	未成品	※7-0382
38	チャート	(31.2)	15	7.2	2.70	-	III E	未成品	※7-0082
39	下呂石	33.4	22.3	7.1	4.40	-	V E	未成品	※7-0056
40	チャート	33.4	20.2	9.2	6.59	-	V E	未成品	※5-0280
-	下呂石	28.89	(18.09)	3.30	(1.31)	51度	I B		※1-0315
-	チャート	33.95	16.05	7.84	3.87	55度	III C	五角形	※1-0350
-	チャート	(23.70)	10.11	6.93	(1.74)	50度	III D		※1-0368
-	チャート	32.95	21.52	9.46	5.50	61度	III C	五角形・瘤	※1-0369
-	下呂石	19.07	13.97	2.77	0.68	60度	I B	磨面伏加工	※1-0506
-	チャート	25.61	12.23	5.81	1.55	54度	III C	五角形	※1-0508
-	チャート	(32.40)	15.44	7.94	4.13	-	III B		※1-0511
-	安山岩	(35.95)	11.24	5.98	2.37	-	III D	磨減	※1-0512
-	チャート	36.32	14.25	6.83	3.40	43度	III D		※1-0515
-	サヌカイト	(36.10)	11.20	5.25	2.01	-	IV D		※1-0517
-	安山岩	48.52	12.97	7.48	3.58	27度	III B	窪に転用	※1-0520
-	下呂石	22	19	5	1.1	50度	I B		※3-0211
-	下呂石	22	(17)	4	1.0	50度	I B		※3-0212
-	チャート	23.6	12.8	4.9	1.48	44度	III C		※5-0279
-	下呂石	17.9	12.7	3.0	0.45	45度	I B		※5-0281
-	下呂石	14.2	12.0	3.6	0.4	51度	I B		※5-0283
-	下呂石	26.3	21.7	7.3	2.95	42度	V E	未成品	※5-0287
-	下呂石	(19.5)	2.0	3.7	1.29	50度	I B		※5-0291
-	サヌカイト	24.5	(17.9)	3.5	0.60	40度	I B	瘤?	※7-0070
-	サヌカイト	20.2	11.4	2.8	0.68	53度	II D		※7-0363

※1 (福岡・東郷・那珂道跡発掘調査報告 99～07)、※2 (福岡道跡発掘調査報告)、※3 (福岡・東郷道跡発掘調査報告)

※4 (平成 22 年度福岡・東郷・那珂道跡発掘調査報告)、※5 (平成 24 年度福岡・東郷道跡発掘調査報告)

※6 (平成 26 年度福岡・東郷道跡発掘調査報告)、※7 (平成 27 年度福岡・東郷道跡発掘調査報告)

表 1 東海市中心街整備事業調査出土石鑑一覧表

# 版 函



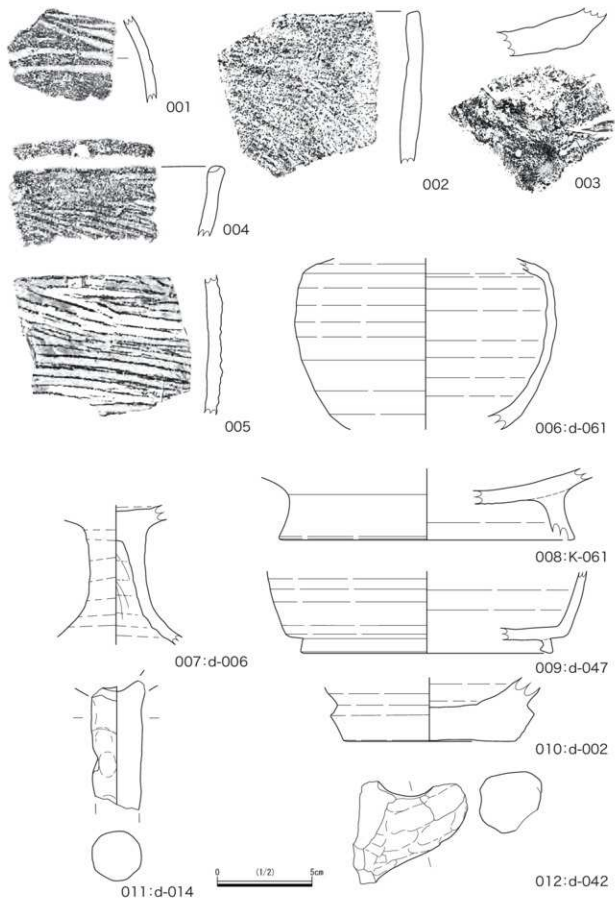


遺構	調査区	グリッド	遺構名	遺長 (cm)	基層	層数	深さ	平面	断面	出土	出土遺物	備考
001	1地点	806r	806a, 807a	SK	265	259	32	不定形	竪	セクション取参照		
002	1地点	806r		SK	213	70	17	溝状	竪	10YR4.2 (灰黄色) 砂		
003	1地点	806g	806g, 806a	SK	(84)	(74)	32	(横切)	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		遺棄物
004	1地点	806a, 807a		SK	193	145	26	横切	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
005	1地点	807f		SK	174	160	74	(横切)	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
006	1地点	806c		F	68	34	14	(横切)	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
007	1地点	807f		SK	49	13	18	(不定形)	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
008	1地点	806a, 806r		SK	319	165	38	不定形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂と 10YR3.2 (暗褐色) 砂の混土		
009	1地点	806b, 806c, 807c, 809b		SD	649	153	33	溝状	竪	セクション取参照		
010	1地点	806c		F	32	20	22	(円形)	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
011	1地点	806c		SK	46	41	26	円形	竪	10YR4.2 (黄褐色) 砂		
012	1地点	806c		F	79	119	17	(円形)	竪	7.5YR5.4 (暗褐色) 砂		
013	1地点	806c		F	35	31	26	円形	竪	7.5YR5.4 (暗褐色) 砂		
014	1地点	806a		DK	(63)	(38)	(17)	(横切)	竪	10YR3.2 (黄褐色) 砂と 7.5YR5.4 (暗褐色) 砂の混土		
015	1地点	806c		F	34	29	28	円形	竪	7.5YR5.4 (暗褐色) 砂		
016	1地点	807f		SK	76	57	21	横切	竪	10YR3.2 (黄褐色) 砂と 10YR3.4 (暗褐色) 砂の混土		
001-2	2地点	807f, 802k, 10E11		SD	(681)	97	20	溝状	直立	セクション取参照		
002-2	2地点	807f, 807k, 809k, 802k, 802k		SD	(664)	430	60	溝状	直立	セクション取参照		
003-2	2地点	807k, 807k, 809k, 809k, 809k, 809k		SD	(1671)	155	45	溝状	直立	断面取参照		
003-3	2地点	807k, 807k, 809k		SD	(522)	57	37	溝状	直立	断面取参照		
004	2地点	807k, 807k, 809k		SK	(265)	(161)	37	(不定形)	竪	10YR4.2 (黄褐色) 砂		
005-2	2地点	807k, 802k		SK	(249)	(122)	26	溝状	直立	10YR4.1 (暗灰色) 粘砂		
006	2地点	807k		DK	89	52	54	横切	不定形	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
007	2地点	807k, 807k, 809k, 809k, 809k, 809k, 809k		SD	(1443)	(13)	46	溝状	直立	セクション取参照		
008	2地点	807k, 809k		F	28	24	37	円形	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
009	2地点	807k, 809k, 809k		SK	(119)	(67)	21	(横切)	直立	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
010	2地点	807k		SK	105	84	41	横切	不定形	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
011	2地点	807k		SK	(265)	(29)	66	(横切)	不定形	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
012	2地点	807k		SK	80	70	33	円形	直立	10YR3.4 (暗褐色) 砂		
013	2地点	807k		F	(38)	(22)	(3)	(円形)	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
014	2地点	807k		F	32	32	36	円形	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
015	2地点	807k, 809k, 802k, 802k		横	(67)	(25)	17	溝状	直立	セクション取参照		
016	2地点	807k		F	40	32	23	横切	竪	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
017	2地点	807k		F	29	26	29	横切	竪	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
018	2地点	807k, 809k, 809k		SK	114	(44)	28	(横切)	直立	10YR4.2 (黄褐色) 砂と 10YR4.3 (にない黄褐色) 砂の混土		
019	2地点	807k		SK	80	(36)	27	(不定形)	直立	10YR3.4 (暗褐色) 砂		
020	2地点	807k		SK	39	32	32	横切	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
021	2地点	807k		SD	57	49	38	横切	竪	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
022	2地点	807k		F	42	36	22	横切	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
023	2地点	807k		SK	53	42	28	横切	直立	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
024	2地点	807k		SK	165	132	58	横切	直立	10YR3.2 (暗褐色) 砂と 10YR4.3 (にない黄褐色) 砂の混土		
025	2地点	807k		F	35	34	28	円形	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
026	2地点	807k		F	26	26	30	円形	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
027	2地点	807k		F	27	26	26	円形	竪	10YR3.2 (暗褐色) 砂		
028	2地点	807k, 809k, 809k, 802k		SD	(673)	69	31	溝状	直立	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
029	2地点	807k		SD	(127)	41	19	溝状	直立	10YR3.2 (黄褐色) 砂		
030	2地点	807k		F	35	34	22	円形	竪	10YR3.1 (黄褐色) 砂と 10YR3.2 (暗褐色) 砂の混土		
001	3地点	807k		F	64	53	30	横切	不定形	10YR3.4 (暗褐色) 砂		
001	3地点	100b, 1010b		SK	(234)	(156)	52	不定形	竪	セクション取参照		
002	3地点	105f		F	35	29	61	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂と 10YR5.4 (にない黄褐色) 砂の混土		
003	3地点	106f		SK	93	72	28	横切	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
004	3地点	106f		F	57	57	32	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
005	3地点	106f, 106f		SK	(240)	99	21	溝状	竪	10YR4.4 (にない黄褐色) 砂		
006	3地点	106f, 106b		SK	117	83	26	横切	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
007	3地点	100b, 100b		F	21	20	29	円形	竪	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
008	3地点	106f		F	31	30	12	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
009	3地点	107f		SK	(25)	(14)	28	(横切)	竪	特定遺構取参照		
010	3地点	107f		SK	56	53	21	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
011	3地点	107f		SK	76	40	17	横切	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
012	3地点	100b, 106f		SK	(241)	(25)	62	不定形	竪	セクション取・特定遺構取参照		
013	3地点	107f		F	19	19	19	円形	竪	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
014	3地点	107f		SK	85	66	28	横切	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
015	3地点	107f		F	34	31	30	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
016	3地点	107f, 107k		SK	(12)	(15)	46	方角	竪	特定遺構取参照		
017	3地点	100b, 100f, 1010b, 1010f		SK	(299)	(263)	92	不定形	直立	セクション取・特定遺構取参照		
018	3地点	106f, 106a		SK	(291)	(220)	17	溝状	直立	セクション取・特定遺構取参照		
019	3地点	107k		F	43	(27)	(5)	(円形)	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		埋没範囲
020	3地点	104f		F	27	19	43	円形	竪	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
021	3地点	107f		F	40	35	26	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
022	3地点	107f		F	39	28	44	円形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
023	3地点	106b		F	42	40	51	円形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
024	3地点	107f		F	27	25	35	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
025	3地点	107f		F	37	36	35	円形	竪	7.5YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
026	3地点	107f		F	26	25	24	円形	竪	10YR5.2 (にない黄褐色) 砂		
027	3地点	107f		SK	238	83	40	不定形	直立	特定遺構取参照		
028	3地点	107k		SK	(175)	(197)	46	(不定形)	直立	セクション取参照		
029	3地点	106f		SK	184	81	20	不定形	竪	7.5YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
030	3地点	107k		SK	46	46	41	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
031	3地点	106f		SK	53	41	28	横切	直立	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
032	3地点	106f		F	38	30	60	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂と 10YR4.4 (暗褐色) 砂の混土		
033	3地点	107f		F	29	28	36	円形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
034	3地点	106f, 107f		SK	(117)	(62)	13	不定形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
035	3地点	106b		SK	119	69	31	方角	直立	セクション取参照		
036	3地点	106f, 107f		F	28	28	32	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
037	3地点	107f		F	33	30	32	円形	竪	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
038	3地点	106f		F	47	36	44	横切	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
039	3地点	107f		SK	117	86	39	横切	直立	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		
040	3地点	106f		F	29	27	30	円形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
041	3地点	104f		F	22	20	49	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
042	3地点	106f		F	31	29	25	円形	竪	10YR4.2 (にない黄褐色) 砂		
043	3地点	106f		F	28	25	41	円形	竪	10YR4.4 (暗褐色) 砂		
044	3地点	106f		F	24	22	52	方角	竪	10YR5.4 (にない黄褐色) 砂		

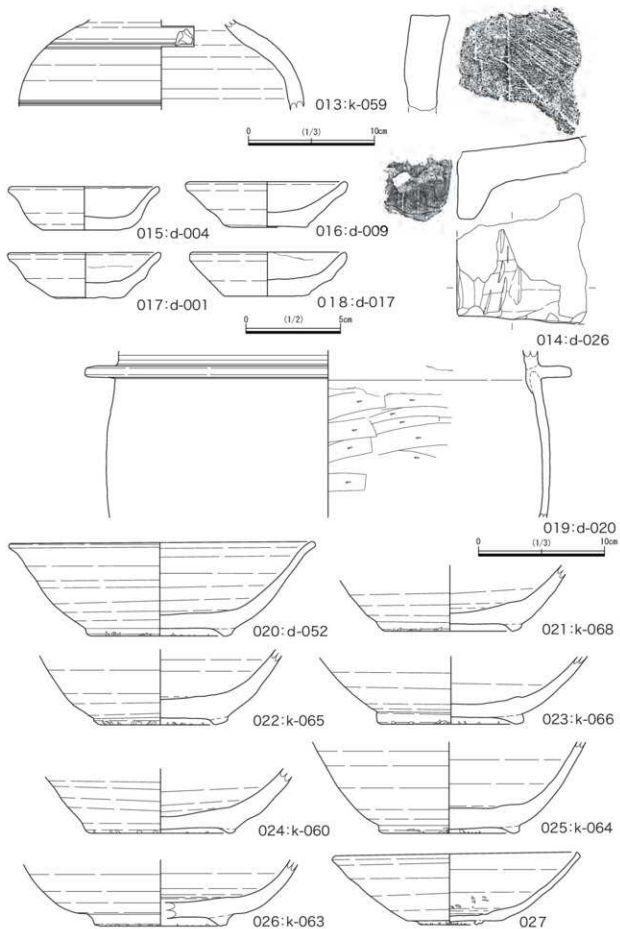
遺構 調査区	グリッド	遺構名	位置 (cm)		平面	断面	層土	出土遺物	備考
			長	幅					
045	3地点 107i	溝	37	27	24	横切	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
046	3地点 107j	F	39	32	26	横切	01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
047	3地点 107k	F	39	40	20	横切	01095/3 (にふい黄褐色) 砂		
048	3地点 107x	F	43	36	20	横切	01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
049	3地点 106k	溝	54	37	25	横切	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
050	3地点 106i	F	26	24	22	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
051	3地点 106j	F	32	30	22	円形	01094/4 (褐色) 砂		
052	3地点 106k	溝	54	40	22	横切	01095/3 (褐色) 砂		
053	3地点 106k, 107x	溝	338/4	123	61	溝状	遺存物 特定遺構調査参照		表紙文土層
054	3地点 106i	F	34	30	31	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂と 01095/3 (褐色) 砂		
055	3地点 106i	F	32	30	21	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
056	3地点 106i	F	24	24	23	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
057	3地点 106i	F	39	36	23	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
058	3地点 106i	F	21	21	15	円形	01094/4 (褐色) 砂		
059	3地点 106k, 106i	溝	251	147	40	不整形	遺存物 特定遺構調査参照		
060	3地点 106i	溝	40	36	27	円形	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
061	3地点 106k	溝	100	103	28	横切	01095/4 (褐色) 砂		
062	3地点 107i	F	55	59	70	横切	01095/3 (褐色) 砂		
063	3地点 107k	溝	87	58	38	横切	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
064	3地点 107k	溝	85	37	25	横切	01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
065	3地点 106k	F	42	34	31	横切	01094/4 (褐色) 砂		
066	3地点 106k	F	40	39	36	円形	01094/4 (褐色) 砂		
067	3地点 106i	溝	158	148	52	横切	本発掘 セクション調査参照		
068	3地点 106k, 107k	溝	166	97	32	溝状	遺存物 セクション調査参照		
069	3地点 106i, 106k	溝	57	44	19	横切	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
070	3地点 106k	溝	68	67	27	円形	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
071	3地点 106k	溝	68	51	27	横切	不整形 01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
072	3地点 106k	F	42	46	42	横切	01095/3 (褐色) 砂		
073	3地点 107k	溝	66	112	48	横切	遺存物 01095/3 (褐色) 砂		
074	3地点 106k	溝	1232	281	50	不整形	遺存物 セクション調査参照		
075	3地点 106k	F	39	29	30	横切	遺存物 セクション調査参照		
076	3地点 106k	F	37	31	28	横切	遺存物 01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
077	3地点 107k	溝	55	50	58	横切	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
078	3地点 107k	溝	90	69	31	不整形	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
079	3地点 106k	溝	103	89	33	横切	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
080	3地点 107k	溝	68	62	22	円形	01094/4 (褐色) 砂		
081	3地点 107i, 107k	溝	138	128	28	不整形	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
082	3地点 107i	溝	228	189	117	不整形	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
083	3地点 107i	F	30	29	34	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
084	3地点 106k, 107i	溝	114	80	40	横切	遺存物 セクション調査参照		
085	3地点 107k	溝	157	115	61	不整形	遺存物 01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
086	3地点 107k, 106k	溝	118	66	46	横切	遺存物 01095/3 (褐色) 砂		
087	3地点 107k, 106k	溝	245	199	38	横切	遺存物 7.595/2 (黒褐色) 砂		
088	3地点 106k	溝	51	34	18	横切	遺存物 01095/4 (にふい黄褐色) 粗砂		
089	3地点 107k	溝	73	50	55	横切	不整形 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
090	3地点 107k, 107i	溝	538	426	113	不整形	不整形 セクション調査参照		
091	3地点 107k	溝	84	49	45	横切	不整形 01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
092	3地点 107k	溝	210	175	43	不整形	遺存物 セクション調査参照		
093	3地点 107k	溝	183	124	32	横切	遺存物 セクション調査参照		
094	3地点 106k	溝	43	50	20	横切	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
095	3地点 107k, 107i	溝	238	118	48	不整形	遺存物 01095/2 (褐色) 砂		
096	3地点 106k	溝	155	150	43	横切	遺存物 特定遺構調査参照		
097	3地点 106k	溝	201	130	40	不整形	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
098	3地点 107k, 107i	溝	132	109	60	不整形	遺存物 セクション調査参照		
099	3地点 106k	溝	160	118	57	横切	遺存物 特定遺構調査参照		
100	3地点 106k	溝	171	70	20	横切	01095/4 (にふい黄褐色) 砂		
101	3地点 106k	溝	142	85	71	横切	遺存物 01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
102	3地点 107k, 107i, 106k	溝	305	162	56	溝状	遺存物 セクション調査参照		
103	3地点 107k	F	27	33	30	円形	01094/3 (褐色) 砂		
104	3地点 107k	溝	106	61	34	横切	遺存物 セクション調査参照		
105	3地点 107i	F	61	53	33	横切	遺存物 01095/3 (褐色) 砂		
106	3地点 107k	F	37	25	29	円形	遺存物 セクション調査参照		
107	3地点 107k	F	67	71	21	円形	01094/4 (にふい黄褐色) 砂		
108	3地点 107k	F	66	58	48	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 砂		
109	3地点 106k	溝	112	93	38	横切	01095/3 (褐色) 粗砂		
110	3地点 107k	F	54	43	45	円形	01094/4 (にふい黄褐色) 砂		
111	3地点 106k	F	38	37	29	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 粗砂の層土		
112	3地点 107k	F	46	40	37	横切	01095/3 (にふい黄褐色) 砂		
113	3地点 107k	F	77	73	29	横切	01095/4 (褐色) 粗砂		
114	3地点 106k	溝	94	79	22	不整形	遺存物 01094/4 (褐色) 粗砂		
115	3地点 107k	F	46	46	25	円形	01094/3 (にふい黄褐色) 粗砂		
116	3地点 107k	F	44	40	23	円形	2.595/5 (にふい黄褐色) 粗砂		
001-1	3地点 107k	溝	81	61	23	円形	遺存物 01095/4 (にふい黄褐色) 粗砂		
001-17	4地点 195a	溝	1146	25	6	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-19	4地点 195a	溝	218	52	4	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-03	4地点 195a, 195b	溝	291	33	5	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-04	4地点 195a	溝	127	25	9	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-05	4地点 195a	溝	195	20	8	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-06	4地点 195a	溝	163	30	5	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-07	4地点 195a	溝	232	20	8	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-08	4地点 195a	溝	106	21	9	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-09	4地点 195a	溝	183	27	7	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-10	4地点 195a, 195b	溝	283	50	6	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-11	4地点 195a, 195b	溝	421	23	6	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-12	4地点 195a, 195b	溝	221	31	10	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-13	4地点 195a, 195b	溝	119	28	11	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-14	4地点 195a, 195b	溝	665	27	7	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-15	4地点 195a, 195b	溝	356	47	8	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-16	4地点 195a, 195b	溝	516	29	12	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-17	4地点 195a, 195b, 195d, 195e	溝	248	41	14	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-18	4地点 195a, 195b	溝	501	30	12	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-19	4地点 195a, 195b, 195d, 195e	溝	886	44	11	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-20	4地点 195a, 195b	溝	336	27	7	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-21	4地点 195a, 195d, 195e	溝	283	59	6	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-22	4地点 195a, 195b, 195d, 195e	溝	689	27	8	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-23	4地点 195a	溝	245	26	9	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		
001-24	4地点 195a, 195b, 195d, 195e	溝	632	40	5	溝状	遺存物 01094/4 (褐色) 砂		

土層中に 107k/4 (にふい黄褐色) 砂

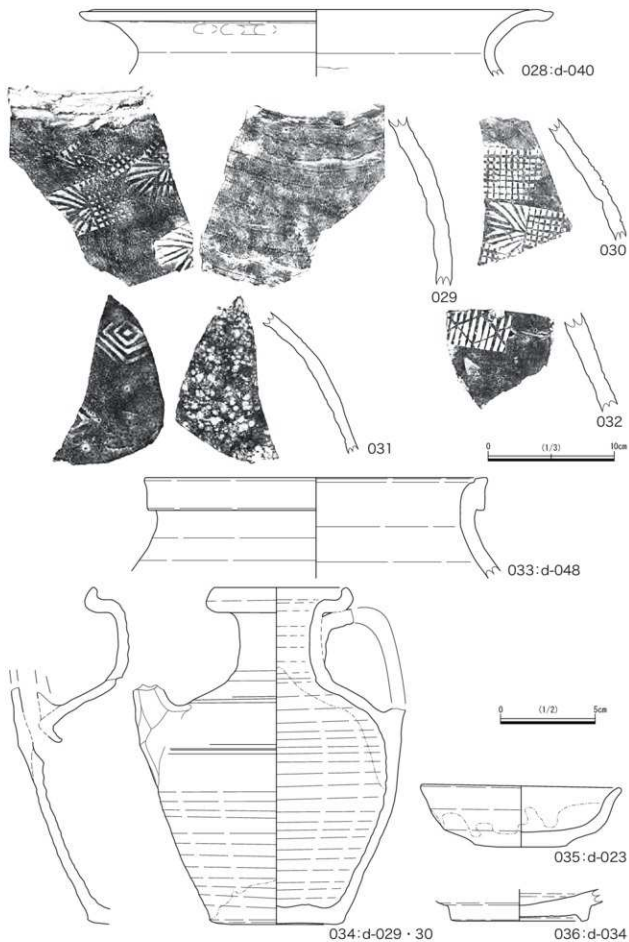
遺構	調査区	グリッド	遺構名	遺構 Com 基礎 土層 礎石 礎土	平面	断面	出土	出土遺物	備考
001-25	4地点	1E10a, 1E10d	SD	201 33 7	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
001-26	4地点	1E9a, 1E9f, 1E10a	SD	1287 45 8	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
001-27	4地点	1E10a	SD	1453 29 6	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
001-28	4地点	1E10a	SD	265 44 8	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
001-29	4地点	1E10a, 1E10b	SD	355 52 9	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
002	4地点	1E9b	SD	435 158	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		中世前半の土層連続
003	4地点	1E9a, 1E9b, 1E9c, 1E9d	SD	1445b 171 7	溝状	埋込形	セクション面参照		
004	4地点	1E9a	SK	321 150 130b	(不明)	埋込形	セクション面参照		
005	4地点	1E9a	SK	409 1105 53	溝状	埋込形	セクション面参照		
006	4地点	1E9a	SK	1517 155 45	(溝状)	埋込形	セクション面参照		
007	4地点	1E9a, 1E9b	SD	2181 166 44	(不明)	埋込形	セクション面参照		
008	4地点	1E10a, 1E10b	SK	365 1285 7	(溝丸方形)	皿	10YR4/4 (褐色) 砂		
009	4地点	1E9a, 1E9f, 1E10a, 1E10f	SB	460 264d 11	(溝丸方形)	皿	10YR4/4 (褐色) 砂		
010	4地点	1E10f, 1E10g	SD	681 134 20	溝状	半埋形	セクション面参照		
011	4地点	1E9a, 1E10a	SB	265 114d 19	(溝丸方形)	皿	10YR4/4 (褐色) 砂		
012	4地点	1E10f	P	62 32 62	不明	半埋形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
013	4地点	1E10f	P	159 63 43	溝状	半埋形	10YR3/4 (暗褐色) 砂		
014	4地点	1E9a, 1E9c, 1E10a, 1E10c	SD	746d 133 25	溝状	埋込形	セクション面参照		
015	4地点	1E9a	P	39 22 37	溝状	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
016	4地点	1E9a	P	20 30 47	円形	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
017	4地点	1E9a	P	25 20 37	溝状	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
018	4地点	1E9a	P	33 25 37	溝状	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
019	4地点	1E9a	P	27 30 30	溝状	埋込形	10YR3/4 (暗褐色) 砂		
020	4地点	1E9a	P	34 27 32	溝状	埋込形	10YR3/4 (暗褐色) 砂		
021	4地点	1E9b	P	31 27 27	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
022	4地点	1E9b	SK	73 138 26	(溝状)	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂と 10YR5/4 (にがい黄褐色) の土		
023	4地点	1E9a, 1E9d	SK	105 65 70	溝状	半埋形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
024	4地点	1E9a	SK	148 73 52	溝状	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
025	4地点	1E9a, 1E10a	SK	72 35 35	円形	半埋形	10YR4/4 (褐色) 砂		
026	4地点	1E9a	P	33 31 34	円形	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
027	4地点	1E9a, 1E9b, 1E10a, 1E10c	SZ	592 571 32	(溝丸方形)	埋込形	特定遺構面参照		
001	5地点	1E11a, 1E111	SK	556 1453 16	溝状	なし	なし		中世後葉
002	5地点	1E111	SK	1359d 160	不明	なし	なし		中世後葉
003	5地点	1E111	SK	60 56	不明	なし	特定遺構面参照		近世土層
004	5地点	1E111	SK	144 115 45	(溝丸方形)	埋込形	特定遺構面参照		
005	5地点	1E12a, 1E12b	SD	496d 55 29	溝状	埋込形	セクション面参照		
006	5地点	1E11, 1E11a	SK	1396 1300 37	(溝状)	埋込形	セクション面参照		
007	5地点	1E111	SK	84 55 20	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
008	5地点	1E11a	SK	53 43 23	(溝状)	半埋形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
009	5地点	1E11a	SK	63 40 46	(溝状)	半埋形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
010	5地点	1E11a	SK	67 60 21	不明	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
011	5地点	1E11a	SK	130 94 54	(溝状)	半埋形	10YR2/4 (黒褐色) 砂と 10YR4/4 (褐色) の土		
012	5地点	1E111	SK	62 60 50	円形	半埋形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
013	5地点	1E111	SK	47 42 16	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
014	5地点	1E111	SK	55 52 21	円形	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
015	5地点	1E111	SK	59 33 54	円形	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
016	5地点	1E11a	SK	57 43 55	円形	半埋形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
017	5地点	1E11a, 1E111	SK	473 289 15	(溝丸方形)	埋込形	セクション面参照		
018	5地点	1E11a	SK	84 58 45	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
019	5地点	1E11a	P	25 29 26	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (黒褐色) 砂		
001	6地点	1B10, 1B11, 1B10a, 1B11a	SK	294 212d 87	(円形)	埋込形	特定遺構面参照		井戸跡 (遺構か)
002	6地点	1B9f, 1B9g	SK	128b 125b	不明	不明	セクション面参照		貝層観察 (遺構か)
003	6地点	1B9a	SK	61 48 13	(溝状)	皿	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂と 10YR4/4 (褐色) 砂の境		
004	6地点	1B10a	SD	366 153 49	溝状	埋込形	セクション面参照		溝 (断面に横状溝を挿入)
005	6地点	1B11	P	25 21 43	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
006	6地点	1B11	P	45 40 19	不明	半埋形	10YR4/4 (褐色) 砂		
007	6地点	1B11	P	20 18 22	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
008	6地点	1B11	P	24 20 25	溝状	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
009	6地点	1B10a, 1B11	SK	1173 105 37	(溝状)	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂と 10YR2/4 (黒褐色) 砂の境		
010	6地点	1B9a, 1B10a	SK	77 75 46	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
011	6地点	1B9a	SK	83 72 24	(溝状)	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
012	6地点	1B10a, 1B11	P	25 27 26	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
013	6地点	1B10a, 1B11	SK	47 142 18	(溝状)	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
014	6地点	1B9a, 1B10a	SK	70 58 49	(溝状)	半埋形	10YR4/4 (褐色) 砂		
015	6地点	1B9a, 1B10a	SK	80 69 21	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
016	6地点	1B11	P	24 20 41	(円形)	埋込形	セクション面参照		
017	6地点	1B11	SK	108 159 28	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (にがい黄褐色) 砂		
018	6地点	1B11	SK	12 175 52	(溝状)	半埋形	10YR3/4 (暗褐色) 砂		
019	6地点	1B11, 1B111	SD	1216 63 22	溝状	埋込形	セクション面参照		
020	6地点	1B11	SK	47 167 19	(溝状)	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
021	6地点	1B10a	SK	1127 48 29	(溝状)	埋込形	10YR2/4 (にがい黄褐色) 砂		
022	6地点	1B9a, 1B9b	P	23 22 46	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂の境		
023	6地点	1B10a	SK	127 80 77	不明	半埋形	10YR4/4 (褐色) 砂		
024	6地点	1B10a	SK	37 36 62	円形	埋込形	10YR4/4 (褐色) 砂		
025	6地点	1B10a	P	21 20 33	円形	埋込形	10YR5/4 (にがい黄褐色) 砂		
026	6地点	1B10a, 1B10b	SK	327 251	不明	不明	断面観察		井戸跡 (遺構か)



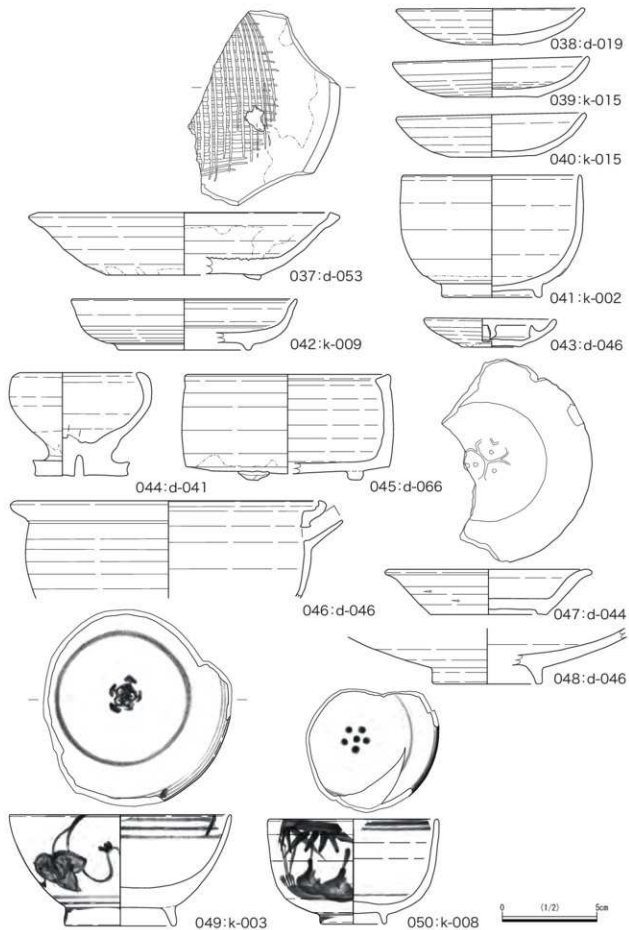
1 地点出土遺物実測図 (1/2) (1)



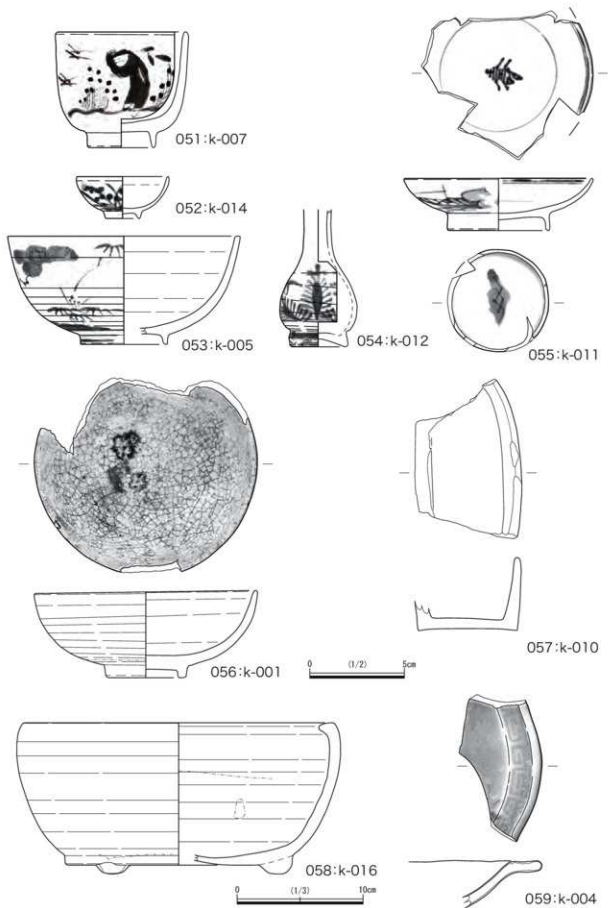
1 地点出土遺物実測図 (1/2、013・014・019 は 1/3) (2)



1 地点出土遺物実測図 (1/2, 028 ~ 032 は 1/3) (3)

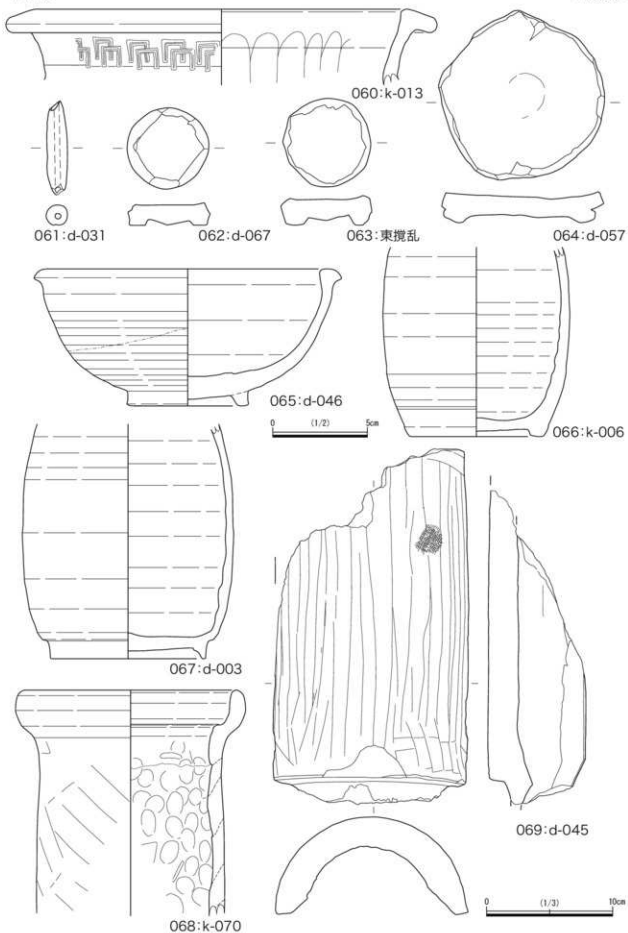


1 地点出土遺物実測図 (1/2) (4)

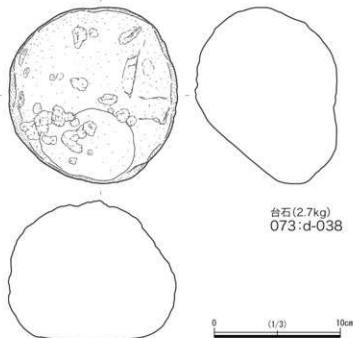
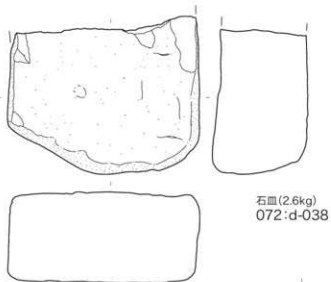
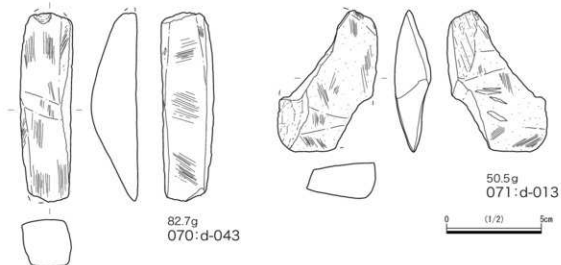


1 地点出土遺物実測図 (1/2、058 は 1/3) (5)





1 地点出土遺物実測図 (1/2、068・069 は 1/3) (6)



1 地点出土石器実測図 (1/2、072・073 は 1/3)

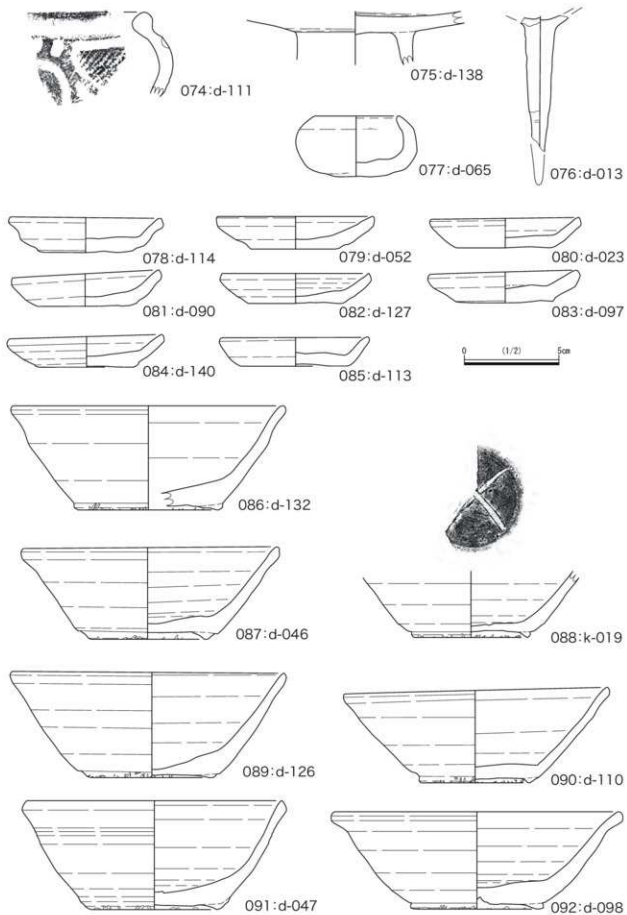
調査 番号	調査区	取上 番号	付	層位・ 遺構	産地 材料	群	種用途	口径 長 (cm)	最大 径 (cm)	底径 (cm)	口径 径 (cm)	重量 (g)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考	
001	1 地点			0030K	縄文土器	深鉢		-	(3.6)	-	-	-	沈積土	ナテ	砂粒を含む	10196/3 に近い 黄緑	下宮式 根山式		
002	1 地点			0015X	縄文土器	深鉢	口 1/12	-	(7.9)	-	-	-			砂粒、緑を含む	10195/6 黄緑	根山式		
003	1 地点			0015X	縄文土器	深鉢		-	(2.2)	-	-	-			砂粒を含む	10196/2 灰白色	根山式 土器底部		
004	1 地点			0030K	縄文土器	深鉢	口 1/12	-	(3.8)	-	-	-	貝殻を含む	ナテ	砂粒を含む	10196/2 灰褐色	五島式		
005	1 地点			総合層	弥生土器	深鉢		-	(7.3)	-	-	-	貝殻を含む	指サエ	砂粒を含む	10196/2 灰白色	土師式 木押式		
006	1 地点	0-061	0030K	遺器類	瓦	瓦		-	(9.0)	-	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	516/1 灰	古代		
007	1 地点	0-006	0030K	遺器類	瓦	瓦		-	(7.3)	-	-	-	ロクロナテ	ロクロナテ	砂粒を含む	7.5197/4 に近い 黄緑	古代		
008	1 地点	0-061	0000	総合層	瓦	瓦		-	(3.8)	(14.9)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	2.517/2 黄緑	古代		
009	1 地点	0-047	0000	総合層	瓦	瓦	底 3/12	-	(4.3)	(13.0)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	2.516/1 黄灰	古代		
010	1 地点	0-002	0030K	遺器類	瓦	瓦	底 11/12	-	(3.3)	(8.1)	-	-	ロクロナテ	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/3 黄灰	古代		
011	1 地点	0-042	0030K	土師器	製塩土器	瓦		(6.8)	2.6	-	-	-	指サエ	ナテ	砂粒を含む	7.5197/6 黄	知多山 北部の一部		
012	1 地点	0-042	0000	土師器	製塩土器	瓦		-	(5.4)	-	-	-	指サエ、指サ エ	ナテ	砂粒を含む	2.517/3 黄灰	古代		
013	1 地点	0-059	0030K	総合層	瓦	瓦		-	(7.1)	-	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	7.5197/1 灰	12C	自然物	
014	1 地点	0-026	0030K	瓦	軒平瓦	瓦		10.3	10.3	2.7	-	-	指サエ、指サ エ、瓦	ヘラクス	砂粒を含む	7.5197/3 に近い 黄緑	平安京 瓦	瓦当類類	
015	1 地点	0-004	0030K	陶器	山部	山部	口 12/12 底 12/12	7.8	3.3	4.5	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	7.517/1 灰	層 5		
016	1 地点	0-009	0000	陶器	山部	山部	口 11/12 底 12/12	8.2	2.4	4.4	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	7.517/1 灰	層 5		
017	1 地点	0-001	0000	陶器	山部	山部	口 11/12 底 12/12	7.9	2.4	3.9	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑、小 石を含む	7.518/1 灰	層 5	遺構の遺物付属	
018	1 地点	0-017	0000	陶器	山部	山部	口 12/12 底 12/12	8.1	2.3	4.4	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ、 回転ヘラクス	砂粒、緑を含む	7.518/1 灰	層 5		
019	1 地点	0-020	0000	陶器	羽釜	羽釜		-	(13.2)	-	-	-	ロクロナテ、 指サエ	ロクロナテ	砂粒を含む	2.516/2 黄	層 2		
020	1 地点	0-052	0000	山形瓦	瓦	瓦	口 4/12 底 12/12	15.9	5.0	7.3	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス、結 付瓦	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	517/1 灰	層 4		
021	1 地点	0-068	東照宮	山形瓦	瓦	瓦	底 7/12	-	(3.5)	6.8	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑、小 石を含む	7.517/1 灰	層 5	モミガウ痕あり	
022	1 地点	0-065	0000	総合層	山形瓦	瓦	底 12/12	-	(4.0)	6.1	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス、 指サエ	ロクロナテ	砂粒、緑、小 石を含む	517/1 灰	層 5	モミガウ痕あり	
023	1 地点	0-066	西照宮 土	山形瓦	瓦	瓦	底 12/12	-	(3.6)	7.0	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス、 指サエ	ロクロナテ	砂粒、緑、小 石を含む	2.516/1 黄灰	層 5	モミガウ痕あり	
024	1 地点	0-060	0000	総合層	山形瓦	瓦	底 12/12	-	(3.4)	7.2	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑、小 石を含む	2.517/1 灰	層 5	モミガウ痕あり	
025	1 地点	0-064	0000	総合層	山形瓦	瓦	底 5/12	-	(4.8)	(8.8)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス、 指サエ	ロクロナテ	砂粒を含む	2.517/1 灰	層 5 (古)	モミガウ痕あり	
026	1 地点	0-062	0000	総合層	山形瓦	瓦	底 5/12	-	(3.5)	(6.4)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス、 指サエ	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	517/1 灰	層 5	モミガウ痕あり	
027	1 地点	底 7/1	0000	山形瓦	瓦	瓦	底 10/12 底 11/12	12.8	3.8	3.0	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	2.5197/1 灰	層 5	モミガウ痕あり	
028	1 地点	0-040	0000	陶器	壺	壺	口 2/12	(25.0)	(5.3)	-	-	-	ロクロナテ、 指サエ	ロクロナテ	砂粒を含む	7.5196/2 灰褐色	層 2		
029	1 地点		東照宮	陶器	壺	壺										7.5197/1 黄緑 7.5198/1 黄灰	常	御堂	
030	1 地点		東照宮	陶器	壺	壺										2.5198/4 に近い 黄灰	常	御堂	
031	1 地点		東照宮	陶器	壺	壺										516/2 灰オリー ン	常	御堂	
032	1 地点		総合層	陶器	壺	壺										2.5198/3 褐色	常	御堂	
033	1 地点	0-048	0000	総合層	陶器	壺	口 1/12	(18.0)	(5.3)	-	-	-	ロクロナテ	ロクロナテ	砂粒を含む	2.516/1 黄灰	13c 横 平、常 ?	層 5	
034	1 地点	0-029- 30	0000	古瀬戸	水注	水注	口 3/12 底 12/12	6.9	17.8	7.0	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	2.517/2 黄灰	古瀬戸 中層 の付	灰緑	
035	1 地点	0-022	0000	古瀬戸	縁起皿	縁起皿	口 10/12	10.4	3.3	4.8	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒、緑を含む	2.5198/4 黄灰	縁起皿 の付	灰緑	
036	1 地点	0-034	0000	陶器	縁起皿	縁起皿	底 12/12	-	(1.7)	6.5	-	-	ロクロナテ、 磨光面付	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/2 灰	黄 3 の 裏		
037	1 地点	0-053	0000	古瀬戸	節籠	節籠	口 2/12 底 4/12	(15.4)	3.3	(8.2)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ、 節籠	赤みない	518/1 灰	古瀬戸 層 1 の 裏	内外面トタン付 、節籠	
038	1 地点	0-019	0000	陶器	手塩皿	手塩皿	口 12/12 底 12/12	9.8	1.9	3.5	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	10197/6 褐	江戸層 の付	縁起皿、内面に雲 文	
039	1 地点	0-015	0209・ 東照宮	陶器	手塩皿	手塩皿	口 8/12 底 11/12	10.2	2.1	4.9	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	7.518/1 灰	江戸層 の付	縁起皿	
040	1 地点	0-015	0209・ 東照宮	陶器	灯明皿	灯明皿	口 9/12 底 11/12	9.9	2.3	4.6	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	517/1 灰	江戸層 の付	縁起皿	
041	1 地点	0-002	0000	陶器	縁起皿	縁起皿	口 3/12 底 12/12	(9.3)	6.4	(5.1)	-	-	ロクロナテ、 磨光面付	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/2 灰	層 6 の 裏		
042	1 地点	0-009	西照宮 土	陶器	黄瀬戸 皿	黄瀬戸 皿	口 2/12	(11.8)	2.7	(7.0)	-	-	ロクロナテ、 磨光面付	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/3 黄灰	江戸層 の付	縁起皿、黄瀬戸 写し	
043	1 地点	0-046	0000	陶器	灯明皿	灯明皿	口 10/12 底 11/12	6.7	1.5	3.1	-	-	ロクロナテ、 磨光面付	ロクロナテ	砂粒を含む	2.516/1 黄灰	江戸層 の付	縁起皿	
044	1 地点	0-041	0000	陶器	茶碗	茶碗	口 1/12 底 2/12	(8.2)	5.5	5.9	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/3 黄灰	江戸層 の付	縁起皿	
045	1 地点	0-066	0070	陶器	香炉	香炉	口 1/12 底 4/12	(11.6)	(5.6)	(10.7)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	518/2 灰	黄瀬戸 の付		
046	1 地点	0-046	0000	陶器	鉢	鉢	口 1/12	(16.0)	(5.1)	-	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/2 灰	江戸層 の付	注口部	
047	1 地点	0-044	0000	陶器	皿	皿	口 3/12 底 1/12	(10.4)	2.4	(6.2)	-	-	ロクロナテ、 回転ヘラクス	ロクロナテ	砂粒を含む	516/1 灰	大塚 2		
048	1 地点	0-046	0000	陶器	鉢	鉢	底 3/12	-	(2.9)	(5.6)	-	-	ロクロナテ、 磨光面付	ロクロナテ	砂粒を含む	2.518/2 灰	江戸層 の付	縁起皿	

1 地点出土遺物観察表 (1)

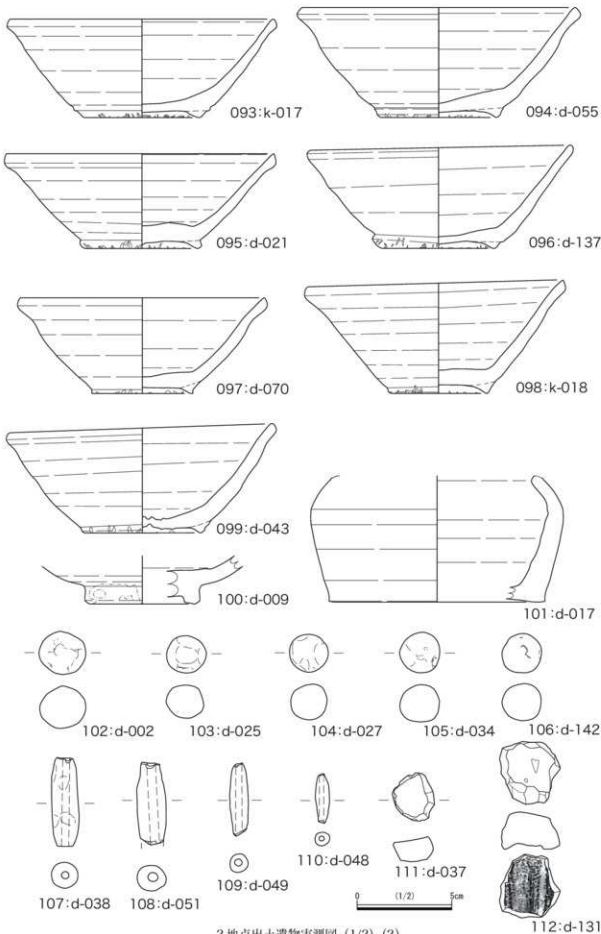
区画番号	調査区	取上番号	引付	層位・遺層	産地・材質	器種	残存率	口径(長)	口径(幅)	口径(厚)	口径(孔)	口径(径)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考
049	1地点	k-003	磁器	陶器(黒戸)	染付 裏面	口 1/12 底 6/12	(11.6)	5.8	(5.6)				ロクロナデ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/3 黄	9小期	陶師染付
050	1地点	k-008	窯器瓦	磁器	染付 裏面	口 2/12 底 6/12	(8.8)	5.6	(3.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白		江戸後期 越 美濃
051	1地点	k-007	窯器瓦	磁器(黒戸美濃)	染付 裏面	口 1/12 底 5/12	6.8	6.1	3.4				ロクロナデ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	10Y8/1 灰白		江戸後期 越 美濃
052	1地点	k-014	窯器瓦	磁器	染付 小鉢	口 4/12 底 7/12	(4.8)	2.2	(1.7)				ロクロナデ、 貼付裏面	ロクロナデ	含まない	5Y8/1 灰白		江戸後期 越 美濃
053	1地点	k-005	磁器	陶器(肥前)	染付 碗	口 4/12 底 2/12	(12.0)	5.7	(4.4)				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/1 灰白		越 美濃
054	1地点	k-012	磁器	磁器	染付 小皿	底 12/12	-	(7.2)	2.9				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ	ロクロナデ	砂粒を含む	10Y8/3 黄		江戸後期 越 美濃
055	1地点	k-011	窯器瓦	磁器(肥前)	染付 皿	口 1/12 底 12/12	(8.9)	2.7	(5.3)				ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白		江戸後期 越 美濃
056	1地点	k-001	磁器	瀬戸美濃	丸瓶	口 2/12 底 5/12	(8.9)	4.6	4.0				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白	書寫 0	備文
057	1地点	k-010	磁器	陶器(美濃)	寶篋	口 2/12 底 6/12	(8.5)	3.9	5.6				ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白		江戸後期 越 美濃
058	1地点	k-016	磁器	陶器(瀬戸)	火鉢	口 1/12 底 1/12	(24.2)	(12.0)	(18.0)				ロクロナデ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白		江戸後期 越 美濃
059	1地点	k-004	窯器瓦	磁器	火鉢	口 1/12	-	(9.5)	-				ロクロナデ	ロクロナデ	含まない	5Y8/1 灰白		高津美濃
060	1地点	k-013	窯器瓦	陶器	風鈴火鉢	口 1/12	(19.6)	(4.0)	-				ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白		江戸後期 越 美濃
061	1地点	d-011	磁器	土師器	土師 碗	5.0	3.1	-	0.3	4.5						7.5Y6/5 黄	不明	
062	1地点	d-067	磁器	陶器	網底丸		4.2	4.3	1.1	-					砂粒を含む	2.5Y7/2 黄	近世	兵衛系磁器加工、 越 美濃
063	1地点		窯器瓦	陶器	網底丸		4.6	4.7	1.6	-					砂粒を含む	7.5Y8/1 灰白	近世	兵衛系磁器加工、 越 美濃
064	1地点	d-057	磁器	陶器	網底丸		8.8	8.5	1.6	-					砂粒を含む	7.5Y7/1 灰白	近世	兵衛系磁器加工、 越 美濃
065	1地点	d-046	磁器	陶器	ねり鉢	口 3/12 底 11/12	(14.6)	7.2	(8.0)				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y8/1 灰白		江戸後期 越 美濃
066	1地点	k-006	窯器瓦	陶器	皿	底 6/12	-	(10.0)	(7.0)				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白		江戸後期 越 美濃
067	1地点	d-003	磁器	陶器	徳利	底 4/12	-	(12.4)	(8.2)				ロクロナデ、 回転ヘラツズリ、 貼付裏面	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄	近世	
068	1地点	k-070	磁器	磁器	陶管	口 2/12	(16.7)	(17.9)	-				ナデ、ねりナデ	ナデ、ねりナデ 土、粘土塊	砂粒、骨を 含む	7.5Y8/7 黄		江戸文 化年間
069	1地点	d-045	磁器	瓦	瓦瓦	-	20.2	15.5	2.4				ナデ、面取り	柘目、面取り	砂粒、骨、小 石を含む	5Y8/1 灰白	近世	

区画番号	調査区	取上番号	器種	石材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(g)	備考
070	1地点	d-043	磁石	緑色絹瓦	9.96	2.96	2.65	82.7	
071	1地点	d-013	磁石	黄銅	7.46	4.92	1.93	50.5	
072	1地点	d-038	磁石	黒炭質砂岩	(12.44)	15.12	7.17	2600	
073	1地点	d-038	磁石	黒炭質砂岩	13.81	13.28	11.16	2700	

1 地点出土遺物観察表 (2)、1 地点出土石器観察表

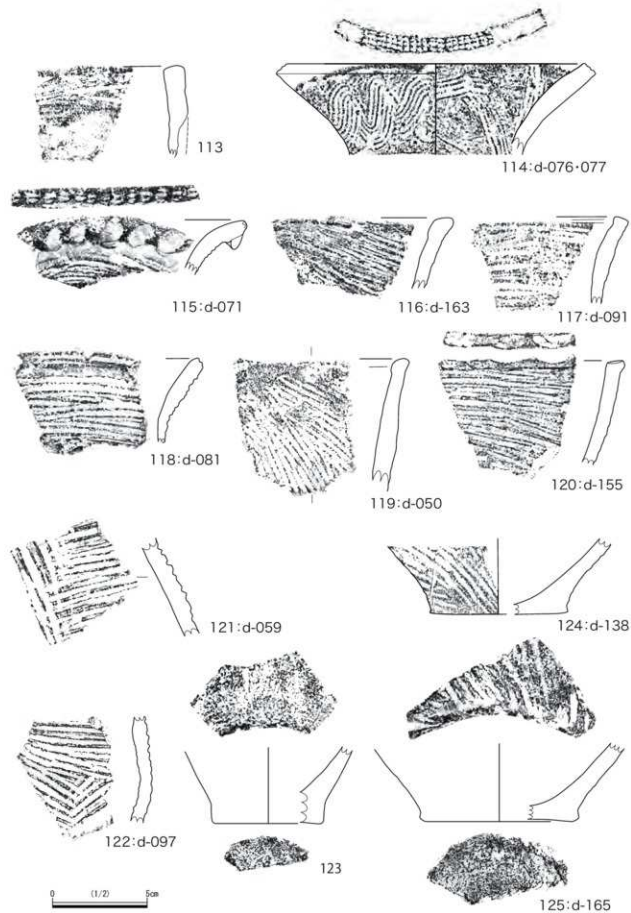


2地点出土遺物実測図 (1/2) (1)

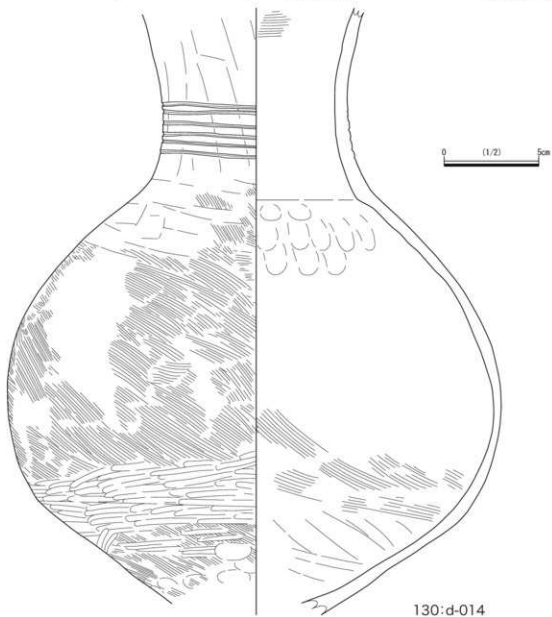


2 地点出土遺物実測図 (1/2) (2)

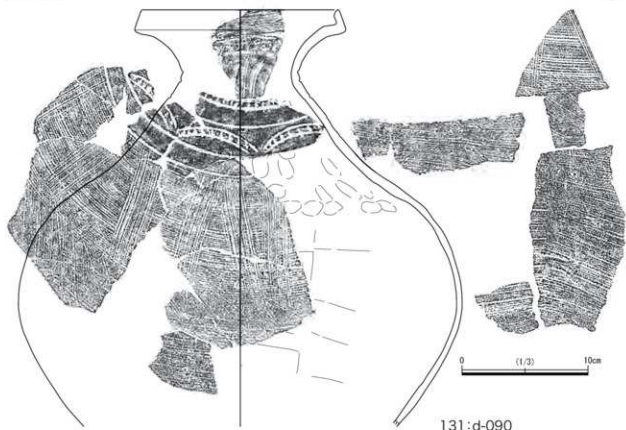
調査 番号	調査区	取上 層号	付与	層位・ 遺構	産地 材質	器種	器作年	口径 径 (cm)	器高 径 (cm)	底径 径 (cm)	口径 径 (cm)	重量 (g)	外周	内面	胎土	色調	時期	備考
074	2地点	0-111			横文土器	深鉢	-	(4.5)	-	-	-	-	ナデ、ミガキ	横文 深鉢	砂粒を含む	10R0/灰白	中群 前期	表面磨削、底面 滑にわずかに厚し 引き線あり
075	2地点	0-128 灰20)			滑面土器	深鉢	-	(2.6)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、緑赤色 土	5/6/1灰	知多 群	製造土器群部
076	2地点	0-103 灰19)			土師群	梨地土器	16.0	1.7	-	-	-	-	-	-	-	7.5/6/4にふい 塵	知多 群	製造土器群部
077	2地点	0-065 灰19)			陶群	香子	口径12/12 底12/12	4.4	3.2	2.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5/6/1灰	15 後 半 群 段 V 灰式	
078	2地点	0-114 灰19)			陶群	山皿	口径7/12 底12/12	8.0	1.9	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	7.5/7/1灰	灰6	
079	2地点	0-052 灰19)			陶群	山皿	口径10/12 底12/12	8.2	1.7	4.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	2.5/7/1灰	灰6	
080	2地点	0-023 灰19)			陶群	山皿	口径12/12 底12/12	7.8	1.6	4.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	7.5/7/1灰	灰6	
081	2地点	0-080 灰19)			陶群	山皿	口径12/12 底12/12	7.8	1.9	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	8/7/0灰	灰6	内面に黒ウツ付 着
082	2地点	0-127 灰19)			陶群	山皿	口径8/12 底12/12	(7.8)	1.6	(5.0)	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒を含む	5/7/1灰	灰7～ 8	
083	2地点	0-097 灰19)			陶群	山皿	口径9/12 底12/12	7.7	1.7	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	10/6/1灰	灰7	
084	2地点	0-140 灰19)			陶群	山皿	口径10/12 底12/12	8.0	1.7	5.0	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑赤土	2.5/7/1灰	灰7～ 8	
085	2地点	0-113 灰19)			陶群	山皿	口径10/12 底12/12	7.7	1.5	5.8	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土	砂粒、緑赤土	7.5/7/1灰	灰7	
086	2地点	0-102 灰19)			山笠碗	碗	口径10/12 底5/12	(14.4)	5.5	(7.3)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 小石を含む	砂粒、緑、 赤土を含む	2.5/7/2灰	灰5	モミガウ痕あり
087	2地点	0-046 灰19)			山笠碗	碗	口径7/12 底9/12	13.4	4.9	6.1	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 小石を含む	砂粒、小 石を含む	2.5/7/2灰	灰6	モミガウ痕あり
088	2地点	0-019 -	0020B		山笠碗	碗	底6/12	-	(3.5)	(6.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土、粘 付灰土	砂粒を含む	2.5/7/1灰	灰6	底部内面緑削 毛ミガウ痕あり
089	2地点	0-126 灰19)			山笠碗	碗	口径6/12 底6/12	(14.4)	5.5	6.5	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/1灰	灰6	モミガウ痕あり
090	2地点	0-110 灰19)			山笠碗	碗	口径7/12 底11/12	13.9	5.0	5.8	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑赤土	5/7/1灰	灰6	モミガウ痕あり
091	2地点	0-047 灰19)			山笠碗	碗	口径4/12 底12/12	(13.5)	5.7	(6.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土、粘 付灰土	砂粒、緑赤土	2.5/7/1灰	灰6	モミガウ痕あり
092	2地点	0-096 灰19)			山笠碗	碗	口径1/12 底10/12	(15.0)	5.1	(6.4)	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/1灰	灰6	モミガウ痕あり
093	2地点	0-017 灰19)			山笠碗	碗	口径2/12 底11/12	(13.9)	5.2	(6.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土、粘 付灰土	砂粒、小石を 含む	2.5/7/2灰	灰6	緑、モミガウ痕あり
094	2地点	0-055 灰19)			山笠碗	碗	口径3/12 底8/12	(14.4)	5.8	(6.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 小石を含む	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/2灰	灰6	モミガウ痕あり
095	2地点	0-021 灰19)			山笠碗	碗	口径4/12 底11/12	(14.2)	5.0	6.0	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/1灰	灰7	モミガウ痕あり
096	2地点	0-127 灰19)			山笠碗	碗	口径7/12 底12/12	13.8	5.4	5.9	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/1灰	灰7	モミガウ痕あり
097	2地点	0-070 灰19)			山笠碗	碗	口径5/12 底12/12	(12.9)	5.1	(5.3)	-	-	ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒、緑、小 石を含む	9/1	灰7	モミガウ痕あり
098	2地点	0-018 灰19)	小 黒土		山笠碗	碗	口径6/12 底7/12	13.5	6.0	5.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土、粘 付灰土	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/8/1灰	灰7	モミガウ痕あり
099	2地点	0-043 灰19)			山笠碗	碗	口径9/12 底12/12	13.8	5.8	6.1	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 陶胎赤土、粘 付灰土	砂粒、緑、小 石を含む	2.5/7/1灰	灰6	モミガウ痕あり
100	2地点	0-009 灰19)			磁群	青磁碗	底3/12	-	(2.5)	(5.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5/7/1灰	磁器 系	中国
101	2地点	0-017 灰19)			陶群	蓋口	口径1/12 底3/12	-	(6.6)	(11.4)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5/6/1灰	灰7	製造地
102	2地点	0-002 灰19)			陶群	陶丸	2.3	2.4	2.2	-	-	-	-	-	-	84/9灰		滑きムラあり
103	2地点	0-026 灰19)			陶群	陶丸	2.0	2.1	1.8	-	-	-	-	-	-	緑/0灰		
104	2地点	0-027 灰20)			陶群	陶丸	2.0	2.0	1.9	-	-	-	-	-	-	7.5/4/1灰		
105	2地点	0-024 灰19)			陶群	陶丸	2.2	2.1	2.0	-	-	-	-	-	-	7.5/7/1灰		
106	2地点	0-141 灰19)			陶群	陶丸	2.0	2.1	2.0	-	-	-	-	-	-	緑/0灰		
107	2地点	0-038 灰19)			土師群	土練	4.7	1.4	-	0.4	9.4	-	-	-	-	10R0/2にふい 塵		
108	2地点	0-081 灰19)			土師群	土練	(4.3)	1.8	-	0.5	8.9	-	-	-	-	10R0/2にふい 塵		
109	2地点	0-049 灰20)			土師群	土練	2.9	1.0	-	0.35	3.1	-	-	-	-	5/6/1灰		
110	2地点	0-048 灰19)			土師群	土練	2.6	0.7	-	0.25	1.1	-	-	-	-	10R0/2にふい 塵		
111	2地点	0-037 灰19)			山笠碗	加工さい ころ	2.5	2.1	1.2	-	-	-	-	-	-	7.5/7/1灰		山笠碗加工品
112	2地点	0-131 灰19)			瓦	加工さい ころ	3.3	3.2	1.7	-	-	-	-	-	-	7.5/7/1灰		瓦4か







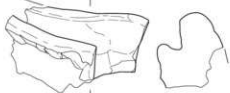
3 地点出土遺物実測図 (1/2) (2)



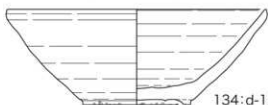
0 (1/2) 5cm



133:d-099



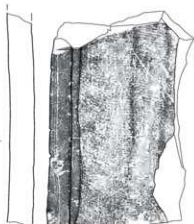
132:d-136



134:d-166



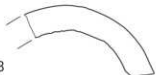
135:d-062



137:d-114

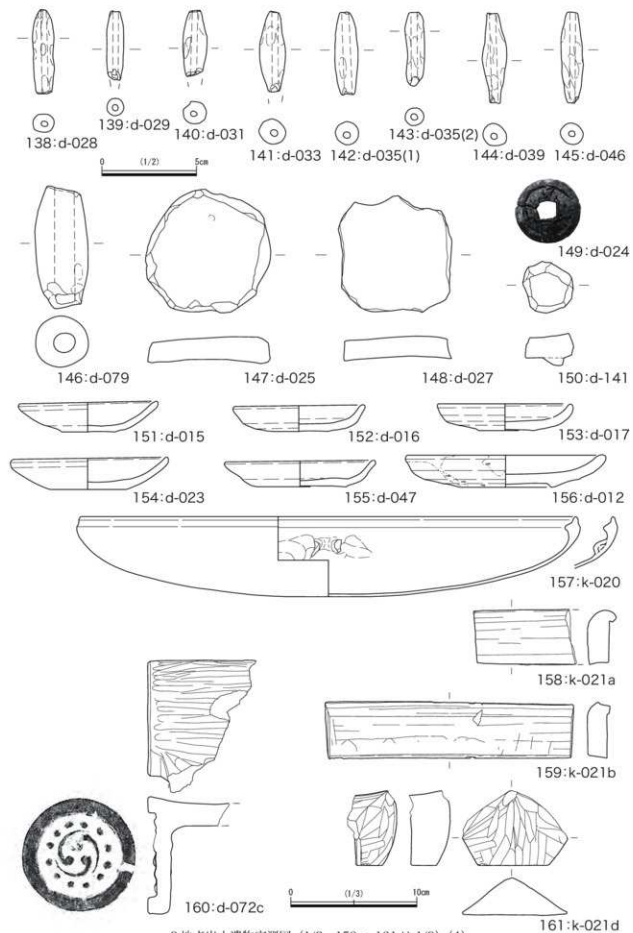


136:d-043

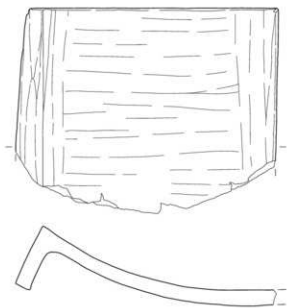


0 (1/3) 10cm

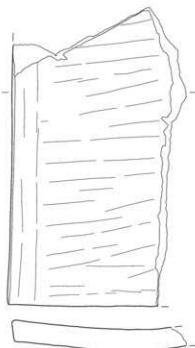
3 地点出土遺物実測図 (1/2、131・135～137 は 1/3) (3)



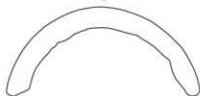
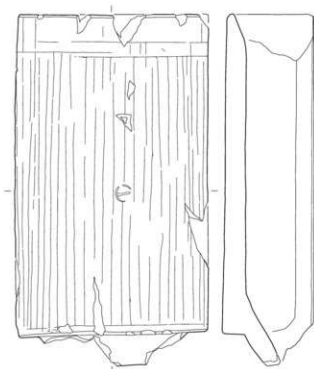
3地点出土遺物実測図 (1/2、158～161は1/3) (4)



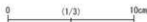
162:k-021e

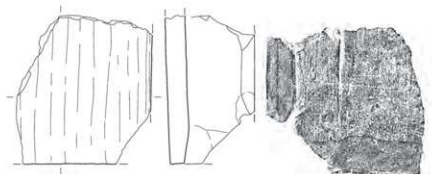


163:k-021f

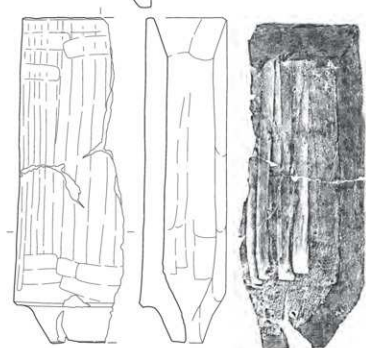


164:k-021g

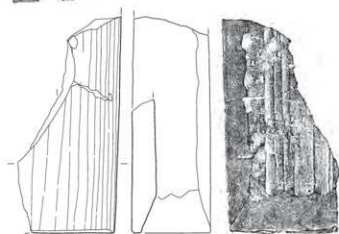
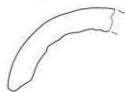




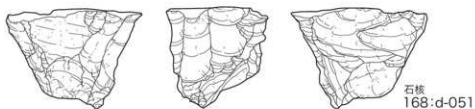
165:k-021h



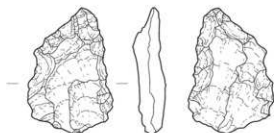
166:k-021i



167:k-021j



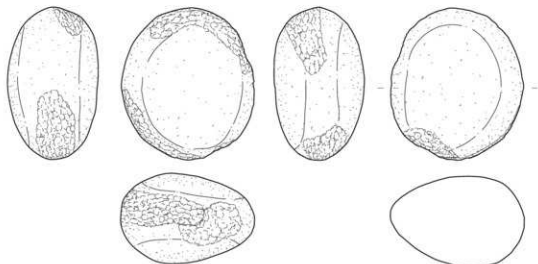
石核  
168:d-051



石核  
169:d-056



石核  
170:d-107

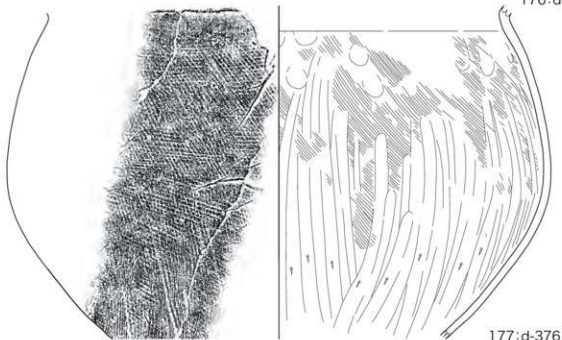
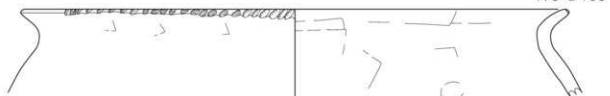
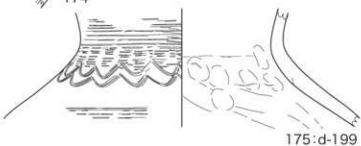
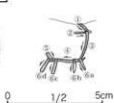
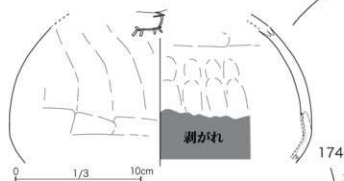
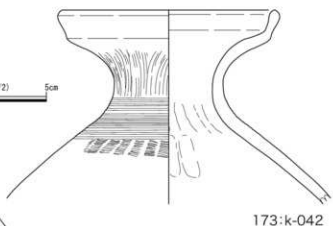
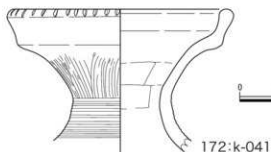


敲石  
171:d-115

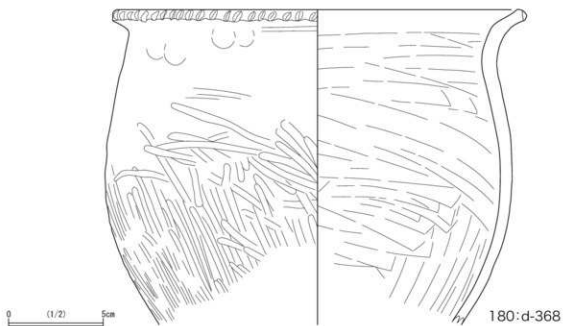
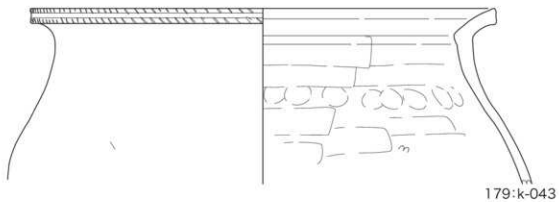
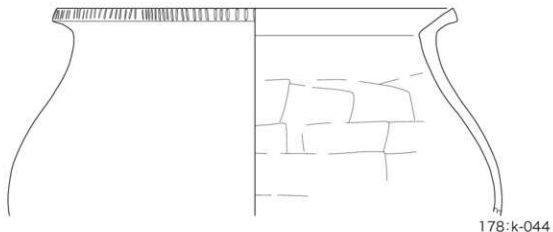
図版番号	調査区	取上番号	Flint	層位・遺構	産地	産地	産地	産地	口径	口径	口径	口径	口径	重量	外面	内面	胎土	色澤	時期	備考
					種類 <td>種別 <td>種別 <td>種別 <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(g)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </td></td></td>	種別 <td>種別 <td>種別 <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(g)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </td></td>	種別 <td>種別 <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(g)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </td>	種別 <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(cm)</td> <td>(g)</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td>	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(g)							
113	3地点	a-076	1071		焼文土類	深鉢									ナ字	貝殻条痕。浅鉢		2.57/3.2浅黄	玉葉森式	口縁部
114	3地点	a-076	077	1091	物生土類	煎	口 1/12	(15.6)	(4.8)	-					ナ字。遺物 灰?。深鉢文	ナ字。深鉢 灰。遺物文 二枚貝条痕。 口縁部縁部割 差。口縁外周 部ナ字状に磨	砂粒。種を含む	1097/4に多い 黄褐色	水降平式	
115	3地点	a-071	1064		物生土類	煎		(17.0)	(2.8)	-	-	-			ナ字。水降平	1cm以下の砂 粒多く含む		1097/4に多い 黄褐色	水降平式	a-018と同一致
116	3地点	a-162	1086		物生土類	深鉢									ナ字	貝殻条痕		1097/4に多い 黄褐色	水降平式	口縁部
117	3地点	a-091	1086		物生土類	深鉢									ナ字。物核	貝殻条痕		1097/4に多い 黄褐色	水降平式	口縁部

3地点出土石器実測図 (1/2)、3地点出土遺物観察表 (1)

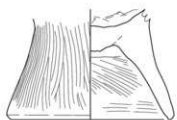




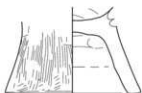




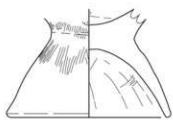
0 (1/2) 5cm



181:d-347



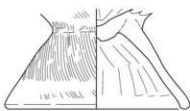
182:d-166



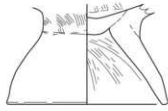
183:d-367



184:d-032



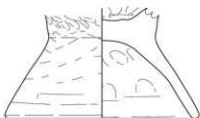
185:d-312



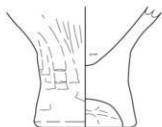
186:k-038



187:k-037



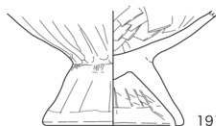
188:k-039



189:k-040



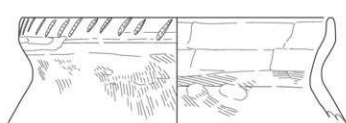
190:k-036



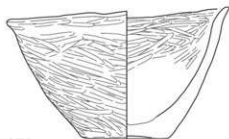
191:d-004



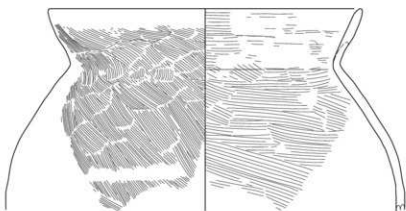
192:d-225



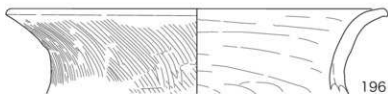
193:d-073



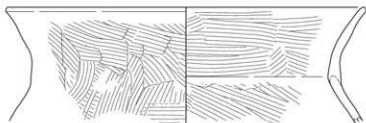
194:d-002



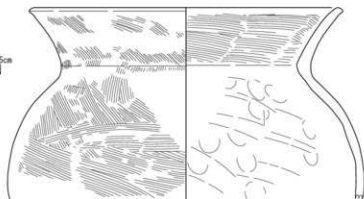
195:d-387



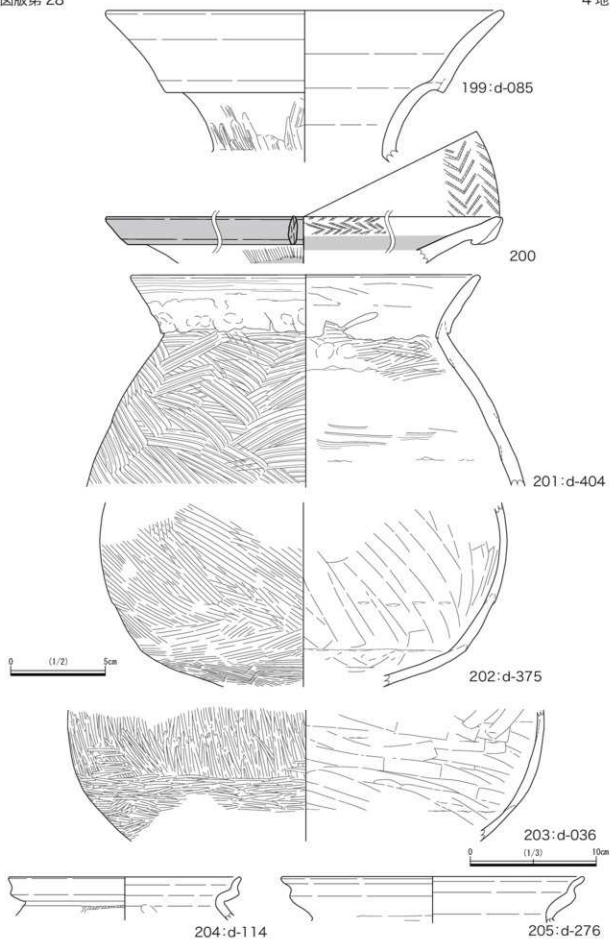
196:k-023



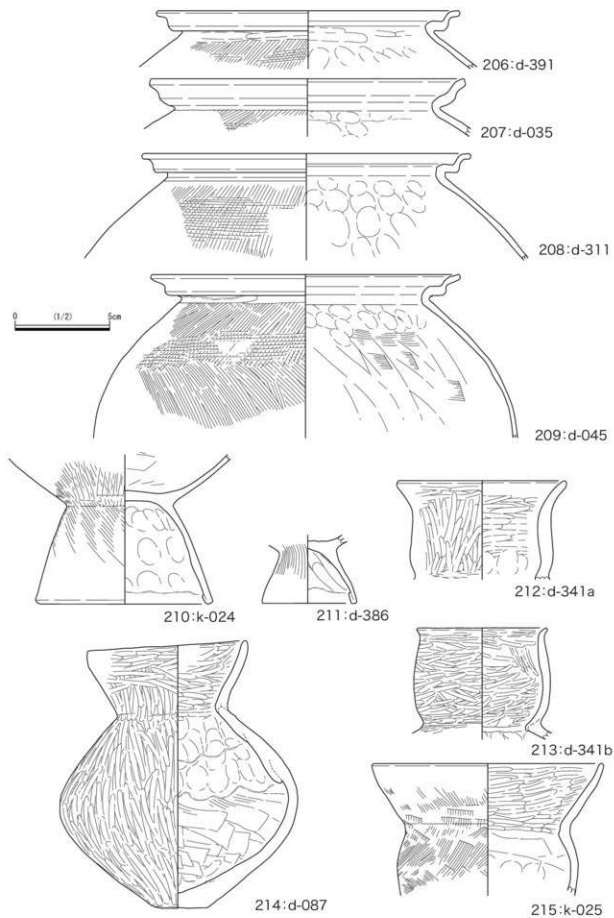
197:d-387



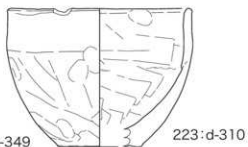
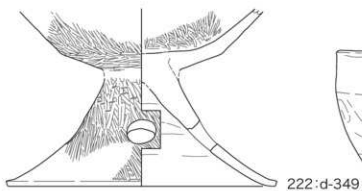
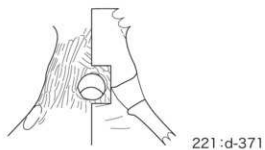
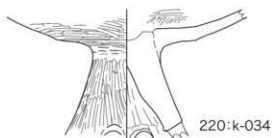
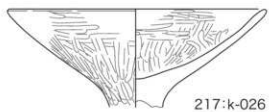
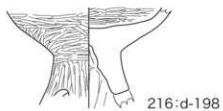
198:d-379

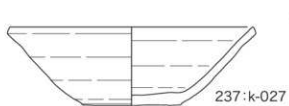
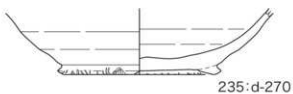
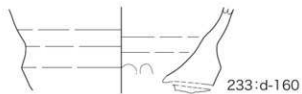
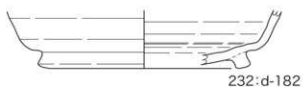
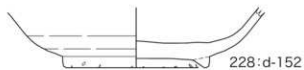
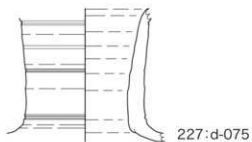
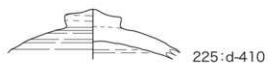


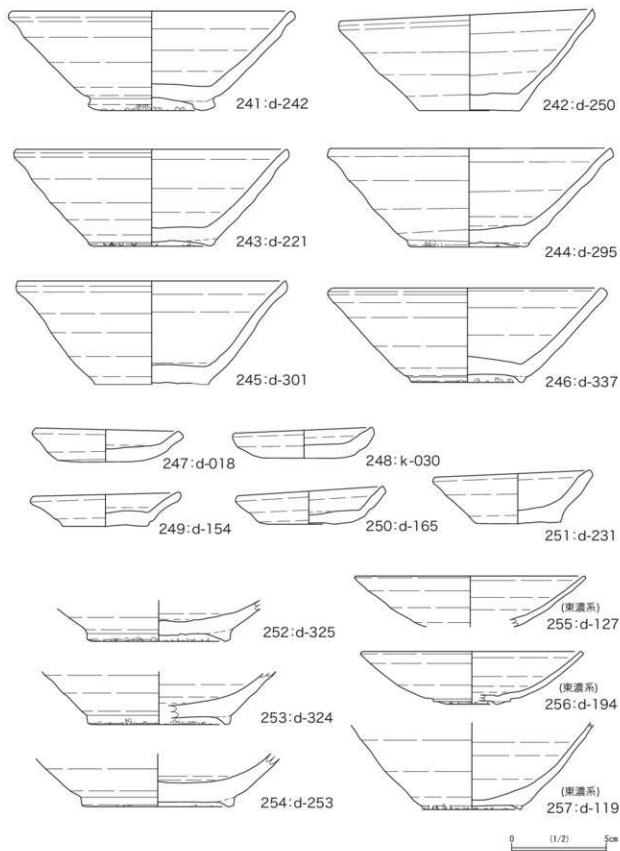
4地点出土遺物実測図 (1/2、203は1/3) (5)



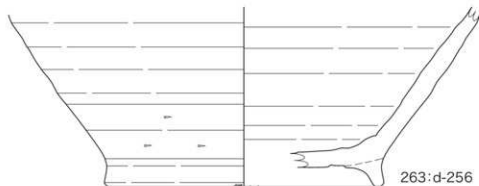
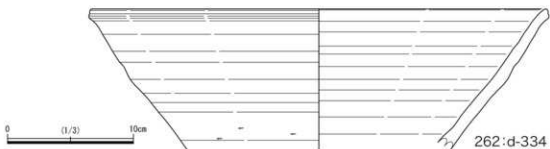
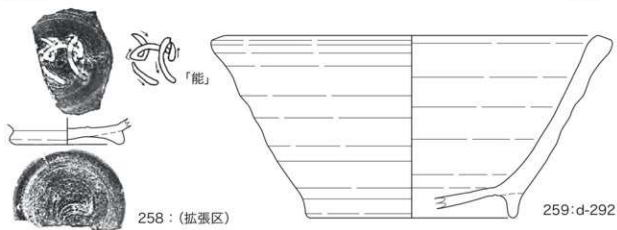
4 地点出土遺物実測図 (1/2) (6)

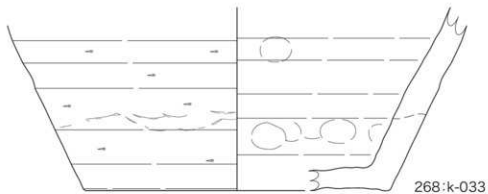
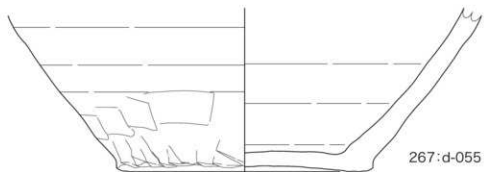
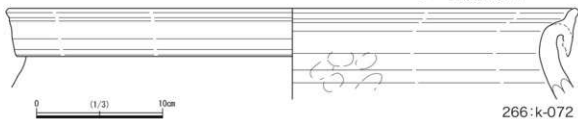
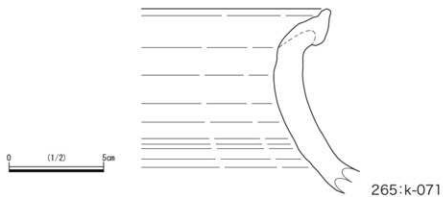
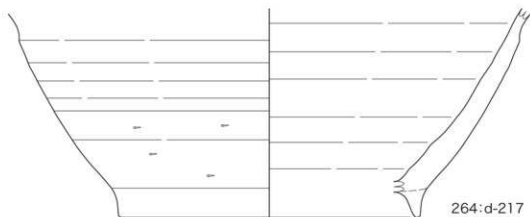


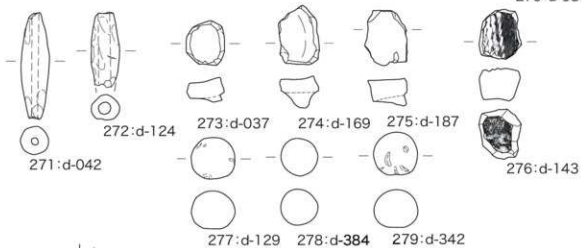
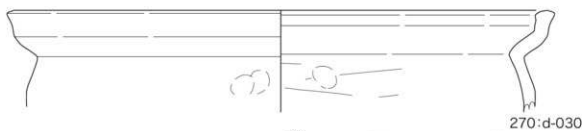
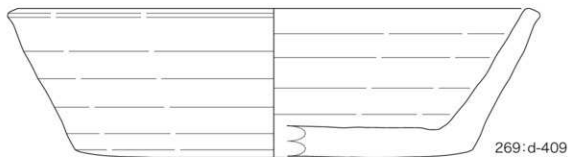












280:d-022



281:d-184

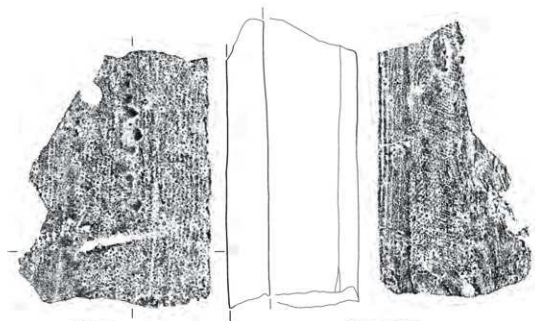


282:d-211

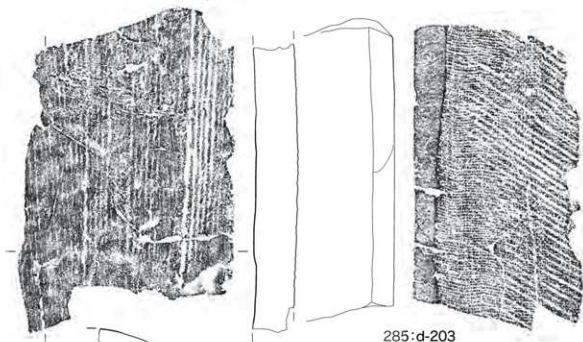
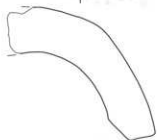


283:k-022

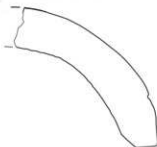
0 (1/2) 5cm

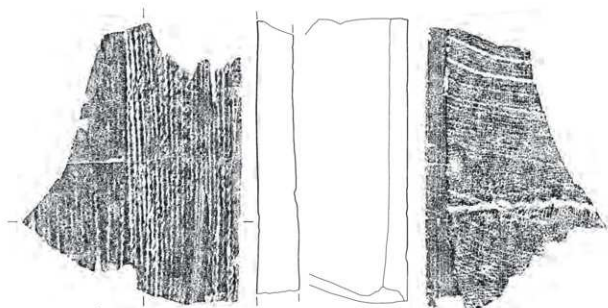


284:d-125

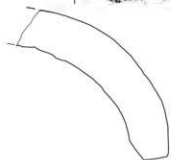


285:d-203





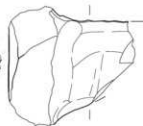
286 : d-069



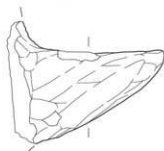
287:d-181



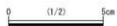
288:d-261

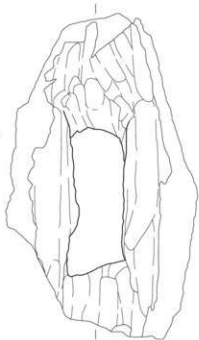
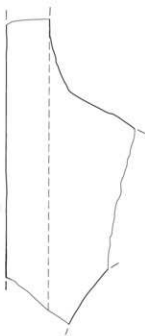


特殊丸瓦(把手部)  
289:d-336

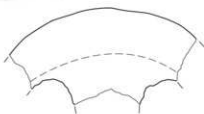
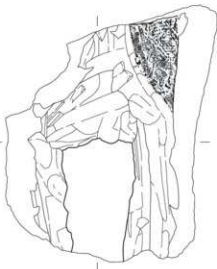
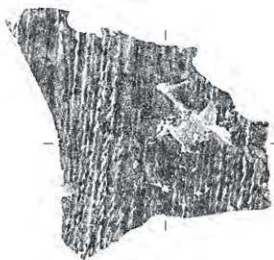


(突起部)  
290:d-251



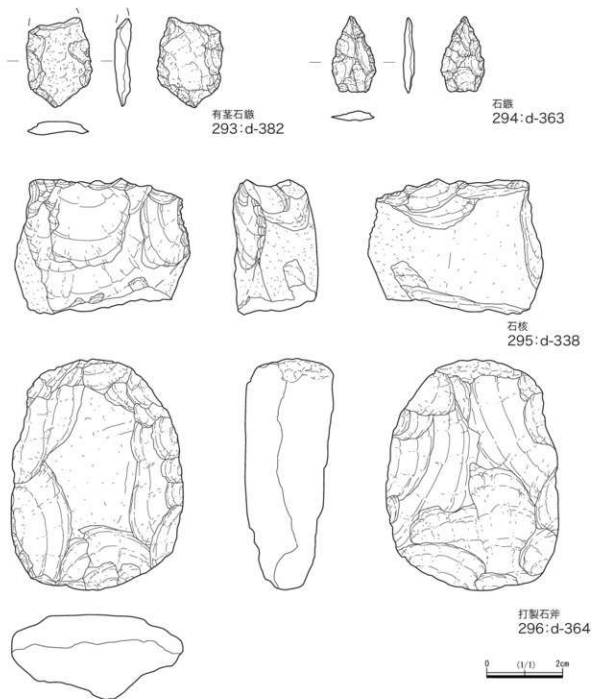


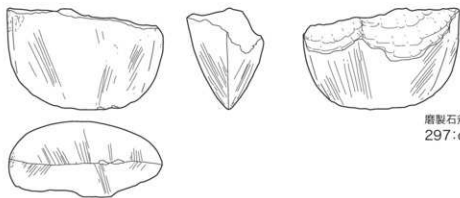
特殊丸瓦  
291:d-216



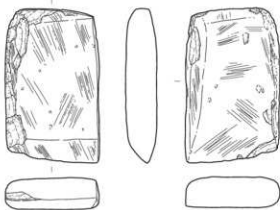
特殊丸瓦  
292:d-405

0 (1/2) 5cm

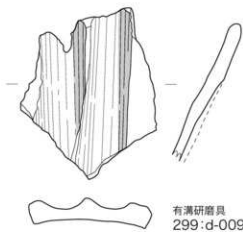




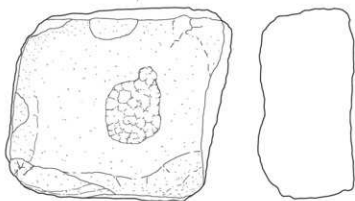
磨製石斧  
297:d-215



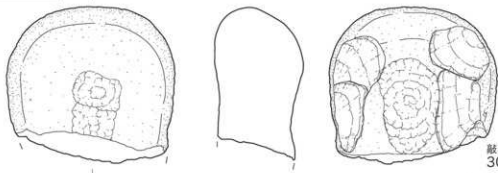
磨製石斧  
298:d-401



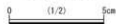
有溝研磨具  
299:d-009



台石  
300:d-407



敲石  
301:d-365





図版番号	調査区	取上番号	Fl	階位・遺構	産地・材質	器種	種名	口径(㎝)	底径(㎝)	底厚(㎝)	孔径(㎝)	重量(g)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考
172	4 地点	b-041	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 4/12	(11.4)	(7.5)	-	-	-	ヨコナデ、横ナデ	キギム、ヨコナデ、土師文、黒文	砂粒、硬を含む	2.5YR/4 に近い黄	古井式	
173	4 地点	b-042	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 4/12	(11.2)	(10.2)	-	-	-	ヨコナデ、横ナデ、しほりク、ヨコナデ	キギム、ヨコナデ、土師文、黒文	砂粒、硬を含む	2.5Y/2 灰黄	古井式	
174	4 地点	b-043	紅埴区	弥生土層	土	壺	-	-	-	-	-	-	ナデ	ナデ	砂粒、硬を含む		横紋面土師 内面割製	
175	4 地点	d-199	紅埴区	弥生土層	土	壺	-	-	(8.3)	-	-	-	ナデ、指オサ	ナデ、横文、黒文、土師文	砂粒を含む	7.5YR/6 黄	古井式	横紋面土師 内面割製
176	4 地点	d-207	紅埴区	土師層	壺	口 2/12	(20.8)	(14.7)	-	-	-	-	横ナデ、指オサ	キギム、ヨコナデ、土師文、黒文	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y/4 浅黄	中期	外面保存好 頸部ツバ目縁有
177	4 地点	d-376	紅埴区	弥生土層	土	壺	-	-	(13.6)	-	-	-	ハケ、指オサ	ヨコナデ、ヨコナデ、土師文、黒文	砂粒を含む	10YR/4 浅黄緑	中期	外面保存好
178	4 地点	b-044	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 12/12	20.9	(11.0)	-	-	-	ヨコナデ、横ナデ	キギム、ナデ	砂粒、硬を含む	2.5YR/2 に近い黄	中期	
179	4 地点	b-043	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 12/12	24.6	(9.3)	-	-	-	ヨコナデ、横ナデ、指オサ	キギム、ナデ	砂粒、硬を含む	10YR/4 浅黄緑	中期	
180	4 地点	d-368	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 6/12	21.1	(16.7)	-	-	-	ヨコナデ、横ナデ	キギム、指オサ、土、ヨコナ	砂粒を含む	7.5YR/2 黄	中期	外面保存好
181	4 地点	d-347	紅埴区	弥生土層	付付層	底 3/12	-	(5.8)	8.4	-	-	-	横ナデ、ナデ、ハケ、ヨコナ	タナハケ	砂粒、硬を含む	7.5YR/2 黄	中期	部のみ
182	4 地点	d-166	紅埴区	弥生土層	付付層	底 2/12	-	(4.5)	7.2	-	-	-	ナデ	ハケ、ナデ	砂粒を含む	10YR/4 に近い黄	中期	外面保存好
183	4 地点	d-367	紅埴区	弥生土層	付付層	底 11/12	-	(5.7)	8.2	-	-	-	横ナデ	ハケ、ナデ	砂粒を含む	7.5YR/2 に近い黄	中期	部のみ、d-402 と接合
184	4 地点	d-032	紅埴区	弥生土層	付付層	底 6/12	-	(5.6)	9.2	-	-	-	横ナデ	ハケ、ナデ、指オサ	砂粒、硬、小石を含む	5YR/6 黄	中期	
185	4 地点	d-312	紅埴区	弥生土層	付付層	底 12/12	-	(5.3)	9.3	-	-	-	横ナデ、ヨコナ	タナハケ、ヨコナ	砂粒、硬を含む	7.5YR/2 浅黄緑	中期	部のみ
186	4 地点	b-008	紅埴区	弥生土層	付付層	底 12/12	-	(5.3)	8.3	-	-	-	横ナデ、ヨコナ	ハケ、ヨコナ	砂粒、硬を含む	7.5YR/2 黄	中期	
187	4 地点	b-037	紅埴区	弥生土層	付付層	底 11/12	-	(5.5)	8.0	-	-	-	指オサ、横ナ	指オサ、横ナ	砂粒を含む	7.5YR/2 黄	後期	
188	4 地点	b-039	紅埴区	弥生土層	付付層	底 4/12	-	(5.9)	(9.8)	-	-	-	指オサ、ナデ	ヨコナ、横ナ	砂粒を含む	7.5YR/2 黄	中期	
189	4 地点	b-040	紅埴区	弥生土層	付付層	底 12/12	-	(6.4)	4.4	-	-	-	ナデ、指オサ	横ナデ、ナデ	砂粒、硬を含む	10YR/2 に近い黄	中期	頸状部
190	4 地点	b-036	紅埴区	弥生土層	付付層	底 5/12	-	(8.1)	(8.5)	-	-	-	ハケ、横ナデ	横ナデ、ヨコナ	砂粒、硬を含む	7.5YR/2 黄	中期	
191	4 地点	d-004	紅埴区	弥生土層	付付層	底 12/12	-	(8.1)	7.3	-	-	-	横ナデ	ハケ、ナデ	砂粒、硬を含む	10YR/4 に近い黄	後期	
192	4 地点	d-225	紅埴区	弥生土層	付付層	底 12/12	-	(8.4)	7.2	-	-	-	横ナデ、指オ	ハケ、土師文	砂粒、硬、小石を含む	10YR/6 明黄緑	中期	
193	4 地点	d-073	紅埴区	弥生土層	土	壺	口 2/12	(16.4)	(5.5)	-	-	-	ハケ、ヨコナ	ハケ、ナデ、指オサ	砂粒、硬を含む		後期	d-344 と接合
194	4 地点	d-002	紅埴区	弥生土層	小塚跡	口 10/12	11.5	7.0	4.7	-	-	-	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	砂粒、硬、小石を含む	5YR/6 黄	弥生末	
195	4 地点	d-387	紅埴区	土師層	壺	口 2/12	(16.5)	(10.7)	-	-	-	-	ヨコナデ、ハ	ヨコナデ、横ナ	砂粒、硬を含む	10YR/2 に近い黄	中期	外面保存好 頸部ツバ目縁有
196	4 地点	b-023	紅埴区	土師層	壺	口 2/12	18.4	(9.4)	-	-	-	-	ナデ、指オサ	ナデ、ハケ	砂粒、硬を含む	10YR/4 浅黄緑	前期	パリス古墳群、西三
197	4 地点	d-387	紅埴区	土師層	壺	口 1/12	(18.8)	(8.1)	-	-	-	-	ハケ	ヨコナデ、ハケ	砂粒、硬、小石を含む	5YR/6 黄	中期	外面保存好
198	4 地点	d-379	紅埴区	土師層	壺	口 4/12	(16.0)	(10.1)	-	-	-	-	ヨコナデ、横ナ	ハケ、横ナ	砂粒、小石を含む	10YR/2 に近い黄	中期	外面保存好 d-381 と接合
199	4 地点	d-005	紅埴区	土師層	樽倉口跡	口 2/12	(20.8)	(8.5)	-	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ナ	砂粒、硬を含む	10YR/2 に近い黄	古代	d-185・273 と接合
200	4 地点	紅埴区	土師層	壺	口 1/12	(21.0)	(2.0)	-	-	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ナ	砂粒を含む	10YR/4 浅黄緑	前期	パリス古墳群、西三
201	4 地点	d-404	紅埴区	0085B	土師層	壺	口 4/12	(18.4)	(11.2)	-	-	-	ハケ、指オサ	ハケ、横ナ、指オサ、ナ	砂粒、硬、小石を含む	10YR/2 に近い黄	中期	西三古墳群、頸部ツバ目縁有
202	4 地点	d-375	紅埴区	土師層	壺	-	-	(9.7)	-	-	-	-	横ナデ	ハケ	砂粒、小石を含む	10YR/4 浅黄緑	前期	内面黄赤 d-039
203	4 地点	d-036	紅埴区	土師層	壺	-	-	(10.4)	-	-	-	-	横ナデ	ミガキ	砂粒を含む	7.5Y/3 黄緑	後期	内面黄赤
204	4 地点	d-114	紅埴区	土師層	5 字壺	口 1/12	(12.1)	(2.3)	-	-	-	-	ヨコナデ、指オ	ヨコナデ、ハケ	砂粒を含む	10YR/6 に近い黄	古代	外面保存好
205	4 地点	d-276	紅埴区	土師層	5 字壺	口 1/12	(15.8)	(2.4)	-	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘ	砂粒を含む	10YR/2 に近い黄	前期	外面保存好
206	4 地点	d-391	紅埴区	土師層	5 字壺	口 2/12	(15.8)	(3.1)	-	-	-	-	ヨコナデ、指ナ	ヨコナデ、ヘ	砂粒を含む	10YR/2 に近い黄	前期	外面保存好
207	4 地点	d-025	紅埴区	土師層	5 字壺	口 1/12	(16.4)	(2.1)	-	-	-	-	ヨコナデ、指オ	ヨコナデ、ハケ	砂粒を含む	10YR/2 に近い黄	前期	外面保存好
208	4 地点	d-311	紅埴区	土師層	5 字壺	口 2/12	(17.1)	(5.5)	-	-	-	-	ヨコナデ、指オ	ヨコナデ、ナ	砂粒を含む	10YR/2 に近い黄	前期	外面保存好
209	4 地点	d-045	紅埴区	土師層	5 字壺	口 5/12	(16.2)	(8.5)	-	-	-	-	ヨコナデ、指オ	ヨコナデ、ハケ、ヨコナ	砂粒を含む	10YR/4 に近い黄	古墳群 期	外面保存好 d-298 と接合
210	4 地点	b-024	紅埴区	土師層	5 字壺	底 5/12	-	(7.9)	(8.9)	-	-	-	横ナデ、指オ	ハケ、ナデ	砂粒を含む	10YR/2 灰黄緑	前期	部のみ
211	4 地点	d-386	紅埴区	土師層	瓦口跡	底 4/12	-	(3.6)	(4.9)	-	-	-	横ナデ	ハケ	砂粒を含む	2.5Y/3 浅黄	前期	5 字壺部
212	4 地点	d-341a	紅埴区	土師層	瓦口跡	口 2/12	(8.9)	(5.2)	-	-	-	-	ヨコナデ、ミガキ、指オ	ヨコナデ、ミガキ	焼付			
213	4 地点	d-341b	紅埴区	弥生土層	壺	口 1/12	8.8	(5.9)	-	-	-	-	ミガキ、ヨコナ	ヨコナデ、横ナ	砂粒、硬を含む	10YR/2 に近い黄	後期	ヒサコ形
214	4 地点	d-087	紅埴区	弥生土層	壺	口 1/12	(8.3)	14.2	3.0	-	-	-	ミガキ、指オ	ミガキ	砂粒、硬を含む	10YR/2 に近い黄	後期	
215	4 地点	b-025	紅埴区	土師層	壺	口 2/12	(12.0)	(7.0)	-	-	-	-	ミガキ、指オ	ハケ、ヨコナ	砂粒を含む	7.5YR/2 に近い黄	前期	
216	4 地点	d-198	紅埴区	弥生土層	高坪	-	-	(5.3)	-	-	-	-	ミガキ、指オ	ミガキ	砂粒を含む	5YR/6 黄	後期	1 層孔 3 方向
217	4 地点	b-026	紅埴区	土師層	高坪	口 1/12	(13.5)	(5.2)	-	-	-	-	ヨコミガキ、ミガキ	ヨコミガキ、ミガキ	砂粒、小石を含む	10YR/2 浅黄緑	前期	

4 地点出土遺物観察表 (1)

図番	調査地	取上番号	引付	発出・遺構	産地	種類	残存率	口径 長(mm)	口径 幅(mm)	口径 深(mm)	口径 容積(cc)	重量 (g)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考	
218	4 地点	4-035	0113B	土師器	高坪	-	-	(5.1)	-	-	-	-	ヒガキ、胎土	ヒガキ	砂粒を含む	5YR7/6 橙	国関か	1 穿孔 1 施 3 方向	
219	4 地点	4-069	1E9d	土師器	高坪	-	-	(5.1)	-	-	-	-	胎土	ヒガキ	砂粒、硬を含む	7.5YR6/4 淺黄	国関II	穿孔あり	
220	4 地点	4-034	0113B	土師器	高坪	-	-	(6.9)	-	-	-	-	ヒガキ	ヒガキ	砂粒、小石を含む	10YR6/4 淺黄	国関か	1 穿孔 1 施 4 方向 赤胎土	
221	4 地点	4-271	1E9c	物生土器	高坪	-	-	(7.2)	-	-	-	-	胎土	ヒガキ	砂粒を含む	10YR6/4 淺黄	国関I	施あり	
222	4 地点	4-349	1E9c	物生土器	高坪	底 1/2	-	(9.4)	(14.1)	-	-	-	ヒガキ、子	ヒガキ	砂粒、硬を含む	10Y6/2 灰黄	国関I	1 穿孔 1 施 4 方向 胎土?	
223	4 地点	4-310	1E10a	物生土器	小丸	口 2/2 底 3/2	(8.3)	7.3	(4.4)	-	-	-	コナ子、コナ子、胎土	コナ子、胎土	砂粒、硬、小石を含む	7.5YR6/6 橙	国関I	口縁打ち欠き 胎土?	
224	4 地点	4-034	1E9d	物生土器	瓦二子	口 10/2 底 12/2	5.4	3.1	3.4	-	-	-	胎土、コナ子	胎土	砂粒、小石を含む	7.5YR6/6 橙	国関I	胎土	
225	4 地点	4-410	1E9d	濃煮器	高坪	-	-	(2.6)	-	-	-	-	胎土	胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y7/3 灰白	古代		
226	4 地点	4-032	松塚区	反胎陶器	小皿	底 3/2	-	(2.3)	(5.8)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y6/3 不白	古代	生掛け	
227	4 地点	4-025	1E9c	濃煮器	高坪	底 -	-	(7.0)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	古代		
228	4 地点	4-152	1E9d	陶器	山菜碗	底 12/2	-	(3.1)	7.1	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y7/1 灰白	属 5	ヒミガク属あり	
229	4 地点	4-074	松塚区	濃煮器	碗	底 1/2	(1.8)	(11.0)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y6/2 灰黄	古代		
230	4 地点	4-171	1E9c	陶器	山菜碗	底 6/2	-	(1.6)	(9.0)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 5	ヒミガク属あり	
231	4 地点	4-073	濃煮	陶器	反胎陶器	底 1/2	-	(1.6)	(7.8)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 5	ヒミガク属あり	
232	4 地点	4-182	1E9c	濃煮器	坪	底 2/2	-	(3.1)	(8.0)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰	古代		
233	4 地点	4-160	1E9d	濃煮器	管	底 -	-	(4.5)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y6/1 黄灰	古代	1 穿孔 1 施 4 方向 胎土?	
234	4 地点	4-232	1E9d	山菜碗	小皿	口 3/2 底 10/2	11.0	3.7	5.0	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	硬を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 3	自然胎	
235	4 地点	4-270	1E9c	山菜碗	碗	底 6/2	-	(3.4)	(8.0)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y7/3 淺黄	属 4	ヒミガク属あり	
236	4 地点	4-291	1E9d	0025U	山菜碗	碗	口 3/2 底 12/2	(17.0)	5.4	(7.1)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 4	ヒミガク属あり	
237	4 地点	4-027	0025U	山菜碗	碗	口 4/2 底 6/2	(12.8)	4.2	(5.2)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 8		
238	4 地点	4-016	1E9c	山菜碗	碗	口 2/2 底 1/2	(14.9)	5.2	(6.2)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	5Y7/1 灰白	属 6	底面何処か?、ヒミガク属あり	
239	4 地点	4-026	松塚区	山菜碗	碗	口 3/2 底 1/2	(14.5)	5.1	(6.2)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y7/3 淺黄	属 6	ヒミガク属あり	
240	4 地点	4-096	1E9d	山菜碗	碗	口 3/2 底 4/2	(14.0)	5.3	(6.2)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 6	ヒミガク属あり	
241	4 地点	4-242	1E9d	山菜碗	碗	口 3/2 底 5/2	(14.7)	5.3	5.3	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y6/2 灰黄	属 7	ヒミガク属あり	
242	4 地点	4-250	1E10f	山菜碗	碗	口 11/2 底 12/2	13.3	5.4	5.3	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y8/1 灰白	国関 I	泥物品	
243	4 地点	4-221	1E9d	山菜碗	碗	口 3/2 底 12/2	(14.3)	5.1	6.2	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 6		
244	4 地点	4-295	1E9d	0025U	山菜碗	碗	口 3/2 底 6/2	(14.8)	5.2	6.0	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 6	ヒミガク属あり
245	4 地点	4-301	1E9d	0025U	山菜碗	碗	口 6/2 底 12/2	(14.1)	5.5	6.0	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 7	底面ハワリ
246	4 地点	4-337	1E9c	山菜碗	碗	口 3/2 底 6/2	(14.1)	5.0	(5.8)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 7	ヒミガク属あり	
247	4 地点	4-018	1E9d	陶器	山皿	口 7/2 底 12/2	7.6	1.8	5.0	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	5Y7/1 灰白	属 6		
248	4 地点	4-030	1E9c	陶器	山皿	口 10/2 底 12/2	7.3	1.6	5.0	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	硬を含む	2.5Y7/1 灰白	属 7	胎土	
249	4 地点	4-154	1E9d	陶器	山皿	口 7/2 底 12/2	7.7	1.8	4.6	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	5Y7/1 灰白	属 7	胎土と接合	
250	4 地点	4-165	1E10f	陶器	山皿	口 12/2 底 12/2	7.7	2.0	4.4	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y8/1 灰白	属 8		
251	4 地点	4-221	1E9d	陶器	山皿	口 12/2 底 12/2	8.2	2.6	4.5	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 5		
252	4 地点	4-025	1E9d	0025U	山菜碗	碗	底 3/2	-	(2.2)	(7.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、小石を含む	5Y6/1 灰	属 5	ヒミガク属あり	
253	4 地点	4-324	1E9d	0025U	山菜碗	碗	底 4/2	-	(2.8)	(7.0)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y6/2 灰黄	属 5	ヒミガク属あり	
254	4 地点	4-253	1E9d	山菜碗	碗	底 1/2	-	(2.8)	(7.4)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 5	ヒミガク属あり	
255	4 地点	4-127	1E10d	山菜碗	碗	口 3/2	(12.0)	(2.7)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 5	実測高(大目)	
256	4 地点	4-194	1E10d	山菜碗	碗	口 1/2 底 1/2	(10.4)	2.8	(2.5)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	5Y7/1 灰白	属 5	実測高(大目)	
257	4 地点	4-119	1E9d	山菜碗	碗	底 5/2	-	(4.6)	(5.2)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒を含む	2.5Y8/2 灰白	属 5	ヒミガク属あり	
258	4 地点	4-292	1E9d	0025U	陶器	片口碗	口 3/2 底 1/2	(19.6)	9.7	(10.7)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、胎土	砂粒、硬を含む	2.5Y7/2 灰黄	属 6a	自然胎

4 地点出土遺物観察表 (2)

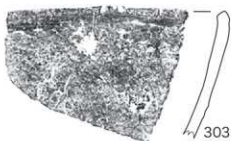
図版番号	調査区	取上番号	Flint	原位・遺構	産地	産地	産地	産地	口径 (mm)	長さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	外函	内函	胎土	色調	時期	備考
260	4地点	φ-203	IE9d	00250	陶器	片口鉢	口1/12 底1/12	(25.5)	9.4	(14.6)	-	-	ロクロナデ、指オサエ、ナデ	ロクロナデ、指オサエ、ナデ	砂粒、細、小石を含む	2.576/1黄灰	第5期	軸
261	4地点	φ-221	IE9d		陶器	片口鉢	口2/12	(28.0)	(8.1)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、細、小石を含む	2.577/2黄灰	第5期	4-319と接合	
262	4地点	φ-334	IE9d	00250	陶器	片口鉢	口2/12	(26.0)	(11.2)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、口取ヘラウツスリ	砂粒、細、小石を含む	2.576/2黄灰	第5期	3	
263	4地点	φ-256	IE9d		陶器	片口鉢	底3/12	-	(8.5)	(14.4)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、口取ヘラウツスリ、貼付黒白	砂粒、細、小石を含む	5.971/1灰白	第6a	尾ミガワ線あり 内面黒粒	
264	4地点	φ-217	IE9d		陶器	片口鉢	底1/12	-	(10.0)	(15.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ、口取ヘラウツスリ、貼付黒白	砂粒、細、小石を含む	2.577/1灰白	第5		
265	4地点	k-071	灰塚区		陶器	皿	口1/12	-	(9.7)	-	-	ロクロナデ、指オサエ、ナデ	ロクロナデ、指オサエ	砂粒、小石を含む	2.572/2黄灰	第5		
266	4地点	k-072	溝橋		陶器	大皿	口1/12	(45.0)	(7.2)	-	-	ロクロナデ、指オサエ、ナデ	ロクロナデ、指オサエ	砂粒、細を含む	10.966/4に古い黄灰	第7		
267	4地点	φ-055	IE10f		陶器	皿	底/12	-	(8.6)	(13.6)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、細を含む	2.576/1黄灰	中世	常滑 自然釉	
268	4地点	k-033	灰塚区		陶器	皿	底3/12	-	(9.7)	(16.0)	-	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、口取ヘラウツスリ、指オサエ	砂粒を含む	2.577/2黄灰	平安末	常滑 広口皿or 煎茶盆	
269	4地点	φ-409	IE9a		陶器	皿	口1/12 底3/12	(27.0)	7.9	(21.0)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、細を含む	2.575/2黄灰	第6a	10	
270	4地点	φ-030	IE9a		陶器	皿	口1/12	(28.3)	(5.3)	-	-	ロクロナデ、指オサエ	ロクロナデ、指オサエ	砂粒を含む	2.577/2黄灰	中-近世	外函に焼付、焼酎に黒炭文を差	
271	4地点	φ-042	IE9a		土師器	土師		4.6	1.5	-	0.32	11.4	指オサエ			10.977/3に古い黄灰	中世か	
272	4地点	φ-124	IE9a		土師器	土師		(3.9)	1.5	-	0.6	6.6	指オサエ			10.966/4に古い黄灰	中世か	
273	4地点	φ-037	IE9b		陶器	加工きいころ		2.3	2.0	1.3	-	-				7.577/1灰白	中世部分	
274	4地点	φ-169	IE9c		陶器	加工きいころ		3.1	2.0	1.7	-	-				2.578/2灰白	高台部分	
275	4地点	φ-187	IE10g		陶器	加工きいころ		2.9	2.3	1.4	-	-				2.577/3黄灰	高台部分	
276	4地点	φ-143	IE9d		瓦	加工きいころ		2.6	2.2	1.6	-	-	断面	縦目		5.976/1灰	有首瓦	
277	4地点	φ-129	IE9a		陶器	陶丸		2.2	2.3	2.0	-	-				5.971/1灰白	中世	
278	4地点	φ-384	IE10b		陶器	陶丸		2.0	1.9	1.9	-	-				5.971/1灰白	中世	
279	4地点	φ-142	IE9a		陶器	陶丸		2.3	2.3	2.0	-	-				7.576/1灰白	中世	
280	4地点	φ-022	IE9a		瓦	軒丸瓦	-	2.8	5.7	2.8	-	-	面取り、指オサエ	ヘラウツスリ	砂粒、細を含む	2.577/3黄灰	平安末	焼文(構4) 生焼
281	4地点	φ-184	IE9a		瓦	軒丸瓦	-	4.0	5.7	4.0	-	-	面取り、ヘラウツスリ	ヘラウツスリ	砂粒、細を含む	2.577/2黄灰	平安末	焼文(構4)
282	4地点	φ-211	IE9d		瓦	軒丸瓦	-	3.3	11.0	3.4	-	-	面取り、指オサエ	ヘラウツスリ	砂粒を含む	2.577/2黄灰	平安末	焼文(構10) 2割
283	4地点	k-022	灰塚区		瓦	軒丸瓦	-	4.0	9.0	3.9	-	-	指オサエ	面取り	砂粒、細を含む	2.577/2黄灰	平安末	焼文(構5)
284	4地点	φ-125	IE9a		瓦	丸瓦	-	15.3	7.9	2.2	-	-	断面、面取り	縦目	砂粒を含む	2.578/2灰白	平安末	自然釉
285	4地点	φ-202	IE9d		瓦	丸瓦	-	15.3	7.6	2.2	-	-	断面、面取り	縦目	砂粒を含む	2.578/1灰白	平安末	小横汁
286	4地点	φ-069	IE9d		瓦	丸瓦	-	(14.4)	8.1	2.2	-	-	面取り、コビキ、断面	縦目	砂粒、細を含む	2.577/2黄灰	平安末	自然釉、φ-142と接合
287	4地点	φ-181	IE9a		瓦	軒平瓦	-	2.2	5.3	-	-	-	ナデ、ヘラウツスリ	砂粒、細を含む	5.976/1灰白	平安末	小横汁 香葉唐草 横線瓦文	
288	4地点	φ-261	IE9d		瓦	軒平瓦	-	4.5	6.3	4.0	-	-	面取り、ナデ	砂粒、細を含む	2.577/1灰白	平安末	香葉唐草瓦文	
289	4地点	φ-336	IE10a		瓦	特殊丸瓦	-	6.3	6.7	3.2	-	-	指ナデ	砂粒、細を含む	2.577/1灰白	平安末	蓮瓦? 把子餅	
290	4地点	φ-051	IE9d		瓦		-	6.5	8.3	3.2	-	-	指ナデ	砂粒、細を含む	2.577/2黄灰	平安末	染紙餅	
291	4地点	φ-216	IE9d		瓦	特殊丸瓦	-	17.2	10.1	2.3	-	-	指ナデ	縦目	砂粒、細を含む	2.577/2黄灰	平安末	内面に突起付
292	4地点	φ-405	IE9d		瓦	特殊丸瓦	-	13.6	11.2	3.0	-	-	断面、ウズリ	縦目	砂粒を含む	10.977/2に古い黄灰	平安末	内面に突起餅

図版番号	調査区	取上番号	産地	産地	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
299	4地点	φ-009	常滑	山吹陶	4.47	3.57	0.55	-	
297	4地点	φ-215	常滑石浜	塩瀬性面	(2.65)	4.06	11.61	26.8	
296	4地点	φ-338	石浜	チャート	3.52	4.62	2.20	50.5	
294	4地点	φ-363	石浜	サセカイト	2.0	1.1	0.29	0.6	
295	4地点	φ-264	打製石浜	安山岩	6.98	4.46	2.24	76.5	
293	4地点	φ-365	石浜	砂岩	(3.21)	8.96	4.21	505.5	
292	4地点	φ-392	有見石浜	下呂石	(2.30)	1.56	0.34	1.7	
296	4地点	φ-401	常滑石浜	ハイアロクワ	8.10	4.94	1.60	140.2	
300	4地点	φ-407	石浜	砂質凝灰岩	32.00	10.16	4.96	691.5	

4 地点出土遺物観察表 (3)、4 地点出土石器観察表



302:001SM貝層



303:d-054

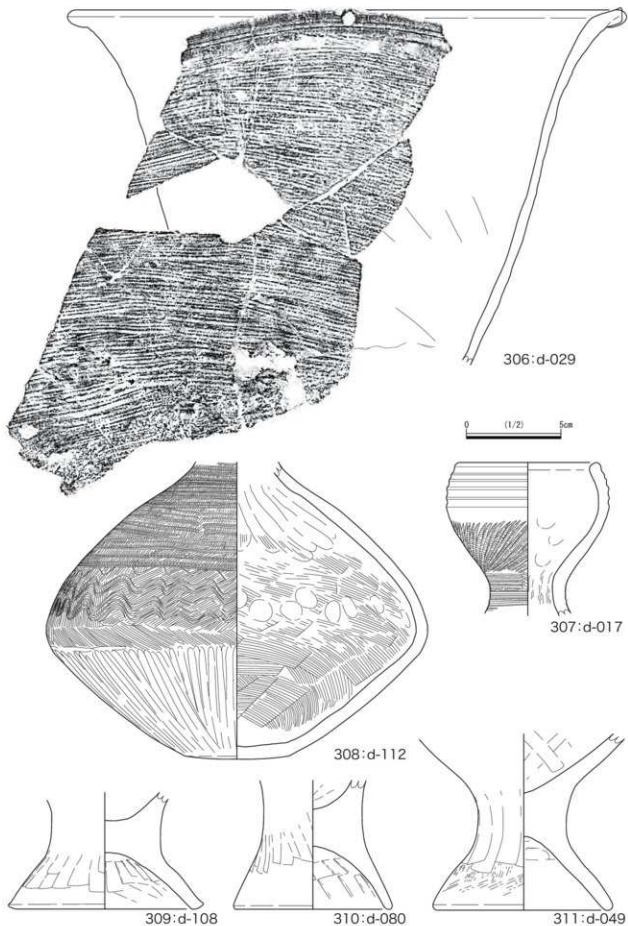


304:d-052

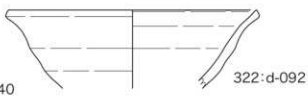
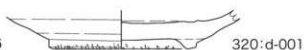
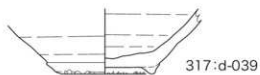
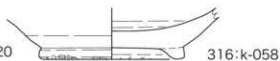
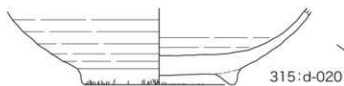
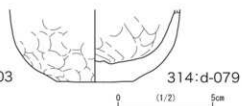
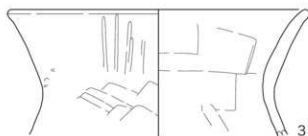
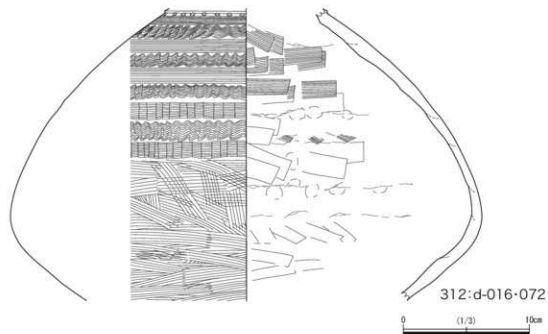


305:k-057

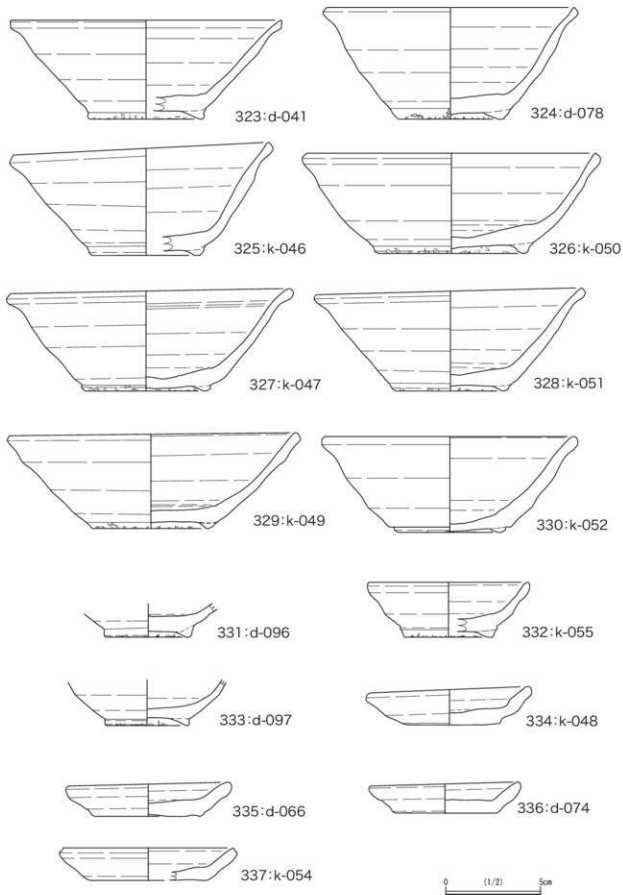


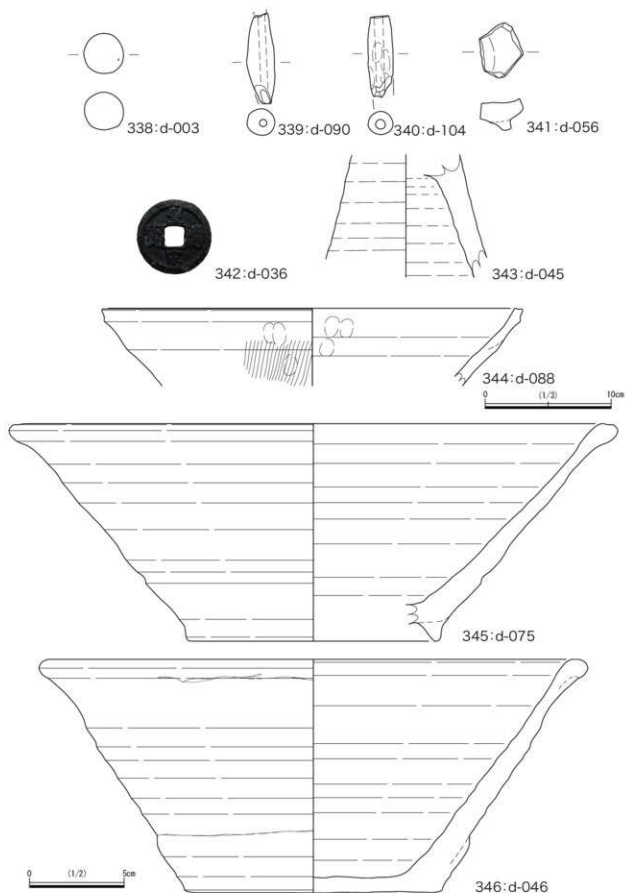


5 地点出土遺物実測図 (1/2) (2)



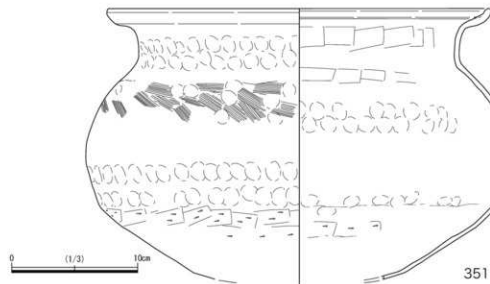
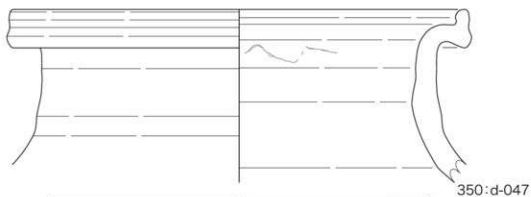
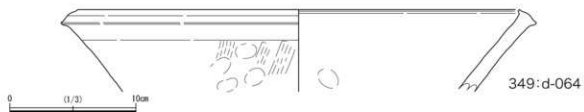
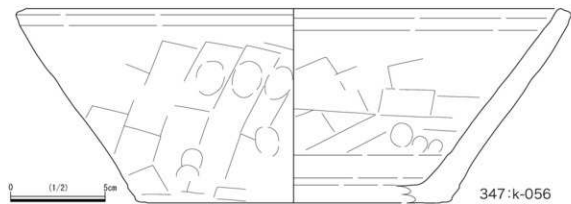
5 地点出土遺物実測図 (1/2, 312 は 1/3) (3)



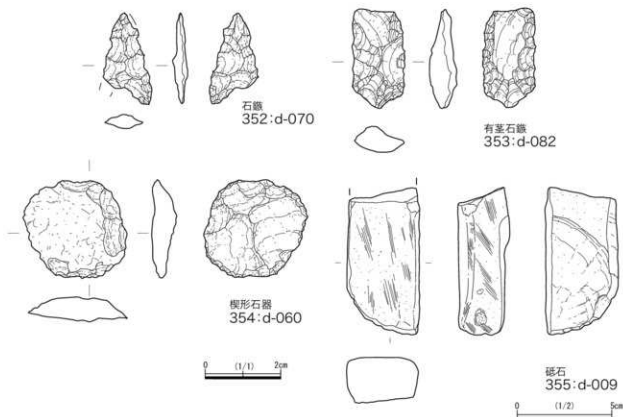


5 地点出土遺物実測図 (1/2, 344 は 1/3) (5)





5 地点出土遺物実測図 (1/2、349・351 は 1/3) (6)



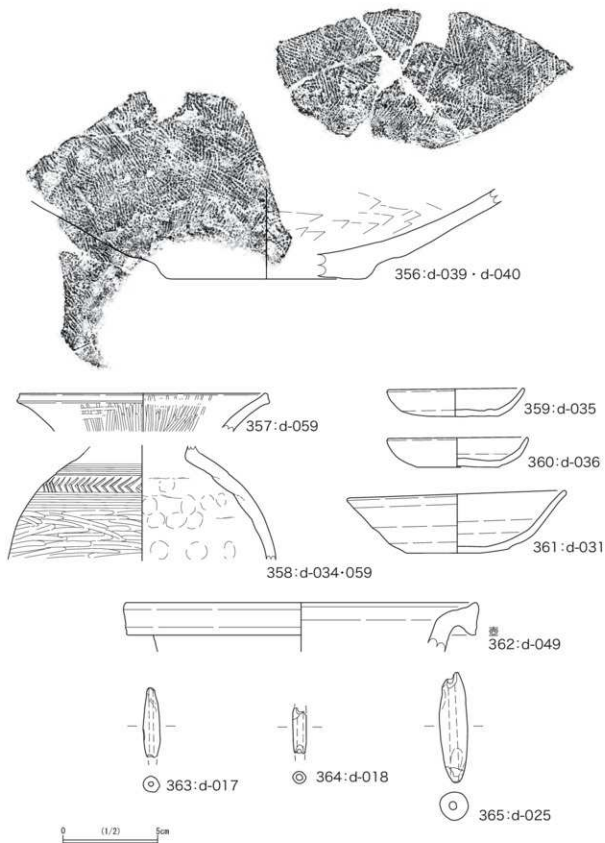
図版番号	調査年度	取上番号	Flint	層位・遺構	産地・材質	器種	残存率	口縁長 (cm)	胴長 (cm)	底縁長 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	外面	内面	出土	色票	時期	備考
302	5 地点			0015層	原生土層	深鉢	口 1/12	-	(4.2)	-	-	-	ハクリ類(部分あり)	赤褐色、生灰半輪紋面	砂粒を含む	2.5YR6/4に似た暗赤褐色部分含む	縄文晩期	
303	5 地点	d-059	IE111		縄文土層	浅鉢	口 2/12	-	-	-	-	-	ナデ	ケズリ、ナデ	砂粒を含む		縄文中葉	五真直式か
304	5 地点	d-052	IE121		原生土層	釜	口 1/12	(23.9)	(6.3)	-	-	-	ナデ	心部、遺灰文、ハタ、丹引文、ホウ文字	砂粒、緑土を含む	5YR6/6層	中期	口縁部
305	5 地点	k-057	-	遺土	原生土層	釜	-	-	(6.7)	-	-	-	指ナデ、瓶ナデ	遺灰文、丹引文、ササリ	砂粒を含む	2.5YR6/2 灰黄	中期	
306	5 地点	d-029	IE111		原生土層	深鉢	口 2/12	(26.5)	(16.8)	-	-	-	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ハタ	砂粒、緑土を含む	10YR6/3に似た黄褐色	縄文晩期	
307	5 地点	d-017	IE111		原生土層	釜	口 1/12	(7.2)	(5.1)	-	-	-	シほリ面、指ナデ、ヨコナデ	丹引文、割草文、遺灰文	砂粒を含む	2.5YR6/4 淡黄緑	縄文晩期	
308	5 地点	d-112	IE11k		原生土層	釜	底 6/12	-	(15.7)	(5.5)	-	-	指ナデ、ハタ、指ナデ	ハタ、遺灰文、丹引文、ササリ	砂粒を含む	10YR6/4 淡黄緑	中期	d-113・119 と連合
309	5 地点	d-106	IE11k		原生土層	付付器	底 10/12	-	(6.2)	9.4	-	-	ナデ、瓶ナデ	ナデ、瓶ナデ	砂粒、小石を含む	5YR6/6層	中期	部のみ
310	5 地点	d-080	IE11k		原生土層	付付器	底 4/12	-	(6.8)	(8.2)	-	-	瓶ナデ、ヨコナデ	瓶ナデ、ヨコナデ	砂粒、緑土を含む	2.5YR7/6層	中期	部のみ
311	5 地点	d-049	IE111		原生土層	付付器	底 12/12	-	(9.3)	9.2	-	-	瓶ナデ、指ナデ	瓶ナデ、ハタ	砂粒、緑土を含む	2.5Y5/1 黄灰	中期	部のみ
312	5 地点	d-016			原生土層	釜	-	-	(22.7)	-	-	-	瓶ナデ、指ナデ、ハタ、輪紋面	竹葉刺、炭灰文、遺灰文、新編炭灰文	砂粒を含む	10YR7/3に似た黄褐色	中期	裏面あり 土層部
313	5 地点	d-103	IE12h		原生土層	釜	口 2/12	(15.6)	(6.7)	-	-	-	瓶ナデ	ヨコナデ、ヨコナデ、ハタ、工具痕、瓶ナデ	砂粒、緑土を含む	10YR6/3に似た黄褐色	後葉~	
314	5 地点	d-079	IE13k		原生土層	小型釜	底 6/12	-	(3.8)	(4.0)	-	-	指ナデ	指ナデ	砂粒、緑土を含む	5YR6/3に似た赤褐色	後葉~	
315	5 地点	d-020	IE11k		山梨焼	碗	底 12/12	-	(4.0)	7.9	-	-	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、指ナデ	砂粒、緑土、小石を含む	2.5Y7/1 灰白	葉 4	モミガシラ面あり
316	5 地点	k-058	-	遺土	山梨焼	碗	底 11/12	-	(2.7)	6.9	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、指ナデ	砂粒、緑土を含む	2.5Y7/1 灰白	葉 5	モミガシラ面あり
317	5 地点	d-039	IE11k		山梨焼	碗	底 10/12	-	(2.4)	4.7	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、指ナデ	砂粒、緑土、小石を含む	2.5Y7/2 淡黄	葉 7	モミガシラ面あり
318	5 地点	d-073	IE11k		山梨焼	碗	底 6/12	-	(2.7)	(5.6)	-	-	ロクロナデ、指ナデ	ロクロナデ、指ナデ、炭灰文	砂粒、緑土を含む	2.5Y7/2 灰黄	葉 8 9	
319	5 地点	d-076	IE11k		山梨焼	碗	底 4/12	-	(2.2)	(6.8)	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、指ナデ	砂粒、緑土を含む	2.5Y7/1 灰白	葉 5	モミガシラ面あり
320	5 地点	d-001	IE11k		山梨焼	碗	底 12/12	-	(2.0)	7.0	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、指ナデ	砂粒、緑土を含む	2.5Y8/1 灰白	葉 5	モミガシラ面あり
321	5 地点	d-040	IE11k		山梨焼	碗	口 4/12	(14.2)	(4.6)	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、緑土、小石を含む	2.5Y7/2 灰黄	葉 7 6or7	

5 地点出土石器実測図 (1/1、355 は 1/2)、5 地点出土遺物観察表 (1)

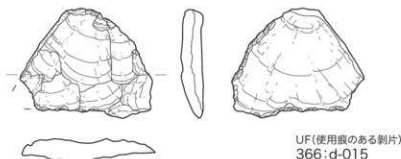
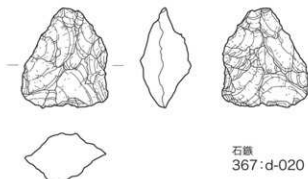
調査番号	調査区	取上番号	方位・通稱	所在地	群種	縄文層	口径(㎝)	高さ(㎝)	底径(㎝)	孔径(㎝)	重量(g)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考		
322	5地点	0-002	HE11A	山形院	碗	口3/12	(13.1)	(4.2)	-			ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫、小石を含む	2.516/2	灰黄	雑碎?		
323	5地点	0-041	HE11A	山形院	碗	口4/12 底5/12	(14.2)	5.2	5.8			ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	1097/12に 近い黄緑	灰黄	瀬戸7	ネミガウ痕あり	
324	5地点	0-078	HE11A	山形院	碗	口1/12 底3/12	(13.0)	5.9	5.4			ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.517/2	灰黄	瀬戸7	ネミガウ痕あり	
325	5地点	0-046	-	0010M	山形院	碗	口9/12 底3/12	13.5	6.0	(5.7)		ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒、礫を含む	2.516/2	灰黄	瀬7		
326	5地点	0-050	-	0010M	山形院	碗	口9/12 底7/12	14.7	5.3	(7.7)		ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫を含む	2.516/2	灰黄	瀬5	ネミガウ痕あり	
327	5地点	0-047	-	0010M	山形院	碗	口4/12 底12/12	15.2	5.4	6.4		ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.516/2	灰黄	瀬6	口縁内側に埋付 痕、ネミガウ痕あり	
328	5地点	0-051	-	0010M	山形院	碗	口12/12 底12/12	14.0	5.4	5.6		ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	517/1	灰白	瀬6	ネミガウ痕あり	
329	5地点	0-049	-	0010M	山形院	碗	口7/12 底5/12	15.1	5.0	6.1		ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.516/2	灰黄	瀬6	ネミガウ痕あり	
330	5地点	0-052	-	0010M	山形院	碗	口4/12 底5/12	(13.2)	5.1	(5.4)		ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫を含む	2.516/1	灰白	瀬6	ネミガウ痕あり	
331	5地点	0-090	HE11A	陶器	小碗	底11/12	-	(1.8)	4.4			ロクロナデ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒を含む	2.515/2	雑灰黄	瀬6	ネミガウ痕あり	
332	5地点	0-055	-	0010M	山形院	山皿	口2/12 底3/12	(8.4)	2.9	(4.6)		ロクロナデ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒を含む	2.516/1	黄灰	瀬4	口縁内側に埋付 痕、ネミガウ痕あり	
333	5地点	0-097	HE11A	山形院	小碗	底12/12	-	(2.4)	4.2			ロクロナデ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒、礫を含む	2.516/2	灰黄	瀬6	ネミガウ痕あり	
334	5地点	0-048	-	0010M	陶器	山皿	口9/12 底12/12	8.3	2.0	5.2	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫を含む	7.517/1	灰白	瀬6	
335	5地点	0-066	HE11A	陶器	山皿	口10/12 底12/12	8.5	1.8	5.7	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切	砂粒、礫を含む	7.517/1	灰白	瀬6		
336	5地点	0-074	HE11A	陶器	山皿	口11/12 底12/12	7.8	1.6	5.4	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切	砂粒を含む	1096/12に 近い黄緑	灰黄	瀬7	口縁部赤色化 (内溝)	
337	5地点	0-054	-	0010M	山形院	山皿	口4/12 底4/12	(9.0)	1.7	(6.0)		ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 回転糸切	砂粒を含む	517/1	灰白	瀬6		
338	5地点	0-003	HE11J	陶器	陶丸		2.1	2.1	2.0	-	-				518/1	灰白	中層		
339	5地点	0-090	HE11A	土師器	土鉢		(4.8)	1.45	-	0.37	8.2				7.512/1	黄	中層か		
340	5地点	0-104	HE11A	土師器	土鉢		(4.3)	1.28	-	0.47	5.8				1097/12に 近い黄緑	中層か			
341	5地点	0-056	HE11J	陶器	加工さい ころ		2.9	2.3	1.7	-	-				518/1	灰白	中層	高台部分	
342	5地点	0-036	HE11A	金属	古銭		2.42	2.42	0.14	-	-					中層	『東洋通貨』1039 年		
343	5地点	0-045	HE11A	陶器	碗台		-	-	(6.5)	-		ロクロナデ	ロクロナデ、 指オサエ、粘 付底台	砂粒を含む	2.517/2	灰黄	古瀬戸	反輪	
344	5地点	0-089	HE11A	陶器	鉢	口1/12	(32.2)	(6.1)	-			ロクロナデ、 指オサエ	ロクロナデ、 指オサエ	砂粒を含む	5186/4	に 近い黄緑	瀬1 層6		
345	5地点	0-075	HE11A	陶器	片口鉢	口1/12 底1/12	(30.4)	11.5	(13.2)			ロクロナデ	ロクロナデ、 回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.516/2	灰黄	瀬6a		
346	5地点	0-046	HE11A	陶器	片口鉢	口2/12 底7/12	(28.0)	12.4	(13.6)			ロクロナデ	ロクロナデ、 粘付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.517/2	灰黄	瀬6a	内面磨粒	
347	5地点	0-056	-	0010M	陶器	片口鉢	口1/12 底1/12	(28.3)	10.3	(16.3)		ロクロナデ	ロクロナデ、 指オサエ、粘 付底台	砂粒、礫を含む	7.5186/4	に 近い黄緑	瀬6a	内面磨粒	
348	5地点	0-101	HE11J	常滑	片口鉢	底1/12	-	(4.4)	(16.7)			ロクロナデ	回転糸切、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	2.516/1	黄灰	瀬6a	内面磨粒	
349	5地点	0-084	HE11A	常滑	片口鉢	口1/12	(35.0)	(8.5)	-			指オサエ、粘 付底台	指オサエ、粘 付底台	砂粒、礫、小石を含む	7.5186/4	に 近い黄緑	瀬10		
350	5地点	0-047	HE11A	陶器	釜	口1/12	(22.9)	(8.2)	-			ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒を含む	2.516/1	黄灰	瀬3	自然磨	
351	5地点		0010M	土師器	伊勢型鍋		30.4	(21.4)	-	-	-	ロクロナデ、 指オサエ、粘 付底台	ロクロナデ、 指オサエ、粘 付底台	砂粒を含む	7.5186/2	灰黄	中層	内溝入り付	

調査番号	調査区	取上番号	群種	石材	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	重量(g)	備考
352	5地点	0-070	石皿	サヌカイト	7.40	(1.74)	0.34	0.6	
353	5地点	0-082	燧石石皿	チャート	(3.55)	1.29	0.67	2.7	
354	5地点	0-060	砂粒 石皿か	下流石	2.51	2.87	0.62	5.7	
355	5地点	0-009	流石	凝灰岩	(7.78)	3.78	2.30	106.0	中層

5地点出土遺物観察表(2)、5地点出土石器観察表



6 地点出土遺物実測図 (1/2)

UF(使用痕のある剥片)  
366:d-015石鏝  
367:d-020

図版番号	調査区	取上番号	フリット	層位・遺構	産地・材質	器種	残存率	口径 長 (cm)	口径 幅 (cm)	器高 厚 (cm)	底径 幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	外面	内面	胎土	色調	時期	備考
356	6地点	0-039 + 0-040	189g + 189g	003DK	原生土器	壺	底7/12	-	(4.0)	(10.6)	-	-	-	板ナデ、ナデ	ハケ、漆オサエ	砂粒、礫を含む	10YR6/4に似た黄緑	後期	
357	6地点	0-059			原生土器	壺	口2/12	(13.0)	(2.0)	-	-	-	-	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	砂粒を含む	7.5YR7/8黄緑	後期~	
358	6地点	0-054 + 0-058 + 0-059			原生土器	壺	-	-	-	-	-	-	-	漆オサエ、輪	黄緑文、ミガキ、磨削突	砂粒を含む	7.5YR7/8黄緑	後期~	0-054・058・059と接合
359	6地点	0-035	1810n		土師器	小瓶 (あわら行)	口12/12 底12/12	7.1	1.5	4.3	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 田舎丸底、板瓦 片	砂粒を含む	5YR6/8橙	中・後期	
360	6地点	0-036	1810n		土師器	小瓶 (あわら行)	口12/12 底12/12	7.4	1.6	4.3	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 田舎丸底、板瓦 片	砂粒を含む	5YR6/8橙	中・後期	
361	6地点	0-031	1810n		土師器	壺 (あわら行)	口12/12 底12/12	11.4	3.3	5.4	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ、 田舎丸底、板瓦 片	砂粒を含む	5YR6/8橙	中・後期	
362	6地点	0-049	1811j		陶器	壺	口1/12	(18.6)	(2.6)	-	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	砂粒、礫を含む	2.5Y7/1灰白	築5新	自然釉
363	6地点	0-017	1811j		土師器	土鏝		(2.4)	0.9	-	0.22	2.8	-	-	-	-	10YR7/3に似た黄緑	追加分	
364	6地点	0-018	1811j		土師器	土鏝		(2.4)	0.7	-	0.33	0.9	-	-	-	-	7.5YR7/8橙	追加分	
365	6地点	0-025	189j		土師器	土鏝		5.8	1.5	-	0.4	10.5	-	-	-	-	2.5YR5/6黄赤橙	追加分	

図版番号	調査区	取上番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
366	6地点	0-015	UF(使用痕のある剥片)	チャート	2.88	(3.46)	0.52	6.0	
367	6地点	0-020	石鏝	チャート	2.54	2.24	1.24	6.4	

6地点出土石器実測図、6地点出土遺物観察表、6地点出土石器観察表



# 写真図版







006



008



007



009



010



012



013



014



020



021



022



023



024



025



026



027



019



028



033



034



037



036



042



041



043



045



047



049



050



051



052



053



054



055



057



058



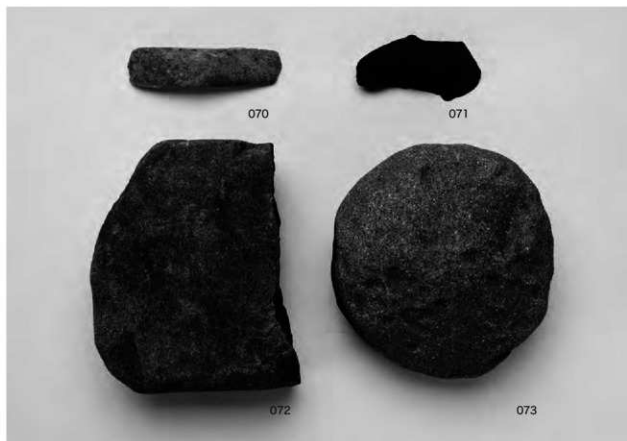
059



060



065



1 地点出土の石器



1 地点空撮写真 (東拡張区)



1 地点空撮写真 (調査区西半)



074



075



088 (内面)



088



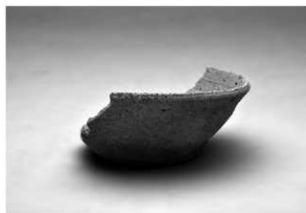
097



099



096



091



089



095



090



086



098



087



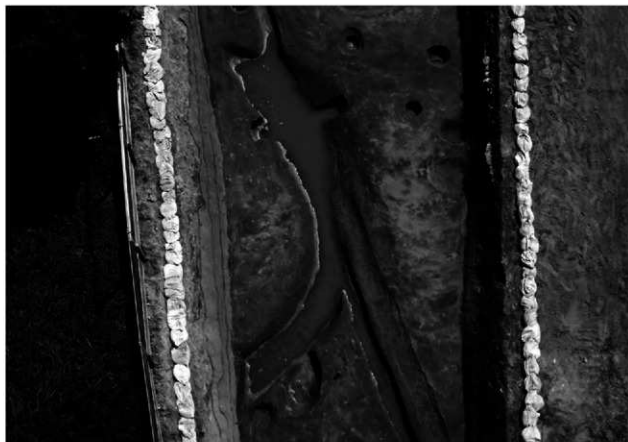
094



092

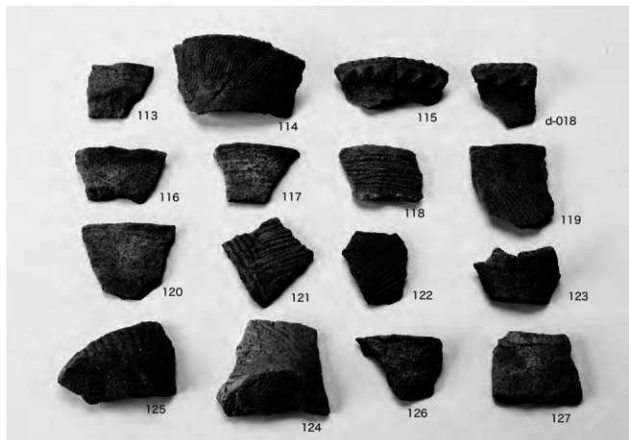


2地点空撮写真(調査区東端部分)



2地点空撮写真(003SD・007SD 周辺)





3 地点出土の縄文土器と条痕文土器



130



131



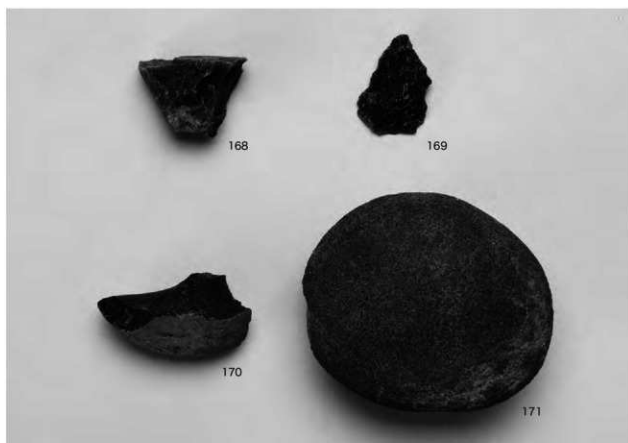
136



133



3 地点出土の傾し瓦



3 地点出土の石器



3地点 009SK 壺 (130) 出土状況



3地点 001SX・012SX・017SX



3地点調査区東端部分の土層断面



3地点 016SK 土層断面



3地点 016SK 完掘状況



3地点空撮写真(調査区東半)



3地点空撮写真(調査区西半)



172



173



174



175



176



177



178



179



188



189



190



191



192



193



194



195



196



197



198



199



201



202



203



204



209



210



217



218



219



220



221



222





214



223



224



225



226



227



228



229



239



240



241



242



243



244



245



246



252



255



253



256



254



257



258



259



268



269



270



280



281



282



283



284



285



286



287



288



289



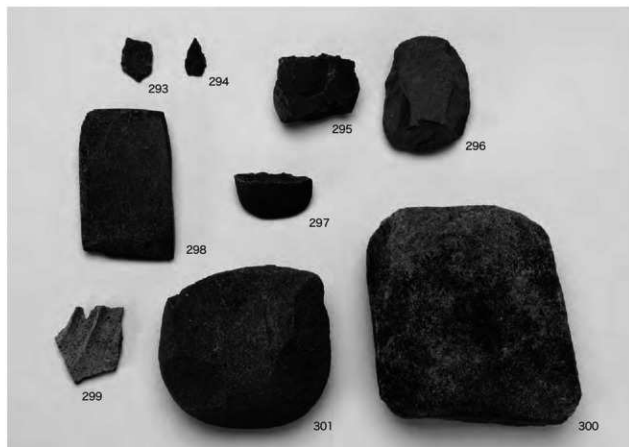
290



291



292



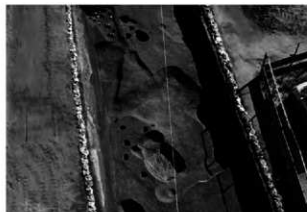
4 地点出土の石器



4 地点 001SD 貝層部分検出状況



4 地点全景 (西から)



4 地点空撮写真 014SD/027SZ 周辺



4 地点 014SD/027SZ 完掘状況



4 地点 008SB・009SB 完掘状況



4地点 005SK 土層断面



4地点 002SU 土器集積検出状況





304



306



305



307



308



310



311



309



321



322



323



324



325



326



327



328



345



346



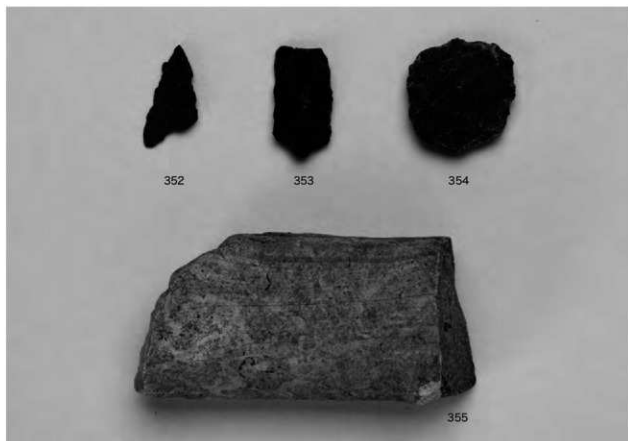
347



350



351



5 地点出土の石器



5 地点台付甕脚 (311) 出土状況



5 地点甕 (312) 出土状況



5 地点 004SK 検出状況



5 地点 004SK 完掘状況



356



362



366

367

6 地点出土の石器



6 地点 002SM 貝層断面



6 地点空撮写真 (調査区東部)



## 報告書抄録

ふりがな	へいせい26ねんど はたま・ひがしはたいせきはくつちょうさほうこく							
書名	平成26年度 畑間・東畑遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	坂野俊哉・宮澤浩司・石黒立人・小栗康寛・西野順二・畑山智史・藤バレオ・ラボ・花井晶子ほか							
編集機関	国際文化財株式会社 中部支店							
所在地	〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1 Tel 052-408-0245							
発行機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 Tel 052-603-2211							
発行年月日	2016年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °'"/	東経 °'"/	調査期間	調査面積	調査原因
畑間遺跡 ヒタマノイノキ 東畑遺跡	アイケン トウハツ 愛知県東海市 アイケン トウハツ 愛知県東海市	23222	43050	35 1 11	136 53 44	20140501～20141126	1,342㎡	土地区画 整理
23222	43052							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
畑間遺跡 (1地点)	集落跡	古代・中世	土坑・溝	須恵器・中世陶器・ 近世陶磁器		古代の礎石 中世の区画溝		
畑間遺跡 (2地点)	集落跡	中世・近世	排水溝・ 区画溝	灰畑式土器・ 大量の中世陶器		近世の大区画溝		
畑間遺跡 (3地点)	集落跡	弥生・中世 ・近世	溝・土坑	条痕文土器・ 弥生土器・近世瓦		神社境内跡		
畑間遺跡 (6地点)	集落跡	中世・近世	溝・土坑 ・貝層	弥生土器・中近世陶器 ・かわらけ		祭祀行為跡?		
東畑遺跡 (4地点)	集落跡	弥生・古墳 ・中世	幅広床下 周溝住居址・ 中世の土器集積 ・溝群	弥生土器・S字甕 ・古瓦		鹿線刻面土器 特殊瓦類		
東畑遺跡 (5地点)	集落跡	弥生・中世	土坑墓・ 住居址・ 貝層・道路敷	弥生土器・中世陶器		弥生中期の土坑墓 中近世の道路跡		

---

愛知県東海市  
平成26年度  
畑間・東畑遺跡発掘調査報告

平成 28 年 3 月 18 日印刷

平成 28 年 3 月 31 日発行

- 編 集 国際文化財株式会社 中部支店  
〒452-0901 愛知県清須市阿原神門 95-1  
TEL 052-408-0245
- 発 行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地  
TEL 052-603-2211・0562-33-1111 (代表)
- 印刷・製本 株式会社 クイックス  
〒448-0022 愛知県刈谷市一色町2-10-6  
TEL 0566-26-0179
-